

明るい人間関係を つくるために

— 第5回全国婦人会議記録 —



労働省婦人少年局

は し が き

労働省では第九回婦人週間の中央行事として、第五回全国婦人会議を四月十三日から三日間東京において、日本放送協会と共催で行いました。

今年は、はじめて男子の会議員も募集しましたので、全国からの応募者三、二五八名（男三六一名）のうちから、書類選考によって選ばれた男子八名が、婦人五二名とともに会議に参加しました。

会議は四部会に分れてアドヴァイザーの助言のもとに「あかるい人間関係をつくるために」という議題で二日間の討論を行い、部会終了後、合同部会では各部会の報告と、各部会共通の問題等を中心とした討論を会議員全員で行いました。さらに三日目の総会では、会議員と一般傍聴人との間で、「義理人情」を中心とした話し合いを行い、部会においては昨年と同様、傍聴人との質疑の時間を設けました。

ここに会議の速記録をまとめて刊行いたしますが、婦人問題に関心を持たれる方々の御参考になれば幸と存じます。

なお紙数の都合で、割愛した部分がありますことをお断りいたします。

昭和三十二年八月

全国婦人会議の構成

名称 全国婦人会議

「あかるい人間関係をつくるために」

主催 労働省・日本放送協会

期日 昭和三十三年四月十三・十四・十五日

場所 東京産経会館・NHKホール

部会

第一部会 都市の家庭及び近隣生活を中心として

第二部会 農村の家庭及び近隣生活を中心として

第三部会 職場生活を中心として

第四部会 社会生活を中心として

出席者

六〇名（全国の応募者より中央選考委員会が決定、婦人五二名、男子八名）

選考委員

東京大学教授（委員長）

弁 護 士

評 論 家

東京大学助教授

都立大学教授

日本放送協会ラジオ局長

日本放送協会ラジオ局婦人課長

労働省大臣官房総務課長

労働省婦人少年局長

部会アドバイザー

第一部会

第二部会

第三部会

第四部会

司 会

宮 沢 俊 義

久 米 愛

松 丸 志 摩 三

松 島 静 雄

磯 村 英 一

前 田 義 則

江 上 フ シ

村 上 茂 利

谷 野 せ っ

久 米 愛

松 丸 志 摩 三

松 島 静 雄

磯 村 英 一

労働省婦人少年局婦人課職員

全国婦人会議次第

四月十三日(土)

開会式

一〇・三〇〇～一一・三〇

開会挨拶

労働省婦人少年局長

谷野 せつ

主催者挨拶

労働大臣

松浦 周太郎

日本放送協会々長

永田 清

講演

東京大学教授

宮沢 俊義

部会

一三・〇〇〇～一六・三〇

部会討議

傍聴人との質疑応答

四月十四日(日)

部会

九・三〇〇～一二・一五

部会討議

傍聴人との質疑応答

合同部会

一三・一五〇～一六・〇〇

部会報告

討議

四月十五日(月)

総会

一〇・二〇〇～一二・三〇

開会挨拶

日本放送協会ラジオ局長

前田 義則

会議経過報告

労働省婦人少年局婦人課長

高橋 展子

話しあい—討論会形式—

「あかるい人間関係をつくるために」

アドヴァイザー

会議員

一般傍聴者

アトラクション—放送劇・独唱—

閉会挨拶

労働省婦人少年局長

谷野 せつ

目次

はしがき

全国婦人会議の構成

全国婦人会議次第

部会

第一部会..... 2

第二部会..... 10

第三部会..... 15

第四部会..... 20

合同部会..... 25

総会..... 30

会 部

第一部会 都市の家庭及び近隣生活を中心として

出席者

青森	武田	澄子	(主婦)
茨城	静間	敏子	(主婦)
群馬	吉村	晴子	(主婦)
千葉	八木	千恵子	(主婦)
東京	坪井	楊子	(主婦)
神奈川	倉石	喜和子	(主婦)
静岡	織田	玲子	(主婦)
兵庫	小林	和子	(主婦)
三重	今井	順子	(主婦)
香川	岡	照子	(主婦)
佐賀	副島	タカ	(主婦)
大分	中村	美和子	(主婦)
鹿児島	本重	瑞子	(主婦)
神奈川	山口	徹子	(主婦)
福岡	牧	一生	(主婦)
アドヴァイザー	井	護	士
司会	婦人少年局婦人課	森山	真弓
書記	婦人少年局婦人課	堀江	淳子

司会 これから第一部会を始めます。この部会は「都市の家庭及び近隣生活を中心として」討論を行います。

まず問題を二つに分けて、今日は家庭に関することをお話し頂きたいと思います。

家庭における人間関係を更に分けると、夫婦、親子、嫁姑、あるいは家事使用人とその使用主というように考えられますが、農村などに比べて都会における家族の最も特徴的な点は夫婦の人間関係にあるのではないかと思います。農村では、夫婦の全生活が一緒であるのに、給料生活者の多い都会の場合には夫と妻の活動の場所が違い、従って夫婦の間の人間関係も都会に独特のものがあると思われるので、都会における家族の人間関係を話して頂くには、まずそれから入って行きたいと思います。

◎夫婦の間

今井 私は昨年六月に結婚しまして、まる一年経っていないホヤホヤの主婦です。私の場合には結婚する前に、なるべく妻が夫に寄ったような生活をしていないように、お互い気を付けようね、と話し合いました。結婚生活を始めたところから私は、生れ故郷を離れて夫の任地に嫁いできたものですから、知人もありませんし、家の中に閉じ籠るような日々を送ることになりました。すると、初めに相

談した、夫に寄ったから生活をするということが次第に出てきて、自分ではそうならないようにと努力していても、どうしても避けることができなかったのです。どんな女の人でも、家庭に入ると主婦となると、多かれ少なかれそういう問題をお持ちなのではないでしょうか。それでいろいろ考えてみたのですが、どうもなかなか巧い解決方法がなく、わたしの場合は思い切って短期間、共働き生活に入ってみました。お互いが独立した生活をし、一人一人の足で立った生活をしなかつたら、知らず知らずのうちに妻は夫に寄ったようになるのではないかと思います。そういう点で皆さん多年の経験を経た方のようにお見受けしますので、家庭に入った妻がいったいどういうふうになるのか、それをどういうふうに解決していこうかといったことをお尋ねしたいと思います。

倉石 私、結婚して十年ぐらいになります。初めの中は夫が全部自分のものでなければ気が済まなかったのです。それが、寄り掛った生活と言えはそうかもしれませんが、だんだん子供が生まれ、周囲を振り返る余裕ができてくると、夫には夫の生活があり、自分には自分の生活があって、経済的には寄り掛っているといわれるかもしれませんが、これと気持としてはそんなことはないと思います。

坪井 東京大会の時に、結婚してだんだん年数が経つう

ち、夫婦間にギャップができてくる。それは妻が家の中にばかりいて難用に追われ精神的に成長しない。夫の方は外でどんどん成長するので非常に差ができる。これは社会の責任か妻の責任かということが問題になりましたが、私はそれはやっぱり妻の責任だと思います。私自身は結婚する前からそうなっていると思うので、結婚後も音楽の勉強を一生懸命続けておりました。夫とは職業も趣味もずいぶん違うところは多いのです。同じような点というのはむしろ少なくて、物事を合理的に処理しようということ、誠実ということ、それから子供を自然に、明るい人間に育てたいと願うことだけ位です。それでもそれぞれ成長するだろうという信頼がお互にあるからだと思えますけれど、夫婦間のギャップは今までのところはありませんし、これからのないだろうと思います。

本妻 私は、妻の方はラジオとか本とか、求めようと思えばずいぶん勉強の機会が多いのに、夫の方は俗人になってしまつて困るという逆の場合をどうしたらいいかと考えております。

久米 今のお話ですけれど、坪井さんも本妻さんも同じことを言っているのだと思います。時間の使い方と心がけ次第で女の方が進むわけだが、それをしないことが問題でしょう。だから今の場合逆の場合というより、

山口 世の中はやはり男と女と半々にあるわけですから、男女がお互の本質というものをよく考慮協力してゆけば、どういふふうにならなければいけないかということがわかると思います。

男というのは大体において、外攻的な性格を持っており、女性には内攻的な性格を持っています。そのプラスとマイナスがお互に相寄せた状態が夫婦であると思いますが、その場合に各々の個性を主張しすぎますと、やはり反撥することもありますし、いろいろな問題が起きます。そこで人間性というものが男女の間の中性子の役目をしてお互に人間であるという意味で、夫婦が一つに固まれる。別々に独立してとか、一方の犠牲によって処理するというのじゃなく、やはり人間性によってお互が固まってゆくのが人生の姿ではないかと思えます。

小林 最初に新婚の奥様のお話がありまして、密々かからない生活をしたということでしたが、その場合、密々かかる方はもっぱら奥さんの方であって、旦那さんが奥さんに密々かかるということをお考えになつていなかったかと思ふ。ところが私は、密々かかるのも突っぱね合う場合もある。奥さん夫婦の側にあると思ふ。たとえば私の主人でも「実はこの事件に対して俺はこういう考え方をしているけれども君はどうか」と私に意見を聞き、いろいろ考え合

同じことを進める面からみたことになるのでしよう。

夫婦の人間関係というのは、親子や姉妹の關係と非常に違った面があります。いま坪井さんがおっしゃったことと思ひ出したのですが、どうして結婚生活を成功させるかというガイダンスのような本の中に「合わない性格」というのはこの世の中にはない。性格が合わないから結婚生活が巧くゆかないということはない。その人々が共同生活を送り得る人間であるかどうかによって結婚生活が巧くゆかないかが決定される」とあるのを読んだことがあります。

全然性格の違う夫婦が仲が好くて、非常に似た性格の人が喧嘩している場合があると思うのです。解釈してみろ、と、その人自身が共同生活を送れる人間であるかどうか、それは、趣味、性格を離れて、合理的にものを考え、相手を理解し、立場を認めようという精神を持っているかどうかという事だと思ふのです。夫婦の人間関係は特殊な感情の混ったもので、理解だけでいかない面がかなりあると思ひます。一心同体も結構ですが、どうせ人間は一人一人違うのですから同じになろうとか、同じ趣味を持とうとか、同じようにものを考えようといつても無理です。違った二人の人間が一緒に生活するのだということを理解して、相手の違いを素直に認め、その違いを合理的に処理してゆこうという精神があれば巧くやれると思ひます。

いまして、私の考え方に、いかにもそうだと納得する場合もありますし又、私がある事件について、私はこう思うけれどもあなたはどうかとききまして、やはり夫の考えの方が立派だと思える場合もあるのです。互いに違う性格や考え方というものを夫婦がお互に呑み込み合い、より幅の広い人間になり、より高くなるのであって、夫婦はお互に密々かかり合いであり、お互にそれによって一人の人間が二人の幅を持ち得るものであると思うのです。

今井 「密々かかる」という事であやふやな言葉を使いましたので皆さまにも耳ざわりだったと思ひますが、私が言いたいののは、女の人が家の中に入りますと知らず知らずの中に夫の耳でものを聞き、夫の眼でものをみるという立場に今までの女の人ばかり易かった。特に私もその弱點を持っており、痛切に感じたわけですね。

その原因を考えて見ますのに、私の夫は一人っ子ですが私は六人きょうだいであります。そのせいか、いつでも夫は私が離婚生活に馴れていると申します。なるほどたくさんきょうだいの中で、特に女の子ですと、そんなことを女の子がするものじゃないといわれたり、あるいは兄は一つの子供を取りましても女の子は共同の子供部屋に押し込められ、学校から帰れば、男の子は勉強部屋で勉強しますが、女の子ですと家のお手伝いに使われる、というように女の

子には個人の生活が少いのではないか。そのせいばかりでもありませんでしようが、みんなの中でとけ合つてしまふという性格ができ易いのではないかと思います。そういう女の子が、結婚して家庭に入りますと今度は家族制度的な枠の中で目立たないように、あるいは支障を起さないようにみんなに調子を合わせようというやり方で、自分というものを次第になくしてゆくのではないでしようか。私のような二人きりの生活でもそういう傾向が知らず知らずの中に現れをもたげるので、大家族の中に入られた方は、特にそういう傾向が強いのではないでしようか。そういう点で、やはり夫と妻がほんとうに、明るい人間関係を保つていくためには、いい意味で独立した個人生活を持つ必要があるのではないかと思います。ところがそれが非常にむずかしい。だからその点を、昔の今まで通りの私たちのお婆あさん、おかあさんがやってきた生活と、今の私たちともう一ぺん考えなおしてみたらどうかと思います。

品の部に時々出ては簿記も勉強した。催設とか、御座さんとの交渉なども少しずつ自分の物にしていって、今では、家庭金物は私がいないとわからないくらいになってきました。そうなりますと給料もやらなくては……ということ、少しづつ給料をもらって、経済的な力も出ましたから、何を買うからいくらくれといちいち言わなくてもすむようになりました。少し不服なのは、主人と給料がずいぶん違うことです。同じくらいにもってゆきたいと努力しています。

吉村 私は學校生活を終へまして直ぐ家庭生活に入らなければならぬような立場でありましたがこの時、それはかわいそうなことだと他の人が同情して下さいました。私もいやでしたけれども、そんなことばかり言つていたらせんので、これから一生楽しい生活を送るためには考え方一つであると思ひ直しました。只今私は家事労働に専念しているのですが、外の婦人会などにも出られず毎日合所ばかりいるというこゝで、自分が卑下してはいくないと思ひます。たとえばお掃除するにしても考え方一つで、今までは母がやっていたのよりこうすれば合理的に能率よくできるなというのを一々考へてやれば、決して家事労働も価値のないものではないと思ひます。そうすれば、自分というものを無にしているという感しはありませんから、何か

司會　いま妻の獨立性を保つことがたいへんむずかしいとおっしゃったのは、一つには教會の給料生活の場合に夫だけが給料をもらつてきて、経済的な力が男の人だけにあつてゐるように思われ、妻は専らそれに、寄りかかつてゐるように見えるところにもあると思いますが、その場合にも、奥さんには経済的力が無いように見えるけれども、家庭の中で御主人が外に出て安心して働けるように家庭を巧く運営してゆく力は、経済的には評価しきれないような立派なものであるとも考えられます。妻の家政とか家事労働の価値ということについてはいかがでしょう。

中村 私のところは個人で会社を経営しているんです。私が嫁入る場合に、私は何もできないから、と言つたら「床の間に座っているだけでもいい」と言われた。そんなこと借用はしませんでしたが、嫁入りしますと、掃除も洗濯もお炊事もしなければならなし、店が忙しいと店に狩り出される。私が少し文句を言つたところが、夫は「女はそれをするのは當り前だ、そのために働つてあるのだ」と言うのです。結婚前の話とちよつと違ふと思つて文句を言つてみたが、結局これは自分で力を發揮しなければならななと思ひました。私の家では、家事労働の価値は余り認めないが店の仕事は仕事として認められますから、お店の仕事先の一部だけでも自分の物にしたいと思ひ、身近な会所用

につけて自分の意見もはっきり言つて自信がついてくるわけ
です。

山口 私の場合には家事を妻と分担して協力しているつ
もりです。しかし妻も外で働くということになると子供は
非常に嫌がりますね。それで共稼ぎは子供の教育上よくな
いということが一つあると思うのです。それでも日本の現
状では、男の働きが少いのでやむを得ずやっているのが多
いと思いますが、又、妻もその能力を社会的にいかしたい
ために外に働きに行く人もあると思います。その場合は二
人で相談してうまく処置してゆくことが必要と思います。
けれども、一般的に言えば、アメリカなんかでも、女は家
庭に帰れ、家庭生活が非常に大切だということを言われて
いるのに、日本では今まで妻の立場が余りに抑制されてい
たのでその反動として共稼ぎが取り上げられたと思うが、
それは一考を要するのじゃないでしょうか。

久米 今の山口さんのお話に皆さん異議はありませんか。いまここにお出でになる方は、たいいてい家庭の主婦だと思ひます。もちろん家庭が大切なことはわかり切ったことですが、それにしても今の御意見——要するに女というもののは家庭に帰ってゆくことが夫婦間をよくする、夫がそれに同構して家事労働を分担してさえいれば夫婦の人間関係がより明るいものになるとお思ひでしょうか。又、いま

のお言葉「アメリカなんかでも家庭に帰れということが盛んに言われているではないか」——これはたしかにその通りですが、アメリカのように豊かな国では、第一に夫の給料で最低限の生活はできるということ、それからわりあい、母親の価値というものを、ほんとうに心理学的に、又社会学的に認めていて小さい子供は母親が面倒を見なければならぬという考えが強い。託児所等のもっとあつてよさそうに思うのに、案外少なく、若い夫婦が遊びに行くと時には、ベビー・シッターを頼んで留守番してもらう。又、社会に余裕があるから一旦子供が育つと、母親は又簡単に職場に帰れるのです。ですから非常に多くの既婚婦人が働いておられます。働く婦人の数としてはむしろ既婚婦人の方が多のです。また、忘れてならぬことは、アメリカのような国は婦人が一応解放されてしまつて、その上ではどういふふうにしていこうという度階にきているが、日本ではまだ婦人が解放されていない。家庭というものを考え直そうという時期は何十年か先ですね。解放されている国の結論をもってこれでは誤解を招きますから、一寸申し上げました。

又、母親が外へ出ると子供はいやがるそうですが、今朝の宮沢先生のお話のように、人間の幸福、或は人間の尊厳というか、ヒューマニズムが発達するために他人の犠牲

とです。ここにおられる人達の御主人が組合活動をやられておるかどうかわからないが、組合幹部として出ておられなくても労働組合等について理解をどの程度持っているかどうかということ疑問に思っているわけです。

司会 いま労働組合のことが出ましたが、それに限らず、御主人が外で持つていらつしやる仕事、外部における活動に対する奥さんの理解が足りない点があるということになると思います。

久米 私、ここに集まっている方が、まれに見る夫婦仲の好い方々だと思つてびっくりしているのですが、きつと面白くないこともおありになると思うのです。夫婦の間の漠然とした生活——うちの亭主と私は性格が違ふから巧くゆきつこないというような公式的な言い方でなく、それは何が原因であろうか、どうして気拙い生活をしなければならぬかということが必ずあると思いますが、それを話して頂けないでしょうか。

本重 私は先ほどから伺つていて、ほんとうに皆さんをうらやましく思つていました。私は夫婦の關係も環境に支配され易いと思います。今まで夫婦と子供三人だけの生活から、夫の生みの親と養子先の親と兄達、姉達というふうな中に入つて二カ月になります。一つの家族構成で新しいやり方をしていた者も大家族の中に入るとそれが崩れ易

があつてはならないのです。子供がいやがるというけれども、母親を犠牲にして子供を成長させなければならぬという道くつはありません。子供にも「母親にも、自分の生活がある。他人を犠牲にすることなく大きくおなりなさい」と教えることが必要だと思ひます。そして私は必ずそれを子供が理解してくれると思ひます。お母さんが働いていたというだけのために子供が悪くなるということとは絶対にないと思ひます。朝から晩まで子供のお尻を追つていて、へんな人間に育てている母親もありです。必ずしも側に付いているということが子供の成長に役立つことではなく母親の意識次第です。

牧 家庭にばかり閉じこもつた主婦の考え方が、夫の外における活動をそらしてゆくことがあると思ひます。ここにおられる皆さん方の御主人は、それぞれ労働者として、会社、工場、事務所で働いておられると思ひますが、そういうような人達が組合に組織され、賃上げ闘争をやることに對して奥さん達がどれだけの理解を持っておられるか、どれだけの援助をしているだろうか、私はよく主人が組合に属することを奥さんが強制するということを聞きます。「会社の上の人に睨まれると首になるから組合なんかに出ちゃいけない」と、奥さんが、正しい要求を出してやろうとする主人の氣持を阻害するのです。これは非常に残念なこと

いというのは、今まで夫が自分でやっていた衣類の始末とか片付も、親がおるから、親の手前、妻がしてくれないかというのです。しかしこれは子供の教育のために、よくありません。又、血縁關係が、大家族の中に入ると非常に濃くなつて来て、嫁は他人で、夫の自分だけは血の縁りがあるという縦の線が強調されて来ます。

單純な家族でいる時には、留守をアルバイト学生でも頼んで、講演を聞きに行つていた、という生活が、大家族になつたらできなくなる。横の人間關係が縦にかへつてしまふ。それはどういふふうにしたらよいのでしようか。

司会 では夫婦の人間關係についてはまだまだ問題があると思ひますがお話しが縦の關係に及んで来ましたので、この辺で久米先生にまとめていただき、次へ移りたいと思ひます。

久米 明るい夫婦關係というものはどういふふうにして作り出すかということを考える時に、夫婦の不和の原因はどこにあるか、経済的な理由である場合もあるし、家族構成のために、夫婦だけなら巧くゆくのには舅姑と一緒に住んだために巧くゆかなくなつたとか、又性格がほんとうに違ふ場合もある。だから自分達の力で直せるものは直し、又理解しあつてゆかなければならないと思ひます。

それからほんとうに明るい人間關係は、対等な、人間と

して、依存をしない、人間同意の間でなければ生きてくれないということ。極端的に言えば、経済的な力を完全に夫に頼られておればどうしても妻の生活は自由にならぬと思えます。そこで夫婦間の問題、妻の経済力の問題が出て来ます。妻の経済力が、明るい人間関係としての夫婦の上になどれくらいの比重を持っているか、今日は結論が出ませんでしたが、考えてゆく問題だけは提供されました。

又、夫婦の關係が暗くなりかけた場合に、なぜ暗くなったかというのを考えてみる必要があるですが、それもやっぱり先ほどから出ているような、先ず相手を一人の人間として認め合う精神、エゴの合理化ですか、そういうものがやはり人間関係の基礎として必要なことじゃないかと思えます。

嫁姑の間

司会 では次に移りたいと思いますが、先程、終りに出て来ました夫婦の關係を巧くゆかなくさせる原因の一つとして、夫婦以外の家族の影響、特によく言われるのは、嫁姑のことがあると思います。それについていかがでしょう。

織田 私は今までのお姑さんの態度がどうもお嫁さんには頷けないのではないかと思います。孫はやはり孫であっ

いから母が子供を養育すべきだと思います。勿論若い未婚のお母さんと姑さんが子の育て方について話しあひということは、よいでしょうが最後の責任は母親にあり、姑さんは孫を責任なく可愛がるだけで結構だと思います。

しかし考え方の違う嫁姑の間の話し合ひは総明さが非常に要求される一つの場合だと思えます。ある問題が喧嘩をあえてしても、どんなに衝突しても主張しなければならぬいか、そんなことをする値打のないことを見極める事が大切で、聰明な判断力ですね。女は引つこんでいてはいけないうという執着に燃えるあまり、どうでもよいことを強く主張する。御飯を男の子にはゆっくり食べさせ、女の子はゆっくり食べてはいけないうことは、私は許せないことだと思いますが、そういう時にお姑さんの気持が悪くなるかと即座に解決するか、又長いことかかっても説きつけるかはあなたの臨機応変だと思えますね。

本重 私は母にはそう強いことが云えない。もう八十近いですから云っても分らない場合父に云うわけです。そうして結局、喧嘩して、そのまま荷物も放ったらかしてよそに行ってしまう、半年ばかり別居生活して帰ってきたことがあるのです。その結果、私も向うも互いに分って今のところ気味が無いくらいよくいっているんです。

織田 私も姑と十数年の生活をいたしました、私は嫁

で、自分の子でないから、お母さんに任せて、お姑さんは自分の趣味や仕事を持ったりして、あんまり孫やお嫁さん達の生活に立入り過ぎないように、ある程度別々に暮らして頂きたいと思えます。

本重 たとえば同居の年寄りが食事のときに男の子はゆっくり食べてもいいが、女の子はさつさと食べて後片付けをするような習慣をつけなければいけないというのです。その時に、嫁であり子供達の母である私としてはそれは男と女の間ではないといつてやりこめるやり方もありますが、そうなのではないので「お母さん二十年すれば男の方に結婚難しななければならぬ時がくるかも知れない」といって笑うことも一つの技術だろうと考えましたが、しかしそれをただ黙っているという事は許せないわけです。そこで子供の教育が非常に難しいのです。

久米 今のお話は思想、環境、生活様式を異にする二夫婦が一緒に住んで、おのの御自分の思うことを人にもさせようとするから、そういうことになってくると思えます。姑たちは子供夫婦と一緒に住んでも、その生活に干渉しない生活態度が大切で、特に子供の教育については、姑さんが絶対にゆずって母親にまかすべきです。たとえ、姑さんの方が賢明で母がおろかでも、おろかな方法でもよ

姑というものはあまり期待をしない方がいいと思います。友達でも親友になる場合と、ふつうの友達の場合と二種ありますが、親友になることを姑に対しては期待しない方がいい。普通の友達で、一種の演出をもってやってゆくべきではないかと思えます。また姑になる心掛としては、自分の世界というものを常に持つこと、いつでも精神的に子供を離乳できる母でありたいと思っております。

八木 私は男のことで十年悩み続けました。ここに来るまでに千葉県でもこういう会議をやりましたが、その時家を建てる時敷居に障子がはまらなければ障子を削ってはめる、お嫁さんも後から来たお嫁さんだから家に合わせるべきだと言ふ意見がありました。後から来た者は不満をがまんしなければならぬのかということをいくら考えても納得できないのですが、皆さんどうしたいか御意見お聞かせ願いたいと思います。

岡 私の家は主人が教員をしており、主人の両親と子供が三人ですが、子供は上の二人は義理の仲で、三人目のが実子です。私の家庭は戦争のため、財産は全部失いました。その後二十坪あまりの家を建てましたが、毎日私と舅姑と部屋で顔を突き合せているものですからお互に誤解を招くことがあって、和解のためにも何とかして家を壊壊して年寄の部屋とせめてわたしと嫁夫婦の部屋でもほしいと思

い、その資金を作るため老人の意見もいれて計画的に予算生活を実行しました。家族皆が協力して努力した結果どうにか資金ができ、金庫の融資を受けようやく狭いけれどももう一軒家を建て、両親にもたいへん喜ばれました。その後子供の進学などのため家計が苦しくなり、幸い父が元教員で、教員の恩給をもらっている上に株を少し持っていますので、相談しましたところ、「お前達の扶養をうけることが間違っていた。家もこうして建てたからおじいちゃんおばあちゃんも困るし、恩給などで生活するから」と言われ現在は別居しています。私達ははじめそうして頂くに越したことはないが、主人の兄弟とか近所親戚が、年寄を裏に押し込んで冷遇するというふうな誤解されては困ると思いましたが、わりあいそういうこともありませんでした。お蔭で両親が非常に理解があり、上の子供二人が私の義理なものですからおじいさんとおばあさんがそれを気にして非常に私によくしてくれるのです。

嫁と姑が言いあうことはどここの家庭でもあるのですけれども、結局その解決方法は家庭内で仕事の分組をきめることだと思えます。おばあちゃんなんか家に用はない、というような態度を取ってはだめだというのが、体験でわかったのです。自分も家にいなければ困るのだという気持ちを持って頂くということは非常に年寄の心をなごめま

か、母は、娘よ娘よというふうな私を思っているかという、そんなことは不可能と思えます。それをそう持つてゆこうと努力するのはむしろ無駄じゃないでしょうか。そういう不自然なことはやめて、できれば別居の形で行きたい。当然世代が違うから考え方も違うわけで、それを一緒にしようなんということは無理です。ですからできれば、距離をおくという意味で別居が理想だと思います。遠くから愛憎を交し合うということは非常にいいと思うのですが日本の現在の経済状態では可能でない場合があります。そういう場合はやはり個人個人が、非常に抽象的な言葉ですが社会人としての教養を持つということより他に解決の方法がないと思えます。

坪井 嫁姑の關係が巧くいかない場合の原因としては、それを特殊なものと考えるところにあると思えます。嫁姑の間は巧くゆかないものだという社会的偏見を気にすることが、素直な気持ちをゆがめることもあると思えます。嫁姑の關係にかかわらず、親類の關係でも、実の親子の關係でも、お互が一人一人の個人といえますか、人間といえますか、他人のような……と書くと冷いように感じられても困りますが、そういったような關係のように思っています。そうすると自然そこに遠慮があります。この遠慮は思いやりという意味のものであって、云いたいことも云わ

ず。私は和裁が少しばかりできますので、それを内職にし両親と同居中は掃除とか炊事は、おばあちゃんの仕事にしていますので外出していても御飯を炊くために時間になると飛んで帰ってくるという風でした。

中村 私の主人は一人息子で、母が四十歳の時に出来た子供ですからとても頼られています。私も結婚してから夫を助けないように、母にはやっぱり自分の息子であると思わせるようにつとめていたのです。何かことがあった時、姑にあなたのやり方が悪いからだといわれまして、私は私なりに、それはお母さんの息子さんですからお母さんの育て方もあるのでしょうかといったりして母と私の共有物みたいにしむけていますが、姑を淋しがらせないことが必要じゃないかと思えます。

小林 嫁姑の關係については、さつき武田さんがおっしゃいましたように、親子のような關係やら親友のような愛憎ということについては絶望だと思えます。

私の姑と私の關係は非常によくいっていると思っています。私がこの会に出て参りますについても、私の子供や夫の世話を委せてありまして、私は大船に乗ったような調子ですが、そういうふうに、困った時にはさつと助太刀に來てくれるように私は信用されてはいますけれども、それならばどこまでもほんとうにお母さまと言つてゆける

ないというふうな遠慮では勿論ありませんが、赤の他人でなくても、ある程度の確い遠慮は実の親子の間ですら、小さい子供を除いては必要で、また明るい人間關係を保つてゆくに欠くことができないものです。そういう意味の遠慮があれば、八木さんのおっしゃったような、非常に押しつけがましくなることもないし、武田さんがおっしゃったように、相手に期待し過ぎることもないと思う。東京会館の時も、嫁をほんとうの自分の娘と思えばいい、嫁は姑をほんとうの母親のように思えばいい、自分はそれで成功したという意見と、そんなことは絶対に考えられない。嫁は全然他人で、娘ではないが、その上に明るく人間關係を保つことに努力してゆくことが大事だという考え方と二つ出ましたが、やっぱり親子だと思えばいい、非常に押し付けがましいことも出てくるし、どういふ關係があってもお互が個人として尊重するという態度を忘れてはいけないと思えます。

久米 あなたのおっしゃった思いやりという意味の遠慮、他人の感情を傷けないでものを言う技術というのは必要だと思えます。

そして、よいいなことを言わないこと、「もの言わぬは腹ふくるるわざ」といってもね。

それから私も大分前ある機会に感じたことですが、嫁と

姑の關係が出て、ある人が嫁をほんとうの子供だと思ふと
いうと、他の人等がどうしてもほんとうの子供のように或
は母のようになつてくれないということを言うのでびく
りました。肉親と思わなければその人に愛情を及ぼし得な
いという考え方に問題があると思います。人間理的な理解の
上に立てば、姑さんでも嫁さんでも、親友のようになさる
人もある。いつまでも並行線だと思ふ人もある。親だか
ら、子供だからと思うからでなしに、お互に気があえばい
う關係が出来ると思ふ。親子でないのに親子の感情をどう
して持てますか。日本人はすぐ人の子をも自分の子と同じ
ようにかわいがっているとか、あなたの子供と思つて下さ
いというふうなことをいうが、その考え方は自分の子供と
思わなければ愛情を注がないし、かわいがれない、それが
のびてゆくと、——自分の子供さ電車の窓ぎわに座つて
楽しんでいれば、よその子供はどうでもよいという事にな
る。日本の社会には嫁姑の不和というものが非常に根強
い。離婚の原因の中にも、夫婦それぞれ自身の問題というより
も嫁姑の關係に端を発したものが多く、不和の原因は色々
ありましようが、共通していると思われるのは相手の生活
に干渉したがること——親子と思えないから頼らしいと
いうおかしい感情があることでしょう。だからそういうも
のを克服して嫁と姑の間に理解と寛容の上にたつ人間關係

いのです。ですからその人から冷たく見られるかも知れないけれど、あまりさわらない親切というのもあると思います。年寄りの方も、暇がなかったからしやうがないとい
ってないで、自分から積極的に見つけるといふ努力も持っ
て欲しいと思います。

織田 そのグループについて静岡で聞いてまいったことですが、やはり嫁・姑の問題で個人で解決出来ない場合には、グループに頼る。そうするとまわりから教育されますから、お姑さんもかたくなにならないということでした。

本重 これは現在の段階では技術として必要でしょうが、それが理想ではないと思います。私は今姑との間はずまぐいっているが、周囲が今までの既成概念の中であえて氣をもむ。衝突したらいけないからと、嫁姑が直接交渉する場をさけようとするのです。例えば昔は結婚の場合でも仲人が申になつて何百遍か足を運ぶのがしきたりになっていたのが、現在の結婚は本人同士の直接交渉になつてゐるのですから、もう少し嫁と姑の間も直接談判でいいと思います。

岡 嶺の立場にある私ですが、姉というものは、嶺である私の船のとりようでどんなにでもなると思っています。結局姉に対する気持ちに姉はこわいものだ、と決めてかからないで、気易く接するのが非常に大切だと思います。こんなこ

が立てられないでしようか。とにかく自分の子でなければ
かわいがれない、溺でなければよくできないという精神た
けはなくてはほしい。ほんとうのヒューマニズムといま
すか、そういう考え方により多くの日本人がなつてくれ
ば、それだけで明るい人間関係が生れて来るのじゃないか
と思います。

山口 親が自分の生活を持たないという発音が初めから思ひやうで、それが持てなかつた場合にはどうしますか？
りましたが、それがあつた場合にはどうしますか？
日本では、貧乏であつて、趣味や仕事を持つ余裕のなかつた家庭が農村に特に多いと思います。

中村 秘のところが母かきつゝ泣いてゐた。遅くないと母になるべく外へでてもらうようにしてゐる。

倉石 私の里の母も全然の主婦専業で何もとわりわけて趣味はありませんでした。しかし子供たち全部結婚させましたら、少し自分の時間が欲しいといつて、教会仲間のお友達もありましたので、木彫を始めました。私達は今ごろから始めてどうかと思ひ又、兄嬢は母にそういうことをさせられるのは喜ばなかったらしいのですが、私が「お母さんの好きなようにさせて頂きたいね」といって、皆が余り干渉せず静かに見ていて時時お小遣いが足りなかったら出してあげるといふ工合にしていますが、母はこれが大変楽しいらし

とを云つたら怒るだらうか、あんなことを云つたら氣を悪くしないかと、氣を廻さないで、甘える態度で申けぱいいと思います。私も若い時はどうしてあんなにうるさく干渉するのかと随分張りあつたのですが、自分が年をとるにしたがひ、又母の会やP・T・Aの金に出掛けて、教養を高める機会に恵まれると、自分を反省する氣持になり、一歩しりぞいて何事も善惡に解釈するようにつとめました。結局鐵が賢明になり、常に反省して人間としての自分を成長させる。それが和解の鍵だと思います。

副島　私は両親が早くなくなり結婚前は自分一人で暮しておりましたので他人に迷惑さえかかなければどんなことをしてもいいという生活でした。ですから結婚して自分のことが何もできないようなこの家庭生活に入るとそれが煩雑でたまらないのです。そのことで今でもやっぱり両親と時々いさかいをいたします。しかし、これは両親の方に理解がないという意味ではなくよく考えてみたら、私がよく説明していないということもあるわけです。以前自分の生活が説明する必要のないものだったので、これでいいと思つて、済ましてしまふから誤解を生じ時々怒られるのです。が話しあえば誤解がついて、根本的な不満はありませんし、夫が間に立ってよく処理してくれるからいいのだらうと思ひます。

司会 御主人の態度が相当影響があると思いますが、それについて山口さん、いかがですか。

山口 それはたしかにあると思います。私の家庭の場合ですと私は一人息子で母が年を取っており、病気がちであり、又趣味もあまり持っていない。そういう悪い条件が重なっています。私の妻にはそういう母の気持がわからず、姑は暇がありますからいろいろなことを言うわけです。結局何だかんだという問題が私に聞えても、はじめは私もあまり理解がなかった。しかし妻が緊張のとける機会を持っていないということが問題であることを知ったので私は経済的な理由もあり、又母の健康の向上をたすけ、精神的にも焦立ちを和らげようと考えて指圧療法を習いました。その後は大体うまくゆくようになりました。

牧 私の親は太分におって、私は開司に出ているのですが、私のうちの場合は妻の立場は非常にいいのです。何故かという、親が妻に対して非常にすまない、苦勞するだろうというような不調の氣持を持っている。というのは、私の妻は鹿兒島生れで、両親もなし——だいたい、私は政治運動をやっている、若し逃げられたら困ると思つて逃げ帰るところのない人をもらったのです。それでずうっと七年くらいになるが、我慢してやって来ていた。私が長く家を外にしても苦勞して留守中やってくれ

るし、そんな形だから親が非常に可憐にそうだという氣持を持っていて。そして又私は妻に苦勞させるばかりで、他に何も出来ないから親に対しては妻を非常に高く誇りこむんです。私がこうこうしている間にこうして我慢してやってくれたと話すんです。するとなお親は嫁に対してかわいそう、かわいそうだと云いながら大事にする。それともう一つ、私自身は日ごろは何も出来ないが、今は幾らか余裕があるので親に毎月仕送りなんかをしてやる。それを送る時に、私の名前と妻の名前を二つ書いて、少いけれど送ってやる。そんなことから非常に妻に対しては親はよくしてくれる。だからやっぱり嫁と姑の關係については、夫になる人が十分妻の立場をよくして、必要以上に高く両親に対してうりこむように意識的に努力する必要があるのではないですか。

もう一つ、こちらに来る前に、社会福祉事務所の所長と話した時、福祉事務所あたりでいろいろと子供のことやっているが、年よりの施設がない。家に年よりのいると自分は何もしないで、嫁のすることに氣をつけているから、遊びに出しておくのが一番いい。遊びに行つて茶飲み友達から面白い話でも聞いてくれば家に帰つても面白いことを云うだろう。やはり年よりの遊び場を作つてやる必要があるということを話したのです。

吉村 親子の間が巧くゆくには、別居が理想的だとどなたがおっしゃった。ほんとうにそうだと思いますが、年を取つた親と別居すると、それこそ輪山節考のような感じを抱かれます。それは今まで特に父親は子供ばかりを頼りにすごしてきたからだと思います。それだから年をとつても子供が自分の生活を見るのが当たり前だという感情が残っているのです。私などは今お友達と話していても、養老院へゆくとき平気で云えますが、今までこういう考え方でない人が年をとつてから肉身と離れるということとは主観的に淋しいと思いますし又急に婦人会に出ようとしても活動範圍は限られてしまいます。ですから別居生活をするという理想にもつてゆくためには、若いうちから子供中心の家庭より、夫婦中心の家庭にして妻も社会的接觸を持ち續けていきたい。夫婦中心の家庭の方が結局妻も幸福だと思います。

八木 さっきどなたがお縁さんも常に反省せよとおっしゃいましたが、反省しても真心でつくしても通じない場合にはどうすればいいのでしょうか。

山口 その問題は神奈川県地方大会でもしました。結局、世代が違い、経験が違い、考え方が違うから、とにかくうまくやろうという努力は若い人も年をとった人も当然持つ必要があります。しかしどうしても分らない者を相手にく

くよすることはない。誠意を持ってやるだけのことやあって、違つたら違つていいのじゃないか、それが当然ではないかというのです。そういう自信を持ってやることです。岡 さっきばらんに云えばどんな人でも何時かは分つてくる時が到来すると思います。おたがい人間ですからね。私も若い時に随分舅姑と云い張つたのですが、でも自分の子供が成長するにしたがつて、親の氣持というものもが理解出来始めますね。

久米 八木さんのおっしゃったどうしても分らない人ですが、これは一生直らないからそういう人に出会つたのが不運と思うより他ない。さっき岡さんがおっしゃったことに結論的に賛成ですが、本心に聴明でありたいと思いますね。人間が少し利口で相手の立場を理解すれば、感じのよくない言葉ですが相手の立場を操縦出来るのです。嫁はお姑さんを操縦するし、姑は嫁を操縦するということです。それが聴明であれば出来るのです。何も意氣投合しないでも、仲よくならないでも、あれはあれ、自分は自分という不干渉主義で、平和な人間關係は保たれます。よく物事を理解出来て、そして自分の立場というものが、客觀的に見られるような人間がふえてゆけば、人間關係は明るく少くとも平和になる。それが出来ない人はどうするといつても生れ変えなければしょうがないかも知れませんが、少くとも一

人々がその心がけになる事は大切だと思います。

それからいまま、嫁と姑の問題に關する夫の態度について出ましたが、牧さんのようないい夫を持った奥さんはうらやましいと思います。夫の態度は嫁姑の關係に随分大きく影響すると思います。お母さんは息子の云うことをよく聞くものです。姑との關係が原因で離婚する人の話を聞くと、たいてい旦那さんが意氣地なしでお母さんに引きずられていて、息子の云うことならなんでも聞く姑に、自分の妻の告げ口をする夫にいたっては精神年齢を疑いたくなりますね。そういうことのために妻と母の間に不和にしている例が、かなりあるのですね。

親子の間

司會 それでは今までのお話し合いから親子の問題が出て来ると思われますので、これから親子のことを話していただきますと思います。

言村 親子の間にトラブルが起るといふ時には、お互いに感情的になりすぎてることが多い。親の方を云いますと、小さい時から子供のことがかり考えて生活してきたので、その延長が大人になった子供に頼りかかる氣持になる。子供を老後の頼りにするといふよりは、もっと頼り氣持で育てた方がいいのじゃないかと思ひます。

る親子は話しあえるし、殊に思春期までの子供はお母さんに何でも打ち明けるようにしたい。ところが二十位になつて一応大人になつてまで、母親にすべてを打ち明けないければならぬだらうかという問題なのですが、私はその時は子供を一人前の人間に認めて、母親から独立した立場を持たせるといふところ、波多野さんはそれに賛成なさつた。ある娘はお嫁に行つてまでも奥家のお母さんに何でも打ち明けて、御主人が恥しい思ひをするといふ。これは母親から見ても可愛い態度かも知れませんが、母親も子供を一人前にしたら社会人として対等に見るといふことが必要だと思ひます。そうすれば嫁に行つた娘を何時までも追かけるということもないと思ひます。だから親と子供の態度といふものは姑の間のようにな固めたものではなくて、四つ五つの子供に対する母親のあり方、十まで、十五までといふふうに進んで来ます。勿論いつの場合も子供たちや、今の若い人たちを理解しようといふ努力は親の側には必要だと思ひます。私なんかでも、自分ではちょっと世の中に遅れていないつもりでいても、二十くらいの人のお話を聞くとびつくり仰天してしまふことがあつて、年をとつたな、どうしてもああいう若い人の考え方についてゆけないと反省することがあります。自分では氣がつかなくてもやっぱり年齢というものはだんだん人間を固定化し、保守

武田 親と子というのは案外話しあつていないのじゃないでしょうか。特に恋愛問題なんか起つた時に、子供たちは離れに一番相談するかといふことです。私の子供はまだ中学校でございすが、せんだつて「黄色いからず」といふ歌謡を見まして、子供の感想を聞きますと、そこに出てくる少年の氣持には非常に同情しますけれども、親の氣持には全然同情がない。あの中で子供が涙を一杯溜めて、「お母さん、ぼくとお父さんどっちが好き」といふことを聞くところがあるが、子供にいわせますとそういうことをいわせる親なんかちやあいないといふ。親が引揚げて精神的に苦しく慮まれていないといふ状態にあるということに對して、全然同情がないのです。これをきいて私はおたがいに生活領域の違ふ親と子といふものが、本當に分り合ふといふことは非常に難しい問題だと思ひました。私はその喰い違いをさけるため何時も母親と子供が話し合い裸で触れあつてゐる境地を造つておきたい。思春期に恋愛問題が起きた時も、素直な氣持でお母さんに打ち明けて貰いたいと思ひます。

久米 今武田さんがおっしゃつたことで、私も青少年の不良化の問題についての相談会だつたと思ひますが、例會最近ぶつたことでした。心理学者の波多野勸子さんと私だけが他の方と意見が違つたのですが、よく理解しあつてい

的にしますから、よくよく子供を理解する努力が必要であるけれども、何時までも自分は子供の役に立つといふ親のうぬぼれは捨てた方がいい。三十になつても自分の奥さんとトラブルがあつた場合も、お母さんの云うことを聞くような男に育てちゃあ困ります。武田さんは恋愛も自分と相談してほしいとおっしゃる。それも結構ですが、それは母親だから相談するのじゃなく、一人の信頼出来る人間として相談出来るといふのでなくては価値がないのであつてここに新しい親子のあり方があるのです。そしてこれは夫婦の場合でも、嫁姑の場合でも同じことでやっぱり互に一人の人間として認めるという關係が根本的に重要で、私は何時も親子の問題の時に云うのですが自分の子供が恋をしたらさつさと結婚して、明日結婚したいけどどの位お金がもらえるかしらといふふうにやつてくれる方がいいと思ひます。

小林 今先生がいいお話を下さつて、私もその通りだと思ひます。しかし、例をあげて申しますと清水慶子さんが御自分の只一人の御嬢さんが独立して結婚なさるといふ問題の時に、非常にお悩みになつたといふことをラジオやいろいろなところで拝見しました。清水さんでさえそうですから、今久米先生がおっしゃつたような理想的な氣持に、母親が——何人の日本の母親になり得るかといふこと

は、非常に問題だと思っています。私は清水さんの御嬢さんと同じようなことをしたのですがその時、私の母を非常に分らない人だと思って、不満を感じたのですけれど、清水さんの話を聞いてああそうかという感じがしました。ですから母と娘、母と子供の関係において現実事件にあたってどういう態度に自分が出られるかということは疑問だと思っています。理想としては、久米先生のようなお考えが望ましいし、自分もそうありたいと思っていますが。

静岡 私は姉と二人姉妹で姉はいわゆるお嬢さんを迎えました。私の時にも両親は夫と結婚します時は遠くに離れてやるのを非常に心淋しく思っていて、手許におきたいと主張したのですが、夫も一人息子で、その問題に少しトラブルらしきものがありました。ですけれど、母が申しますには、子供を育てたのは育てるということそれ自体が自分の喜びでもあったし、又一人前になって独立してゆくということも又喜びであって、いつも近くにいることばかりがよいのではないと申し、私は結婚して遠く離れていきます。勿論血のつながりですから、切れて終うというのではなくて、別々の人間どうしとして一応つっぱなしで、一歩退りぞいて見られるという余裕を持ってゆくことが非常に大事だと思っています。

坪井 この間東京の部会で出た話ですが、あるお母さんまでも認められるように努力しなければいけないんですよ。

久米 今の八木さんの場合は、仕事を一緒にしているという一寸違った事情がありますね。親子と同時に同業者という関係が入ってきているから、親子の関係でとまらないでしょう。たとえば、息子が三十か、四十になって何処かに勤めて課長さんになっている。おじいさんは学校の先生かなんかで別に出勤しているという場合には、そういう問題は起きないでしょう。ところが共同の事業をやっているから親子だけで済まない問題がそこに入ってくるのじゃないですか。仕事の仕方が悪いとかね。それがまた同時に親子であることによって、他人なら遠慮していいないことまで云うということになってくるから、普通の場合と非常に違うものがあるって、親子であるから親に理解されるようにしなければいけないということ以外に、共同事業者として相手を納得させなければいけないということですね。それよりもあなたの御主人はあなたからみてどうですか？ 信用するに足りない夫ですか？

八木 私から見れば満点です。

久米 それならそれでいいじゃありませんか。親の云うことが間違っているという判断ですね。

牧 親子の関係で、子供の時の親の生活態度が非常に影

がお嬢さんをもたう頃の息子さんを持っているが、その息子さんが外からお歸りになる時に、夜遅く十一時、十二時になっても起きて待っていて、帰ってくるといういろいろな物を温ためてやったりしているのに対し、子供はそれが迷惑なようなことをいったのでびびくりしたと同時にがっかりして、とても淋しくなったという意見があった。これなんかも、お母さんは何も知らなかったからびびくりなさったのだと思いますが、子供の立場とすればもうお嬢さんをもたう年頃になってまでもあまり一生懸命かまわれすぎるというのは当然負担になり、息子さんが迷惑がられるのは無理な気がします。そういう声を聞いても、あんまり子供を自分の所有物のように親が扱かわないように加減になったら、結局問題は個人を尊重する、何をいってもそこにゆきますが、そういうことが大切じゃないかと思っています。

八木 先ほど親と子供が理解しあうべきだとおっしゃいましたが、私の夫とその父は話しあってもどうしても意見が合わないで結局最後に喧嘩になっちゃうんです。私は何時も黙ってそれを聞いているのですが、結局親が子供を信用してくれないからで、子供は信用されるように努力しなければいけないと考えるのですが、父は頭から受け付けません。そういう時にはどうしたらいいでしょう。やはりどこ

響があると思います。私の場合はうちが大部分で百姓をしています。小さい時のおやじの印象が強い。非常に貧乏で私が夜学に行って帰ってくると、おやじは土間でこもを編むかなんかしているんですね。それを見るとかわいそうでもあるし、こんなにしてまでやってくれるのかというその時の感謝の気持ちが印象にこびりついている。そして母から「一生は学校にゆかしてないから、兵隊にいった苦勞するかもしれん、社会に出て又苦勞するだらう」と父が云っていたというのを聞いて涙が出ました。そういう苦しい中で精一杯家庭を支える努力をしてゆく親の姿が非常に強く焼き付いています。又私は兵隊から帰って、政治活動に入ったので、親が非常に心配して隣り近所に困るからやめてくれ、やめてくれと手紙でいってききました。しかし私はそれだけはこらえてくれと云いながら焼けているので、さんざん親の苦しんでいる立場を何かの面で補いつけてやらなければならぬという気持ちもしょっちゅうあるわけですね。だから十七、八からのちは自分は一人で努力してやっていたし、兵隊に行く前、鉄道機関士をしてあって、給料六十円か七十円のところ、二十円くらい送ってやり、兵隊に行った時も給料を送ってやったから、町内でも私はものすごくよい息子さんだという評判でした。しかし私は親に孝行するが、それはただ親だからするのじゃない。尊敬できるいい

人で子供の時から本当によくやってくれた。私も出来るだけのことはしたいという気持からです。このころはもう私の政治活動についても親達は完全に諦めており、だんだん私達の立場が、社会の人たちに理解してもらえないようになれば、親も養育に肩身の狭い思いをせずにはすむわけで、このころはほっとしています。

山口 慣習に足るような子供を育てることに同時に親と子供の教育環境、生活環境、育ってきた環境が違っていることに思いやり適切な判断をしてゆく子供に育てることが必要だと思えます。それには、やはり話しあうということが必要で、今までは殊に母親が子供に対して小言を云いすぎたのでそれが親に何も云わなくなる一つの原因だと思えます。小言は非常に人に迷惑かけた時、衛生上悪いことをした時、あるいは下品なことをいった時だけは直さず、それ以外のことにについては、小言を云うよりそういうことについて自主的に判断出来るような子供を育てるべきです。そのためには先ず一々小言を云わなくていい生活環境をおたがいが作る必要がありますが、それには一つの家庭だけでは出来ませんから、やはり集团的にやってくることがあります。そういうこともやはり親と子供の問題の解決の上には必要だと思えます。

教 子供を素直に育てるためには、子供の貌をどういう

を感じたとか、その外性格的なものとか、色々あるがそれは専門家の分野として、……一般的に、よからぬ区域の子供が早熟で悪くなるということは、社会環境を変えることで救済されますが、なかなか環境だけでは出来ないこともあると思えます。しかしここで話し合える問題としては、初めに今井さんや本重さんの発言にもありました親の教育態度ということがあると思えます。たとえば、日本のお母さんたちが今でも男の子と女の子に違う教育をする傾向のあることです。私はそれが日本婦人の進歩や解放を遅らせ、不幸にしていると思う。女は黙っていれば事が済むとか、大人しく従順で可愛いとされなければならない。男の子はそうではないというふうに育てることが、いけないことだと思えます。

きょうだいの間

司会 それでは今男の子と女の子を区別するという問題が出ましたので、兄弟・姉妹の間の問題にうつってはいかがでしょうか。

久米 親が男の子は出世するように育て、女の子は家事労働に従事するように育てるという日本の家族感情が兄弟関係に大きな影響をしていると思うのです。又家族制度の許では長男は跡とりだということね。兄弟は出戻りになっ

気持で、どういう態度で、どの程度やるのがいいか？ 私には自由労働組合の委員長をやっている関係で、非常に貧乏なおじさん、おばさんたちが来る。その中には貧乏からくることもかも知れないが、昔から醜態を飲み、博打を打つというようなことをして来た人も多いのです。子供が悪くなり困って断えてくるが、どの程度を親の責任と考えていいのか迷うわけです。

山口 それはやはり子供は親の環境と云いますか、大人の環境に影響されると思えます。これは赤ん坊を見ればよく分ります。子供には責任ない。ですから親の環境、大人の環境をよくすることを親が心掛けるより仕方がない。

牧 ところが二人兄弟で、片一方は素直になる。片一方は悪い奴になる場合があるので……。

山口 それは子供の性格を親がのみにでいないからです。この人間は内向性か、外向性か、非常に弱いか、強いかが、それが一番基本的な問題だと思えます。

久米 環境は人間を支配しますが、環境じゃ支配出来ない人間の性格があるのも事実です。同じ環境に育った者が同じになるとはかぎりません。これは心理学の問題になると思うが、子供が同じところで生れ育って違うようになる原因は、親の偏愛だとか、子供の時に親のよくない面を見たとか、知らない間に親の秘密の話を聞いてそれ以来幻滅

た姉妹や結婚しない姉妹の面倒をみるという負担を負わされて、そのために兄弟の地位が姉妹のそれより高いという形態があると思えます。そういうことからお話ししてはどうでしょう。

本重 私が鹿野島に帰りましたのは、夫の兄が匿者をやるからで、私も匿者です。あとを譲るからというわけでした。私はそこでする希望もありませんから、断りました。弟である私の夫が帰ってしまっただけなので、自分は兄との血のつながりの方が強いから、兄の云うことを聞くのは仕方がないというのです。私は人間的なつながりというより家族制度的な縁のものでしかないということに反対するわけです。

倉石 神奈川の会で中年の方から、うちの嫁は息子のところに嫁にきたという感じが強すぎて嫁になじまなくて困るといふ御意見がありました。私はこれが納得出来ません。私は夫を愛するからその嫁に気に入られたいし、兄弟とも仲よくしたいと思えますが、基盤は夫で夫婦の間の方が濃いと思えます。

久米 「血は水より濃い」そんなのでしょう。だけど血族関係にやたらに重きをおくことがやっぱり封建社会の特長だと思えます。それに一方兄弟は他人の始りという言葉があったりね。

勿論結婚生活というものは、夫婦単位ではないですか。あなたのおっしゃった通りでいいと思うのです。それに自分の愛する夫であるから、夫の兄弟とも仲よくしてゆきたいし、夫の親にも気に入られたいし、よくしてあげたいというなら、これ以上いいことはないのです、これ以上本当の親と思わなくてもうまくいくわけですね。

終戦までは結婚は妻が夫の家に入ることでした。戸籍にも戸主の婦と書きまされた。お嬢さんは家に来るという感じが今でもしみこんでいる。これは日本社会がまだ封建的だということと表現されると思います。しかしだんだん西洋のように夫婦と未成年の子供が家庭の単位であるというように変わってきたものではなからうか。だから希望をもつて……。

坪井 東京の部会でも長男が嫁をとって、家を出たことを大変気にしており又長男が家に帰えるという言葉が非常に多く使われました。それで中年以上の人の間では非常に長男が中心になっていっているように思いましたが、それはあらためなければならぬと思います。又あの人は三男坊だから気楽に生活しているといわれるのは間違いで、長男だっけが気楽な生活をする事ができる筈だと思います。

久米 親子の関係も、血の關係に重きをおきすぎて、それに意味をつけすぎるのではないですか。我が子を動物的

久米 私も子供の喧嘩に親が出る必要はないと思います。今の義理の親子、これも難しい問題ですね。小さいうちから随って育てている。大きくなって偶々知ったため、悲劇がおきたというような話が実際ありますね。難しいですが、理想はやっぱり本当でないならば、本当でないという事を早く教えて、しかも心から可愛いがあれば一番いいと思います。本当の子供とそうでない子供がおりれば、良きにつけあしきにつけこたわると思う。よくしようという意識が消えないため、よくする。それはこたわる点に於てはいじめる場合と同じだと思う。その意識をなくして、同じになさいというのは、姑さんを親と思えというのが同じで不可能でしょう。しかし子供というのは世話して育てたら可愛いくなるのではないですか。結局なるべくこたわらずに、少くとも取扱いは、例えば、食事を買ってあたえるもの、外出等は自分の子と区別する理由はないでしょう。叱るときは叱るという風にね。

住み込み使用人との關係

司會 では続いて家事使用人とか、同居の店員とかいう問題にちょっとふれたいと思います。

八木 うちはおせんべいの製造をしていますので非常に朝早くから忙しいわけです。夏などは、それこそ火の前で

本能で可愛いのはあたりまえでしょう。それはそれでいいのです。わが子もよその子も、同じように可愛いおなりなさいとは云わない。しかし自分の子だけが可愛いのが極端になると他人の子はどうでもいいというのね……。

武田 血というのは本当に恐いものだというのを感じたことがあります。

岡 その点ですが、私のところは上の二人が義理の子供ですが、きょうだい喧嘩をする。上のお兄ちゃんが、下をからかうのです。その場合に結局お兄ちゃんが悪いのですから、お兄ちゃんを叱ればいいのですが、そこが妙にとられはしないかと迷います。高等学校二年生といえはすべて分っているのですから。そんな時どうしたらいいでしょう。

織田 そのお兄さんが、かなり大きくいらっしやるから、わけが分るまできちんとお話ししてあげたいのではないでしょうか。自分の子供、人の子供だからと考えないで。

岡 現在の私の方法としては、放っておいて干渉しないのです。

山口 それが命に関わるようなことならば、とめなければいけないが、そうでなければ放っておけばいいのではないのでしょうか。

一日やかなければならない仕事です。きたがる人がいないのです。今三人使っているのも私たちが夫婦でわざと頼んで来て自分たちの弟のようなつもりでやっているものなんです。割合私たちとはいいいのですが、やっぱりお父さんの考えと一致せず困っているのです。

岡 会 いかですか。そういう点、女中さんをお使いになつていらっしゃる方はありませんか。

小林 女中さんの問題ですけれども、私病氣した時子供がおりますので、小さい女の子を使つた経験があります。その子を奥力以上に評價して、仕事を派山与え、がぜんはりきって、自分の仕事の分野を非常に固く守り、私がちょっと越權すると「もうこないで下さい」と云って、一生懸命やる。そういうふうな使用人の使い方、これも人権を尊重するとか、個人の尊厳を考えるとということになると思います。とてもよくいって、子供もなつき、その後何度か訪ねてきたりします。

ま と め

司會 ではこの辺で、今日のまとめを先生にどうぞ。

久米 親と子、嫁と姑、夫婦の問題について今日話したことの結論は、つまり、人間の關係は、先ず個人を認めあう事を基礎にしたものでなければいけない。相手の立

場を認め理解しようと努めること。これは夫婦関係にも、親子・姉妹の関係にもあてはまる。それがなかなか出来ないというのは、日本社会の封建性にある。まだまだ日本の家族の關係が、家族制度で、妻は家の嶺として、子供は何時までも親のものと考えられる。それを解決するために、何れも申しあげたように、人間がもっと聰明になること、民主的な物の考え方や生活態度を身につけること、個人の尊厳というものをと理解する、そうすれば人間関係も明るくなるということであつたと思います。

それからまず話しあいましょうということですが、人間関係を調整する上に姉と姑同士、夫婦間の話しあいの必要性という点はまだ出なかつたが明日の会にまた出ると思いますが、これもただ話しあうという事ではなく、何を話しあうかということが重要でしょうね。最後にどんなに話し合つても結局わからない人がいるのはどうしようという重要な問題にぶつかりましたが、だいたい今日の討論で、人間関係というものが現在どういうふうであるか、これを明るくするためにどういう方向に向わなければならぬかというところについて、あるつかみどころを得たと思います。

質疑 応 答

質問 とても頑固な姑や親がいて、そういう方はどうに

えが通う。息子の嫁だから私の知つたことではないと言ってお母さんと、息子があれではかわいそうだからわしは何とかしなくてはなるまいと考えるお母さんとの違いですね。そして姑さんは必ずというほど別居している事。それから老後に子供に養われたいということが非常に大きな原因だと思ふ。別居をしており、子供に養われたいと生活が離れているから干渉する必要もない。経済的な生活が入り組んでいることが問題をおこさせるのです。日本でも老後の生活が保障されてくれば、おっしゃる通りに親子の關係あるいは姉と姑、あるいは家族關係も違ったものになってくるでしょう。

質問 私の二人の子供が高等学校くらいに大きくなつてきました、今ほとんど親としての家庭内の教育方針が、夫婦揃つて一致していません。夫婦が愛する子供を教育するのを感じているのです。夫婦が愛する子供を教育するのから目標も方法も一致しなければならぬ筈ですが、それが往々にして夫と妻がなかなか一致しない。そういった場合にももちろん妻である者が夫が正しい教育方針でやっている場合はそれにしたがってゆくのが当り前ですが、往々にしてそれが間違つていていけないということがわかつていながら、夫であるので頑固に押し通された場合、どうすることもできないでただ心配するということがあると思ふの

もしやがないというお話でしたが、どうして頑固だろうかということを考えてみると、老後の生活の不安ということが背後にあるということを感じずにはいられません。社会保障の完備した社会でも老後の不安がない親と、その次の世代とのいさこさもあるでしょうが……社会保障が完備してなくて、また社会保障の肩替りになるべき子供の生活というもののすらも完全ではないというような日本においては、大分機嫌が違ふのではないかと思ふ。もし社会保障が完備して、養老院に行けば世話をしてくれて、棺桶に入られてくれるという安心感があれば、次の世代が意見が合わないということもただ黙くだけで済むのではないか。それは重大な問題ではないでしょうか。

久米 おっしゃる通りだと思います。たしかに社会保障があれば、姉と息子、したがって姉との關係というものとの不和のあり方が違つてくると思います。

アメリカ人と離婚問題の話をしたとき、日本では姉と嫁さんの仲が悪くなるのが離婚原因の一つだという話をした。そうしたらそのアメリカ人が曰く、姉と嫁と仲が悪いのは世界の共通現象だ。しかしそれがアメリカでは離婚原因にならないで日本では離婚に発展するところに違いがある。一方は深刻な問題になり一方はならないのは何故か。個人主義の発達した国と封建的家族制度の国と根本的に考

ですが。

山口 そういう場合は第三者的な学校の先生の知恵を借りるということが一つ必要ではないかと思ひます。学校にいてる子供なら両親が学校と連絡をとつてしつてゆくことが必要と思ふ。日本のP・T・Aは、母親は連絡に行くが父親は行かないということが多いですね。

質問 今おっしゃったように、P・T・Aに女の方ばかり行っていると、男の方が遅れてしまふ。よく夫というのは、P・T・Aに行くことは妻の専断のように考えているので困ると思ひます。

山口 先生の方からそういうところに話しに行くというのが多いですよ。学校で先生が家庭訪問をする。あるいは母親と父親のおしどり学級というのがあつたのです。神奈川県で農村では相当やっております。だからそういう試みを婦人の力で推進していったらと思ひます。

久米 子供教育は両親が全責任を持つべきものであることには意見が一致する。しかし夫婦の考えが違ふ場合ですが、夫婦喧嘩の中で子供に關するものは上等の部類です。お互に子供がかわい、立派な人間にしようとするから争うのでしょう。父親が教育に無関心なお母さんの思う通りになるわけです。夫婦が大いに話しあつて、或は議論してこれが子供のためになるということを両親が納得すべき

でしょう。

ただ子供の前で、夫婦が喧嘩をするというのは、子供にとって堪えられないことで、子供に悪い影響を与えますから、子供の前でなされることは慎むべきことだと思えます。父親よりは母親が子供をよりよく理解している、聰明なお母さんは自分の子供をよく理解していると思えますから、お母さんの力で父親を納得してゆくべきでしょう。第三者に対する相談は最後の最後です。先生にも御相談してみれば必要の場合によつてはあるでしょうが、最後まで親が責任を持つということに私は全面的に賛成です。

質問 親子関係のことについてお伺いしたい。子供がだんだん大きくなって二十ぐらいになると、親はほんとうに理解して話しあうことができないとなげく友人が多い。私の家庭ではそれができるようにお互協力しているのでもうやましがられる程です。そういう人達に親と一緒に同じ会合に出て、広い場で話しあつたらどうかということをおすすめしたことがあるが、自分の母親や父親は恥しくて人の前に出せないとなげくのです。そういう家庭の若い青年男女がどういうふうに生きていったらいいかということですよ。

今井 私も学生時代に自分の意見と両親の意見と違ひまして非常に困ったことがある。それが積り積りまして結婚

ういうことは理解できなくてもいいと思う。

さつき牧さんが、政治問題になるとそういうことはやらないでくれとお父さんお母さんにお頼みになる。これは理解しておられないからだが、同時に、やっても仕方がないと諦めるという考えの中に、自分の息子だからあれのやることなら、という憤慨がある、と思う。それで結構だと思えます。どうせこんなことをお母さんに言つたてわらないから……といっても母親を馬鹿にしたわけではないと思う。受けた教育も違えば暮した空気も違う。思想も友達も違う。そういうものを乗り越えたところに親子の信頼感があるのでしょうか。

山口 小学校でも中学でも、そういうことがあるのですよ。やはり母親とか父親が出てきてもらうと困るという子供がわりあいあるのです。考えも古いし、身なりがみすばらしいという、いろいろな原因があるわけです。今おっしゃったのは考え方が古いということでしょう。そういうことをみんなの前で話しあつても笑いになつては子供として堪えられないということです。

久米 古い考えを決して礼讃するわけではないが、その人の考えとして認め尊重しななければならないこともあるので、あなたがこれを軽蔑するということは間違っている。

山口 そういうことを子供に理解させるための話し合い

に対する意見にまで双方の意見が分れてきたわけです。自分で考えてみまして一番悪かったところは、何も両親ともそれほどわからない人ではないのに、自分が十分信用されるだけに、自分の行動を父や母に鮮明にしなかったということです。結局子供が親に信用されてなかったということですから父母に信用されるような平素からの行動であることですね。自分が自信をもって、私はこうなんだと説明でき、親を納得させられるような生き方をするのが一つの条件ではないかと思う。結局双方が信頼しあうことですね。

又、今のお話に、自分の両親を、恥しくてとても人前に出せないという話があったが、子供としてそれはずいぶん淋しいことではないかと思えます。お父さんお母さんの意見が違つても、子供が親を人前に出せないという風な考え方は、子供の方に何か考え違いがあるのではないかと思ひます。

質問 父や母を人前に出せないということについては私も理解と尊敬の念があつたらそういうことは、ちょっと考えられないと思ひます。

久米 二十を過ぎた人が親とは何も話しあえないとなげく人があるということです。世代が違つてからわかるわけがないというのが私の考えです。人間的な信頼があればそ

が足りない。

久米 だから理解ということとは思想感情を同じくするということでなくて、相手の感情をわかつてということですか。その違いを認識するということが子供の側にも足りないのではないですかね。

司会 それではたいへん残念ですがこれで今日の部会を終りたいと思ひます。
(第一日閉会)

司会 それでは第一部会を始めます。

先ず昨日の討論の内容をとりまゝとめて書記から御報告申し上げます。

書記 昨日は都市の家庭の問題を夫婦、嫁姑、親子、きょうだい、家事使用人の問題に分けて討論しました。

夫婦の問題については、結論として、相手を一人的対等な人間として認め合う精神が基本ではないか、これによって妻が夫に寄りかかることもなく互いに独立した人格の上になつた人間関係を作ることができると。又、夫婦が何でも一致しなければならぬのではなく、むしろそれぞれ違った思想感情を持っていても、相手のそれをよく理解することとお互を認め合つて人格を尊重するということになるのではないかということでありました。又、家庭の経済的理由とか家族制度的な要素が不和の原因になりますが、そう

いう中で女の立場が弱くなり勝ちなのは、女の人が子供の頃から従属的なものとして環境になじみ易く育てられていたことが原因ではないかということが言われました。

嫁姑の問題はお嫁さんもお姑さんも聰明でありたい。よく日本では昔から、嫁姑も実の親子のように仲良くしなければならぬと言われてきましたが、肉親と思わなければ愛情を持てないという考え方はより広い人間愛に反するのではないかと、むしろお互いの立場を客観的に見ることができなければその関係が明るくなるのではないかと。そしてこの場合、やはり夫の協力の重要さが強調されました。

親子の問題については、子供がごく小さい時と、一人前の判断力を持った社会人として成人した時と、二つに分けて、子供が小さい時はしつけは親の責任であるから正しい判断力とか思想を持つ者に育てるべきで、所有物的なかわいがり方をしたのではない。一人前の社会人として成長したらお互い対等者として接するべきで、母親はいつまでも子供の役に立つという觀念は捨てなければならぬ。この場合も人間関係としてはお互いに離れて眺める立場を持つのが望ましいということが言われたと思います。

その他にきょうだい、家事使用人の場合がありました。が、きょうだいについては、男の子と女の子の育て方の差、まだある長男の權威と責任ということから、親子の関

係のようなことにも言及し、使用人の場合には、家事使用人を身分的な扱い方をする人がまだ多いが、使用人の人格をもっと尊重するべきである、そして会議員の中からその体験談も出されました。

どの場合も個人を認め合うことで人間関係が明るくなるということが共通の点であるが、何をどう話し合ったらいいか、それから、話し合ってもわからない頑固な人はどうするかという問題が残る、ある程度誠実を尽してわからなければやむを得ないという意見と、どこまでも話し合っても何とかわかってもらえないように努力しようという考えと、両方出ていました。

近所のうるささ——その原因と解決策

司会 それでは今日は、近隣の方を中心にお話ししたいと思います。

この部会では部会の近隣生活についてお話ししていきたいと思えます。一番問題になっておりますのは近所のうるささということです。先ずそれから入って行きたいと思えますが、近所はただうるさいというばかりでなく、互いに助けあえば便利な点もあるので、その辺のかねあいが、どの位が一番適当であるかということが問題ではないかと思うのです。

対して愛情に似た尊敬を持っているために、嫉妬から嫉妬は仇か何かにように見られたのだと思いますが、主人が薪を削りましても、あんなことをさせてはかわいそうだあれでは先生が病気になるとか、子供が小さいので主人をうっかりお使に行かせれば又うるさく云うのです。

中村 私の近所は、同じような商店がたくさん並んでいて、同じような生活をしてますが、中に景気の好いお店がありますと、あそこは経済的にはいいが夫婦仲が悪いとか、姑さんとお嫁さんの仲が悪いなどと、その人の幸福の中にある不幸を見付けて自分の不幸と対照して、人の不幸によって自分の不幸を厭えているという点があるのです。

小林 私もちょうど城下町の封建的な社宅に四年ばかり住んだことがあります。最初そこに参りました時には、一種独特の鬱閉感を感じました。まず社宅の構造からして階級性がある。一番トップのところは二階建の広い邸宅で、その次にすぐ隣り合って次のクラス、その次は課長、その次は職工宅というわけで奥さん同士のつきあひも一号の離さん二号の離さんと旦那様の階級によって言葉の使い方が眼の使い方から、あらゆる点に差別をしているわけですから、私は人間の価値が、身分や貧富によって差別されるものでは絶対ないと思ひ、所長の奥さんであろうが釜たきの奥さんであろうが全然差別をしなかったのですが、それが

静岡 私のところは人口十万ぐらいの、四世帯中一世帯は社宅に住んでいるという大きな工業都市です。その社宅の内訳は七五％は夫婦と子供だけで、いわゆる嫁姑の問題がある家庭は極く少いのです。ただその社宅は、二百軒三百軒というふうに非常に大きく固まっておりますから、それだけで一つの世界を作ってしまう、孤立して固まってゆく傾向があります。それで視野が狭く近視眼的になって、必要以上に人のことが気になるのです。隣り近所の生活内容とか水準が似ておりますから、もちろんいい面もありますがそういう住みにくさということが、大きく出てくるのです。

司会 なぜそういうふうになるかという原因について御意見を言って頂きましょうか。

静岡 それは私の場合、生活が会社と密着しており、町へ行かなくてもそこに会社の売店がありまして、三分の二の生活物資をそこで賄えますから、そこだけで一日の用が足りる。だから視野が非常に狭いのです。もちろん外へも出て行こうという意欲のある人もたくさんありますけれども長屋のおかみさんになる場合が多いのです。

織田 私は医師の妻ですが結婚当初、住宅で看護婦さんの宿に住みました時に、やることなすこと全部干渉されて困ったことがありました。これは看護婦さんが医師に

奇異な存在になりました、異物扱いをされました。そのうるさいことというたら、例えば私が何も考えないで洗濯物を北国に乾したら、今度来た奥さんは方角を知らないらしいといわれたと見え、若い人が、気を付けなさいよ、と言ってきたこともありす。

又、服や物をしている奥さんに会いました時「まめになさるわね、私は着物が縫えないものだから、縫ったり服ったりするのかわないわ」と言いましたら、忽ち、あの人は着物が縫えない、たいした奥さんだと言われました。そこで感覚の違いを感じすっかり自分の殻を閉じてしまったのですがその時は非常に淋しく感じました。

倉石 私もずいぶん長く共同生活しております。今は大体巧くいっていますが、初めから巧くいったわけではなくてそこへ行くまでに相当苦労しました。そして、共同生活するための技術というものが大事だということを体験としてさとしたわけです。私は根本に、善意ということがまず必要だと思ひます。何でも人の言うことを善意に解釈し、自分も善意に行動する。薩口は一切気にしない。人の生活には干渉しないという自分の線を決てしまったのです。そうして割り切れることは事務的に割り切つて、感情を挟まず、ドライにしてゆくことが必要ではないかと思ひます。

司会 うるささの原因からどうしたらいいかというところ

人だと思つたいたのが、すてきな人もいることを発見したのです。

又、クリスマスの人で、うちで集会しますから未婚者の方でも何でもいらして下さいというので出掛けて行つたら、そこで非常に楽しい雰囲気を感じられて嬉しくなりました。そのグループが出来るまでには全然その集団には付合ひがなかったのですが、このようにしていつの間にか全く自然発生的に気の合った、わかり合った同志がそういふきっかけをもとにして、非常に強い人間関係の環りが出来たのです。

その仲間の中では互いに子供を預け合つて安心して掃除をしたり、洋服ならあの人、和裁ならあの人、料理ならあの人というふうに教え合ひ、あなたの服の格好はおかしいとか、手が汚いとか、歩き方がどうか、そんなようなことが何でも言えるような間柄が二年ぐらいかかってできました。ですから、個人主義に徹することも必要でありながら、一面、人情の通いというものも明るい人間関係の一面であつて、その両者をどういうふうに総合するかどう分けていくかが問題だと思ひます。

倉石 やっぱ仲間よくすることはいいらしいが個人主義はハッキリした方がいいと思ひます。

私、さつき善意ということを申し上げましたが、善意に

ろまでいったと思ひますが、その点についていかがでしょうか。

武田 集団生活を事なくやってゆくには、個人主義に徹するのが無難だと思ひます。個人主義に徹してしまふ強固性が日本人に足りないのではないのでしょうか。

岡 私には集団住宅ではないのですが、どうしても家庭にこもりがちで、人間関係の場が非常に狭いから人格的成長という面においても又、一歩前進して明るい隣人関係を持つために、PTAの会合とか母の会を利用して見ます。

それらが催す料理や福物の講習とかスクエアダンスなどによって共通の話題から仲間を作つてゆき井戸端会議でなく、めいめいが個人をはっきりと出した話し合いをしてゆくことが非常に大切だと思ひます。

小林 私は先程申上げたように貝殻を作つて、要らない刺戟を払いのけていたのですが、非常に淋しいのでその解決を他のグループに求めました。すると距離的に遠くに出掛けて行つたり、遠くから人を呼んだりして、それでよろしく新顔代回はできていたみたいですが、大変不便ですし、又不自然だと思ひました。その後地域の中の親友が人形作りをしましょう、人数が集まらないと先生を呼べないのだからあなたもいかがですかと誘われたので行つてみたところ、そのグループの中でこれまでみな一様にうるさい

よる親戚でほんとうにその気持はわかる場合でも、ふれられたくないこともあるのです。私の個人的なことですが、子供を昨年なくしました。その時皆さんにお世話になったことは言葉に尽せません。しかしその後「お淋しいでしやう、がっかりなさつたでしやう」と同様に下さるわけですがこれは余りうれいことではないのです。死んだ子供は赤ん坊でございましたからお乳をやめたので私は乳腺炎になり入院しました。一つには人に会わないで済むということも入院の魅力でした。誰にもかまわれずいた時はとても悲しかったのですが、三日目ぐらになるとだんだん子供を失つたことが人生を失つたことではないというファイトみたいなものがわいて来てやっぱ私の生きる理由はあると思ひて来しました。もし安易な同様の中に生きていたらそれほど早く立ち上れたかどうかかわりません。仲好くなることも必要ですが、ほうっておく親切ということも大事だと思ひます。

藤間 私のところの集りは、趣味というふうなものではなくてはじめは下水の溝がつまるから何とかしようというところで十軒ばかりが集りを持ったのです。それから近所隣り顔は知つていてもお話ししない方が一緒に作業することによってつきあひができて、レクリエーションなど一緒にしましたけれども、やっぱ数値とかいろ

いろいろな違いがありますから、そこから先はつき抜けられないところがある。ですから集っても何となく寂然としなくてマンネリズムを感じるのです。それをどういうふうに向付けてゆくべきかと考えております。

武田 私どもも会社の中で婦人会を持っておりますが、何とかそれを血の通ったものにしたいと思ひながら集りをしますと、院長夫人をまず上座に据えて、あとは夫の月給順に並び、当りさわりのないことを言つて帰ってくるというものでした。みんなが努力して、就職会のようなものをしてみたり、講師先生をお呼びしてお話を聞いても、医者の家内あり、金たきの奥さんあり、という状態ですからびたりこない。ところが最近ある会合で子供の入学試験が心配だという率直なお話から、共通な話題ができ、みんないろいろな成長段階にある子供についての体験話がでて非常に精神を脱いだお話しあいができたのです。偶然なことではありましたが、身近な素材からお話しあいが非常に発展して、それ以来官舎の人達がお互を身近に感ずるようになりました。そういつたことで、共通の話題を見出して話し合つてゆけばわりあいいい会合を持てるのではないかと思います。

今井 私のところは、県営住宅で、二間か一間の家が百戸ばかり軒を並べているところですが、比較的うるさくな

と、うるさいな、という工台で突き離されてしまひます。それでも又「あの人は汚職したそうだ、会社で女性関係がこうだそうだ」といつて報告する。御主人はうるさいので奥さんを適当にあしらつてしまふらしい。そういう場合、夫婦の溝というものは奥に深いと思います。御主人は女がなにを言つてるかと思つていらつしやるようですね。

牧 夫の話しが出ましたが、私の家の近所の場合は男が近隣の交わりに対して全然関係してない。そういう主人の態度が近隣の交わりにとってプラスしている面があるのかマイナスしているのか、どうあつてほしいとか、あるいは近隣の女の付合ひに男が没交渉であつても結構だということか伺ひたい。

倉石 社宅とか寮は、地域がすなわち会社の関係にまで繋り易いのです。ですから男の人が出るということとは、会社の関係を家に持ち込むことになるので、私のところでは男の人が近隣の関係について顔を出さないということが不文律のようです。

静岡 私のところも社宅ですから、ほとんど男の人は近隣関係にはタッチしていません。入つてくるとかえつて非常にうるさくなるのです。

久米 近所がうるさいというのは日本社会の独特の言葉ではないでしょうか。日本の社会が個人主義に徹していない

い方です。と言いますのは、新しい土地へ家を建てて、そこへ最近入った人はかりですから、その点でみんなが一応平等のおかげです。それからまた、県営住宅に入る人というのは、生活程度、給料の中みも大体わかつておりますし、その家族構成も間借で不便な暮らしをしていた若い夫婦、子供一人二人というのが多い、入りましてから隣組みたいなものを十ほど作りまして、それをつつとまとめて町内の自治会にし、溝の掃除にしても日にも決めてやるようにして、いろいろなことを話し合ひでやり、わりあい巧いこといつています。窓を開けたら前の家のお座敷がまる見えになるというような家ですが、みんなそれほど他人の生活に干渉しませんし、それに共稼ぎ夫婦が多いので夜帰つてから人の噂話などできません。

近所隣りのうるさをささきから考えますのに、女の人家が家に閉じこもつていて視界がせまい上に少し暇な人が、必要以上に他人の生活に関与するところに原因があるのではないかと、なお、もつとつきつめますと、女の人の虚栄心というものが、うるささの原因になっているのではないかとささきから思つています。

本重 私も前アパートに生活したことがあるのですが、奥さん達は主人が帰つていらつしやるのを待ちかまえていて「今日はこうでしたのよ」と言つて話しかける。そうする

いからでしょう。日本人の悪いところは、他人の生活に関心を持ちすぎることです。それは田舎者の特徴だと思ひます。

あすこの家は家を普請した、どうやって金を儲けたのだらう、とよけいなことを心配して。人の不幸を気の毒だとつていながら、心の中で優越感を感じるといふようなことは人間の性格の中にあるのですが、しかしそういうものは努めて持たないようにならねばなりません。近隣の関係は、どなたかがおっしゃつたように個人主義に徹するということに賛成です。

近所とかいうことでなしに、偶々気の合つた人が近いところに見付かつた、その人と友達になるといふならよいが近所であるが故にということでも立入つたり、細かくすることはない。皆さまの作文を拝見してちょっとびっくりしたのですが、近所同士でレクリエーションをいつも一緒にし、時には御飯も一緒に作るということを書いてある方がありました。——こういうところに住んだらいいんだらうと同情したわけですが、われわれにはみんな個人の生活があり、それぞれの家庭には侵されたくない家族の生活がある。それを近所であるが故にといつて、そこまで共同でしなければならぬ必要は私はないと思ひます。人間がもつと郷会人になる事が必要ではないか。とにかく田舎に行

くと、今日隣りの歳さんがどういいう着物を着て出掛けた、あれほどこへ行くだろうと気にしますね。これは全くよいなことです。自分の生活を大切にすると同時に、人の生活を大事にするならばもっと無關心になれると思います。そしてこれは決して近隣社会の生活を損うものではなくて、隣りの人がどんなことをしている人が知らなくても、近隣として協力しなければならぬ事は協力出来ません。

坪井 私も近所のお付き合いはほとんどありません。いま考えてみても、最も敬も隣接したところは四、五軒あるわけですが、互いに何の職業かということとははつきり知らないままでしたのが長い間住んでいるうちに、裏の隙を開けたら写真を撮っていたので、そこにはどういいう人がいるかわかったとか、洗濯物が干してあったのを見てどういいう子供がいるな、とわかるという程度で、自分で直接よその家に上ったこととはなし、向うもいらしたことはないのですが、そのかわり、街灯を立てるから協力しようではないかということはもちろん喜んで協力するのです。まして買物などに一緒に行ったことはないのですが、とても住みよくて、今いるところが気に入っているわけです。

小林 久米先生のおっしゃったことには納得ではないのですが、個人主義に徹するという言葉、マスコミエの論法でゆくと、明るい人間関係を作るためにはあまり接近しないで、壁を立てておく方がいいということになりはしませんか。

山口 結局坪井さんのように付き合いをしないで済む環境にある人は個人主義に徹することができるが、それができない人達がどんなに明るい関係を作るかということをはかり合うのがこの会議の目的ではないかと思えます。個人主義で自分の枠以上にあふみ出さないということでは解決の途にならないのではないのでしょうか。

久米 私の申し上げたのは社宅の場合でも、そこに限度があるということです。それで淋しい人は友達を求めればいい。私はいまの牧さんのお話に対して申し上げたいが、おっしゃる通り東京の真中に住んで、隣りの人ときき合わないでも、忙しく又娯楽もあるという場合とそうでないところとは違ひましょう。不便なところでは共同のレクリエーションも結構です。青年団なりを組織するのも結構です。しかしお宮でお祭をする、あの家は来ない、金を出さない、とるさくというのが私は嫌なものです。来たくない人は来なければいい。娯楽が少いからみんな一緒にやるが賛同の方はお入り下さいというのでやるならいいのですが、神社仏閣には関係ない人がいやいやながら強制的に金

ーションが使えと誤解され易いと思えます。

久米 個人主義というのはヒューマニズムです。そこを間違わないで下さい。人間主義ですよ。個人主義というのは個人を尊重主義だから、人間の関係を身分関係で決めるというところはこれは反するわけです。それは又自由主義でもあるわけですが、自分勝手というのではないのです。自分一人で非戸の水を汲んで、山から薪を取ってきて、お米を作って食べていた時代には、協同によって働く必要はありません。社会が進めば進むほど集団として、又協同でしなければならぬことがふえて来ます。その協力関係とお節介とは全然違うということです。そのけじめをわかっていただきたいと思います。

近隣の協力

牧 今度の婦人過問の目的は「明るい人間関係を作るために話しあいましょう」ということだと思えますが、そのためには徹底的に近隣の人間に働きかけ、グループを作らねばならぬ。これをやるのがやはり必要ではないでしょうか。これはいま久米先生と一緒にレクリエーションに行ったりなくてもいいし、しない方が預わしくなくていいということ言われましたが、やっぱり難かそうという近隣の人間を結集させるための努力をする。人が必要になっ

を出させられる、出さなければ批難するという難し方が個人主義ではないと思う。あなたのおっしゃった問題は、近所であるからそうしようということ以外に解決方法を求められないではないでしょうか。思うとおりの好きなように暮らして、しかも摩擦を起さないということが、明るい人間関係の根本でしょう。行きたくないのに行ったり、出たくない金を出すということでは、その社会は明るくならないと思えます。

牧 しかしそういう考え方に隣り近所の人にもなってもらわなければ何もしないで、そのためにはこうするべきではないですかと云いたいのです。近所付き合いはしなくていいという考え方でその抵抗の中から社会を改造してゆくというやり方があると同時に、抵抗するための力を蓄積するための話しあいも必要だと思います。そういうことの理解を皆が持つてもらわなければ、その人が村八分にされる。会合があつて、十人が出て来て一人は来ないなら、その人と話しあひの機会を、積極的に持つということでは重要だと思います。いま私が一番悩んでいるのはいかにして理性的にものを考える人を私どもの周囲に作ってゆくかというところで、そのためには一人一人が積極的に勉強してくれればいいが、それでなければ個々の人の話しあひを通じてでなければいけないと思えます。そういう努力をどうい

うふうな形でやるかということが、ぶつかっている問題であると思います。

久米 私はそういうところに住んでいないから言う資格がないと思いますが、そこは私とあなたの考えが違うのです。私はそこまで話し合う必要はないと思います。あなたが、自分の住んでいるところにこういう集団があればいいと思った、それを作ると呼びかけるのはいいが、賛同しない人がいていいでしょう。いや、いるのがあたりまえではないのでしょうか。これは協力しないということではなくて、たとえば私がお隣りの奥さんが外出中に雨が降ってくれば洗濯物を取り込んであげるが、それ以上生活が入り込んだ交際は近所であるという理由だけではしないというのです。

山口 しかし救わない人間も何とか救ってやろう、助けたり助けあったりしようというのが人間性だと思うのですが、それにそれをする必要がないということ、それを話しあいの限界にしてしまえば、世界的な平和というものに繋がらないではないですか。

久米 私は人を救ってやろうという大それた考えは持たないのです。

ナシロナリズムとか世界とか平和とかいう言葉が出たから言いますけれども、たとえば原爆実験反対には世界は結

集してやらなければならないと思います。しかし他国の政治制度はよくないから自国のそれと同じにしたりやりたいものだと論ずる必要はない。そこに話しあいの限界とか問題の掘りどころがあるのです。個人の生活で日本人はややもすると他人の問題にまで干渉します。さっきも言ったように、街灯をつけたらどうかというような問題は一緒にしないでいいし、又、両親が事故で死んだ残された子供を親戚其他の引きとり手があるまで面倒を見なければならぬ。そういう時に隣りの人が知りませんということではない。そういう助け合いは必要だが、あなたにはその義務よりこの方がよいからお答えなさいなどということは必要ないということです。

山口 だから話しあいの限界というのは、内容の問題ではないのですか。

久米 ですがそれらを話し合って頂こうと思うのですが、やっぱり集団住宅と、全然別個に住んでいる方とでは条件が違ふし、都合と、おじいさん時代から知り合っているというふうな農村の社会とでも非常に違ふと思います。集団住宅に住んでいらっしゃる方に議論して頂いたらどうかしら。

金井 家を出て勤めている女の人とか、お友達をたくさん持っている女の方はいいと思うが、そうでない女の人が

近所づきあい

家に入りましたら、やはり隣りとか前とかしか付合う範圍がないわけですね。その人達の多くは家で毎日御飯を拵えて、お掃除をして、家計のやり繰りをして子供を育て、それだけが生活です。何か仕事を持っていて、他人に干渉されないでやりたいという人はいいが、どこか家庭でもある日常の行事が、自分のすべての生活になっている人は、隣り近所がどうしたかということが関心の的になるわけです。近所のうるささも女のうるささが中心になるが、根本的には家庭婦人の在り方をもう一度考え直してみなければただ、個人主義に徹底しようと言ってもどうしたらいいかわからない人がたくさんあるのではないかと思います。

倉石 具体的に申しますと、一緒にお茶を飲んでお話ししましょうと声がかかった時に、自分はそれに行きたくないという気持を持っているが、そこに行かないと仲間外れにされるというので万端繰り合せて出席することになりやすい。私だったらそこに入れてもらわなくても自分の生活があり、今日の予定があるから行きたくない。だから自分の生活ははつきりあり、自分の方針がしっかりしていると、のけ者になったからといってそれがそんなに大変なことではないと思います。勿論目的を持って、自分が選んだところに行くことは、ほんとうに結構ですし、又、街灯、下水というふうなことは進んで協力致します。

中村 私は先ほどから久米先生のお話をお聞きしていたいへん勇氣が出ました。何か事があるとすぐ私のところへ飲んだり食べたりするならわしがあるのです。そしてうちの姑より近所の小姑といたい位うるさいのです。私も若い者同士になったらこういう近所付き合いはやめたいと思いがら一方少し心配していたのですが、たいへん勇氣が出ました。

町金 中村さんの近所の人が集ってお茶を飲むということですが、どの程度の範圍の方がいらっしゃるのでしょうか。

中村 二十軒くらい来るのです。隣保班という、戦時中の隣組のようなものがありまして、それは納税の徴立をして廻ったりするので便利などともあり、その点はいいのですが飲んだり食べたりする時に参加しないとその後その人は何についてもオミットされてしまう。私はそうされてもいいのです。直接税務署なり役場に持って行こうと思いますから。

又、祝儀不祝儀とか年始にもそのグループが集ってやり男の人が入りますがいつも人の噂話にばかりなるんです。司会 いくら個人主義に徹しようといっても現状ではな

かなか徹しきれない、どの辺が近所付き合いの限界かということをもう少し具体的に。お葬式の時には何軒先までならお悔みに出掛けるとか、年始には近所の何軒を廻るとい

ようなことを言っていたらどうでしょうか。

倉石 私のところは二階建てで十七軒が単位になっておりますが、祝儀不祝儀はその中の範圍で参ります。お年始なんかは話し合いで、廻り客礼はやめて、その気持のある人は九時なら九時に入口のところに出て、おめでとうを言いますというところで、大体の範圍はその程度に決めております。

静間 私のところも十軒くらいです。四軒で一つのブロックになっていますが、それが三棟、同じ建て方がある。取り立ててお年始などの範圍はないのです。

今井 私のところは家の建て方によりまして分け易いように各組に分れておりますが、うちは一棟六軒なので、六軒一グループで、子供がつかいこの間始めて生れたのですが、その時はお返しなしということで、心ばかり、百円くらいずつ出し合ひ、もらった家でもはい、有難うで済ませました。お葬式にもそれで済ませましょう、お正月にはしい人は広場に出ておじぎをしましょう、旗や煙のほりもやめましょうと同覧を廻しました。

久米 いまのお話では、皆さんお年始なども簡単に済

番など全部外され寄付しなかったためによかった、そういう例があります。

岡 私の方は大体サラリーマンが多いのですが、皆さん昔から住みついていての家なのです。道路を境にして大体一区劃が十七、八軒あります。近所付き合いとしては私は母の会の役をしている關係で、会長さんから連絡を伝えたりする程度です。私も内職しておりますからおしやべりのようなむだな時間は全然ないので葬式とかお年始も家の接している五、六軒です。

吉村 この間学校の辦を立てるとかでどうしても寄付しなければならぬことになり、寄付の金額は町内で割当になりました。そういう場合幾人か委員が出て相談するのですが、初めは家の格とか商売の大きさから割当てだったので、納税組合ができたので税金の金額で決めるようになり、わりあいきちんとできています。ただ問題は、市会議員の方が一人町内にいらっしやる。そうすると一般の者もその方におねるような気分があり、市会議員の方でも先手先手を打ちまして、寄付も大目にか、いろいろよけいなものを出すとかそういうことが多いのです。

本重 そういふように寄付を言ってきた嫌でも出さなければならぬということも、何かそうしておけば便利だという私たちの生活が多いからだと思います。その上に何事

ましていらっしやるようですが、集団住宅でない方は如何ですか？

吉村 私のところは道から道までの商店街が三十軒で、元の隣保班のような組織を持っています。それが基本になって、納税組合のお金があるからどこかに遊びに行こうというように繋がりが多くなってきました。けれどもだんだん、御年始は一ところに集ってするとか、簡素化されてゆく傾向があると思います。

八木 お年始などは、どこも行ったり来たりしないのですが、子供の七五三のお祝だけはもの凄くお金をかけて、子供のお祝なのに男の大人達が飲んで、夜おそくまで騒ぐのです。私たちはむだなお金を使うよりも子供の先の教育費に貯金した方が有効だからとやらなかったのですが、それをやらないからといって近所から疎く言われたということはありません……。

織田 最近私機關に移ったのですが、やはり新開地ですから新しい人ばかりで、一番古い方で二年です。ついこの間、お祭の寄付の問題がでて最低百五十円でしたが、皆さん新しいその神社は遠いし、関心ありませんでしたので半強制的だったけれど、どなたも寄付しませんでした。別に問題は何も残りませんでした。町会の方からは睨まれたかもしれませんが、かえって強制のお掃除やその他の当

も義理と人情を重んじて、人間としての愛情や信義がないからだということをつくづく感じることがあります。たとえばあすこが医者だという、誰か博士に紹介して下さいと言って一筆書いてもらい、他の人よりも丹念に診てもらえないということになり、紹介してくれた人のお金は取れないという事になり、紹介してくれなかったところに行けば好きだからというのでお酒を廻す。だから、一対一でゆけば五十円で済んだものが、特級酒になったりしてこれですと安心だ、ということも、医者である他人を信じられないという人間の不信ではないでしょうか。寄付のことも出したら又何かこっちで頼む時にいいという利害關係と、義理人情を重んじて考えるからややこしくなるので、やっぱり今の社会が相手を義理人情にからまして、利用したばかりよくゆくようになっていくからこういうことになるのではないかと思えます。私自身はまだ引越してすぐですからわかりませんが、周囲を見ると、たくさん寄付を言ってきた、すぐ出してしまふ人が多いのです。周囲が古い人達ばかりで、変えることのできない立場にあるのでしよう。

倉石 私たちは十七軒が単位になっています。互選で一人管理人を決め、それがお世話をするわけです。祝儀不祝

儀は、毎月のきまつた会費——それは運営費ですが——その中から金額はほんとうに些少ですが、管理人が持つていて誰も個人的にお返しもなければ何もないうちにしてしまいましたが、この間は病気の時にお見舞をどうするかということが問題になりました。病気の範囲とか何とか話が出ましたが、そこまで歩調を揃えなくてもいいのではないかと、お見舞に行くだけでなくてほんとうに困ったことを手伝ってあげるといふ親切の方が大事なのだから、揃って歩調をとってお見舞をあげることはよそうと書いてやめました。

司会 病氣などの場合の助け合いはどれくらいにしたらいいという具体的な例はありませんでしょうか。

山口 私、会社の寮に住んでいますが、寮の委員があります。一階と二階で二人ずつ出ています。それから毎月集会がありましてそこで決める、委員で決らない問題はみなさんの討論で決める。病氣の場合はやはり決めてあります。私たちの場合は家族の誰かがたしか二週間以上病氣だという場合にはお見舞を登上げることになっています。

吉村 うちの場合はそれぞれの主人が病氣した時にしています。

倉石 お見舞をしないということは、知らんぷりをする

坪井 私のところでは、特別に、誰が病氣だからお見舞を上げようという勝いを受けたことはありません。ただ、真の家でおじいさんがなくなったという時は、みんな行ってお極みは申し上げていますけれども、それ以外には何もありません。

社会的な解決の必要

牧 私のところの場合、制度として自治委員制度があり市長から委嘱した自治委員が百戸ぐらい単位で世帯をやってくれています。非常に都合よくいっています。又、助け合いの問題で、皆さん方の周囲の人達は生活の安定している人、困らない人が多いと思いますが、たとえば二、三軒先に子供を育てて困り、生活保護にかけられるような母子家庭があつて民生委員を通じ福祉事務所に行けば処置をしてくれるのに、それさえ知らない人がある。不十分ではあるが、現在の日本の制度の中でできるだけのことをお互に勉強して、困った人が近所におつたら教えてあげて、何等かの方法をするということも助け合い運動を進めてゆく上に必要だと思います。そこで自分達のふところから出して援助しようという協力の仕方ではやっぱり限界がありますから、社会的に問題を解決してゆく方法はないだろうかということが考えられて、そのための話し合いがや

ということではなくて、気持のある人があつて、おいしい果物があればそれを登したり、奥さんが病院に行くなら子供を預る、というより実際の手伝いをした方がよいということ。今までお見舞を登上げるのは五十円かそこらで医療の足しにも何もないからそういうことをやめて、ほんとうに実際的なことをする。もし旦那様が会社を長く休んでほんとうに困る場合、たとえば自分達がボイナスをもらった。あそこは入らないで暮らになってお借もつけないという時に、お見舞でなくて助け合いの意味で額を廻し、自分が好きなだけ入れるということはよくいたします。

静間 私のところは五十円ずつで薄葬の道具などを積み立てておきます。

お見舞なども半月以上お休みになったら、ということをしていたのですが、ある方が、御主人が結核になって何年にもなり、一番初めは一箱に幾らか持つて行きましたが、その後は皆さんの御自由で、仲好しの方はいらっしゃる。

また別の例ですが、偶然に、郵便局の簡易保険にとてもたくさん入っていらっしゃるということを知り、調べてみましたら、十五人集まれば集団加入ができ非常に安くなる。年に六千円ぐらいくわけ、それで、子供にお砂場を作りましょうということになっています。

られ、明るい人間関係を作つてゆくために努力する必要があるのではないかと思います。ここでは近隣ということにしぼっているが、やはりこれは社会に繋がることで、親切というのには近所ばかりでなく、困っている人があれば近隣であらうがなかるうがお互にできるだけの協力をしたいと思ひます。一口誰かに言えば死なずに済んだのに、相談する者がなくて死んでしまったということがある。私は友達に、何もできぬが、少くとも死ななければならなくなった時は言ってくれ、死ななくてもいい方法だけは考えてやるとよく言うのですが、やっぱり近隣問題も、社会の一角としての立場から見ると必要があると思ひます。

司会 たいへんいいことを教さんからおっしゃって下さいましたので、時間も迫ってきましたからこのくらいにしたいと思ひます。最後に久米先生どうぞ。

久米 近所付き合いについては私は皆さんと考えが違うのです。私は一切要らないと思うのです、非常に極端のようにはきこえますが、お正月に道であえばおめでとう、今年もよろしくという。隣りの人が病氣だということを知れば、道であつたときかがです。か、どうぞお大事に、と言うことは人間社会の礼儀としてあたりまえのことです。しかしそれ以上のつき合はしません。それで仲が悪いかという、決してそうではない。奥の奥さんが急病のときは、御

主人に電話を掛けてあげるし、役にたつ世帯はする。人間として隣人として困っている人を見てはっておくわけにいかない。それからといって見舞に行くわけではない。遠慮なくおっしゃって下さい。近所のことはお互さまだからというところまでです。集団住宅の場合と事情はとも違いますが、又眼界はむしろ小さいし、ときにはかなり勇気がいると思う。自分の主義は通して、気持ちよく付き合おうが、決してひと様の生活の中を覗くことではない。いつか横浜で、スリがにげ、捕えてくれと叫んでいるのに誰一人としてつかまえるようなのを見たことがあります。人のこころに無関心でいられず、人の生活を覗きたいという気持はあるが、ほんとうに助け合う気持がないわけですね。あれば泥棒を捕えてやるはず。あるアメリカ人が言っていました、日本人は子供をかわいがるというのが嫌だ、迷い子が泣いても知らん顔をしているのではない。自分は言葉がわからないから、一緒に行った日本人に何とかしてくれと言っても「そんなものにかかわり合ったりするところさいから」と言う。それから、小さい子がちょこちょこあふない電車道を渡って行く、それを知らんふりして見ている。日本人は他人に無関心だというのが、又、東京で或時、一家心中が隣りにあったのに知らなかったという例がありますが、やっぱりさっきの泥棒を捕え

ちつとも違わないです。

司会 それでは第一部会の討論はこれで終らせて頂きましたと思います。どうも有難うございました。

質疑応答

質問 いまの段階では、私も家庭の主婦が積極的に集って話しあいをするということがたいへん大事ではないかと思いましたが、たとえば何か勉強するとか、本と一緒に読むとか、ラジオを一緒に聞いて批判し合うというような形で集ってその中からいろいろ生活の問題なども出てくるというふうになったらいへんいいのではないかと思っております。私は職場でもそういうことをやってみて非常に成功しましたが、家庭の場合はどうでしょうか。そういう御経験をお持ちでしたら伺わして頂きたいと思えます。

倉石 前に住んでいたところでは、図書館のグループ、コーラスのグループ、生活を明るくするためのグループとか技術的なグループ、そういういろいろなグループ、または家族計画のグループなどがあり、大変楽しくやっております。

本堂 私のところは婦人会に出てもつまらないという不平を持っている方が隣り近所で話し合い、読書会のような形でもってゆき、一月一回思ったことを書いてみて読む。

るのに無関心だということと同じで、近所付き合いをして、一家心中しなければならなくなったことは、かくすしね。要するにほんとうのヒューマニズムが欠けているんだ。そういうことをのけておいて、近所の付き合い——形式的に何日間隔たらお見舞を持ってゆくなんておかしいと思うのです。仲のよい場合は別として気に入らない人もまじやう。仲良くしたいけれどもできないのが人間です。日頃心よからず思っているのに見舞を強制的に出すということはどういふものなのでしょう。それよりも、ほんとうに助け合いの気持があるなら、しなければならぬ時に乗り出してゆく精神があってほしいですね。社宅とか、勤め先が一緒である場合は違いますが、お正月が来たからお隣の玄関に行くということでは、来られる方も有難さを感じます。皆さんと意見が違って失礼しました。

小林 意見が違うのではないと思えます。結局その間柄がほんとうに個人や社会のために役立つものであるかを判断する社会人としての教養が必要なのだと思います。相手の立場になってものを考え、自分のしたいと思うことを人にしてあげる、そういう意味の間柄です。それを見極めて進歩ができる社会人としての教養を婦人が持たなければならぬということが結論なので、先生のおっしゃること

一回十円ぐらいの会費で大体十人位集まる程度です。

織田 私のは、ちょっと御質問からズレるかもしれませんが、社宅で、噂話が頂点に達してしまい、取捨つかなくなった時に話しあいを持ったことがあります。大人の世帯がみあいが子供達の世界までびびき、子供に對し大人が恥しいということ、その結果話題が向上していきまふと違った楽しい付き合いができるようになったという例があります。

小林 私たちの場合は、近隣の集団の中からお集った同士のなグループで、一人一人が持っている何かの特権をみんな遠慮しないで発表するのです。その場合も今度誰れ皆さんのところで支那料理をするらしいということを皆に知らせ大勢集めてやりますと、たいへん具体的に便利で、一人一人も向上した、という例を持っております。

質問 先ほどの久米先生のお説が近所のお付き合いには無関心でいいというふうにとれたのですが、主婦が毎日家におりますと、近隣の付き合いは一番大事なことだと思うのですけれど。

久米 私の申し上げたことが十分理解されていないように思うのですが、付合わなくていいといつてもその限度です。私は近所隣りと付合われないが、それはものを言われなくても返事をしないということではないのです。おれわれの

近隣生活を円滑にする上に必要な礼儀は当然つくすべきです。親子の間でも人間としての礼儀は必要でしょう。いまの方がおっしゃった、家にはかりいいる奥さんがお料理の講習をしましょうというので、発起人があって呼びかけたところが、賛成者が多く、あすこの奥さんも歸きましょうというところで会合が出来、友人が出来るといふことにはいささかも反対ではありません。ただ近所でこいういう会を作るから集まれとか、出て来ないからいけないというように、個人生活に干渉することが嫌だということです。合理化されない近隣付き合いをどこまでも隣止して行きたいということです。

質問 自殺寸前にある母子家庭を助けるという場合に、やはり集りということが自分の経験から、ほんとうに必要なことで役に立つことではないかと思いますが……。

久米 日本の社会はその点進歩しなければならぬと思っています。たとえばあの家庭が非常に困っているといつても、われわれの力で救うことは不可能だと思います。そういう場合社会保障制度が完備し、福祉事務所に行けばソーシャル・ワーカーがいて、すぐに事情を調査し、助けてくれるようになっていけばいいですね。しかし、個人が干渉して助ける自信があるのか。話を聞いてお気の毒だといふだけならやめなさい。死なないで済むようにしてあげる

自信があるならいいが、助けることもできない人間が新だけきいてどうするのですか。自分でしてあげられるならばそこに入って相談のつてあげなさい。結局は社会保障の確立する社会をわれわれが作るように努力することです。同会 ではこの辺でどうも有難うございました。

(閉会)

第二部会 農村の家庭及び近隣生活を中心として

出席者

北海道	喜多千恵子	(漁業)
岩手	藤原静子	(農業)
山形	小林えい子	(主業)
埼玉	山田カホル	(主業)
新潟	増田治美	(事務)
富山	近藤千代子	(農業)
岐阜	小西美佐子	(農業)
京都	小村悦子	(散員)
島根	山室三津子	(主婦)
岡山	堀江住枝	(主婦)
愛媛	井川定代	(主婦)
熊本	岡村富喜子	(主婦)
宮崎	古川千歳	(地方公務員)
滋賀	須安彦	(地方公務員)
愛媛	大沢龍雄	(農業)
アドヴァイザー	評議 家松丸	志摩三
司会	婦人少年局婦人課	秋山常子
書記	婦人少年局婦人課	鈴木栄子

家の中の問題

司会 この部会は農村の家庭と近隣の問題を中心として討議することになっているのですが、今日はその中で家庭の問題について話し合うという予定です。近隣の問題の方は明日の議題とします。

家庭の問題ですが、皆さん初め全国の方々からいただいた応募原稿を見ますと、家庭の問題として嫁と姑の問題が非常に大きく取り上げられておりましたので、ここでも嫁と姑の問題から入りたいと思います。

嫁姑は昔から非常に仲の悪いものと相場がきまっています。そういふふうには嫁姑の仲が悪いということについてはじめに考えてみたいと思います。皆さんはどうお考えになりますか。

山田 お姑さんもお嫁さんもお互いに遺憾を以て理解し合っていないのではないかと思います。

那須 理解以前の問題としてお互いが押しつけ合う——老人は若い者に押しつけ、若い者は、抵抗する。それを年寄りのは、今の若いやつは親孝行しないという。お互いに責任のおしつけ合いというふうなことで、そのためになかなかじょうとしない、それが一番大きな原因ではないかと思

という、そういうしきたりが非常に多いと思うのですけれども。

小西 時代のずれが今大へんあるのではないかと思ひます。私の場合でいいますと、嫁には自分の昔の嫁のころのように苦勞をなるべくさせたくない。親元へ行きたいとか、映画でも見たいとか、向うからいわないうちにこもらから氣をつけてやるようにしようと思っておりますが、今はこの姑がそんなことを考えるまでもなく、嫁の方からはっきりと行ってくることを心にきめて、自分の方からその行動に移すというふうな場合に、姑の方としては少し淋しい感じがするのです。

山室 経済的に恵まれた方の方が円満にいつているのではないかと思ひます。農村には経済的に困難な方が多いので、そういう方の方がなにかいざこざが多いように思われます。

堀江 私は嫁姑の仲が悪いというのは、だれの責任でもないと思ひます。結局農家の暮しというのは考へるということが絶対にできないように仕組まれていると思うのです。特に女の人は理解する理性というものが眠っていて娘時代のままでとまっているのです。感情線だけがものすごく発達しているという感じがします。

古川 お嫁さんもお姑さんもお互いに関心を強くもって

ます。

岡村 私は姑の座、妻の座を理解し合っていないのではないかと思ひます。たとえばお姑さんは嫁を働かせることだけを考へる。私の村では雨の降る日以外はお裁縫もできないという状態になっています。姑も少し嫁の立場を、また嫁は姑の立場を考へたならば、いざこざが解けるのではないだろうかと思ひます。

喜多 嫁と姑の中の悪いというのは「血のつながり」ということになるのではないのでしょうか。嫁というものは他人から来る、自分の血を分けた娘ではないという先入観があるから、なかなかうちとけていかなないのではないかと思ひます。

井川 姑さんも嫁の時代には大にいいじめられてきていて、その考へが嫁に当るようになるのではないかと思ひます。私の姑だけはそうでなくて、若いときに大へん苦勞したので、その苦勞を私に与えまいとして、却ってよくしてくれました。

小林 農村では因襲が非常に問題だと思ひます。お姑さんは昔からのしきたりにあまうこたわり過ぎていていのではないのでしょうか。たとえば自分の娘を嫁にやるときは必ず送り嫁を持たしてやらなければならぬとか、孫ができれば高価なお嫁様をお節句には買ってやらなければならぬい

いるために、ささいなことが原因して大きく仲を悪くする、または仲をよくするという、両方に分れていくのではないかと思ひます。

進藤 一番の原因は他人を干渉し過ぎることから始まるのではないかと思ひます。

司会 ではこの辺で先生の御意見をどうぞ。
松丸 大体いろいろな御意見が一応出たと思ひますが、問題は理解し合うということが非常に必要だということが底にみんな流れていると思ひます。

ただ、日本の農村では、だんだん政教はされてきていていけれども、お嫁さんをもちうのをやっぱり労働力をもちうという、そういう考へ方が非常に濃厚にあるのではないかと思ひますが、その点皆さん方どうでしょう。

労働力としての嫁

近藤 それは「手間をもちう」といっていることでもわかると思ひます。

松丸 そうすると人間のお嫁さんをもちうのか、農具をもちうのか、もっとひどいことをいうと役畜をもちうのかということになる。そうすると人間と役畜の間の理解の仕合ひ方だということだと、なかなか理解というのはむずかしいのではないかと思ひうのだけれども。

堀江 農村は人間というのは住めないようなものです、今のところ……。(笑)

千葉 農村では労働を重視します。そのために、岩手と言葉でしゃべりますが、「おれもからだこわくなつたから、早く嫁こもらせてかせえでもらわな、わかんねえで、こういうのです。そうするとあたりの人たちは「ああ、そんだなんだ。でえげ年取ったから、嫁こもらせて嫁こさやらしいんだ。いつまでも働くのやんなつた」こういうのです。だから結局無収入の労働者を、ただかせがせる機械をもちょうとすることが頭にあるのです。そのために見かけはどうでも、何もなくてもいいから「かせぐやつもらいてえよ」こういうわけですね。

増田 お姑さんはお嫁さんに、何も欠点のない人間を要求しているのではないかと思います。自分の娘の欠点ばかりうけれども、お嫁さんというものは欠点がなく、何でもできて完璧なものでなければならぬように思っているから、何か欠点が出てくるといざこざが起きてくるのではないかと思います。だからお嫁さんの欠点というのは譲り合つて見てやらなければならぬと思います。

松丸 増田さん、あなたの作文読んでみて、あなたのお宅ではお母さんが非常によく働いていらつしやる、お父さんはじゅう文句ばかり言う、そういう作文を書いていら

をもちょうとという考え方は全然もっていません。

那須 僕は十九で女房もちつたのですが、そのときはやっぱ僕も「手間をもちつた」と思いました。僕は自分の家だけ見たときはそんなに極端に思わなかったのですが、農業改良普及員になってよその家を見て回つて、うちの女房を可哀想に思つたわけです。祖母が今の若い者は仕事しよらんとか、いろいろなこと言うわけです。僕が「十八の嫁もちょうと何一人前の仕事できんね」「おまえじきに嫁の方に味方する」というわけで、よくけんかしたわけです。そんなことが僕はイヤだったのです。

僕も初めもちょうとというときには人間の格好した牛もちょうとというように、それまで極端ではなかったと思いますが、そういう気持ちがあったと思います。

世代のちがい

大沢 私は先ほど京都の小西さんの言われた時代のずれということに非常に同感な点があるのです。昔の切り捨てごめんの時代から考えてみると、今日の嫁姑を含んだ親子の關係というものは非常に變つてきているはずですが、円満にいかないのは、やはり時代の感覚のずれが大きき作用していると思うのです。そのことを痛切に感じたのは過日愛媛県で地方会議をやったとき、中学生と高校生の部会

っしやるね、するとお姑さんばかりでなくだんなさまもそうだな、お父さんのことを考えてみるとね。

増田 そうです。うちの父は人から見たらそんなに特別悪い人でもないし、私もそうとは思いませんが、子供の目から親夫婦というのを見てみると、母は朝から晩まで働き通しのにちよつと失敗すると父が文句を言うのです。そして母も私が悪いのだ、と思つてしまっています。母自身が自分は夫に隷属したもののようになつてしまつて、いるのではないかと思いますし、祖父母も母をそういう存在だと思つていられる方だと思います。

松丸 ひどい言い方をすればやっぱ家の農具という感じですね。

増田 やっぱ母は、ちよつと風邪をひいたぐらいでは床にいたりしません。父は風邪ひいたからといって悠々と寝てますが、母が寝ることは考えられないことです。

松丸 大沢さん、あなたのお宅はどうなの。あなたは奥さんをどう考えてますか、やっぱ農具ですか。

大沢 そういう考えは全然もっていません。妻には、いつまでも若くて美しく健康であることを望んでいます。

松丸 お父さん、お母さんはどうです、あなたの奥さんをどういうようにお考えになつてますか。

大沢 別に農具というようになつてますか。

を一つ作つたのですが、そのときでた御意見の中に非常に私たちが親の立場を批判している意見が多くて、やはり私たちが自分らの親に抱いているような意見を述べたのです。私はそれをきいて、自分らが親との問題を悩むよりも、もうすでに自分の子供の關係に取り組まねばならぬ時代が来ているのではないかとというようなことを痛感して、時代のずれということに非常に感じています。

小西 嫁は早く嫁の座に安住したいと思ひ、姑は嫁に早く座を譲ることに淋しさを残すような気分は、理性では抑え切れないものがあるのではないかと思います。

司会 譲ることの淋しさを覚えるとおっしゃいました。が、なぜ淋しさを覚えるのでしょうか。

小西 今の嫁は昔の嫁に比べると大へんはつきりして、相談なしに家のことでも何でもやっていきます。昔の嫁はそのはつきりした態度に納得しかねるような気持ちが心の底に潜んでいるのではないかと思います。

事多 いま大沢さんのおっしゃつた通り、私たちの年代ももう少し勉強しなければならぬと思うのです。いまの嫁と姑の問題は、机の上で討論しただけでは絶対に解決するものではないと思います。自分の気持ちをお姑さんに言つてもわかつてもらえないと思う。八十ぐらいになりますと、今の言葉を使つても理解してもらえないのです。そ

いう嫁と姑の問題はけんかしないように、わけのわからぬいお姑さんを上手に扱って、自分の妻の座というものを安定させていなければ、この世の中はうまくいかないと思います。

松丸 喜多さんのおっしゃることは、現実的にはそうだと思うのですよ。だっとなにかそれだけを非常に親切なようでもあれば、ちょっと不親切なような気がする。じつと死ぬのを待っているというところにもなりかねないと思う。おっしゃる通りだが、少しずつでも年寄りを納得させるようなことも勉強していただきたいと思うのです。

財布の問題

司会 さきほど嫁に座を譲ると淋しくなるという話が出ましたが、皆さんの中で現在財布をもっているお姑さんは、どれだけいらっしゃいますか。

井川 私は半分もっています。

司会 そうしますと大体もっているしやらないのですね。農村ではいつごろになったらもてるのでしょうか。

山室 大体部落の様子をみますと四十歳過ぎないと渡すようなお姑さんはいません。

岡村 私の住んでいるところは農漁村です。私の近所にも婦人会費を三月月に二十四円いただきに参りますのに、今

お姑さんがいないから、その二十四円を待ってくださいといわれる家が往々にしてあります。このことから私はまだまだお姑さんに財布を渡してないということをわかりました。

千葉 私の方では孫ができたら財布をあずけてもらえます。六十ぐらいです。五十でももてない人もいますし、四十になって初めて財布をあずけられて喜んでる人もいます。

山田 私の方はお姑さんが自分の子供を全部縁づけてから渡すというのが大部分だと思います。

松丸 やっぱ四十以上ですな。

古山 私たちの方で財布をだれが握っているかということとを調べてみましたが、婦人会などの会合によく出てくる人たちは大抵いお姑さんがきて十年ぐらいたつと渡しているようです。会合に全然出ない方たちはやっぱり四十、五十にならないと渡していないような現状です。

進藤 この財布の問題ですが、一家のみんなで話し合っで計画立ててやったら財布はだれがもってもいいではないか。それよりもっと重大なことは、もっと根本的な話し合いが末端の財布のことに追われている方が問題だと思ふのです。さっき堀江さんがおっしゃったように、人間が住めないでなくて、住まないのだと思ふのです。住む勢力を

っても何もないじゃないの」ということになるのです。それが繰返されていくうちに嫁としても、聞きづらくなるのです。そういうところからだんだん嫁姑というものはすき間が入ってきますね。

堀江 私のところは実は老人と別居しているのですが、財布は老人がもっています。私も四分の一財布をもっています。それはどういうわけかと申しますと、かりに一反の田で三万円あげる予定を立てると、それ以上あがると私たちに自由な金としてくれます。私たちは一町作っているのですが、予定だけは老人にあげて、あとは私たちの自由になる。老人は賢いでしょう、三万円あげようと思つて助むのです。二人が農業雑誌読んで、図書館に通つたりして研究します。昭和二十七年にスイカを一反作りました。普通だったら五万円しかあがらないのを、消費をそれこそびしょぬれになってやりました。そうしたら十万円あがったのです。その年は雨の降ったかげんで減収で、よそは二万円ぐらいだったのです。それで五万円を両親に払い、私たちが五万円もらって、それで水道設備などをやりました。別に私は財布を深刻に考えたことはありません。

井川 愛媛県の会に指導的な位員にある青年が話しに来ていたのですが、その方がある婦人に、生産をたくさん上げて、その余分の生産高を自分がもらったらどうか。試し

気長にしなければならぬのを、住めないものだと思ひ込んでいる。そういうものだと思ひ込んでいる。それがもっともっと真実に耐えられなければならぬ問題だと思ひます。財布はほんの末端の治療といいますが、もっと根本的な問題があると思ひます。

那須 財布の問題はやはり農村では一番深刻だと思ひます。滋賀県あたりでも三割くらいしか財布をもっている人はいないわけですが、三十代で……。山形の方がいわれたようにおまえ小遣なんぼやるといふようにやって、お互い話し合つてやるのはいいのですが、他人が入れば、うちの嫁はよう使つて、勝手なことをするといふようなことをいわれるわけですから。そういうところに生きがいをもたしてやるべきだと思ひます。

古川 私の経験ですが嫁に参りますと必ず炊事をしなくてはならないわけですね。ところが経済はお母さんが握っている。嫁にいったら何んでもお姑さんに聞くのだよということをしっかり言いつかってお嫁に来てますから、「お姑さん、今晩は何のお菜にしましょうか」と一々聞くわけです。そうするとあんなにささい、こうしなさい、これであらうを買つてね、というふうな十円、二十円を金渡されるのですが、二月も三月も毎日日々聞かれていますとお姑さんの方のいいやになつてくるのでしょね。「そんなにいい

に難を買ってごらんない、できた期代を自分の小遣にしたらいいではないかといったらその婦人は自分のからだから被れるだけで損だといったのです。損だという意味は、いくら働いて余分によっても自分のふところに入らないということですよ。そういうお嬢さんが多いということ、それから考えれば堀江さんは大へん仕合せだと思えます。

松丸 あんまり仕合せにされると困ると思うのですが、堀江さん仕合せですか。

堀江 家庭的には満足しています。

松丸 そういふ親子関係というのはちつとゆがんでいるような気がする。正常な親子の愛情という考え方からするとどうでしょう。

井川 堀江さんのおっしゃったのは、生活費は別に親の方でもってもらって、その上に、生置した余分のものを小遣としてもらう、それを文化設備に使う、そういう意味ではありませんか、私はそういう意味にとって、それだった仕合せだと思ったのです。

松丸 比較の問題ではないかと思えます。不幸な人よりは一段いいと思いますが、ほんとうの人間関係ということからいうと、少しゆがんでいるのではないか、手放して棄められないという気がするのです。もっと親子の関係というのは愛情があつていいのではないのでしょうか。

ちなのですね。そういう人間関係を築くために氣長に、いろいろな方法を講じてみるべきだと思います。

嫁姑の問題をだんなさんは知らんぷりして、女のいさかいなどに構っている方がばかなのだと、胸組みしながら世間に對しては自分の家は円満だという顔で、自分の地位だけを求めて、何となく市会議員になったりして（笑聲）家庭のことなど構わないで家庭を犠牲にしてそういうふうになつていゝ男性がとて多いのです。お嬢さんをもつて場合合も、ただ何となくもらえといわれたからもらう、そういう結婚が多いと思えます。だからもっと男の人に協力してもらつたらいいのです。お姑さんに言える人だつて夫でしょう。自分に注意してくれる人も自分の夫だと思えます。音楽でいえば指揮者のような、そういうつながりをもたしてくる男の人の努力が必要ではないかと思えます。

司会 嫁姑の問題からだんだん夫婦の問題に発展してきてたようですので、このへんで夫婦の問題に重点をうつしたいと思ひます。

小村 農村の女は大体男を牽り過ぎる、それで男の人がいい氣になつて意地を張り過ぎる面があるのではないかと思います。ですから女にも半分の責任はあると思うのですけれど。

小西 私の長男は私と嫁の意見が違ふときに、どっちも

喜ぶ愛情といつても経済の上に成り立つのではないでしようか。堀江さんの話も経済が確立してるから仕合せなので、いくら親子の関係を仲よくしても、貧乏して明日から食ふものがなければけんかすると思ひます。

松丸 いきなり極端な例までもつていけばそうだけれども、そこまでもつていかなくても、もつとなにか、そういうことに追い込まないで、喜んで働かせる方法があるのではないか。そういうふうにならなければ新しい人間関係ではなからうか。いきなり人間関係の問題を出してしまつてはいけないと思ひますが、ちつと私の意見として申し上げておきたいのです。

夫婦の問題

小村 私は嫁の方にも少し努力が足りないと思ひます。私は四人のしゅうとをもつていますが、いろんな問題でずいぶん争つたことがあります。尊敬してる主人と話し合つてみれば何か通ずるところがあるのではないかと思つていろいろ努力して話し合ひなどをしてみました。ずいぶん長い時間かかりましたが、今では四人のしゅうとがいはる割合には明るい家庭ではないかと思つています。

進藤 いま小林さんがおっしゃつたように氣長な努力をしないのです。今日努力して明日求めようとする、せつか

五分々々を見ると嫁の方に味方します。私のひがみでも何でもありません。（笑聲）長男と二人だけのときに私が「あの問題はやっぱり考えてみたが、こう思うのだけれども」と言ひますと、長男は「僕もあのときはお母さんの言つた方がほんとうだと思つたけれども、農村の嫁というものは嫁に来た当座三、四年ぐらひは、いわば敵地に乗り込んだようなものだから、五分々々のときにお母さんの方に味方したら、嫁の立つ顔はない。二人が何か言い合つていゝときに、僕が黙つていたらお母さんの方に味方しておると思つていたらいいし、嫁の方が正しいことを言つていゝのにお母さんがいつまでも言うのだったら嫁の方に味方する」といひます。私はむすこと言葉に満足してゐるのです。

松丸 あなたがむすこさんみたいなんだんなさんが多ければ婦人会議も実に楽になるのだが。

司会 みなさんの方はいかがでしょうか。お姑さんとの問題が起つたとき、だんなさまはどういう態度をおとりになりますか。

古川 私の場合は母が後援に来ましたので、主人としてはお姑さんには、恩になつてゐるのだからという氣持と、それから私にひかれる氣持と両方で、全然自分は知らぬような態度で、嫁と姑の問題は自分たちで解決してくれという氣持です。

喜多 いま南さんのお話を聞いていると、南と北に離れていても大体環境は同じですね。私の夫は私と姑がけんかしている、仲に入ってうまい工合になだめるのです。が、「おばあちゃん違う」とかいとうと、「おまえたち組んでおらばかりいじめる、おまえたち出ていけ」とむすこまで憎まれるようになるのです。私はその場合夫に何も言わないでくれといっているのですが、こういう場合どうしたらいいのでしょうか。

松丸 いま北と南が一致しているというお話でしたが、私は今までの経験では日本の事主というものは、嫁と姑の間にけんかが起きたときにどういう態度をとるかといったら、よくて中立ですよ。一般的におよそ頼りにならない亭主ばかりだということだな。

山田 私は皆さんと反対にむこ取りですが、私も中立で、夫はいろいろおやじの不満を私にいう。おやじは私の夫の不満を私にいう。その中に立って悪いことは自分の心におさめて、お互いの融和をはかっているのですが、やはり男の人も同じだと思っています。

松丸 ただいきなり味方をすれば、喜多さんがおっしゃったように「二人して年寄りいじめるか」という反響を食らうことは往々にしてありますね。それはやっぱり藝術のまずさだと思っております。

常に重要視します。ところが横の関係である、その一番最初のひっかかりである夫婦の関係というものは非常に軽んじるのです。軽んじるばかりでなしに非常に軽蔑する考え方であるわけですね。この横の関係を緊密にするということを持ち込むことが今の日本の農村社会では非常に重要なことではないでしょうか。今まで縦の関係ばかり重んじていたところに横の関係をもち込むとすれば、ちょっといざこざが起きます。起きるけれどもそれをうまいこと最少限度のものにして持ち込むこと、それが一番いいことなんでしょう。ところがそれを「家庭の平和」というような言葉で絶対にもめ事は起すまい、それが一番いいことだという考え方が、相当いまのだんなさん連中にあると思うのです。

非常におもしろいことには、今の大体六十以下ぐらゐの農村の方々は、ほとんど大らかな仲のいい男女関係というもの全然知らないで育っていると思うので、仲よくすることがとてもうしろめたいのですよ。だから皆さんもそういうことの犠牲者になっているので、だんなさんと並んで歩かないでしよう。むすこと嫁が仲よくするとやけるのですよ。やっぱり並んで歩く方が楽しいのだということを、今からでも遅くないからおやりなさいというわけです。

千葉 むこさんが先に行って、嫁さんが来るのを待って

大沢 嫁姑の争いの中に主人がどういうふうな立場をとるかというのは、私たち自身にとって非常にむずかしいのです。私自身の立場ではどちらがかわいいかといいますが、実は、親御さんに対しては非常に申しわけないのですが、新しい、まあ民主主義というふうな立場からいっても夫婦が家庭の中心です。そういう立場からいっても妻の方が多少はよいかわいいのではないかと思います。しかしそれなら妻をかばっていいかというところ、実際問題として妻をかばうと家の中が円満にいくかどうかということを考えます。また反対に親の方に味方した場合にはどういうふうになるかといいますが、やはり先生の言われた中立的な立場をとらざるを得ない場合が非常に多いと思います。

小村 私もむこ取りの立場ですが、中立にしておくよりは後まで問題が残るのではないかと思うので、私は完全に主人の方に味方します。主人が好きだから、親がけむたいから、ではない、どちらもいいのですが、私の方の現状では、夫婦の愛情を固そう願そうとするのです。私はそれはいいけないと思います。

松丸 日本の農村のいわゆる封建性の一つの特徴は縦の關係ばかり重要視することだと思っております。横の關係ということを非常に軽んじるのです。だから人間關係でも親子の關係とか、祖先と子孫というつながり、これは非

いて、隠れて一緒に行くわけですね。(笑)

喜多 北海道というところはそういうところはとても民主的なのです。私なんか夫の先になって歩いたりしますしね。漁村ですからコンプ取るのでも、夫婦して首のところまで海に入っているのです。コンプ引く張るのだった夫婦協力でしょう。私たちの村でしたら夫婦の中は、少しはヤキモチけんかぐらいますが、深刻なけんかしてる人を見ません。

農村の方も老人の気持ばかりを思っていないで、二人で堂々と歩いて、こんなものです、といって見せてあげたらいい。(笑)

松丸 見せるだけではだめですよ。あなた方もおやりなさいと、親を勧誘しなければ。

岡村 私はあんまりお姑さんの前でそんなこと見せつけるのは、農村ではよしあしではないかと思っております。と申しますのはお二人揃っていられば何でもないのですが、お母さんだけの場合ならとても淋しさを感ぜられるのではないかと思います。

小西 その御心配はありがたいですけれども、いりません。皮肉じゃなしに、ほんとうに二人が日曜に映画にでも孫をつれていくと、私も心から喜んでますし、私もそのかわり歌の会に行くときは遠慮なしに行かしてもらいたい

と思つてます。早くから未亡人になっていきますと、嫁さんの苦勞が普通以上だそうですが、私は嫁をもらう前からそのときの心持をどういう工合にしようかというかしらといつも考えておりました。私がそういうことで淋しがっていいないことはよく知つてますから、自分たちが写真で写してきたら「お母さん、まだフィルム余ってるから写してあげよう」と、私にもお上手します。

松丸 皆さんに質問があるのですが、私が最近感じていることで嫁いびりをするお姑さんというものは大体かかあ天下ではないですか。奥は私はこの間ある農家に泊つたのです。大へんな嫁いびりをするおかあさんのいる家なのです。それを見て、もし私がおかあさんの亭主だったら、もうよしておきなさいといつて止めると思つたのです。ところがそのおやじはのほほんとした顔をしていきます。よく見ると、あの嫁いびりをするお姑さんというのは、なかなか作戦を練つてると思ふのです。お父さんをものすごく立てて、お父さん、お父さんと大事にする。そしてお父さんを自分の味方にくつつけておいて嫁いびりをするのです。自分が孤立しないような作戦を講じておいて、お父さん、お父さんといって大事にすると、お父さんはすっかり目下り下げて、よしよしといつて。奥は完全にお母さんが握つていて、私が言うかあ天下と

いうのはそういう意味なんです。

それで考えたのですが、あのお母さんが若いときには、やっぱりお父さんに抑えられていただろうと思ふのです。農家というのは大体むすこが嫁を取るくらいになると、奥はお母さんの方に移つてまよへんか。

山田 大が移つていけると思ひます。

松丸 その辺に嫁姑の問題を考えなければならぬ重要な問題があるのではないかと思ふのです。若いときには嫁はさつき育つたように機械かなんかのような取り扱いをしてるのが、だんだん甲斐を経てくると、いつの間にか亭主の上になつていく。それが嫁いびりの一つの大きな原因になつていくのではないかと。

金田「春彦さんの『日本書』を讀んでいたら、日本の農家の婦人はボラやブリに似たところがあると書いてあるのです。ボラにしてもブリにしても出世魚といつて、出世していくといふのです。大きくなるに従つて名前が變つていくわけです。私はよく知りませんが、ブリでいいですと、一番初めハマチといふのですか、それからイサギ、イナダ、それからブリになる。ところが農家の御婦人といふのがお嫁に来たばかりのときは、山形でもそうかな「あねっこ」といいますね。子供ができる「あねっこ」、孫ができる「おんば」になり、孫が結婚すると「ばば」になるそ

うですがね。こういう工合に名前が變るところがブリによく似て、出世魚といふのです。

これをもう少し意味を考えてみると、初めは虐待されて、だんだん成り上つていってというか出世して、子供が嫁をもらふころになると実質的な権力をもつてしまふ。そういうことはやっぱりほんとうに夫婦関係を味われない人がそういうことになるのではないかと思ふのですがね。

井川 いま先生がおっしゃつたようなことを愛媛県の青年が申してました。私たちはその青年から「あなた方は今そんなふうな物のわかつたことを言つていらつしやるが、一たんお姑さんになつたとき、よくわかつたお姑さんになれますか」と釘を打たれました。その青年は指導者ですが、いま生活つづり方というものをみんなに書かしているそうです。自分たちがつらかつたこと、自分たちが希望していること、そういうことを作文に書かしておいて、それを保存しておく。そして自分たちが親になつてからも出してみて封建的になつていないか反省するように今から心がけています。そしてその青年は、僕たちは自分からもらうお嫁さんは大事にするが、お嫁さんより先に自動新幹線を買う。それからお嫁さんをもつたのだ、と申しておりました。

司会 これからの青年はいい旦那さまになるという覚悟のようですが、皆さんがこの会議にお出になるときになりましたとき、御主人は何とおっしゃいましたでしょうか。

井川 ほんとうのことを言うのだから、構わないから行っていい、と言いました。私は「おじいさんとあなたのこととを娘の上に載せて切り刻むのですよ」といったら、構わないといふのです。主人は父にも「今度会議に行くのは、おじいちゃんのことと娘に載せるのですよ」といったら「そうか、まあせいぜいやってくれ」と申しました。大へんわかつた人たちではあるのです。

岡村 私が通知をいただきましたときは主人がびっくりしました。私自身の気持は私のような者が出て、何もしやべれないから御辞退申すつもりでおりましたところが、主人が、皆さんのお話だけでも聞くことによつて、君が一つそこで学んできたなら、それを帰つてからお伝えできれば社会のために尽せるのだから、元氣で行つてくれ。あとは僕たちが分担してやるからと申しましたので、元氣を出して出て参りました。

古川 私の場合、実は地方の新聞に私が書きましてあの原稿が全部載つたのです。私は嫁姑のことを書いたのですが、そのことが新聞に出ましたときに、一大決心をしました。主人が今日一体どういふ顔して歸つて来るだろうかと

と思つて、一生懸命待つていました。それから母の心の動きがどう出るかと注意して見ていたわけですが、そのときに母も主人もまったくも愛らない。かえって母も「ほんとうにこういうことが響けるようになってよかったね、私たちの仲が厚かったらこういうこと響けないがね」といって、みんな自分たちが仕合おせになりたいたいのだから、こういうことを人に発表することによってみんなが救われるならいいではないか、行つてきなさいというふうに、非常に自信をもって送り出してくれました。

司会 反対を押して切つて出ていらしたというような方はいらつしやいませんか。

喜多 私は当選したとき、家内中が大へん喜んでくれたのです。札幌の放送局から、私の原稿の内容を放送して、私の話が電波にのりました。ところが家のお姑さんや兄弟が聞いて、せっかく十何年もたつておまえの坐っている座が空になったのを、何も今さらこういうことを掘り出して書く必要はないではないかというのです。ものとり方が違ふと私はそのときだと言つたのです。ところがそれを理解してくれないのです。理解してもらえないままに出てきましたが、そのときの主人の態度は喜びと淋しさと半分ずつだ、うれしくて仕方ないけれども、うれしい半面いやなような、一つの心がごちやごちやになっているという

しますが、そういうずれのようなものを御主人との間にお感じになるようなことがありますでしょうか。どちかが進んでいるというようなことですね。

松丸 増田さん、あなたのお父さんお母さんを見て、そういうことを感じませんか、何かずれがあるというところを。

増田 思います。うちの父もしゃべることは進歩的なことを言っていると思いますが、家へ帰ると全然それが実行されていないのです。私の書いた原稿がやっぱり地方の新聞へ載りましたとき、母が何だったか古いようなことを言つたのです。そうしたら父が「おまえがそんなこと言うから娘があんなこと言ふのだ」と話していました。やっぱり私の書いたことで二人とも何か感じたらしいです。

小林 私は主人より一つ年が上なのです。主人が二十一、私が二十二のとき結婚しまして、結婚した当時は私の方が優越感があつて、とても主人が頼りなく感じました。ところが子供ができて私がだんだん遅れてしまい、正直なところ年中取り残されたようで、いらいらしていました。今度これが当選しましたら、何だか取り残された気持がちょっとすくわれ、主人も喜んでくれました。

松丸 いろいろお話を伺つて、大へんいいだなをお持ちの方が多いと思いますが……なかにはもめた方もおあり

のです。私も同じような気持で出てきました。そういう事情ですから子供も、小さい子供は母にあずけてきたのですが、一人だけ責任負わせられてつれてきたようなわけですね。

大沢 私は別に家庭の人に対して出てくるのを心配もしませんし、反対もされませんでした。奥も喜んでおりました。

千葉 私はここへ来るとき、ちょっとした事情があつてもう村へ帰りたくないというような悲壮な気持で出てきました。ですから主人だつてはたして喜んでいるやら……七分通りはいやだったろうと思つております。

小西 私の場合もみんな喜んで送つてくれました。

山田 私は父母やまわりの人たちにずいぶん喜んでいただいたのですが、夫は何ていいますか、自分が取り残されたような感じがしてとてもいやだということです。でもまわりの人たちが喜んでくれるのですし、悪いことでもないのだから、一生懸命やってくるようにと、駅まで送つてくれました。

司会 取り残されたというのは、何か妻の方が自分より先に進んでしまうという……。

山田 そういふことがあるかもしれません。

司会 そういふお話が出ましたのでちょっとおうかがいようだが——どうでしょうか、どっちにしてもいいにっけ悪いにっけ、今度のことの一つのきっかけになつて話題ができて、いろいろと話し合える機会がふえるでしょう。

小林 見直してくれるといふことがありますね。

堀江 私はかえつて信用が落ちました。

松丸 信用が落ちたにしても話し合いができる話題ができたといふことはいいでしょう。

私は皆さんに申し上げてみたいと思うことは、先ほどから世代の差とか、嫁姑の問題というものが一般的な問題として出されたのですが、まだほんとうに理解ができていないといふこと……理解しようにも共通の話題がないといふことが大きな問題としてあるのではないですか。

共通の話題のために

小村 共通の話題をもつためにラジオが大きな役割をしてくれているのです。「昼のいこい」ですが、ちょうど農家のお昼の時間なので、あれを中心にお嫁さんと姑さんの話し合いができて大へんよくなったといふことを聞いています。

大沢 時代のずれがあるから共通の広場がないのではないでしようか。

松丸 それはもちろんそういうこともありますね。

私の家庭のことをちょっと申し上げてみますと、私の家庭というのは複雑なのです。私は五年前に家内に死なれて、いま再婚しているのですが、年寄りがいます。これは死んだ家内の母親です。私は子供が五人いて、今四人になつていますが、そういう輿情です。この年寄りとの家の関係というのはなかなかむずかしいわけです。このおばあさんが大へんな働き者で、ラジオを聞くのもよくない、働いてなければいけないというふうな非常な古い型で、もう少し遊んでくれると非常にいいのですが、だめなのです。たまたま変な動機からテレビを買ひまして、いやこれがおばあさんに大へんな影響を与えました。どの程度に野球がわかつているのかわかりませんが、とにかく野球がわかったら、お料理の講習です。家内が晩に何か御馳走作りますと、「これはこの間のテレビでは、こう作っていた」というのです。そういう新しい話題が年寄りの間から入ってくるようになったのです。

これは一つの例ですが、やっぱり時代のずれがたしかにあります。方法はあると思うのです。

小林 今のお話に共通していますが、農村の家内では姑も嫁もみんな家内中が一緒の喜びをもつことが大切ではないかと思ひます。私どもは貧しいものだから、畑から麦

とさつまいもを取ることはかり考えていました。何でも金になるようなものばかり考えていたのですが、二、三年前から主人の提案でスイカを植えました。そうしたら年寄りも子供もみんな喜びまして、自分で水をやったりして、それが家庭を明るくしたことのひとつだと思ひます。

司会 農村では御主人と奥さんが一緒に働くわけですが、そういう一緒に働いているということが何か特別な関係を生まないでしょうか。

近藤 私はいまは農村にありますが、私の主人はもと勤め人でしたのでよく知っておりますが、勤め人の主人というのは外と家の生活が違いますから、そのことを思ったら農家の生活はいいのです。スイカ一つ作るのでも喜びが一緒になりますし、子供も手伝ってくれて、生涯が上れば上るで喜びますから。

真多 私は漁村ですが、漁村でもやっぱり夫婦協力してやっています。喜びも苦しみも分け合うことができますから、私ならサライマンの家内より幸福ではないかと思ひます。もともと東京の方には想像できないような労働をしますが、自分の食べるための仕事だから不満を感じていません。

近藤 農村はいいと思ひますが、話題が向上したら、もっといいと思ひます。

松丸 新しい話題が入ってこない、ぐるぐる回った話題になつてしまふ。小林さんの作文に、子供さんに本を讀んであげていたら、おじいさんが「声が小さい」と言つたという話ね。あれはおもしろいと思うのですがね、やっぱりお年寄りもそういうことを欲しているということなんですよ。

小林 七十三から八十五まで四人の年寄りがおりますが、文字という世界から遠い生活をしてたのだと思ひます。それで話し合いではすぐけんかになつてだめだったのですが、童話がおもしろいということを感じてから、古新聞から広告から、私の子供は作文が上手なものですから本によく載るのですが、そんなものを讀んであげますと、孫の書いた作文は一人なのでね。そんなところからほぐれていったと思ひます。

司会 ではこのへんで今までの御発言をまとめながら、先生に御意見をいただきたいと思ひます。

松丸 今まで家庭の中の問題について、わざと問題を嫁と姑の問題というふうに限定して取り上げて、それからだんだんいろいろなことへ発展してこうという意図でやってきたと思ひます。いろいろな御意見が出ましたが、結局初めに、なぜ嫁と姑が仲が悪いのかという疑問の出し方をして、お互いの理解の仕方が足りないのだという抽象的

な答が出たのですが、だんだん具体的に掘り下げていきましたら、現在のところでは農村の嫁というものはまだ労働力であるという考え方が相当強いということが出てきました。それから親たち夫婦とむすこたち夫婦の世代の違い、ここからいろいろな答え方の違いが出てくる。そのもう一つの結核点としては財布をだれが握っているかということ、これが重要な問題ではないかという答が出てきました。進みまして、やっぱり嫁の問題というのは嫁だけの問題ではなくて、夫の考え方が非常に重要な問題で、つまり夫婦の話し合いということが非常に重要ではないか。同時に親たち夫婦の方にも問題があるのではなからうかということが出てきました。そこから、ではこの人たちの新しい人間関係というか、そういうものを作る手がかりとして大いにいろいろなことを話し合わなければいけないのだけれども、話し合おうにも話題が少いのではないか。お互いに共通した話題を作る。それについての考え方をいろいろ工夫する必要があるのではないか。それについては果樹を植えたろうまくいったというふうな例も話されたわけですね。

いろいろな問題が出てきたのですが、それ以外の重点として、もう一つちやんと出てそのまま流れてしまったことですが、血のつながりの問題というのは一つ、よく掘り下げ

てみないといけないのではないか。また血のつながりというものと関係したことですが、家督相続の問題、これが嫁というものを縛っているという考え方ができるのではないだろうかという気がします。

この二つのことにちよつと触れて皆さんの考えを述べていた上で、その上で以上のような問題が出たのを頭の中に入れて、家の中に新しい人間関係を作るためにはどうしたらいいかという話し合いにだんだん移って、今日の話し合いを終わらうかと思うわけです。

血のつながり

司会 では血のつながりの問題ですが、手がかりとしてお嫁さんと小姑の問題といったところから話し合ってみてはいかがでしょう。お嫁さんはお嫁さんと自分の奥の娘を同じように扱っておりますでしょうか。

小村 親の考え方としては自分の娘は農村で働かせたくない。できれば町の勤め人のところへやりたい。そして嫁はなるべくよく働くのをもらいたいというのが現状ではないでしょうか。

近藤 私はここへ出るについて、部落で一日、村で一日話し合いをしてきたのです。そのときやはり今のお話の通り、農村はいやだといって若い人が出たがという話があり

ました。親の方も自分の娘は農村にやりたがらない。もう方はちゃんとした人をもりたいところ、どこにジレンマがあるわけです。

それについて話し合いをしたらそのとき出たのが、休日がないということです。朝から晩まで働き詰めで、今日はお休みという日がほとんどないのです。私も初め都会におりまして農村に入りましたので、初めはびっくりしました。表で働いて帰ってきてやれやれと思つて腰をかけた、それじゃ一服しながら御飯をたいてくれということです。一服しながらお炊事をし、一服しながら子供を育てるのですから、育児やお炊事は片手間なのです。お休みも農村のお休みの日というのは洗濯したり髪洗ったりです。それが一番問題になりました。

司会 問題が血のつながりの方からそれを感じていますが、その問題も重要だと思いますので少し話し合ってみてはいかがでしょう。農村では家事をするということが大事な仕事と考えられていない。そのために嫁が非常に苦しい立場にあるということです。いかがでしょうか、家事をやっているということが近んでいることと同じように思われているということですか。

那須 農村では家の中に入ること、遊びでいるようにとられる。田圃にいたら、作業衣を着て一日立って

松丸 それは模範的嫁だな。やっぱり嫁は小姑様性というのが大体普通なのではないですか。

古川 今は青年たちのそういう話し合いの機会が非常に多いわけです。

松丸 私はちよつと逆の意見をもっているのですが、このごろ青年団の会合にいくと、男の連中を集めて、この中で朝起きたとき布団をたたむ人手を上げろというとき、十人の中で三人ぐらいいしかならないですね。その三人に「君は女房もらつてもたつたか」といったら「たつたみません」というのです。なぜたつたまいかという、女房もらつたのに自分で布団をたたんだら、おまえは女房に甘いといっておやじから怒られる、と、これは結婚してたつたなくなつたのが言えるのです。「ほんとうに怒られたのか」「いや、たんだことないから知りません」というのですよ。

そういう点でいま那須君が言ったことから始めて家事という考え方に一つ問題があるのではないですか。

那須 この布団の問題ですが、僕も松丸先生に二月にやられたのです。「那須君布団をたたんでるのか」とやられたわけです。そのときは気が向いたらたたんでたんだ、気が向かなければはたらかしておく、そういうふうだったのですが、最近になってからやるようになりました。ところがこうしたのは青年団の中でいわれる意識過剰なのです。今

も働いているということになってるのです。そういう考え方が婦人をゆがめていると思うのです。僕なんかそうですが、仕事着を着て田圃に出れば緊張しているというふうに見られる。家にいて——もみすりとかあいうことやっていけば仕事だと思ひますが、家に入って洗濯や炊事をしてると、うちの嫁は洗濯して遊んでいるとか、また子供をだいて遊んでるというふうに見られるわけですね。これは皆さん方というよりやはり男の方が悪いと思ひます。

古川 青年の集まりのとき出た話ですが、お嫁さんがお姑さんとけんかして出たということです。そのけんかした原因というのは自分はこんなに働いているのに、まだ働いてないと思う、そういうところからお嫁さんが出ていったわけです。それを動機に出たお嫁さんが聞いて、どうせ自分たちも将来は嫁という立場になるのだから、お母さんは自分の言うことなら何でも聞いてくれるから、一つ自分がおねえさんの立場になったつもりで、お母さんをおねえさんという気持ちで、おねえさんの仕事について家族中で話し合ってみる会を娘さんが作ったというのです。お母さんというのは娘のことは聞かなくても、嫁のことはあまり素直に聞いてくれないところがあるのではないかと思います。

の若い者は……」というふうにはたの人に思われやしないかという意識過剰であつてはならない。それで言うだけなくやらなければいけないということを私たちは知っています。そんな点で青年たちもだんだんよくなっているわけですね。

松丸 僕が言いたいのはこういうことなのです。お母さんが嫁をもらったら布団は嫁にたたませるものだと定めること、血のつながっている方にはそれだけ甘くなる。そういう物の考え方が布団一つにもあるのではないかということと言いたいのです。

千葉 それは嫁の勤めとしてやるもので当りまえだと思つて苦痛を感じないのです。

岡村 私は、今は主人の父もお亡くなりですが、引き揚げて参りましたところ、赤ん坊の世話をしてるものですから、朝なんか庭がちらかっていると主人が掃いてくれるのです。それを見て父が、何をやってるのだ、女が何人もいるのではないかと止められたことが何度か身にしみていますものから……。

松丸 いま千葉さんの言われたように、女の人の考えが家事は自分が引き受けるものだというふうに思っている……。

山室 農村では小さいときから男の子と女の子としつけ

覚えても床の中ではたばこを吸ったりしています。そういうとき一緒に起きて、共に苦勞した方がいいのではないかと思っています。

司会 血のつながりの話に展したいと思いますが……。

小林 私は四人のしゅうとをもっています。どういふわけでしょうとが四人でできたかと申しますと、いま八十三、八十五になる夫婦に子供がなかったものですから、その弟の七十六と七十三になる夫婦が養子になったわけです。その子供が私たち夫婦なのですが、そうしますと八十五になるおばあさんは全然だれとも家の中に血のつながりがないわけです。それをおばあさんがとても強く意識していて、おれは野原の一本杉だということです。それが私の家の一番暗い面だと思います。私は何とかして古い方の人たちが居つらくないような雰囲気を作ろうと思つて気を遣うのが容易ではありません。明治の教育をうけて育った女の人というのは血のつながりという概念を強くもっているのではないのでしょうか。

松丸 必ずしも明治だけではないでしょうね。

岡村 私は二十五になる娘がおり、学校に勤めています。が、その友だちの話を、自分のお兄さんのお嬢さんが気に食わないから、いつもへまを見つけると、お母さんにおねえさんがあんなことやつた、こんなことやつたとちよいち

が違います。女の子には布団もたたましお掃除もさせるのですが、男の子にはさせません。だから親のしつけが自然に男の方を甘やかして過ぎているのではないかと思ひます。

松丸 それはたしかにあると思いますが、もう一つは逆の意味で農村のお母さんが自分の娘に甘過ぎるという気がしてしょうがないのです。

山室 娘よりもむしろ甘いいのではないのでしょうか。

松丸 むすこにも甘いがある意味では娘の方にめっちゃに甘いことがある。宮沢先生のおっしゃった本能的な愛撫の仕方だな。嫁さんつかまえて、君はだんなさんと話す方が楽しいか、里に帰つてお母さんと話す方が楽しいかというところ、大抵の嫁さんはお母さんの方が楽しいという。

小西 布団の問題ですが、農村では布団などは男の人がたたすに、女の人にさせておいて、女が御飯をこしらえるまでにひまでもあったら木一本でも切るとか、同じするなら男の仕事をしてほしいという関係があります。ですから布団をたたむというようにことを都合の家庭の場合のようになくてもよろしいと思います。

松丸 それは男にとつてはつけ目ですよ。(笑)

山室 農家の主婦は農繁期でしたら四時か四時半ごろに起きますが、男の方は御飯ができるまで眠っています。目が

よいけ口する。けれどもお母さんはあんなの考え方が若いのだ。人間は年をとると見方だつて変るのだといって、いつもはねられるからお母さんには何も言わないことにしたというのをききました。私はそんなお母さんが一人でもみえたら家庭はみんな明るくなるのではないかと思ひます。

進藤 私の姑は血のつながりというものを考えていないのです。血のつながりというものはあるけれども、人間はとことんまでいけばみんな孤独なんだというような立場に立っているのです。一人ぼっちなんだ、だからみんな仲よくしていかなければならぬ。経済力がないから、恵まれないから、淋しいから、だから仲よくしていかなければならぬ。短かい人生ではないか。それをよくよくいがみ合つていくことはないではないかと、ほんとうに大らかな気持ちです。だから他人に干渉もしなければ自由も認めます。だから血のつながりを重視している人はやっぱり自我が強いのではないのでしょうか。

松丸 いま「短かい人生」とおっしゃったけれど、それは長くはないのだけれども、古い考え方の人はなるべく人生は短かい方がいいのではないか、「死んで来世は極楽へ」という方に重点をおいてませんか。血のつながりを尊重する人はそういう答え方が強いと思ひます。その考え方がふ

つ切れた人は非常にうまくいくのですが。

那須 遊覧車は日本では一番保守的だと思ふのですが、その考え方は血のつながりというのには金科玉条なのです。憲法に依りだぐらいのものです。子供のない夫婦があると、どちらか血のなかった方のものをもらう。その次に嫁さんなりおむこさんなりが、これがみなといていいほどです。そういうわけで非常に家の中というのはいまは暗いのです。

松丸 那須君、その問題とお寺の多いということと関連がありませんか。

那須 みんな寺参りばかりして、「ナンマイダブツ」といってたら極楽へ行くように思っておきらめていられるのです。

松丸 今の時代を生きている間に染しむのだという気持ちが強くなってくれば進藤さんのおっしゃったような明るい関係ができるのだと思います。

井川 私の嫁も大へんいい姑で、どうしてこんなに私を大事にしてくれるのだらうかと考えるのですが、それは主人が一人っ子であって、娘が一人もないということと、自分が若いとき大へん苦労した。そのつらさが身にしみて、そのために私に自分の娘のような愛情を注いでくれるのではないかと思っています。

喜多 お姑さんというのは自分の娘がそばにいと気が

だから仕方がない、「家へ来て休めや」と簡単に片づけてしまします。そこにやっぱり血のつながりというものが、何年たってもとれないのではないのでしょうか。

松丸 ですから問題は、一番根本に遡れば、どっちにしてもほんとうの夫婦ではないということですね。

家督の問題

司会 時間も少ないことですから、先生がさっきおっしゃった家督の問題に移りたいと思います。たとえばこういう場合にはどういう考え方がとられますでしょうか。一人娘があるとしたら。その人は普通の考え方で家督を継ぐわけですが、その娘が長男の人と恋愛でもしたという場合に、どういうふうな措置がとられますでしょうか。

喜多 私の妹が伯父に子供がなくてもらわれていきました。年ごろになって恋愛した相手は長男だったのですが、どうしても結婚したいというのです。そのとき伯父のたった一人の娘を結婚させて別居させました。私が伯父に老後はどうするのだと聞いたら、ある財産で自分ができるだけやっていく。自分が倒れたら黙って見てないだろうと、そういう考え方で解決していているのですが、そんな考え方もいいのではないのでしょうか。

松丸 そんな考え方になれたら大したものです。

強い、捨てられても娘がいると思うことが一番の原因ではないでしょうか。私も血のつながりのない人の子なんかもらって育てられないと思つてます。それは本能的に仕方がないけれども。

松丸 あんまり仕方がないと思わないでください。思わないように話し合ひしていただきたいですね。

大沢 先ほど嫁は夫よりも里のお母さんの方が頼むというお話がありました。私の近所でも、夫婦になつてから長い間たつて子供が二、三人あつてもときどき里へ休みにいくということがあります。私の家もそうです。自分の家について休まずによそにいて休むというのはおかしいと矛盾を感じているのですが、私は「おまえは休みにいくところがあるが、わしは休みにいくところがない」というのです。それに対してあまりいい解決方法は見つからないのです。

松丸 それはおかしい。あなたは休みにいくところが無いといっているが、休むところに住んでいる。それでは奥さんが気の毒だ。(笑)

千葉 いなかでは嫁さんが病気になる場合、自分の実家へ戻って治してくる。もしくは実家から金をいだけて医者代を支払う、それが当然だと思つています。もらった方もそうだし、くれた方もうちの娘が病気になるの

千葉 健康ならいいけれど、五十くらいでからだが弱つた場合にはどうするのですか。お嫁さんの方の親が倒れ、むすこの親たちも病気になる場合、負担が両方からかかつてずいぶん苦しいのではないのでしょうか。

喜多 うちの場合は両方とも経済的に恵まれているから暗然のうちに了解しているのではないかと思います。倒れていく方から先に見ていくというふうな……別居といったら経済力の問題ですもの。

那須 僕は簡単な問題ではないと思ふ。なるかならないか、そういうことが起つてみなければわからないのですが、見ていると僕たちの周囲でそういうのがありました。最後は別れてしまうのです。恋愛して結ばれても、親類で離してしまうのです。おまえらそんなことではないのかというふうなことで、親類が寄つてたかつて反対するから部落もその二人に対して圧迫というか、白い目で見ると、それで二人がばらばらになつてしまったというふうなことがあるのです。喜多さんの方は恵まれていると思ふ。僕らのところは、僕がそういう二人を結びたいと思つていふことを言つても、受けつけてくれません。「あいつは勉強しやがってのぼつていくさ、婦人会なんかあんなことやってちょっとアカになつてきよつた」とこんなこと言われるのです。僕たちが二人を幸福にするためにやるのがアカに

なったり、シロになったりするのです。僕の場合簡単に喜多さんの言葉はわからないですね。

喜多 内地と北海道とそれだけの差があるのです。しょうが、別に夫婦別れる必要はないでしょう、親と一緒で生活していくのではないのですから。

松丸 喜多さん、那須君の近所の町へこの間行つてね、この会議の話をしていたら、その婦人会の会長さんがこういうことを言った。「あの会合は困ります」。なぜかといったら、「あれは労働省が主催だから。」——「労働」という名がついたらアカだと思つてゐる。日本にはそういう地帯もあるのです。

小林 私はいつも四人のしゅうとがつきまわつてくるようですが、四人のしゅうとは正直申し上げて憎みのたねなのです。自分の老後を考えなければならぬような年齢に來ているのに、まず四人のしゅうとを片づけなければならぬかと思ふと切実な問題なのです。これはどこから來ているかと考えてみると、日本では家というものにあまりこだわつてゐるのではないかと思ふのです。子供がないから幾らも年の進まない弟を養子にして、私の主人は一人むすこで、あとをやつて、それでみんなが丈夫ですから結構なようです。私自身はいつでも暗い顔というのがそこに出てゐるのです。私は自分の子供にはこういう負担を負わせま

てこんな大金もらえるのなら、なかなか死ねねえと言ひ出した。(笑聲) 社会保障を要求することを忘れてはいけません。と思う。しかしすぐできることはないということです。

小林 横のつながりをもちたいと思ひます。しかし四人もしゅうとをかかえてゐる人、同じ悩みをもつてゐる人がいないというのが心細いのです。一日も早く養老年金をやつていただきたいと思ひます。月千円でも、五百円でもいいと思ひます。

松丸 それは声を大きくしてやらなければいけないと思ひます。それともう一つ、年寄りたちに明るい生活を知らせて生きるということに対して希望をもたせることです。

小林 その方法の一つとして現を飼うとか山羊を飼うとか、スイカを作つてみてそこからおいしいものを食べるとか、そんなところで解決の道を見出しているのですが、それだけでは済まされない問題だと思います。財産があるというわけでもありませんし、別居どころではありませんから。年取つてゐる老人をおいて別居することは、世間の迷惑ということを考えてもできません。

解決のために

司会 いろいろ問題が出ましたが、どういうふうにした

い、私一人の代でこれは切り上げたいと思つてゐます。それにはどうするかといふと、あんまり家というものにこだわつてはいけません。たとえば家には財産もないし、どうしても社会保障の問題をお願いしたいのです。たとえ一歩月に八十歳以上千円でも結構ですからほしい、そのことを声を大きくして申し上げたいのです。皆さんの力もお借りしたいと思ひます。しかし、ただ社会保障ができて老人年金をいただいただけで満足したくありません。今のこの苦しみは結局家族制度からきているものです。だから憲法改正なんてことがあつて、再び家族制度に追いやるような、私たちの歴史をくつがえすようなことがあつたら断然反対したいと思ひます。人間の生命が一番尊重されなければならぬということ、声を大きくしていいと思ひます。年寄りがピンピンしてゐるのに、この身を捨てなければならぬのはどこに原因があるのかしらと思ひます。

松丸 ピンピンしてゐるくせに死ぬことを考えてゐるんですよ。それを割合簡単に改めるといふことでは、秋田県のある村で今から三年前に七十以上のおじいさん、おばあさんに一万円の養老金を出すという約束をした村があるのです。一年たつたら一万円は出せなかったが、半分の五千円を出してやつたのです。そうしたら年寄りたちが大驚びし

らこういう問題を解決することができたらどうか。皆さん御意見をもちになつていらつしやと思ひますので、一言ずつおっしゃつていただきたいと思ひます。

山田 私の部落の二十六歳くらいのお嬢さんですが、四人のおしゅうとさんがあります。そのおしゅうとさんは相当意地が悪いのですが、それでもお嬢さんがとても気がよくて、自分の思ふことは何でも当りさわりのないように言うのです。自分をさらけ出して言うのです。しゅうとさんの方も仕方がない、それに着き込まれて自分の気持もさらけ出すという具合でわりになつてゐるようです。そういうふうにお互いが意地悪くなく、財布の問題でも経済の問題でも話し合う、嫁には家のこと知らせるなどというようなことのないように、こういうわけでこれだけの収入がある、これだけの家族があるから小遣はこれだけしかやれないがまんしてくれといったように、お互いに話し合つていったらいいのではないかと思ひます。

小林 姑の問題もともかく、夫婦の問題の方が重大だと思ひます。今のお嬢さんは少し努力が足りないのではないかと思います。何でも黙つて知らん顔していれば事が済んでしまふという考えがあるような気がします。ですからあきらめないで、あらゆる方法で嫁さん自身が努力することが必要だと思ひます。

小村 私はお嬢さんがあまり忙しいからこういうことが起ると思いますのでこの忙しさを、忙しい忙しいといつて放っておかないで、部落でも村でもそういう問題を取り上げて、少しでもお嬢さんが忙しくないように、そうして本でも読むひまができるよう考えることが大事ではないかと思ひます。

小西 私はやっぱり一人一人が楽しみをもつためには少しづつでも自分に自由になる小遣があると思ひます。それで家族で話し合つて、百円ずつでもみんなに自分の自由になる小遣をもたせることと、それから人のことには干渉せず、話し合いの上で、一人一人の行く道を邪魔せぬようにしたら、割合にばらばらに見えていて、それがばらばらでなしに工合よくいくのではないかと思ひます。私のことを申しますと、私は嫁をもらひまして三年ほど私が出納簿をつけておりましたが、会計を姑がもっている限りは、ほんとうに嫁を理解しようと思つても、それが邪魔をしているのだと思ひまして、一年余り前から嫁に会計全部をもつてもらひ、私が小遣をもらつております。そうして小遣の中で私は私なりの楽しみを求めて、歌が好きなのです。から、短歌の会などに入っています。私が歌の会にでけたときは自然に明るい顔で帰ってきますので、嫁も心から喜んで出してくれますし、それが私の今までにやってきました。

う交流がないので、世間の人がこういうことをいつてるとか、ああいうことをいつていてることを聞く機会がありません。それでおばあさんならおばあさんに向いたような話とか、若い者には講演とか、そういうお話聞く機会を、婦人小年室とか教育指導の方からつくつていただきたいのです。農村よりも漁村が程度が低いですから、そういう機会をよけいにつくって啓蒙していただきたいと思ひます。

山室 ある若夫婦が井戸の便利が悪いので、井戸を掘ろうと思つたところが、年寄夫婦が反対しました。いなかのことですから方が悪いとかなにが悪いとかいうわけです。それを若い夫婦が無理をして井戸を掘つたものですか。折台が悪くなつて、若夫婦はサラリーマンでしたから別居しました。すると年寄夫婦が自分たち二人で放事もしなければならなくなつて、若夫婦が井戸を掘つてくれたことがありがたく感じられるようになった。そういうことから嫁と姑の仲がよくなつたというようにあります。

漁藤 まず話し合ひましょうということ、お嬢さんの方からお姑さんに話しかけなさいといつても、何かおっくうで話しができない。ではどういふふうにしたらいいか、南極で宗谷が氷に閉ざされて身動き出来ないといふとき、オビ号が五メートルの氷をバリバリ割つて、宗谷を迎

した解決の一つになっております。

古川 私の近所に姉学級というのがあります。お姑さんとお嬢さんが仲よくするために、お姑さんにも今の時代を知つてもらおうということから集まつていろいろ話を聞く機会を作る。そのためにお嬢さんたちが月に一回目をきめて、近くの温泉のわくところへ行つて湯を湧かしておいておばあさんを入れてあげる。その日はお嬢さんが御馳走をもたせて送り出すわけですが、その温泉場でお姑さんたちは一日中いろいろな話し合ひをしたり寝たりして楽しんでます。そういう会があります。

那須 僕の場合は女房を早くもらつたので非常に問題があったのですが、僕は家で話をするのがきらいでしたので、家の中がもめてくると、酒が好きなので、酒に逃避していたのですが、そのために家の中が工合悪くなつてきたので、一ぱいきげんで「済まんことしたな」とちよつと言つたらとたんに株が上りまして、それからいろいろなこと話し合うようになりました。今では非情にばあさんの問題はずうまいといひます。その盗には女房者一生懸命になつてくれているわけです。共通の場をもつて、こつちが張り詰めてないで、下から出て納めさせてやるということが必要ではないかと思ひます。

喜多 私の部落の場合は他から人が入ってくるなどとい

えてくれたというあの話のように、お姑さんとお嬢さんの間もお姑さんの方があたたくしてくれれば、問題はたやすく解決できるのではないかと思ひます。

若人人も自覚する必要があるのですが、力のあるものからまず先に話し合うということが大へんいいことだと思ひます。

古川 共通の話題を見つけるといふ問題ですが、たとえばあるお姑さんはとにかく金儲けをすることなら一生懸命話されるというのです。たまたまそのお姑さんは豚を養うのに熱中しておられたので、お嬢さんは豚の養ひ方を一生懸命研究した。それから引っぱり出していろいろ話すきっかけを作つたという話もあります。

岡金 では、先生にまともをしていただきたいと思ひます。

松丸 家庭の中の新しい人間関係を作るといふことの基本的な方向というのは、楽しい家庭を作るといふことが重点になるのではないのでしょうか。もつと別の言葉でいうと、今までの古いお年寄りたちが育つた社会というのは生命を粗末にしていた時代だと思ひます。たとえば農機のために切腹するのが美談になつてたといふふうです。生命を粗末にすることがかえつていいことであつたような時代なので、お年寄りというのは生命を大切にすること

とを悪いことだというふうな考え方、別の言葉でいうと楽しい生活をするということとはよくないことであり、貧乏なことだというふうな考え方をしていると思うのです。それは間違いないので、そう思いながらやっぱり楽しい生活をしたいわけです。遠慮会釈なく楽しい生活をしていいのだということをお母さんにみんなで語り合うということ、それが必要ではないかと思えます。それが一つの方向だと思ふのです。

その出発点ということで、いま進藤さんがオビ号の例を引いて話されたが、いまのお話を聞きながらそう思ったのだけれども、夫婦のまわりをバリバリと割ってくれというのは、これはお姑さんの方ではなくてだんなさんの方だと思ふ。だんなさんでなければいけないと思うのです。やっぱり楽しい夫婦生活というものを確立することを皆さん方の出発点としていただくことが今の日本の農村では一番必要なことではないかという気がするのです。ここにいらっしゃる方は大へんに幸福な方ばかりなので、それをあまりお感じにならない方が多いかもしれませんが、一般的には変則的なものだと思うのです。一つの例をあげれば休みに里に帰るという、里のお母さんと話をする方がだんなさんと話をするより楽しいという悲しい夫婦生活です。頼りに

が含まれています。

質問 そのお見合の形態は、都会ですと交際結婚というのがありますが、新しいやり方というものはないので

喜多 恋愛結婚した場合は別ですが、見合結婚だと仲人が、こういう娘がいる、ここの家と釣合がとれるし、財産の程度も同じくらいだからどうだろうというので親同士下相談が出来上って話を一応むすこに伝えるわけです。娘にも……。そうするとお父さんのいいように、お母さんのいいようにという場合に見合いさせるのです。見合したら「いいです」と返事したことになるのです。私の場合は相手の人の名前も知らずに結婚しました。運よくいい人に当たったので、ほんとうに幸福です。(笑)

質問 お見合に運ぶまでの選択権というものはあるのですか、写真とか何とか……。

喜多 それはあります。写真を見て少しみつともないからいやだというふうなことはできます。

近藤 まだまだ恋愛結婚の方が少く見合結婚の方が断然多いのですが、元のように頭も知らず、名前も知らずという方は少くなっているようです。

大沢 自活するだけの能力のある者同士で恋愛のできた場合に、ある程度親の反対を押し切って別居するなどの方

ならない事主だ。やっぱり事主のそばが一番楽しいという夫婦生活でないかと思ふのです。それを一つ確立するということが話の出発点ではなからうかという気がします。その辺でだんだんに掘り下げていこうと思ひます。

司会 どうもありがとうございます。それでは今日の討論を終りたいと思ひます。

質疑 応答

質問 先ほど農村の夫婦生活というものは大へんゆがんだ、変則的なものだというお話がありましたが、そういうものは結婚の形態といいますが、結婚の仕方というものは自体の問題があるのではないかと思うのです。農村では結婚するときに家長とか、とにかく年寄の意見というのが大へん尊重されるようですけれども、そういう老人の権威というふうなものが結婚に際してどういうふうな働いているのか。それについて伺いたいと思ひます。

喜多 農村も漁村も大いに関心なのですが、家督相続者の場合は親の氣にいったものをもらう、次男三男になると自由だというふうな空気ではないかと思ひます。

質問 長男の場合にはお父さんお母さんが探してくれるのですか。

喜多 探してくれるといわれておりますが、家長の権威

法で自分たちの幸福を追求していいものでしょうかどうか。

松丸 ちょっと補足します。要約的に結論的にいいますと、農村の結婚というのは人間人間の結びつきという傾向よりも家と家の結びつきという傾向が非常に強いということです。ですから一番ひどい例はこれは千葉県の佐原というところの近くの話ですが、その地方の農村にいきますと結婚式に花嫁と花むこが出てこないのです。そして両方の両親と親戚が出て参りまして、それで三三九度をやる、そういう結婚が現在まだあります。

それからこれは東北地方に一般的ですが、結婚式のときにおむこさんは裏で専らおかん番をやっていますね。風呂たきしたり……。花嫁だけは式場に角かくして出て、それで三日三晩くらい飲む、こういうのがあります。これは花むこ、花嫁は邪魔なものです。いらぬのですが、花嫁はアクセサリで贈物と同じような状態、そういうのはこれは非常にたくさんあります。

そういうことから考えてみても全く家と家との結びつきということなのです。そこが非常に特徴的なことです。家と家の結びつきですから本人の選択の意思なんてことよりも親の発遣権が非常に強いのです。農村の親子関係の一つの特徴といえますか、都会の親子関係と違うところは、農

業で生きていく青年にとって生きていく方法の大部分のものを親から習うことです。学校の先生でも教えてくれない、だれも教えてくれないで、鎌の使い方から鉄の使い方から親が教えてくれる。だから親に対して非常に親孝行になるのです。同時に親が子供に対して非常に大きな権力をもつという関係にあるわけです。

最後に青年団の「おれは見合結婚するんだ」、「恋愛結婚するのだ」といっている人が、必ずといっていいくらいみんな親のいう通り負けてしまいます。それが今のところ一般です。十中の九分五厘ぐらいまでそうでしょう。親孝行なのです。だから今のようないい御賢問が出る。自分の幸福のために生きていたらいんですよ、生き生きと。それを弱さを合理化するために、そういうことをすれば家庭に風波が立つというようなことをいって、自分の犠牲を払うことに美徳を感じている。しかしある意味からいえばおやじをいつまでも時代遅れにしておくことは必ずしも孝行ではないと思う。やっぱり時代に沿ったものに親の考え方を改めさせていく。それにはいさこががあっても押し切ってだんまん納得させていくのが一番の親孝行だと思ふのです。小林 いまの問題でうちの方に足入れ婚というのがあ

のですが……。

松丸 足入れは全く労働力としての試験です。使ってみる。那須 僕の場合ですが、非常に年寄りというのは猜疑心が深い。これは一般的にそうではないかと思うのです。たとえば僕が外へ出た場合、うちの兄は何してるやろ、悪いところへいつてやしないか。学校でうまいこと勉強してるやろかとか、親や年寄は若い者に対してそういう目で見ろわけです。するとどうしてそういうふうに見られるだろうかと抵抗を感じます。そのときに親がボンと怒ってくると「馬鹿者ッ」と火花が散るのですが、女親の場合は「なに、ほんまに」というようなわけで、そうした中に、うちのこいつ手に負えぬようになったと、淋しいところがあるわけです。夕食のときでもあまりものをしゃべらない。そういうときにちょっとした世間話でもこちらからすると「そうやそうや」といいながらついつい釣り込まれてくる。非常に猜疑心が強いが単純なものです。そういうことで、僕はいつも自分の話をするようにします。今まで話をしなかつただけに、そういうことで非常にみんなよく理解してくるようになります。

山田 私たちはお年寄が外へ行って来られたとき、「寒かったでしょう、大へんだったわね」といってあげると、外でおもしろくなかったときでも、家へ帰ってくるとあたたかくして気持がとてやわらかくなる。ほんのささいなことですが、そういうことをやっています。

てあんまり故障も起きなかつたら買ってやろう、故障が起るようだったら……。

小林 全部ではないですけれどもかなりあります。ずいぶん女を侮辱して思うのです。

質問 平生人間関係の調整というようなことでいろいろ苦勞しているものですから、今日のお話を伺たり、私の経験などから考えまして、人間関係の調整がうまく解決つな場合に問題の当事者が、相手のたとえば姑の心理状態なり、おかれてる立場というものを自分のことのようにピンと感じてきた人は問題がうまく片づくのです。そういう意味で人間関係の調整をして話し合いをするためには相手の人の心理状態が、どうしてあんなのかわからなければ根本的な話し合いはできないのではないかと、これを感ぜます。そういうふうな相手の心理状態を掘り下げて考える方法を、どういうふうに行うにやっていますか。あるいはどの程度考えていらつしやるだろうか。いい方法があったらお教えいただきたい。ただ年寄りが古いとか嫌いだ、りするといふ程度で理解していらつしやるのではないか、今日のお話はそういうふうに感じられたものですか、その点深く掘り下げる方法としてどういうものを実際におやりになつていらつしやるか、ということをやりたいと思ひます。

小林 年寄は割合に昔のことを言いたがるものです。何でも昔のことを引つ張り出すのです。縁の立場としてそういうのはコッソリコッソリと当ってきつてしゃくにさわるのですが、このごろはある程度、そういうことを聞いてやることも必要ではないかと思ひます。がまんしているといふ気持からではなくて、深い愛情をもつと、何か気楽に毎日きけるのです。

松丸 人口の四割八分は農民が占めているという面では農民の心理というものを学問的に扱っているものがないのです。そういうことを心がけている人がほとんど皆無であるということ、これが一つの非常に大きな盲点ではないかという気がするのです。このごろ木田みのるさんやおやじになつてゐる。それも文字者の片手間というふうなことになるのです。農民の自分体に関心ということとは非常に必要ですけれども、やっぱりそれを体系づけてまとめていくというジャンルが一つ確立されなければならないのではないかと、いうことを考えております。

司会 まだ御質問も残っておりますが、時間が参りましたのでこれで終らしていただきたいと思ひます。

(第一日閉会)

司会 初めに昨日の話し合いの内容を書記が取りまとめしておりますので、読み上げます。

書記 まず家の中での問題について、嫁姑の問題から入って、いろいろな人間関係の問題を発展させていったと思います。

まず最初に嫁姑はなぜ仲が悪いかということについて、相互に理解の仕方が足りないこと、姑は嫁の時代になめた苦勞をまた嫁に押しつけようとする、互いに関心をもち過ぎて他人に干渉し過ぎること、世代の違い、血がつながっていないということ、それから嫁は労働力としか考えられていない、家計の奥手を握っていないというような問題点があげられ、それらの状態について話し合われました。

嫁と姑の間にいざこざが起きた場合に夫の態度はどうかということについては、よくて中立で、大部分の人は見て見ぬ振りを、それは農村では夫婦の愛をかくそうとする結果であるが、そのことが果してよいことだろうかというところが討議され、夫婦の問題に話は発展していきまし

た。これらの問題についてアドヴァイザーから日本の農村では縦の関係ばかり重要視して、横の関係を軽視する、軽視するだけでなく軽蔑する傾向があるので、この横の関係を大切にして上げていけば人間関係は民主的になるのではないかという助言がありました。

村では一番大切ではなからうかという助言があつて昨日の会議は終つております。

世間体の問題

司会 今日は農村の近隣生活を中心としての人間関係について話し合つていただくことになっております。議題として、近隣関係の問題を話して、世間体の問題とそれから仲間作りの問題というふうに取り上げ、まず世間体の問題から入りたいと思います。

私たちは都市でも農村でも、多かれ少なかれ世間の思惑というものを気にしながら暮していると思うのですが、特に農村ではそれがはなはだしいのではないのでしょうか。そしてそのことが農村の生活を暗くしている大きな要因になっているのではないのでしょうか。皆さんの昨日の御討論の中にも多少そういう御意見も出たようでしたが、これからその世間体ということをしりとり下げてみたいと思います。その手がかりとして昨日ちょっとどなたかの御発言の中に出ました別居はしたいが世間体が悪いという問題をここでもう一度討論し直してみたいと思います。

那須 僕たちの方では別居するというようなことをやつた場合は、大へん親不孝者だといわれるのです。みんなが親不孝者だというと、その人がほんとうに親不孝であるか

続いて話は血のつながりに触れて、農村の母親は本能的な愛情のもち方で、自分の娘は甘過ぎるほどかわいがる。そして娘は農家へ嫁がせたくないといながら、嫁には働きものをもらいたがるという矛盾があつて、こういうところから嫁と小姑の問題も起きてくる。また血のつながりに関連して家督の問題では、農村では家にこだわり過ぎて複雑な人間関係があると話し合われました。

このように暗い家の中の人間関係をどうしたら明るくすることができるとかということについては、嫁を忙しから解放する、銘々が僅かでも自由になるお金を持つて一人々々が楽しむ、共通の話し合いの場をもつて相手を納得させる、経済や経営を家族全員で話し合う、社会保障、養老年金制度を確立する。嫁姑関係が積極的に農村や漁村に入りこんで啓蒙してほしい等の意見が出されました。最後にアドヴァイザーから、家庭の中の新しい人間関係の基本的な方向は楽しい家庭を作ることから始めなければならないのではないか、年寄は生命を尊重して、それをよいことだと思ひ、また楽しい生活をするをうしろめた、寛大なことのように考へているが、それはまちがいで、遠慮なく楽しんでいいのだということ、また家族がぐらに話し合うことが一つの大切な方向ではないか、そしてその出発点として楽しい夫婦関係を作ることが今の農

ないかということ考へる以前に、みんながそう考へてしまふわけです。この場合自分がしっかりしてればいいのですが。岡村 私の主人は長男です。両親は四、五年前まで二人とも健在でおりました。私も主人の仕事の都合もありまして、同じ村で別居することになりました。一年後、主人が教育長になるといふ問題が出ましたときに、「岡村は両親をおいて自分たちだけ外に出て、親不孝者だ。あんな親不孝者を教育長に出すことはできない」といふ話が一、二あったそうです。私たちは親に不孝するのではなくて、父も主人も話し合いで別れたことですが、世間では誤解がとて多くて困つたものの一人です。

なぜ世間体が気になるか

松丸 多かれ少なかれ世間体というものは邪魔になつていふところなんです。一体なぜ世間体が気になるのでしょうか。それを一つ考へてみてくださいませんか。井川さんのところであなたの方御夫婦が家から出ていかれたでしょう、ああいう場合世間体の問題はどうかですか。

井川 私たちの場合は農業を営む上には父と主人との間に衝突がありまして、主人の方が新しいやり方、父の方は古いやり方なんです。どちらも一歩も退かない。それで

遂に主人の方が、それでは家の中で別々に経営してみないか、自分には種子をまくのから消毒まで思うようにやらしてくれ、一切干渉しないでくれといったのです。ところが父は、同じ家の中に住んでいて親子が別々の経営をするのは世間体が悪い、というのです。そうすると主人の方も頼み、父の方も一粒だねですから大へん考えまして、それとどうとうおまえの好きなようにして、家を離れてみないかという話し合いになって離れました。

松丸 その場合に世間では何かいいましたか。

井川 私の父は村の政治の方に頭を突っこんでいまして町長選挙なんかに出ました。そのときある反対派の人が、家の中で父と子供がうまくいかないと、本来の政治ができるかと発言した人があったそうです。

松丸 そういふことが世間体を尊重しなければならぬという気持と結びついていくのです。大沢さんいまの話を聞いてどう思いますか。

大沢 井川さんの場合は非常に幸福な別居の形になっていると思います。私の場合でも現在自分に自活の能力がありまして世間体とか何とかを気にせずに、悪いといわれても構わない、別居する方の幸福を選びたいと思います。

小林 嫁というのは家の中で姑に気がねしながら世間の監視にもあっているというような状態ではないでしょう

いし、世間のこともあまりいわないと思います。私の場合を申しますと、伯母に子供がなくて、私が伯母の家にいくものと世間ではきめていたのを、私の夫になる人に私は不服だったのです。それを押し切ったために、家はもちろんのこと、世間の風は冷たかったし、どうすればいいか途方にくれたことが度々ありました。そういう経験を経験してきただけに、今ではどんなことがあっても平気です。自分が強くならなくてはいけない、世間々々と気にして、那須さんがおっしゃった意識過剰になって、いつでも世間に負けているということが悪いのではないかと思います。

松丸 一つまとめてみましょう。なぜ世間体に縛られるか。大沢さんは自分に生活能力がないから、自信がもてないということですね。

生活能力がない。生きていくことの自信の弱さ！——自分にそういうものがあると世間体というものが気になるという考え方、こういうものが一つ出てきたと思うのです。それから進藤さん、小林さんの言われた一種の鬼衆です。優越感を味わうという見栄坊の気持、これが世間体というものを気にするのではないかということが出たと思うのです。それからそれとからんでくるのは功利心、これが自分のそういう気持の中にあるということ。もう一つの重要だと思ふことは、まわりの人がおせっかいやきで困

か。嫁自身もいい嫁になりたいという、そういう自尊心というのですか。鬼衆心というのですか、そんな気持がいくらあるのではないかと思います。いかがでしょう。

進藤 世間体ということとは何かの人より優越感をもちたいということから始まっているのではないかと思います。劣等感をもっていることを裏返しにすれば優越感をもちたいということになるのではないかと思います。

那須 自分たちが意識過剰になって気にし過ぎていいのではないかと思うのです。人にはよく思われる方がいいが、これやったらまたあんなことをやりよったと思われはしないかと気にするのは、自分に自信がないから、自分にすぎがあるからだと思います。

千葉 昔から子供と家族と親が同居してきたしきたりがずうっと続いている、そのために一緒に生活しているというところが美点だと思われてきましたので、今別居するとなると、たとえ人に親をきらげて出ていくとか、親を捨てて出ていったとかいわれはしないかと思うわけです。昔からのしきたりの考えが抜け切れないために、世間々々と自分が気にするのではないしょうか。

進藤 世間体を気にしながら、自分も世間に干渉しているのだと思います。自分がほんとうの意味で生活の体験をしてきた人、自分で苦労してきた人は大抵世間体を考えな

るという御意見が出ましたが、それはこっちにもあるのではないのですか。こういうふうに考えてみると、これは人のことではなくて自分のことだということになると思うのです。そうすると世間体という問題は自分が考えなければいけない。

金のつかい方

町会 世間体のあらわれとしてはいろんなことがあると思いますが、お金の使い方のことなどいかがでしょう。

松丸 生活をやっていく場合、いろいろの金の使い方があって、その場合に皆さんは、世間体ということに相当勘定に入れた金の使い方をされていませんか。

小林 農村ではそういうことがとても多いと思います。たとえば味噌とおこうりで御飯を食べて、栄養など考えない生活をしていながら、人の手前を考えて、町の薩摩札とか尾張札とか、そういうことに沢山使っています。

それはとても無駄だと思ふのです。

那須 うちの場合でもラジオ代、新聞代、それから食事とかそういうことにかけるお金をさいてまでも客體を三十分分集めたりしています。葬式や婚礼のとき、よそから借りたくないのです。また、自分が寝たこともないような布団をしまつておいて、自分はせんべいみたいな、体の痛く

なるような布団で寝ています。

増田 世間体というものを気にするのは、やっぱり都市よりも農村の方がひどいようですが、農村は家の中に住む人間よりも家自体を大切にすることができないかと思えます。昔からそこに住んでいて、家というものの地位がきまつたようになっていきましたから、それを守っていきこうという意識で世間体を気にするのではないかと思います。

小林 私は七十三歳から八十五歳までの四人のしゅうとがおります。今は丈夫ですが年からいって明日にも知れない年です。これから四人の葬式をしなければならぬのですが、私はそれを夫婦単位で二回にやりたいと思うのです。たとえば一人のおばあさんが亡くなったとしますとおじいさんが亡くなるまで仮埋葬しておきまして、そうして親戚や隣り組の人を呼んで葬式するのは二回にしたいというわけです。いかがでしょうか。先生方の御支援があれば断行したいと思えますが。

那須 僕はこう思います。世間体をかばって派手にやりたい葬式であれば二回でもいいと思います。ほんとうの心からの葬式するのだったら四回やってもいいと思う。近所の人に寄ってもらって、五升も六升も振舞い酒出すというところになったら葬式四回もやったら数万の金がいるわけです。だから僕は二回にするということは、そのやり方に

もいろいろ問題があるでしょうが、反対ですね。たとえ粗末でもいい、ほんとうの心の現れの葬式を、世間からはたかれるかもしれないかもしれませんが、その家の奥に合った葬式やったらいいと思う。

小西 葬式の形ですけど、私のところの部落は五十戸ほどの家がありますが、葬式出しますときには五十戸ほどの家が全部、お米を一升ずつ持ってきています。野菜も取れたものを持ってきていきます。香典も百姓のことですから値かもっていきます。そうしますと、もってきてもらったものでお葬式の費用から何らか出して、お互いの助け合いみたいな格好になっておりますので、勘合に葬式というものは、一度にしても四回に分けてしても苦勞のないような形になっております。

松丸 私は自分自身のことを申し上げてみたい。それは昨年の夏、次男が琵琶湖へいって泳いでいる間に溺れて死んでしまったのです。葬式を出したのですが、そのときに香典をたくさんもらいました。そうすると私のところに年寄りがいまして、香典をもらったから香典返しをしるというわけです。私はもらったものはお礼するのはきらいな性格で、一日延ばしに延ばして時期を失ってしまいました。あまりばあさんが言うので抵抗してる意味で延ばしたのですが、一体香典をくれるという習慣はどういうことが原因で

起きたのだろうかと考えてみたのです。どう考えてもあれは相互扶助ですな。あそここの家に不幸があつて葬式を出したり物いりだから助けてあげようという意味で、相互扶助だろうと思うのです。相互扶助ということならば助けていただいたのだから、ありがたういただくのがほんとうだ。

お返しするのはかえって失礼なことではないかという気になったのです。でやめてしまいました。実は私がテレビを買ったというのはそれなのです。香典に少しばかり金を足してテレビを買いました。子供の死んだ記念品として買ったわけです。それでおばあさんに、「あなたは考えてみると専主にも死なれてるし、一人娘の私の家内にも死なれ、孫にも死なれて気の毒な人だ。私は親孝行したこともないし、これは孫の記念品だから孫を思ふでやってくれ、あなたの余生を楽しんでください、こう言ったのです。そうしたらおばあちゃん、初めは文句を言っていました、テレビがうれしかったのでしょう。このころ決して文句を言わなくなりました。私は現象をつかまえて、こうしたらどうだろうかあ、だるうかというのでは、なかなか勇氣が出てこないと思うのです。一つの問題の原因まで溯って、そこから新しいことをやるという勇氣が出てくるのではない

だらうかという気がします。いまの小林さんの場合のことでも、いいとか悪いとかいうことは、人に聞くものでなく

て、自分でおきめになるものではないだろうか。

達磨 これはいいことだと思うこともみんなの力を借りて、なるべく世間の風を少くしてからやろう、人にたよってだれかやったらやろうという感じがあまりほしくないでしようか。

松丸 たしかにするさは認める。だけれども金の使い方を考えてみると、いま喜多さんたちがおっしゃったように、もつとうまいものを食ったらいんだな、うまいものを食べたいというのは人間の本能だと思う。本能を抑えてはかのことをやるというのはさだけではできないと思う。自分自身の中の弱さ、そういうものがあるはしませんが。

那須 葬式の語が出ましたが、田舎の場合結婚式がまたものすごく派手です。前日から寄ってきて飲みや歌えで、ガラス二、三枚割って数がふえてめでたいといって、一掃抜いてしまふという具合です。おれのところが前によばれているからよび返さなければならぬというのは世間体だと思えます。もちろんそれを改革しようとは思いません。さもあるし、みんながやっているからしょうがないというあきらめがあると思うのです。ずるいとか弱いとかただけでなく、あきらめているのではないかと思うのです。

司会 世間体ということば、非常に幅がひろいと思うのですが、お金の使い方以外のことではいかがでしょう。

小林 世間体ということばとっても考えている人の顔をつぶしたために親戚関係がまずくなつてしまった経験をお話します。私の主人の妹が嫁にいった先の姑さんが世間体みえをはりた人なのです。その人の身内の娘さんがお嫁にいくので帯を貸してくれと私の家に来ました。終戦直後のものがなかった頃のことです。私は、ほかのものは何でも貸してあげるけれども、これは形身の帯で、ちょっと貸してあげたくないと正直にことわりました。そうしたらどこかに貸していて今うちになから——ということにして、うそをついて今うちにもらいたかった、そうあとでいわれました。今でもうまくななくなっています。向うの面子をこわしてしまったものですから。

那須 男女交際なんか厳しいですね。たとえば恋愛するにしても隠れてやらなければやれないような寡黙な意気です。昔の人は盆踊りのときなどに奥力行便で抑えつけてしまふというふうだったので、今の若い者が二人で歩いていると、手の速いやつだと見られるわけです。若い者同士が青年団の仲間や生活改善の問題で仲間を作っているのを親たちからはこんなふうに見られて、みんな隠れてしなければならぬようにできていくわけです。そういうふうにも男

女交際の場合でも隠けられた中で青年たちがくらしている。だから農村はいやだということでも外に出てしまふ。

松丸 日本のお嬢様関係を書いた現わす言葉に「口でけなして心ではめて」ということわざがありますが、やっぱりわれわれは行動の上でそれと同じようなことをやっていますね。たとえばかわいくてかわいくてしょうがない子供を人に紹介するときに、褒めたらよきそのものを、「どうもまだっ子で」というようなことをいいますね。

千葉 御馳走でも、まずいですが食べてくださいと、自分の方でけなしているのが常識家だと思っている。

大沢 私の方に変った坊さんがいまして、上げる場合に「これはお粗末なものです」といって怒るのです。「お粗末なものだったらいらぬ。結構なものじゃが、といったらもうが……」そういうわかれでも「おしょうさん、これは結構なものですから」とはいわれないのです。

松丸 そういうふうにならわかれの骨の髄までしみ込んでいらないですか。

喜多 お店から買ったものでも「粗品」と書いてあるから、農村だけでなく日本全体ですね。

小林 農村ではほんとうのことはいわれない、うそが多いということとは痛切に感じます。私は度々そういう経験があります。子供のことで、パレーの試合があり、朝の七

時から夕方の七時まで、パレーを続けているので子供が疲れ過ぎはしないかと心配しまして、父兄会るとき母親同士で話したら、みんなそうなのです。ほんとうに困る、来年は高等学校なのに、もう少し早く帰してもらわなければ勉強がでないし、何とかいまいましようということでした。

それで先生に「どうですか」と聞かれて、私は「先生、過ぎやしませんか」と正直に申し上げました。ところが二、三日してうちの子供が体操の先生につかまって「小林、四本の体操の点を五点にしてやろうと思って一生懸命やっているのに、小林の母親は過ぎると言ったそうだが……」といわれた。もう一人の母親は、「自転車の上から落ちてけがをしたけれども、けがするほど一生懸命にやっていたら、どうもありがとう」と言ったということです。それがほんとうに困ると話したお母さんなので、私はびっくりして、こういうふうな先生の前でもうそを言わなければならぬのだらうかと思つて、とても田舎にいてから臆病になりました。真実を語り合うというのに欠けているのではないかと思います。

松丸 うっかりほんとうのこと、と、問題が起きる場合が多いのではないですか。

堀江 私は次男を二年保育にやったのです。ところが保育所で二年保育は私の子供だけで、ほかの子供は一年保育

なので、保育所の父兄としては私は先輩のわけです。ところが世話役の人が、去年はこういうことがあって、先生に記念品を上げたというのです。私は去年の会のことを知っていますから、話が出たけれども、保育所というのは金持の子供を預かる場所でなしに、貧しい、両親が働いていて見てやれない子供が来るところであつて、もし先生にお礼することが例になつたら、貧しい親たちが困るし、ちゃんと保育料納めていて先生も月給をもらっているのだから、先生にお礼はいらないといつてしなかつたということ、事実の通り話したのです。そうしたらその世話役が「顔焼いた」というのです。

小林 苦しくても苦しいといわれない娘さんがいい。姑のことなども語らないのがいい娘さんの標本ですね。経済面なんか、困っても困らない顔してるのがえらい、婦人会の役員なんかしている人でも、ほんとうのことをいわない。

松丸 農村の人の話というのは当りさわりのないことばかりいっています。農村の人のあいさつを聞いてみると、まずお天気のあいさつから始まる。「今日はいいお天気です」と、同じ天気の下にいて、特別そんなあいさつをしなくてもいいだらうと思うのですが、あれはお天気のあいさつというものが当りさわりがないからではないです

か。

世間体はかくれみの

司会 昨日ちょっと子供のしつけの問題が出て、そのまま流れてしまったのですが、世間体との関連でここであれみてはいかがでしょうか。男の子と女の子と育て方がちがうということもでていましたが、いかがですか。

山田 私は男三人、女一人ですが、区別なくやっています。

小村 区別しないところにでていらっしやる方はおっしゃるかもしれませんが、やっぱり男の子を大事にするのではないのでしょうか。

司会 小村さんは学校の先生ですね。父親の態度などを通してそうお考えになりますか。

小村 やっぱ男の子を大事にしますし、長男を特に大切にしますね。「先生この子は女の子ですから、PTAも失礼させていただきます」といったり「これは長男で大切でございますから、今まで失礼しましたけれども、再々出さしていただきます」と、そこまでおっしゃる方もあるくらいです。

小林 私は女二人、男の子二人おりますが、家にいますのが高校一年の女の子と、中学三年の男の子です。私も子供には理解があるというような優越感で育ててきたわけ

ですが、このごろになって女の子が高校にいき始めてから、「お母さんはすぐに私に何でも用をいいつける、勉強で少ないから少しは気をつけて」というのです。私の言葉で少し反省しているのですが、そういわれてみると男の子を大事にするところがあるのですね。それは反省しなければいけないと思っています。

松丸 その問題と世間体とはどうなりますか。

小林 これは家につながっている問題だと思います。跡取りだから男の子を大事にするというようなことがありませんかと思えます。

増田 親が男の子、特に長男を大事にするのは親のエゴイズムだと思います。年取ったら長男に見てもらわなければならぬという觀念が長男だけを大事にするということになっているのではないかと思います。

事多 農村は封建的ですね。仕事の性質からいって、固定した土地で生活してゐるからでしょうが、漁村というのは海で、公有物からわれ先に収入を得ようとしてゐるから、男の子も女の子もない、一家協力して働かなければならない。お互いが忙がしいから、男の子にも御飯の仕度させたり、男女の差別はないですね。

那須 僕はそのエゴイズムということ、自分でうまいことをしようというのが、「世間体や」といえば大義名分が立

か。

つというずるさがあると思うのです。それと正面から取っ組みなり、その壁を下からあけるなり、そんなことを考えないで、「世間体やしょうがない」と単純にものを割り切ってしまうのが農村では多いと思います。喜多さんの話のように漁村はそういうことがない。農村だったら、今日僕がここに来ても妻が大きくなっています。それを刈ったら金になります。漁村の場合は今日いかなかったらだれかその魚を取ってしまうかもしれない。そういう点で、農村が大へん古いというのも、今日遊んでいたらからって妻は大きくなっている、米も取れる。天候が変ってペンションになっても、「わしだけやない、みんながそうだ」という。そこに古いあきらめが生まれてくるものがあるって、世間体というかくれみのにじきに流れたがのだと思います。

どう対処するか

松丸 実はエゴイズムを合理化するために世間体という言葉を非常に使っているということですね。

ここで一つ問題は、やっぱり新しい人間関係を作っていく上に世間体ということは非常に大きな邪魔になっているのだから、やっぱり世間体の問題にわれわれがどう対処していくかということではないかと思うのです。なにかこういうことやってうまくいったとかいう御経験はないです

岡村 また葬式の問題になりますが、主人の父が亡くなったときのことです。私の村ではお香典返しに四十九日と申しましてお餅をついて配るのですが主人はどうもそういうことをしたくないと申します。それで私の家にたくさん小鳥を飼っておりまして、自分の家に置くよりもおじいさんの香典返しとして学校に寄付したらどうだろうかとか家族と相談して、小学校へ寄付しました。そのあと岡村さんたちは引揚者だからああいことが出来るけれども、自分たち地元にいるものは、「よかことばってん、なかなかできん」といわれました。

大沢 世間との交際で無駄使いが多いのは、私の家も同じで、生活改善とかなんとか呼ばれておりましても現実それが実行されない。香典をもらうと香典返しをする、病氣してお見舞をもらったら快気祝をするとか、無駄とは知りながら、やはり世間体に向けてしまつて繰返してあります。先生の言われたように、自分で満足して香典をテレビにかえる、というようなことをしましてもその結果近隣同士でおもしろくないというようなことが生まれた場合には自分満足しても結果としてはあんまりよくないのではないかと考えるのです。そういうことを実行する場合は近隣同士で話し合つて、了解の上で実行できた方がいいのです

が、いきなり抜き打ち的に、人がどういううわさをしても構わぬ、自分が思った通りやるのだ、そういう方式で進むのはどうしてもまずいという感じだと思ふのです。

那須 一人で矢面に立っていてみんながばらばらになつてやっているから弱く思ふのです。もう少し大沢さんの場合でも友だちがあったり仲間があったりしたら、おやじさんの問題でも家の中の問題でも解決の方法が見出せるのではないかと。仲間を作るために話し合いということになつてくると思ふのです。近隣をよくするには近所同士で、隣の家に蔵が建てば腹が立ち、焼けたときにはスツという気持をなくするために、積極的にそういう仲間作りをしていかなければ自分一人が力んでいたからとて負けてしまふと思ふのです。

山室 この問題は個人的に考えてもちつとも解決すると思われません。近所同士のつきあいからみましても表面的なことが多くて、ほんとうに腹の底から話し合える人がないわけです。第一番の解決として腹の底を測って話し合いのできる人を作ることが先決問題ではないでしょうか。

松丸 やっぱり仲間を作ることが非常に重要だといふお話ですが、それも一つだと思ふのです。けれども仲間を作るといふのはこのごろ流行語になつていて、なにかそれをいうとスバツと解決したような気になるのだな。な

わかつてもらえてその親の方たちとほんとうに心を測つてうちとけた話もできるようにあります。そういう手近かなところから、小さいことですがぼつぼつやっています。

松丸 問題は、たとえば世間体を破るという目標を設けての仲間作りだと思ふのです。ただ仲よくするという程度ならできると思ふのですが、それを一歩越して、目的が一つはつきりしてくるとこのところからむずかしくなる。

小西 先生が田舎へ参られましたときに御飯がたくさん過ぎて困るというお話、私もいろいろの先生に来ていただいて婦人会から御飯差し上げたとき皆さん残されますのでそういうことを感じました。田舎の方の婦人会はおもてなしを十分にするつもりで心からさせていたでいておられますので、そういうお話で先生の方から座談的にでも、ちょっとおもしろ半分のようにでも話して聞かしていただきますと、ああそうだったのかということ、その次からびたこととまっています。そういうところは純情です。

松丸 じょうだん言っちゃいけません。そんなことでびたつととまるのですか。(笑) 私はしゃべるたびにそのことをギャンギャン言っているのです。そうしてから泊りにいきます。するとその御夫婦が「昼間いわれたことですが、今晚だけは特別で、この次からいたしますから」とおっしゃるのです。

かなかそれができないのですよ。

山室 婦人会とか生活改善グループとか青年団とか、そういう方面で固執してやっています。

松丸 私は方々農村を歩くでしょう、農家に泊めてもらうわけです。ところが最近はお泊めてもらわれないのです。かなわなれないのです。それはなぜかという御飯です、御馳走になるときに「お茶わんにてんこ盛りなんですよ」。

堀江 それがエチケツトなのです。私のところでは小さいので出すと、「あそこ食べられん」といいます。

松丸 それが一ぱいでは決して許してくれない。一ぱい飯はいけないとか、そういうことを皆さんどこでもいう。あれを毎日やられたら体をこわすから泊めてもらわれないのです。

若い人ですらそうです。だから婦人会とか青年団の仲間というのは非常に表面的だと思ふのです。もつと何か掘り下げたものが必要ではないかと思ふのです。

山室 私の場合は一番身近なことやらやっています。いろいろ部落の人から非難されたりしますが、そういう声をあまり気にしないで、近所の子供たちがよく家へ寄ってきますので、その子供たちの服の破れたのをついであげたり、ボタンのとれたのをつけてあげたり、洋服も縫ってあげたりします。そういうことをしているうちに私の気持も

山室 それは農村の人たちは粗食が多くて栄養がとれないために、たくさん食べなければいけないでしょう。それがやっぱりそういうふうになつて習慣づけられて……。

松丸 そういうことよりも私が申し上げたいことは、一ぱい食べてげんなりしているでしょう、「精進です」といって断わるでしょう、「いやもう一ぱいぐらい入りますよ」といって、人の胃袋を勝手に推察する。このくらい人権を無視した話はないと思ふのです。

千葉 それは先生は重労働なさったことないからですが、農家では重労働して胃袋を大きくしますから、よそへいくと遠慮して食べません。遠慮して食べないから皆さんもそうだろうと思つて、勝手に想像しているのです。

松丸 勝手に想像するということが相手の人権をすっかり無視しているということなのです。勝手に想像するということに世間体などというものがからんでいるわけですよ。

大沢 先ほど堀江さんが、たくさん御飯を積むのをエチケツトだとかいわれましたが、昔の農家というのは食べるのにも苦しい、水吞百姓という言葉がありますが、食べるのにも事欠いたものがたくさんあったと思います。そんなことからお客さんに対してたくさん上げるのが最大のもてなしだというふうになつてつけられたのではないかと思ひま

す。

松丸 はしなくも皆さん方の弱点が暴露したと思うのです。世間体がいいとか悪いとかいって、そのときは正論をはいていらしたのが、自分のことになったらエチケッとか昔からの習慣とか、一生懸命合理解けようとしている。進藤 さつき皆さんのおっしゃったうそが多いということ、それがもう一ぱい食べられる人でも「もうたくさんです」というのです。そういう場合「ああそうですか」とやめる人が私のお姉さんです。私も初め来たときは遺囑するのが美点だと思って、「もういいです」といったら素直に受けてくれるので、毎日遺囑してるとおなかがすくものです。今では食べたいだけ食べます。お密さんが来て「いいです」といったら「ああそうですか」と一ぺんにやめます。自分はいそを言わないけれどもほかの人はうそを言っているのだからというのではなく、ほかの人もほんとうのことを言うと考えている人にはほんとうのことを言うようになりなす。人がいろいろ自分の苦しいことをいってくると、おあさんはそれは違うと思うと、必ず「それは違う」と、その人の前で言います。そのときは、いやだ、もうこんな人に話さないようにしようと思つて帰つていくけれども、長くつきあっていくうちに、この人なら相談もできるし、ほんとうに自分のことを素直に受けてくれる人

司会 では仲間作りの方に入ります。さきほどから仲間作りの問題がだいたい出ていたようですが、皆さんがこういういい仲間をどういうふうにして作った。そしてその結果人間関係がこんなに明るくなったというふうな体験談をお話しいただきたいと思ひます。またやってみなければ失敗した。それはこういうところに原因があったのだというふうな話でも結構です。

岡村 私はとても困つた問題がありました。

実は私の村は五千人ぐらゐの小さな村で、——今は町になっていますが——封建性の強いところ。村長選挙に家柄の候補者が立候補されたのに対立して、二十代の青年が立候補されました。ところがみんなの予想を裏切つて、青年村長が出来上つたわけ。これは全く私たちの村にとつては青天の霹靂でした。そこで村会議員も全部解散し、新たにできた村会議員が今度は反村長派と村長派の二つに分れてことごとく対立したわけ。そこでその対立があんまりひどいものですから、青年村長は信を村民に開くために一応辞職しましたが、その村長に對立して村で信望の厚い、この人ならばという方が立ちましたが、それにもかからず青年村長が再度當選されました。そうすると対立に家族まで巻きこまれて、家族同士が道で行き会つても、あの人は何々派だ、この人は何々派だからというよう

だと思ふようになります。いろいろほかの人のことはうそが多いとかいいますが、自分もそういう偽善とかエチケットにかくれたうそをいっていると思ひます。

松丸 時間がなくなつたのでこの辺でまとめようと思ひます。世間体の問題というのがいま非常に新しい人間関係を作ることの障礙になつていっていること、これは改めていうまでもないことです。ただそれを知っている人が実はいざとなるとそれをかくれみのにして、自分の弱点を補うことに使つていっていることが大抵出てきたと思ひます。やっぱりそういう問題をなくするにはこれは一人ではなかなかむずかしいので、仲間を作つてやらなければいけないということなのですが、仲間を作るといふ意味が、いま進藤さんが言われたように何でもほんとうのことが言ひ合える仲間作りでなければだめだ。それはもつとはつきりいへばお互いに相手の人格を尊重し合える仲間作りということ、それであれば工合が悪いのではなからうか、こういうことになつてきたのではないかと思ひます。

その程度で一つとりまとめにして、その次の仲間作りの問題にも関連してくると思ふので、先に進むことにいたします。

仲間づくり

なこになつてしまいました。主人もそのころ村会議員をしていましたが、岡村は反村長派だと烙印を押されてしまひ、おもしろくないことも再三あったようです。一昨年八カ町村が一緒になつて市になります際に、主人がこれではいけないから、自分たちはなるだけ反村長派の人たちに接触するようになしうではないかと申しましたので、いい機会だと思ひ、私も近所の方や青年村長の奥さんと話し合つてグループを作ることになりました。初め十五、六人の人が、私の家に集まりました。ところが次の集まりの日に五、六人しかおいでになりません。翌日どういふわけでごなかつたのかと聞いてみますと「村長の奥さんがいていなければ、そんなら来られぬ」とかういふのです。私はそのときこれは村の人たちみんなが利口になつて仲よく一緒の方向に進もうという集りなのですから、村長の奥さんがおいでになつたけれども、これに加わつてくれないといひました。が、いや非難が起きてそれではできないといひわれ、ほんとうに困りました。

小村 そこでそのグループは今どうなつておりますか。

岡村 今では御主人までうちの女房も入れてくださいます。おいでになるようになります。だんだん會員もふえつつあります。今はそこそこサークルを作るような氣配が芽生えておきます。

松丸 これは那須さんとか古川さんとかいう、いろいろな青年、婦人のグループを作るという仕事を担当していらっしゃる方に特に私は聞いてみたいのだけれども、なにか今の仲間作りというものが一つの流行で上から目的をはっきり出さないにしても何か内蔵しておいて、作画的に作るという傾向が非常に強い、そんなような気がするのですが、どうでしょうか。

那須 僕の場合はそう思いません。四日クラブと呼ばれているグループがあるのですが、五人の連中が離散会をやっていたのです。その中の一人が結婚したいというわけですから、その青年はおやじのきめた娘さんがいて、きめ酒が済んでから結婚をする——この娘はよう気張るからおまえにちやうどいいというのです。ところが本人がその娘さんに会ったら、話しかけても一つも答えてくれないので失望して、こんな嫁かなわんといったわけです。そうしたら「ばかこけ、親のきめた嫁なせもらわん」といわれ、それを四人の仲間打ち明けたわけです。とにかくその青年のおやじをくどくどということになりました。去年の八月のことでした。そこで僕たちはおやじを陥落させるためにおやじのところへ渡状攻撃をやりました。「そっちの娘もいいけど、今度のこっちの娘も話せるぞ、どうやら」といっていったところが、「そんなことは通じんことや、恋愛結

婚するのは、別れるもとや。恋愛結婚でうまいことできるのありやせんやないか」というわけですね。それでおやじが風呂に入っているときに仲間たちが風呂にいて「きめようやないか、欲しい嫁もろうてやれ。おじさんがもうらんやないやないか」ともちかけてみたり、またヒエコきや薬酒のたねまきにいたりして、おやじに話したわけです。はじめは「みんな手がけてもらってすまん。そやけど陥落せんよ」なんていっていたのですが、しまいに秋になったらおやじもかぶと脱いで、「そんなこといつまでもいっているのおかしい、本人の好きなのもろてやった方がよさそやうや」ということになりました。ところが今度はおまえら好きなやつもらってやるかわりに年内中にもらえというわけですね。先方も都合があるし、そうはいかない。結婚だけを年内中にしようではないか、ということになってきたときに、また結婚の問題が起ってきた。おやじさんは当世の相場は七万四くらい、生活改善で五万四くらいにしたいにいいけれどということになった。ここに問題があるわけです。当人は結婚は売買結婚ではないか。売買結婚やるのかなわんといつて、とことんまでおやじに反対するのです。最後には僕たちにまかされたのですが、さっさと二人をエンディング・リング買いにやらして、結婚をやめました。ところが結婚式がまた問題なのです。今までだったら四日かかる

のです。

そういうふうにして仕事を通じて相手の家に押しかけた、そういう生活を通じて仲間作りでないとだめだということを感じてきたわけです。

松丸 今の話聞いていて、青年団の場合には婦人の組織の場合よりも青年の組織というものに固まっています、いろいろ研究集会などもやられて、そういう訓練を相当積んでいると思うのです。だから青年団と婦人会の場合と同一にならないと思う。もう一つ青年団の場合には抵抗している対象が側台にはっきりしているわけですね。ところが御婦人の場合ははっきりしていない、そういう違いがあると思うのです。その点で非常にむずかしいのではないだろうかという気がします。だからある場合には非常に先走ってしまふ。ある場合には非常に自分の身の回りだけの問題になつてしまふ。そういう二つの面がありはしませんか。

喜多 先生はいま仲間作りが大へんだとおっしゃいましたが、私の村は百三十戸か四十戸しかありません。その中で村の若い人たちが公民館を作ろうといいました。ところが公民館を作ろうとする——お金を出すのに困るというので不満の人もありましたが、結局押し切って公民館を作ったのです。作ってみれば結婚式もできるし、利用価値が多いわけですね。こんなふうで私たちの村では仲間作りを

下から盛り上げるより、結果を大きく見せて引っ張っていくより仕方ないのではないかと思います。

小林 私は婦人会にあき足らないのですが、いつの間にかだれいこうとなしに、幾人かでグループを作ろう、移動図書館愛読者の集いとかが、そんなのを作ろうではないかという話を持ち上ってグループができました。まだ満足したばかりで、目的は本を鑑賞するというのが主眼ですが、それだけでなく、ほんとうの自分たちの不平を言い合ふ場所にも使っています。まだ仲間が八人しかいませんが、少いからいいのではないかと思います。ほんとうに気の合った人だけとか、趣味の上からの結びつきならばそういうグループになるのではないのでしょうか。行く行くは雪の日などにみんなの子供を学校へ送っていくとかいったことをし合ふ、そんなところから始めてみたいと思っています。

司会 婦人会があき足らないとおっしゃいましたが、どういう点であき足らないとおっしゃっているのですか。

小林 財産というものが大きくバックしていて、そういう人たちが勝手に動かしているようで、その人たちの意見が大きく反映している傾向があります。

岡村 私は三年前まで婦人会の幹部の一員でしたが、どうも幹部に自分が入っているときは一般の人の声が聞けないのです。幹部だけの勉強であって、毎日仕事に追われ

ている一般の人の勉強にならないと思つたものですから、一応いまやめています。もう少し一般の人と話し合つてからやらしていただくと思つております。

近藤 私も今の婦人会はあまり派手になり過ぎて、地についでいないような気がします。私の仲間作りは主人が亡くなりましとき、税金のことで矛盾を感じたのが動機です。といひますのは、当時の税法では主人が亡くなつて私が世帯主になりますと、私の扶養控除がなくなつて、税金が主人が生きていたときより上るという仕組になつておりました。私は税務署にいつて話をしましたところ、初めのうちはまけられないといつてましたが、まけるまけぬでなくて、この問題のはんどうのものになるものが間違つてゐるのではないかと思つたのでよくお話ししたら、なるほどその通りだといふことになりました。それが二十三年のことなのですが、二十六年から法律が變りまして、主人が亡くなつた未亡人は扶養家族のように扱うということになりました。私は、自分が未亡人になつてみて、周囲の未亡人をながめましてときは、援護してもらうどころでなく、虐待の形になつてゐることに気がついたので、それが今の仲間作りの初めになつたわけです。

山田 皆さんともございばですが、私たちはそれ以前の状態です。私たちの村はとてへんびなところでもあり

いきたいという気持です。子供の教育など今まであまりかえりみられていなかったのですが、多数の人が子供の教育といふことを真剣に考へてくるようになりました。

当面の目標

松丸 私は仲間作りといふことの当面の目標は、女の方々が自分で主張することを覚えることだと思つたのです。しかし主張するといふことは、自分を主張するのですが、同時に相手の主張も認めるのでなければ利己的なエゴイズムになるわけです。もちろん非常に大きな目標からいへば、婦人の力で世の中をよくしていくといふことですが、そういう目的を掲げて集まつてみてもなかなか思ふことも発表できない、また自分の思つてゐることを精一ぱいに発言しますと、相手のことを考える余裕がなく、自分のことばかり主張するといふ訓練のなさがあるわけです。それではないのであつて、自己主張するといふことは、相手の自己主張も認めて、よく話し合うことだと思ひます。そういう訓練の場を作る必要がある。

その前にもう一つあるのではないか。それは自己主張するには自分にそれだけの知識なり蓄積なりもつてないといけないわけです。いま必要なことは、特に農村の場合、自分が主張できるだけの蓄積をもつ、そういう仲間作り、こ

ますので、親たちに仕事を言いつけられて、下向いて働いてゐるばかりで、木曜むことも、新聞読むことも知らないのです。自分たちも心の中ではもやもや思つてゐるのです。それが何であるかわからないといふような態度なのです。なんとかこの自分の苦勞を打ち明ける場所を作りたと思つてゐたのですが、指導者もないしなかなか機会がありませんでした。あるとき普及員の人が話に来てくれて、よその部落ではこういう会があるが、ここの部落はどうですかといわれて、グループを作りました。お嬢さんの立場にある人だけで、夫側も協力してくれました。会といつても何も目に見えた成果はないのですが、でも自分の心の悩みなり、もやもやしたものをはき出すだけでもいいのではないかと思つて現在やつてゐるわけです。そこから少しづつ向上していきたくと思つております。

松丸 岡村さんの仲間作りといふのは相当はつきりした目的が一応ありになつたと思つたのですが、山田さんの場合にはもやもやしたものをもみなではき出せばいいといふことです。どちらか仲間作りだと思つたのですが、一体仲間作りといふそれは団体ができた仲間作りであるか、その辺どういふ気持をもつて仲間作りをお考へになるかといふことを伺ひたいと思ひます。

山田 少しでも自分の気持を向上させて何かしら求めて

れが今一番必要な段階ではないか、そこから始めてだんだんに育てていくといふのがいま一番必要な仲間作りではないかといふことを感じるわけです。それにはいろんな形があるでしょう。婦人会もいいでしょうし、農協婦人部でもいいでしょう。PTAといふものもありましょうし、サークルがあるでしょうし、古いものでいへば講といふものがあるわけです。このごろサークルなんて言葉がはやり出して、今までの講といふものがあるのにサークルを作れなどといふ考へ方が普及してきたようですが、この辺は少し考へなければいけない問題ではないかと思ひます。どこでもいま言つたような仲間作りの場にはなり得るのではないからうかといふ気がするのです。

山田 それは田舎ではいろいろな会合に出て女が養育すると、あの女は行き過ぎてゐるとかいつて、ちょっと八分扱いぐらいにされかねません。そういう因習を取り除くことを先にする必要があると思ひます。

松丸 だから初めは女の方だけの集まりといふことが必要になつてくるわけでしょうね。それもあんまり大きなものではだめです。大きな仲間を作るときとほんとうのこととをいひわなくなる。みんなおていさいのいいことばかりいって、サラッと逃げる。青年団の会合なんか大きくても十人ぐらいのグループを作つていこうといふことになつて

います。その点、大目的の方が先に来ているという欠陥があるような気がします。

那須 農村の女の方は僕たちを頼り過ぎると思います。とにかく指導者だから、あるいはたとえ松丸先生のような權威だからというので、言われたことをみなのみ込んでしまうという婦人が多過ぎるということを感じます。

松丸 つまり習性がいいのだね。

む す び

司会 最後にこの二日間にわたっての討議のむすびとして先生から一言お願いします。

松丸 非常に上っ面をなでただけで、大きな問題に時間が短時間で不十分だったと思います。これは来年からもう少し時間をとっていただくように主催者の方に考えていただきたい点だと思いますが、しかし何かなごやかに話し合えた。

結論として出てきたところは、やっぱり仲間を作ってみるなどでよく話し合わなければいけないということになったと思うのです。共通の広場を作らなければいけないという言葉が出ましたが、そういうことは今申し上げた結論だと思えます。ただここで感じたことは、そういう話し合いをしななければいけないという結論が出たのに、やっぱり皆さ

げて話し合うということこれからやっていただきたい。そういうことを非常に感じたわけです。

それからあんまり大言壮語しないで、まずできることからやっていくということ。非常に身近かなところからの問題で結構だ、話し合いをできるだけ具体的にやっていたということです。日本の農村というのはなんといっても非常に遅れていると思うのです。遅れておりますが、遅れているについては、日本の封建制度というものは大体七百年続いたのですし、七百年の歴史をもっているわけですからこれを改めさせるのに一朝一夕で改まるはずはないのです。どうも指導的立場に立つ人というのは善意で急ぐのですよ。なにか善意の押しつけをやる傾向が非常にありはしないか、気長に、そのかわり不断の努力をしていくという、そういう形で話し合いを一つやっていただきたいということを感じました。

司会 それでは討議の方はこれで打ち切りまして、傍聴の方から質問をお受けします。

質 疑 応 答

質問 先ほど那須さんから、女の方が指導者に頼り過ぎているというお話がありました。青年団と婦人会での人の関係というのはどういうふうになっているのでしょうか。

ん方の話し合いの仕方がまずいと思うのです。自分のもっている問題をみんなにわからせるように要約し、くだいて、総合する、そうして問題を投げかけるのでないと、納得がなかなかできないわけです。自分の特殊事情が非常に強調されてしまうと、ほかの人は話し合いに乗っていかないわけです。ここにお集まりのような方でさえも、話し合いがまだまずいということだから、日本人というのは一般に話し合いの習慣がほとんどなく、非常にまずいのです。いま皆さん方の腹口を言ったようですが、実は私も含めて日本人全体の問題としていっているのです。自分たちの話し合いのまずさというをよく噛み直していただいて、これから話し合いをやっていく場合に、どういうふうにしたらもっとよく話し合いができるかという、その方法をもっともって考えていただくということが必要ではないか。

それから話し合いということをするにしても相当弱り下げていくことになると思います。勇気がいることが多いと思いますが、勇気なしに話し合いをしたのでは実行力にならないのです。実行の伴わない話し合いというのは意味ないと思う。実行までも深めた話し合いということになると、話し合いする前にもほんとうのことを言うということについても非常に勇気がいると思うのです。その点まで掘り下

か。

那須 青年団の場合は指導者がなくてもやりますが、婦人会の場合は、生活改善普及の会でも、生活改善普及員が来ないと始まらない。また農業改良普及員が来たら百姓の話をしてもらうとか、權威に対する盲従、物知りに対しては黙って聞くという、そんな欠点があるように思う。自分たちでたまたまやるのでなしに話し合うということができる。しゃべるといふのはとりとめない相手を傷つけないようなことをしゃべること、話し合いというのは心の中のことを言い合う、そういうことが婦人会ではできていないのです。できていないから頼るということはあるが、頼り過ぎるから、そういう気持ちに追討ちかけられているように受け取れるのです。

質問 今年是新憲法になって十一年目ですが、一番遅れているといわれる農村にお住みになっている皆さん方の生活の中で、選挙権を得たということがどういうふうな影響を与えているか。皆さん方がそういうことをどういうふうに使っていらっしゃるかということをお聞きしたいと思います。

千葉 婦人が今までは出て行けなかった公けの場に出るようになってきたということが私は愛したと思います。近藤 PTAでは、今までは何か意見を言えませんでした。

慮がちでしたが、私が初めて小学校のPTAの副会長にお
 されました。それから選挙管理委員ができたとき、選挙権
 のある者の中からというので、初めて管理委員になりました
 た。これは形の上でといえるかもしれませんが、婦人に選
 挙権を与えられたことが影響していると思います。

堀江 婦人会とか、農協婦人部の役員をえらぶのに今ま
 では男の人があの人にきめようと有力者に押しつけていた
 が、それではいけないというので今度私達一人一人の意志
 によって支部長というものを選びました。

松丸 こういうことがいえるのではないですか。実質的
 に選挙権を与えられたから非常に変わったということは、そ
 れほど顕著にはないと思うのですが、最近は何といっても
 婦人の地位が高いとか低いとか、そういうことが問題にさ
 れるようになった。それはやっぱり選挙権を与えられたと
 いうことが一つの契機になっているわけで、そういうこと
 で狭っ苦しいながらも身動きができるようになってきて
 いるのではないのでしょうか。

第三部会 職場生活を中心として

出席者

栃木	白石	瑠子	(教員)
東京	小沢	磯子	(公務員)
神奈川	渡辺	ふみ子	(女中)
福岡	安久	美与子	(看護婦)
愛知	吉田	泰子	(栄養士)
三重	金沢	登美子	(工員)
大阪	大森	篤子	(教員)
奈良	樺	八重	(保母)
和歌山	島山	陽子	(公務員)
鳥取	佐々木	八重子	(公務員)
山口	植垣	淑美	(車掌)
高知	谷	展子	(公務員)
福岡	唐崎	夏枝	(公務員)
鳥取	大村	俊夫	(公務員)
岡山	氏家	榮三郎	(会社員)

アドヴァイザー

東京大学助教授	松島 静雄
婦人少年婦人課	神田 夏子
婦人少年婦人課	東出 恵美子

司会 今日皆さんの職場で、人間関係に關するどんな問題があるか、またはあったか、具体的に話し合つて頂きたいのですが、その前に今度の全国婦人會議に出席なさるについて、皆さんの職場でどんな反響があったか、それからまず話して頂きたいと思ひます。

小沢 私のところでは労働省の通知を頂きましたので、早速に組合婦人部の委員會を開きましたが、大変結構だから、みんなが常に悩んでいることを話しあつて、解決策を聞いて来てくれと支援して下さいました。

渡辺 私は女中をしています、ご主人も奥様も非常に理解がありまして、伸びられるだけ伸びていらつしやいと氣持よく出して下さいました。

安久 ただいま激励文が参りまして、感激しています、が、みんな私が出席することについて関心を持っておりま

す。

吉田 私は病院の營養士をしています。食事のことは一日も留守にできませんので、こちらへ参りますのに大変頭が痛かったのですが、職場の方からいろいろな激励を受けました。

大森 私は教員ですが学校長の許しが無かつたら来られないのに、自分はこういう會議だから当然出て行けるものだと思つていたのですが、そういう手続きもしないで一人

っかりやってくるようにしたことでした。この會議で明るい人間關係を作る基盤を得て歸りたいと思ひます。

谷 私は小学校の事務員ですが、職場の皆さんのあたたかい友情がありまして、この會議に出張という形で出られました。学校が汽車が通るすぐ前ですから、生徒もみんなが出て見送ってくれました。

唐崎 私のことが「給食のおばさん、全国婦人會議に行く」という見出しで、新聞に出ましたら、県内、県外の多くの給食婦の方々から、労働条件の悪さを皆さんに訴えて来て下さい。私たちのためにしっかりやって下さいという手紙をもらいましたが、私の働いている組合の中では、自分たちの代表で行くなんて生憎な、それなら幹部役員のところへ挨拶に来ないのかという抵抗を受けたのです。婦人會議の内容がみんなによく認識されていなかったので、その点で混同され、非常に悲しい氣持になりましたが、決して代表ではなく、個人の資格であることや、そのほか内容を詳しく話しますと、しっかりやっていらつしやい、あとの仕事は自分たちでやりますからと応援されました。

大村 実は僕は参加が決定したときに現場にいなかったからかもしれないが個人的に突如にどういう反響があったという事は感じなかった。みんなが個人的にしっかりやつて来いとか、特に最初の男性であるということで、い

て行く行くといつていたわけで、女の陥りがちな一人よがりになつてしまつて、出てくるのにもう初めから大失敗をしたと思つて反省しております。

畠山 私は臨時職員という身分なので休暇は一年に六日しか与えられていないので、特別の休暇の扱いにして出して頂きました。また労働組合からも非常に応援がありました。

氏家 私たちの上部団体である総同盟から、全国婦人會議所感文に各組織はできるだけ応募するようにという達しがありました。私の参加が決定したことは、新聞を讀んで知つておられた方もかなりありまして、折角の機会に十分職場の身近な問題をとり上げて討論をやつて来てほしいという激励を受けました。

佐々木 私は山の中の小さな保健所の受付をやつております。私が一人でその仕事をやつていて、抜けるとみんなに迷惑かかると思つて氣に病んだのですけれども、女の方がみないことだから行つていらつしやい、私たちがちゃんとしておいてあげるという力強い声援を頂き、また職員組合の方から出席する日は出張にして下さるなど、皆さんの応援でここに出来ました。

植垣 職業は自動車の車掌をやつております。職場ではべつになんかの反響もなかったのですが、組合の方からはし

るい關心を持っていたように聞いて来ました。

白石 私が受け持つております生徒が小さな手を拭けて「先生、ラジオ聞いているからね」という可愛い声援を送ってくれました。また校長先生からは「愛情をもつて全国の皆さんと打ちつけた愛聞氣の中で語り合つていらつしやい。」とあたたかい言葉を頂きました。

同僚間の諸問題

司会 會議出席については皆さんの職場では大体快く送られていらつしやうたことを伺つたわけですが、それでは日常の職場での人間關係に關するどんな問題が皆さんのところにおありになるかを話して下さい。暗いことでも明るいことでも結構です。所感文では同僚間のことだけをお書きになつた方や、同僚間のことにウエイトを置いた方が非常に多かつたので、初めに同僚間の問題についてお話し下さい。

植垣 私たちの職場ではまず第一に人間關係を損つてい

うものがお互いの足を引っ張っているのではないかと思います。

それから第二に勤務が午前と午後とに分れていますし、女子は深夜業ができませんので、生休をとった場合ダブル勤務などが出て、男子との摩擦が生じている。

第三に貸切車掌と定期車掌のいがみ合い、現在のところ貸切車掌がいないので差別待遇をするというところから、それは会社のやることだということを忘れて、ものを言わないとか、威張っているとかで反目し合って、話し合いの場が持てないということです。それは勤務時間が午前、午後また、時間外勤務と一定していないので集まることとできない。婦人部の集会ときは全員早退するので男子との摩擦が起る。

第五に男と女の対立、正しい権利を男性の非協力とか冷視、あいつ女のくせに生意気だということと対立的になる。結婚のことを考えると女性はやりたいことも言えないというのが現状です。

第六、仕事をしても常に感ずるのですが、乗客との摩擦、全然個人の人格が尊重されていない、こういうところに私たちは車掌という職業的な劣等感を抱いている。現金を取り扱う関係上、指導係——私たちは「あら探し」といっておりますけれども、まるで罪人の如くつきま

とわれるのです。そうして服装検査をされる職務上の不平、不満。指導係は指導係で、乗務員には乗務員で不平、不満がある。指導係は、あいつは挨拶さえしないといひ、乗務員は「人を泥棒扱いする」といふのが現状です。

白石 終戦後私たち女は発言の機会に恵まれて来たのですけれども、どうしても女という立場を自分自身が卑下をして、女だから黙っていた方が得だとか、女だから男の人がなんとかしてくれるまで黙っていた方がなにかなるという要領のよさで黙っていることなどが多かった。私は社会は男だけでなく、女も一員である以上、話し合わなければだめだと感じて、できるだけ話し合うという機会を持つようにしたのですが、まことに男の人はわがままなところがあり、私どもが発言するとだめだだめだといって押えてしまったり、またこちらが言い出すと要領よくいえということを押えてしまします。

小沢 私のところは今婦人職員の間は非常によくいっているのですが、ただ一つ問題なのは、定職員の枠外の臨時職員が多勢職場にいてことで、両者の間に、微妙な摩擦を起すことがあるので、非常に悩んでおります。たとえばボ—ナスを定職員が一・五とか一・七五頂きますけれども、臨時職員の方はそういうのがないのです。ほんとうのお涙金、餅代といひまして、五分の一、あるいは六分の一くら

いしがない。そういうとき今まで仲よくいっていたのに、いやな気持ちになることがあるのです。

安久 私は看護婦をしております。勤務先の病院には技術本位に教育を受けたものと、学問、教養を主として教育を受けたものと、その二つの違った教育を受けた看護婦が半々くらいおります。技術だけでも、学問だけでもなり立っていないのが看護婦なのに、それを承知でお互いのカラにとじこもり冷い態度をとっていたことがありました。

また同僚間のことでは、若い人たちと年輩の方との折り合いというものが問題になりますし、また看護婦として重労働に耐えていくについて、未婚者と既婚者の問題もあります。私たちは三交替制ですから、夜勤があります。家庭を持って子供があるひとには、とても負担になるのです。それで能率の低下をうまく切りぬけて未婚者と同様にやる方はいいのですけれども、どうしても能率の点からいって働きぶりが悪くなるような場合、やはり未婚者から攻撃されるということがあります。

嵐山 私は公務員ですが、先ほど小沢さんもおっしゃいましたが、やはり現在の職場において臨職というのが非常に大きな問題となっています。また特に最近婦人職員の締め出しの傾向が強くなりまして、今後女子職員は一切採用

しないという声明を出したところもあるそうです。こういうことから女子職員はいくらやっても重要視されないという考え方を女子職員の間に植へつけているのではないかと申すのです。そういうところから女であるという一つの劣等意識を醸成して、それが表に向って公式の立場で吐き出されればいいのですけれども、私的な感情でお互いに当り、お互いの足をひきずり合います。そういうことが非常に職場の関係を暗くしていると思います。

大森 私の場合、職場で一番悩みに思っているのはやはり男女の職員の差別をされることなのです。今度もそのことの問題を持ってここにやって来たわけですが、ほかの職場の方は小さな問題だと考えられると思うのですが、公務員ですから賞金の面では同じなのです。同じだから最初から同じ仕事をしたいと思つて教員になって、その気持でやって来たのですが、学校に入ると担任は女の先生は持たさない。男の先生に教育的な仕事をたくさんさせて、女教員はひまなものでからなにするばいいか、職員室の中でお茶を汲んだり、体育大会のあとのお料理をしてくれまして、明るくしているかというところという不満があるものです。それから、どうもうまくいかない。それを解決しようとして積極的になると、あの教員は生意気だということと、年末の人事移動の選に必ず載せられる。だから一生教員の仕事

をしたいと思っても、職場で差別されるし、生徒との人間的な結びつきができないから、おもしろくなくなっている加減でやめてしまおうかということになります。

佐々木 私の勤めておりますところは小さい保健所で、私はその臨時職員です。それぞれみんなにきまっていた仕事が生えられていて、お互い同士の摩擦ということはありません。ただ私個人の問題として私の気質から、あまりみんなと親しめないのです。そんなことから明るく、みんなと楽しめるようにするにはどうしたらいいかというような悩みを抱えています。

谷 先ほど大森さんも言われましたが、同僚問題になるかどうかと思いますが、こんなことがあるのです。男女同じ試験を受けて、同じような資格で入ったにも拘らず、初めから女の方には伸びないポストしか与えられない。おんなじことばかりやる雑用向きのポストが与えられるということが問題になっております。

藤崎 私は昨年の六月から学校給食婦として働いているのですが、その半年前まで新聞社に勤めていました。そうした前職による先入感があったのか、その頃は他の方からいささか敬遠の目で見られたように感じました。昼休みに新聞や本を読んだり、言葉づかいなどについて仲間から、私たちとレベルが進うとか、学問のある人はちがうという

ようにみられることがありました。

松島 先ほどから伺っておりますと、大体問題点が出て来たような気が致します。皆さんのお話で一番同僚の中でどういふことが問題になっているかといへば、男女の違いで、これがなかなかうまくいかない。また臨時職員、職員という身分の違い、それから異婚、未婚、さらにはこの職場、この職場という違いでなかなかしっくりいかない。こういうような問題の中で一番皆さんが重要な関心をもっていらっしゃると思うのは、やっぱり男女による職務上の問題です。それをどうにかしようと積極的に動く職場で敬遠の目で見られる、それがまた問題になる。つまり男女間の問題、女の人に責任というものと仕事を与えてくれない。いわゆる女性の保護という意味では、男の方も非常にわかりがいかもしれない。しかし女性の平等の要求については男が非常に封建的になる、それをさらに突っ込んでいこうとすると、圧力がかかってくる、こういう二つの問題が出て来ているように思う。この場合一番問題になるのは、男性の方々がこれをどう見るかという問題ですが、ここにいらっしゃる男性の方はいかがですか。

男性と女性

大村 私は県庁に勤めております。私たちのところでも

同様の問題があります。私たちはそのためにいろいろな行動をして、それに対する反響あるいは反響があったので、そのことについてお話ししたいと思います。

役所には非常に封建的な職制、身分的な職制があります。私たちは公務員である故に争議行為ができませんが、職員団体を作る権利は認められていますので、二千七百人ほどで組合を作っています。職員の中で一番圧迫を受けるのは婦人と若い者であるというので、青年婦人協議会を結成しました。私たちはいろいろ話し合ったのですが、最近非常に私用に使われることが多い。仕事をしても煙草を買って来い、牛乳を買って来いというような用事です。それから職場はみんなの職場だから、誰もが朝早く来て掃除をするものだと思っているのですが、女性や年少者が一時間早く来て一人で掃除したり、みんなが帰ったあと、五時過ぎてから三十分、四十分も茶碗洗いをすることを当然のように言われるわけです。これは正式な職務からいっておかしいことで、女性の地位を非常に低めるし、年少者が非常に痛められる公私の混同は非常に能率を低下します。雑用に追われて自分の仕事ができない。逆に責任を持たされ仕事がないから雑用に使われる。これでは婦人も若い者も地位が非常に低くなる。その上に恩給がつく者とかない者で差別がつくわけです。ところが個人的にこういうふ

うにしてほしいといへば職制の圧力を受けます。そこで青年婦人協議会を活用して、団結の力でやることにして、まず上の人には個別に話をしました。しかし一般の組合員の中で私用に使う人が多いので、あとは文書でやわらかく書いてお願いしました。ところが青年婦人協議会そのものに圧力が加わったのです。特に女子の職員に対してはその人を個人的に呼びつけて文句を言う、いやがらせをする。男に対しては主事になってから文句を言えと、身分的な差別をします。それで私が考えたのは、人間関係を明るくするためには、職場の民主化が大事だ。そのためには婦人だけでなく私たち全体でやらなければだめだと考えました。

氏家 私の職場でも男女の問題は従来とあまり変わらないような状態です。お互いにもっと立場を理解し合い、愛情と誠実を持った態度で接するのが近代的な人間関係の確立のために必要なことではないかと思いますが、男性側の認識に欠けている点が感ぜられます。言葉づかいが対等になされていないような面も一部に見受けられますし、雑用も私用も依然としてやらせておけるような傾向も見受けられます。

しかし婦人自身も男性に従属的な立場にあってよいというような考え方から抜け切っておられないのではないかとという面も見受けられ、陰ではぶつぶつ不平、不満をこぼして

おりますが、面と向って自分の正しいと思う意見でもよく吐き得ないといった傾向も見受けられます。

松島 今のお話だと職場の民主化が女だけの問題でなく、男を含めて職場そのものの民主化が必要だということになったようですが、この問題についてなにか御意見があるのではないですか。

植垣 今まで女性はまだ男子に対して忍耐というものだけが押しつけられて来たと思うのです。それだけでは婦人の向上はないと思います。われわれ婦人の労働条件が低下すれば、男性がいたずらに競争心をかり立てられるということになるのではないかと思うのですけれども。

松島 みなさんの職場ではお茶汲みの問題、責任を持った仕事で女性に与えられないという問題がやはりあると思います。

大村 それがほとんど大半だと思います。

鹿山 役所はほんこで仕事をしますが、下は係長から課長、部長、次長まで書類にはんこをつけて貰うのです。書類を書いたのが男の人であっても、そのたびに書類を持って回るのが女の人なのです。女の人が曲りなりにも自分の仕事を持って、おい、落さないけれどもこれちょっと持っていてくれんかとくるのです。その場合自分より下の者はあごで使って、自分より上の者に対してはおだ

はないかと思って圧迫を加える。そういうものを非常に恐れて、周到な調査項目を作るわけですが、それにすら答えてくれません。

小沢 東京会議で出た発言ですけれども、男子の方とはかく二重人格だ、というのは職場で積極的に仕事をしたり、あるいは組合の仕事に非常に熱心で、みんなのために発言もするし、積極的に行動するという女性を、公的の場においてたたえ、よく積極的にやる、なかなか君はえらいというけれども、そういう女性を結婚の対象には求めたくないという気分があるそうです。その方の発言では、職場の労組で働きたいと思っても、自分たちの将来の結婚の問題を考えると、思うように組合で働けない。積極的に人の先に立ってものをやることはできないという矛盾を感じるといふことです。

吉田 それについて私はいわゆる職場での女らしさや女性的感情というようなものを決して出さなくてもいいと思うのです。仕事は仕事でやっていく。そうして自分の生活では女らしさを出して十分女らしく生きることができると思っています。それを混同して仕事の場合にデレデレしたり服装を気にしたりおしやべりしたりすることを女らしいと仕事の面だと思ってやっていることを女自身が反省しなければならぬと思うのです。ですから男の方も仕事の場合に

てて使うのです。このようにして雑用係を半分引き受けておりますから、女の人は結局自分の仕事以外の仕事をやらされることになって、これだけをやるのがせい一ぱいで、それから発展していこうという努力ができなくなってしまう。そういう点女の職務の内容について考えなければならぬ、女の人自身も考えなければならぬと思います。

大村 私出る前に調べたのですが、職制の差別は特にひどいのです。臨時職員だけに掃除をさせるというところがあるのです。そして非常に男性の協力が無いということが私たちの場合ある。

地区大会では職場の場合は男性に理解してほしいということではなしに、理解さすのだという精神が出ました。私ももちろんそれに同意です、自分を解放するのは最後は自分の手しかない。その意味で広い目で性別などに惑わされずに見てほしいと思います。

松島 たとえば組合でいろいろ問題を出しておられる場合に、女性の立場などを正確に取り上げておられますか。

大村 青婦協としては取り上げるのですが、その場合に一番問題となるのは、先ほど氏家さんも言われたように、公式の席上で話してくれないことです。アンケートでちょっと私用の回数を調べようとしても、主事とか技師とか上の人が見た場合に、青婦協は第二組合的のものをやるので

女らしさを求めることはいけないと思うのです。

渡辺 私たちの県の地方大会ではお茶汲みの問題が一番大きな問題でした。そのときあるお勤めの方が、雑用を女の人にさせるというけれども、女の人にはサーヴィス精神からお茶汲みをしてののだということが出ましたが、皆さんはサーヴィスの意味でお茶汲みはなさらないでしようか。

谷 女性の仕事ができないということを中傷的に言われるのですが、その一つの原因にお茶汲みが入っているのではないかと思います。そういうものははっきりと仕事の分相上きめておくべきだと思うのです。

渡辺 ある官庁にお勤めの方は、十時と十二時と三時と、お客様が来たときは自分たちのと一緒に出すけれども、ほかの場合は出さないということが話されました。

植垣 お茶汲みや雑用の問題ですけれども、これは決して強制的であってはならないと思うのです。男女平等ということとは必ずしも女性が屋根の上に上って天井を直すとかそういうことではないと思う。やはり女性の神の中で自分をより生かすことが婦人の最大の幸福ではないかとも思うのです。

大森 女の人の場合に、自分本来の仕事の韻率に差支えないかということに考えなければいけない。初めから

雑用するための給仕を入れている場合は、その人にお茶汲みをして貰うのは問題ないが、公務員で対等の資格で入っているのに、自分はむずかしい雇根の修繕はできないからお茶汲みの仕事をするということはおかしい。大阪の会ですういふ問題が出て、各自ほしいというときに自分で飲みに行こうということにして、実際にやってみるとどうも仕事の能率が上らない。結局一人できちんとやってみると、一人の能率でほかの人が能率よくできるから、お茶汲みを当番制でできたということが出ましたが、それもいい考えだと思います。

松島 私もお茶汲みの問題はいろいろな問題を暗示していると思う。職場では人々は必ず職業的なある一つの職位について仕事をしている。その職位がお茶汲みということであらかじめ定めているのなら問題ないと思うが、現実には多くの場合職位として定められているのは決してお茶汲みではない。仕事としては他の内容のことを求めながら、単に女であるが故にそれ以外にお茶汲みが求められるのであり、これは非常に重要な問題だろうと思う。ところが職場といっても大きい社会の中の一部分である。つまり日本の社会の中には封建遺制というか、いろいろな問題があり、それが職場も日本の社会の一部である以上、必ず職場の中に投入されていかなければならない。こう考えれば職場で

ても、女性の進級がおくれたり、停滞しており、実際には大きな差が出来てしまっている場合が多いのです。大体賃金は低ければ低いほど経営には利潤がある。その場合に女性の賃金が低いということが社会通念としてあれば、経営ではそれを利用するに越したことはなく、なにも自ら好んで高める必要はない。事実ソシアル・ダンピングの問題が起って来るのは、女性の多い職場に限られている。ところが組合の要求を見た場合、女性の問題が組合そのものに、また男性の中に正確に伝えられているか、どうかこれにまず疑問なのです。これは女性の向上力の弱さもあるけれども、組合や男性の中に職場の民主化が大切だということとは十分わかっていても、それは理念的な事情で、実際には古い今までの方式に対して、云いしれない郷愁を感じていることが多いのではないか。職場の民主化は大切で、それに向って男も女も手を取り合っていかなければならないというのだけれども、その前に前提条件として、まだまだ考えておかなければならない問題がありそうな気がするのですが……。

大村 私は多分そういう疑問が出るだろうと思っています。私たちは公務員ですから差別があるかもしれませんが、表面上男女同一賃金です。もちろん身分的な差別は別ですが、そのときに人間問題と職制の問題と絡むわけなの

お茶汲みの問題がおこることなどは、当然な話だといわなければならぬかも知れない。

普通私たちが男女間の問題でいろいろ話し合っていますと、一番多く出てくるのはこのお茶汲みの問題で、それに つづいて生理休暇の問題です。ところがほんとうは一番職場の問題でやっかいなのは賃金の問題です。これなど労働者あたりにもっと太鼓を叩いて頂かなければならない問題です。つまり女性の賃金が男性にくらべて余りに低いという問題で、たしかにどの国でも女性の方が低いのが一般的です。これは勤続年数がどこでも女性の方が低いことあるし、一般に残念ながら教育程度が女性の方が低いことも事実です。そのほか労働の職種も違い、女性の多くが熟練職種についていない。ほかの国でも女性の賃金は男性の大体六〇パーセントから七〇パーセント、一番高いフランスが八八パーセントですが、日本の場合などでは四三・七パーセントで、それに輪をかけて低い。ところがさらに問題になるのは、組合の要求自身がこのような形で出て来ている場合が非常に多いことです。甚しいのは組合の要求が男女二本建てであったりする。これなどはもう法律違反で、大体こういうべらぼうな話はない。もつとも大概の職場ではそういうことはもうなくなっている。しかしなくなっているといっても、初任給だけは大体同じに支払っている

です。

松島 賃金の問題というのは非常にむずかしいのです。なぜかという点と女性と男性がそもそも同じ職種についているという点とはほとんどない。どうやら同じだと思われるのは学校の先生、それから医者、これくらいいいのです。職種が全然違つてなかなか比較出来ないのですが……。何かひとつわれわれ男性が反省することが必要なのではないかと考えるのですが……。

大村 それはちょっとおかしいと思います。私は先ほど封建的といいましたが、もちろん全部の都会を通じてもそのことが根本になつており、同時にその線で今回の婦人会議でも取り上げたと思うのです。

もう一つ、先ほど先生のおっしゃったことですが、どういふ認識で人々が女性的ということを考えておられるか、逆に言いますと人々が封建的な考えで女性的なよさということを考えていらっしゃるのではないかと思うのですが、その点でお茶汲みの問題も出ると思うのです。職員間としては当然私用だと思ふ。それを今までのしきたり上というふうな考へている。一つは批判の尺度を考へてほしい、そういう努力がお互いにあるかどうか。

それからもう一つはきりぎりし切つて、職務外であるけれども、慣習としてやむを得ない。男の手から注いで貰う

より女について貰った方がおしいと女自身も言われるので驚きましたが、特に今まで育って来た環境がそうですから、それを認めるとしても、はっきりした考えをみんなに持っていて貰いたい。これはいいことと悪いこと、いうことをみんなが知っていて貰いたい。そうでなければ私たちのものの見方が、先生が先ほど指摘されたように、賃金の問題、社会問題を、職制の問題、男女の問題に転嫁してしまう。

司会 この男女の問題は合同部会に持ち込んだらいいのではないかと思います。たとえば職場で女のひとがお茶を汲んだ方がおしいと思う人があるということや、家庭では奥様のお客様に旦那様がお茶を汲む家庭は少ないと思うのですが、そういうところから職場だけの男女間の問題とせずに合同部会に出してみたらどうですか。

白石 お願います。

氏家 私どもの会社側に言わすと、お茶汲み、掃除、接待のようなものは道材適所という面から女のしかも学校を出たばかりの若い女の人にやらせるべきだということを言っております。お茶汲みとその他の事務と兼ねている中小企業では問題かと思いますが、私どもの会社では大きい関係もあります。お茶汲み、掃除、接待は、はっきりと分担がきめられて、そのような分担、職制に応じて給与が払

氏家 従来からずっと行われている慣習的な問題です。が、お盆とか歳暮とかいった時期に、下役の者から上役の者に対して贈答が行われます。会社も組合もそれぞれの機関紙等を通じて毎年その時期の前には、従業員間にこうした贈答がなされることは、新生活運動の精神からいってもあまり好ましいことではないし、いろいろな弊害が起るかも知ないので、できるだけ自粛してほしいと呼びかけるのがなかなか改まりません。

どうして弊害が起りがちかと申しますと、私どもの会社では現業職は毎月成績効果点というのがつけられるのですが、贈答を受けた職制のひとが、贈ったものに對して点数を加減するというのが一部にあるということです。こうした問題は職制の人もやはり人間で、貰った限りは悪い感情は持たないというようなことから、とかく起りがちな問題ですが、一方、職場の同僚間での対立意識と申しますか、自分は贈答しないから点が悪いとか、あいつは贈答したからいい点数をつけられたということで、反目的な感情を来している点も一部にあるように見受けられます。こうしたことは一朝一夕には改まらないと思いますが、できるだけ労資双方が努力して、近代的な人間関係の確立をしなければならぬ問題だと思えます。

鹿嶋 私のところは現在同僚は五人で、その上に献立主

われています。男女の賃金の差の問題も関連しますが、看護婦とかタイピストとか、特殊な技能を要するものは別ですが、お茶汲みその他職務については、責任度の関係で男子と同様の賃金は支給するべきではないという見解をとっているようです。なおお茶汲みの問題は先ほど大森さんが言われたように、仕事の分担上ではっきりときめるべき問題であって、それが中小企業等できめられにくいという面もあるかと思いますが、仕事の分担上ではっきりときめた場合には、お茶汲みがどうこうという論議は問題にはならないのではないかと思います。このような問題はここあたりで卒業すべきではないかと考えています。

安久 精神的な面から考えますと、男の方たちが家で奥さんにして貰う家庭でのサーヴィスを職場においても女性に求めるという、男性のエゴイズムというものが考えられるのです。

上下の關係

司会 それではお茶汲みの問題で代表した同僚としての男女の問題を一応これで打ち切ります。次に、公私混同の点ではこれと同じような種類かもしれませんが、上下の關係にあっても妙に混同された問題が職場にあるのではありませんか。

任として学校の先生がいっぱいしゃり、その上に校長が連なっておりますが、私たち五人は話し合って、年賀状、暑中見舞、その他個人的に自分がいい子になろうとするふるまいは一切しないということを率直に申告しております。なにかしたことがわかるとすぐ批判して、自分勝手にそんなことをする目の前で言われるので、同僚のそういう空氣はないのです。

松島 不合理な職場の問題というものは先ほど皆さんのお話で、お茶汲みの問題も、上下の不合理な關係もすべてこれに入っていると思いますが、こういう問題を考える場合に、どちらかというと男性はある意味で卑屈なのです。職場を明るくしようと思っても、食っていくためには実態にその不合理な職場で上長に従属して給料を貰わなければならぬ。不合理なものををはね除けようとするけれども、はねのける活動をするためにも、とかく食っていかなければならぬ。最近よく従属とか抵抗などという言葉を言うけれども、その二つは全然別個のものではなく、一人の人間の内に存在する二つの側面だともいえる。人間というのは誰でも合理的なものに對する憧れは持っているが、現実的な問題としては、首になってはしょうがない、そういう意味では非常に用心深くなってなかなか出せない。これは特に一般に生活の負担のかけがちな男の場合にいちじるし

く、女性に反ってこの点はっきりしたことを言うことが多い。つまり明るい職場の確立は、女性の力によるところが大きいということがいえると思います。

安久 上司がその地位を利用して下の者を私的に使用するという場合があります。たとえば大風が吹いたとき、家の間いをするのに使ったり、そうしてまたその行く人も、そういうときに行っておいて上役の目にとまって、それを利用して自分が上になりたいとか、認められようとする。そういう上下の関係もあると思います。

司会 主従関係が上下の関係に入っている例のようですが、ほかにありますか。

白石 私の方は学校ですから、上下といったら校長先生と女教員、教頭と女教員という関係で上司と使われる者というふうになりますが、やはり上司に気に入られようという気持は誰もが持っている。職場では教員ですが、負けたくないという人間の本能がある。校長先生の顔をうかがって、それによって校長の御きげんをとるような言葉を使うとか、お茶でも余計づくというふうになり、職員間の調和がとれないと思う。さつき氏家さんのおっしゃったように、贈りものことなんですから、お互いに自分だけいい子になろうという気持をなくして、まとめて校長先生のとこに当番が持つて行く。それに対して校長先生のお

宅におよばれをする。これはレクリエーション的な意味をもっています。

司会 今校長先生に招かれておよばれをするというお節が出ましたが、下の方の側に上役のおふるまいをあてにするというふうなことではないでしょうか。

白石 あてにするというのではなく、お互いが感謝の気持ちでやっているわけです。

大村 私たちの職場でも、勤務評定をやるわけですが人間が人間の成績をつけるわけですから、人間的な感情が入ります。それを本人に見せてくれ、さもないれば組合とか代理の人に見せてくれるようにしてほしいということ、二年ほど前から交渉していたわけです。ところが管理の立場から、つける人が困るから見せられないというのです。ともかく見せるか見せぬかで問題が起ったわけですが、こういう場合には贈りものとか封建的な昔風のやりかたをなくすために、全部つけた人とつけられた人が、誰も見るといふことにしなければならぬと思います。

松島 職場の問題を考えていった場合、さつきのお茶汲みから、皆さんのおっしゃっているいろいろなことで、非常に重要なものは、それについてからんだ職場での上長対下僚の関係です。職務上の命令で下僚が上長に従うことは当然だといえる。職場というのは職位から組み立てられてい

る。その職位はそれぞれが責任と義務を内容として持っている。そうした権限は最も上の者が包括的にすべてをにぎっている。しかし自分だけで全部の仕事をするにはできないから、下のものに自分のもった権限の一部を委譲する。こうしてたとえば工場などでは所長、部長、課長、係長、主任、さらに組長、班長、伍長というように、権限の移譲を中心としてピラミッド型の構成が出来てくる。そして誰が誰に命令し、誰が誰に報告するかきちんと決められている。だがこういう権限はそれぞれの職位に対して与えられているのであって、あくまでもその人間個人に対して与えられているのではない。職務上では職位にしたがい上下関係にたつが、一たんこれをはなればすべてのものが平等の立場にたつはずで、これが近代社会の職場の原則である。しかしお茶汲みの場合もそうだが、日本の場合非常にこれが混同されている。つまり上長というのは、日本では何かと下僚の面倒を見たがる傾向がある。たとえば就職するのに必要な縁故にはじまり、入社後の保証人、また借金、保証、好きなものは仲人までやり、何組やったかというところが妙な自慢になったりする。また機会あるごとに部下におごりたがる。

そういう反面下僚は上長に対して、一身的に何事によらず忠誠を尽くすことが要求されがちである。つまり職位に決

められた職務に忠誠を尽くすのではなくて、上長である人間そのものに忠誠を尽くすことが要求される。そして人間として上長に忠誠を尽くすことが、職場で昇進するための最大の条件になったりする。だから職場の中が小さな黒幕の集まりのようになって、隅というふうな妙なものが出来やすくなる。勿論偏倒を見てもらったことに対する感謝の気持は大切です。しかしといって、そのために自分の希望というふうなものが述べられないとしたらこれは大変な問題です。人間として希望や意見を持っていないものはない。そういうものを捨てて一身的に全部を上長に委ねることが求められ、それに対して飲んだり、噂話を盛んにしてウサをはらす。これでは余りにみじめです。もう一度いいます、上下関係が発生するのは職務上のことだけです。人間は凡ゆる人間が自由と平等で、こういうことはわれわれがまず第一に確認してからかなければならない前提条件です。男や女、経験の多い者と少ない者で能力に差があるのはあるいは当然かも知れない。しかし人間としてはすべてが平等なはずで、職位としての上下関係を離れた場合は、同一のレベルに立つてつき合うべきです。たとえば自分の勤めている職場や会社に愛情を持っていない人間はないはずで、なにかしら愛情を持っていて、ところがそれが上長の意見で代表される職場だったら、ほんとうの意味の職場へ

の愛憎は生まれて来ない。職場は本当にそれが自分のものだと感ぜられるものでなければならぬ。要するに職位上の上下関係が、人間の身分的なそれと混同されて、非常に不明確化している。アメリカなどでは職場の組織化が進んで、職務制などによって職場の合理化が行われ、それによって人間性が次第に失われて来た。それで人間関係ということがいわれ、失われた人間性を恢復することが考えられ出した。ところが日本では、昔からある妙なことがもやもやした人間関係を打破して、そこにいわゆる自由と平等、対等な立場に立った人間関係を築き上げて行くことが明る人間関係をつくる場合にまず問題になる。その意味でさっきのお茶汲みの問題も、職位として規定され、その約束で入ったのなら当然やるべきだが、それ以外の要因からやらざるを得ないのなら問題です。なにかさっきから皆さんのお話を伺っていると、どうもこういうところがわれわれの解決すべき最大の問題のような気がして来ました。が……。

渡辺 私の職業の女中というのは、なんといいますが、人間の平等というものが全然無視された関係の中におります。職場を離れてというのは主家を離れてのことですが、会合などのためよそに出た場合でも、なにかものを言いますと女中のくせに黙っているというふうに言われますし、

なんだか自分の職業に対して劣等感を持ちます。そういうことではなにか先生からお話伺いたいです。

司会 「女中」というのはレッキとした職業として主人と雇用の関係にあり身分的に低いものだということはないと思うのですが、ただそのような考えが、社会一般にも働く者にもあるのではないかと思いますので、少し話し合いたいと思います。どうでしょうか。たとえば窓口業務の方にも、それからバスに乗ってお客様を扱う方にも、駅務員として大衆との人間関係があると思います。また私たちは働く者であると同時に社会人でもあるわけですから、職場の人と社会人との関係で問題を話し合ってみれば、渡辺さんの問題もはいると思います。

渡辺 百貨店の場合には閉店までの勤務時間中お客様にたくさんサービスして、たくさん買ってもらって貰う。それは勤務中だけのことで、私たちが主人のうちを出て遊びに行ったりする場合は、皆さんと対等だと思えますけれども、そのおりに、「あなたの職業は何ですか」「女中をやっています」「なんだというように雇われているのか」と。私は自分が雇われているうちの仕事だったなら忠実に致しますけれども、皆さんに雇われているわけではないと思うのです。

安久 肉体に触るというようなことを汚らわしいという

考え方がまだ地方に残っていて、私たち看護する場合に、患者さんに直接ふれるのをなにかそこに汚らわしいとか、そういうような感情をまだまだ社会の人たちが持っていると思うのです。

唐崎 私は給食婦という立場から申しますが、給食は現在義務教育の一環として非常に重視されて教育のカリキュラムとして使われているものは非常に多いのですけれども、それを作っている私たちの立場というのは、家庭の台所から延長した単なる単純労働者という扱いをされて、身分は非常勤嘱託で、月給も十年働いても四千五百円という非常に低い扱い方をされています。私たちは日本の児童のために食生活の改善のためという社会的な意識は非常に持っているが、外面的に見ると学校の給食の炊事婦という見方しかされません。そういう点で私たちは非常に不満を持っているわけです。

吉田 私のところでは普通の方は賄いのおばさんとか、おじさんと呼んでいるわけです。それで仕事といいますが、一日御飯を炊いたり、野菜を切ったり、食器を洗ったりという仕事をされているわけですが、私は決して仕事によってそういう呼ばれ方をしているのを卑屈に考えてはいけなと思う。たとえば一日食器を洗っていても、自分の誇りを持てるようにいっております。唐崎さんの場合

と同じように女子は日給ですから、一日休みますと非常に響いてくる。長期欠勤したらなにも保障がありません。けれども男子は県の職員になっていてそこところは男性と非常に差別があるのです。

小沢 私は区役所に勤務する公務員としてその立場を理解して頂きたいのです。区役所は区長さん初め助役さんもおのころ区民の方に対するサーヴィスをモットーとしており、窓口でも区民の方々との接触をできるだけやわらかく、また具体的に仕事がおかわるようになっていますが、お客さんが自分が賄に落ちないと、非常に怒るのです。二言目にはわれわれの税金で食っているのではないかとどなられるのです。それは非常に私たちにこたえるのです。しかし私たちはいつも皆さんへのサーヴィスを考えているのです。それは区役所全体、公務員全体を通じての心がけですから、一人でも多くの方に理解して頂きたいと思っています。

松島 明る人間関係をつくるにも、それぞれの人がまず自分の尊厳というものを自覚することが一番大切だと思う。なにが神聖か、神聖なもの、尊厳に値するものというものがあれば、それは自分以外にはない。つまり個人の解放がまず重要なのですが、これも言うはやすく行うはかたい。人間は感情をもっており、理性だけでは割り切れない。

い。そこにいろいろ問題が起ってくるわけで、お互にた
わりあいながら、一歩一歩解決していかねければならない。

どうしたらよいか

(一) 臨時職員について

司会 今までに関係のところでは問題がたくさん出て上下
の関係のところではあまり出ませんでした。ではどうし
たらよいかということ、まず関係のことから、問題を出
しながら話して下さい。

佐々木 臨時職員の問題について取り上げて頂きたい。
私は保健所の受付で身分は臨時職員です。臨時職員は島取
県では普通の給料の七〇パーセントくらいになるのだそう
です。賃金の問題も大切なのですが、現在もし不当な解雇
でもあった場合に提訴するという権利がないということ
が、一番私たちの悩みなんです。そういうことについてい
ろいろ討議して頂きたいと思うのですけれども。

司会 あなたの方でなにか対策を講じたことありました
か。

佐々木 臨時職員の者が集まって、臨時協議会というも
のを拵えているのです。組合でも臨時問題を取り上げてく
れて、県の人事委員会に身分の保障について提訴しました
が、県の方で取り上げてくれないのです。

工が大体四〇パーセントくらいはいつているのじゃないで
すか。

氏家 私のところは組合員が六千二百程度で、臨時工、
日傭、社外工を含めて九千名。組合の方も臨時工組合と
いうのが組織化されてないのでもいろいろの要求はできま
せんが、組合の方は同じ労働者であるという立場であり、
ここ二、三年は現在の多忙な状態が続くという見通しに立
って、できるだけ本工への切りかえ、労働条件の向上とい
った面について要望しています。本工への切りかえも臨時
工の古い人、成績の特に優秀な人は、一部行われておりま
すが、労働条件の向上はなかなか実現しない状況です。

松島 日本の人事管理というものは非常に大きな特色を
持っている。それは第一に採用、これは断然縁故関係によ
る採用が多い。縁故入職者は大体全産業を平均して六一・
六パーセントに達しているといわれる。そして欧米のよう
な直接申し込みは日本ではわずかに五パーセントくらいし
かない。縁故採用というのは元来企業にとっては非常に弱
点が多い。というのは第一に採用に偏狭が絡みます。そし
て選別の範囲が狭くなる。また首が切りにくい。しかし反
面により重要なことは、心身、特に思想やものの考え方に、
非常に確実な情報を得られる。直接自分が関係なくても、
自分に親しい第三者が保証しているから安心だと同時に

島山 今日佐々木さんとお話したのですが、佐々木さ
んの方では臨時職員は一月を二十五日の計算にして、日給
二百円という契約でしたら一月五千円くれるというので
す。一日休んでも一月の五千円は動かないのです。

私たちの場合は日給月給制というのがなくて、一月五千
円確保されるところまでいっていない。一月二百円のもの
は三回休めば六百円差し引かれてしまう。今までは祭日も
日給の中に入らなかったのですが、現在のところ日曜はも
ちろん入りませんが、一日休めば一日引かれるという
臨時職員の身分というのは、同じように働いているながらそ
れだけの差別待遇を受けるのは非常に問題だ。うちの組合
もなかなか臨時職員の問題については力を入れていない。最
近はなかなか臨時職員の問題については力を入れている。最
近は五千人は動かさないようにするという準職員の待遇に持っ
ていくことを努力しているわけですが、それでも御多分に洩れ
ず赤字財政ということで、現在のところ実現に入っていま
せん。しかし組合幹部の努力によって、今までは日給二百
円だった者が今度は二百二十円に引き上げられるのです。

松島 臨時の問題は人間関係に重要な関係があると思
う。つまり日本の企業はインフレ、デフレの波を臨時工で
カバーしている。造船なんか特にそうです。景気、不景気
の波を蒙ることの多い工業はとそうですね。造船でも臨時

に、六〇パーセントの縁故入職場があるということは、さ
っき言った職場のなかの職制の上下関係を、いわゆる義理
人情や淳風美俗と絡み合せて、経営家族主義的な様相をつ
くるのに非常にいい条件を作る。結局これは何になるかと
いうのは、はっきり言って近代的な労資関係をペールするの
です。

それからさらに特色があるのは賃金です。これはさっき
おっしゃったように若い人、女性、そういうものによって
非常に格差が大きい。特に大きいのは勤続による格差で
す。そして仕事の質や量に対する配属が低い。もともと賃
金が勤続によって上っていくのは、勤続年数の上のものが
一般に能率も高いから当然だともいえる。しかしそれが勤
続という形式的な指標とむすびつく所に問題があるので
す。つまり入社してすぐに能率は低い。しかししばらくし
て急速にそれは上り、さらに時間がたつと上昇がとまる。
しかし賃金の上り方はゆるくたえず上っていく。それで入
って二、三年のものが能率とくらべ賃金が非常に損をする
ともいえる。つまりこれは会社が恩恵的な形式で備った子
傭の人間の勤続を希望するということです。そしてこの
ことは退職金についてもいえる、これも勤続に対する格差が
大きい。

また大きい会社だったら必ず入社教育をやる。ところが

技術教育ばかりでなく、直接技術と関係のない一般職業的な学科をやる所が多い。一体一般企業で職業学科である必要があるのか。これは一種のしつけ教育をしているわけ、社風に合った人間を教育しようとしていると思う。その場合基幹的な従業員だけをこれぞみたし、しかもその勤務を希望する。これ以外には出来るだけ人間をふやさないようにし、それ以外は臨時工でまかなおうとする。またそういう縁故を持ち、しつけ教育を受けた人々が基幹の要因になって、職場の特色を生み出している。こういう形の職場は非常に問題が多い。というのは法律上どんなに労働者の保護が問題になっても、現実には下層の従業員の中にいくつもの階層ができる。そして下層の人々には恐るべき無権利状態を現出する可能性があるということです。これをどう打破するか、これはやはり組合なんかの力を伸ばしていくことが重要で。

ところが臨時工の問題に対して、ある意味で女性の従業員そのものが、こうした臨時工的な形で雇われていることが多いともいえるのですが、積極的にこれを取り入れる幅の広さを持った組合は非常に限られたものに過ぎない。勿論緊急的には皆わかっているが、現実の問題としては、そういう人々がいることは、自分の地位の安全に役立つわけですからどう対決するかが非常に困難な問題になる。この

(二) 女性同士について

唐崎 私が最初入ったときに、学問のある人とはとか、ベルの連う人とはというような見方をされたのですが、「所懸命に働いていつも謙虚な態度でいることを忘れず。身の回りの話から入りまして、お互いに裸になった人間づき合いができるようにしたのです。それから組合運動の仕方については、やさしい言葉でこういふふうにしたらいいのではないだろうか」というようなことから申しまして、生憎気な言葉を使いましても批判されるようなこともなくなりました。単なる感情だけのつき合いですから、近代的なという言葉では言えないかもしれないけれども、組合運動を通じて少し合理的な人間関係が芽生えて来たというのを、私の経験として申し上げたいのです。

島山 職場の中で感じますが、若い者、特に女の人の間には集団の中で働く者の共通の立場からものを考える訓練が非常に欠けていると思うのです。それを解決するために労働組合の婦人部というのがあるのですが、まず話し合うということが一番大事な解決策ではないかと思ひます。そうして自分たちの問題を自分たちで討議して話し合うという、そういう訓練ができれば、共通の働く者としての立場からの考え方も出てくると思う。私は労働組合の関係で地

問題を解決するためには、人々の間にある意味で本当にもりあがる力が大切で。しかしそういうものを盛りあげるために、職場における明るい、人間関係が別な意味で重要なのです。そしてそういう人たちの言葉、意見が組合でも取入れられるようにしなければならぬ。また組合そのものが大概臨時工などを入れていない所が多い。これなども、それ等の人の希望をとり入れるだけの幅の広さを持たせるように、人々の気持を持っていかなければならぬ。このような問題の解決を法に期待することは無理で、やはり時間がかかっても、できることから自分たちでやってみなければならぬ。そういうものを礎き上げるために、みんなの意見が十分反映されるような職場を礎き上げることがわれわれの最大の眼目だと思ひます。これには資金準備が必要で、最低賃金制が大切だ、未亡人の保護が重要だという。こういう大きなことが、この解決に必要なのは分ります。しかしそういうものが出来なければ職場はよくならない。出来たら、何時までもたつてもどうにもならない。出来ることなら、身近なものを一つ一つ努力して。一歩一歩目標に向かって歩いていくことが一番近い道なのです。そういうものをこれからみんな考えていく方が会員のうち方としていいのではないですか。

方の婦人部の代表者の方たちとお話しする機会があるので。どこの組合でも何年も前からお茶汲みと生涯休暇の問題をやっている。それはどこに原因があるか、自分達の問題を自分達のものとして考えられない。自分は生体の必要がないと、ほかの人に必要があってもそれを問題として取り上げない。そういう団体的な訓練をするために私は今度初めて労働組合の幹部の役員になったのですが、まずもと労働組合の婦人部をみんなに解放しようと提唱して来ましたが、四月から年度が始まり、まだ奥の奥に入っていないのですが、まず黒板にみんな話し合おうと書いて、よく女の人がお茶を汲みに来る小便室の前に置きました。今年ば労働組合は話し合いの雰囲気を作るという方面に努力していこうと思ひます。要するに私たちの中で話し合うということだけが明るい人間関係のための解決策といっているのではないかと思ひます。

小沢 その婦人の発言を反映させるということも、結局輿論を高めなければならないと思うのです。私のところの組合は非常に婦人部の結束が固いのですが、どうしてここまで手を繋いで来たかということも申しします。区役所は職場が広くて、学校も診療所もあるので、毎月巡回して定例的に話し合いは必ず持つことにしています。その一月の間にその場に持ってくるいい問題をみんなに考えておい

て預いて、有効にその時間を使いますから、その婦人部の葬儀が組合に反映します。それにつきましてもおもしろい話があります。春になると職員が歌舞伎を見物に行くのですが、お弁当と、お酒が二合つくのです。それは毎年やって来たのですが、ある年のこと男の方がお酒で非常にいい気分になったので、組合に野次を飛ばして恥かしい思いをしたことがあります。それを婦人部で取り上げて、こういうことはああいう大衆のところでは考えなければならぬことだから、お酒をつけないことにしたいというので、婦人部と男子部の比率は二分の一弱なので、お酒をつけることを私たちが反対したことは、随々ござうたのでしたが、ある年のこと実行して、もう二、三年持っていけないようになりまして。一人一人の声ではだめですが、大勢の声としては通せんごいとは思いません。

安久 私が地方大会へ出たとき教員の停年退職が問題になりました。私の県では男子職員は五十五歳が停年で、女性性が四十五歳、そこに十年開きがあるわけですが、そこで四十五歳の停年でやめられる教員の方たちが立たれたわけです。そこで私たちの反省になるのですが、問題は四十五歳の方たちは集まるが四十四歳、四十三歳の方が集まらないのです。来年、再来年四十五歳になる、実際問題が迫っているにも拘らず集まらないということは、そこに女性と

して一つの大きな目標に向って団結する力に欠けているのではないかと思うのです。それは四十四歳、四十三歳の問題だけでなく、もう少し若い人たちにも関連してくる問題だと思ふのです。団体的な活動といいますが、そういう堅持の持ち方が欲しいですね。反省すべきことではないかと思ふいます。

植垣 話し合おうというところまで来たもうしめたものだと思ふのです。そこまで持っていくためにどうすればいいか、それを討議するところまで持っていくのですが。

司会 話し合いをするところまで持ち込むのがとても大変で、それにはどうしたらよいか、これはとても時間がかかると思ふいますので、明日にしましょう。

未婚者と既婚者

白石 私はよい職業人であればよい母であり、よい妻になれるかということに悩まされています。私は夜中に洗濯をしたり、日曜日は朝からねじり鉢巻まで子供たちの世話をしなければ、職場の勤めが果せないのです。子供は半人足だという言葉をしみじみと思うのですが、一たん職場にある限りは私は自信をもって自分の子供たちを教えます。教員ですから男も女も差別はなく、女は女としての、男の先生は男の先生としての教育の本分があり、仕事の軽

い、重いはありませんが、理論と実際は伴わないもので、子供にお乳を飲ませながら給食をしてやる。随々ござうたとなったときに、果して私はいい職業人であろうかと思つて悩むことがあるのです。その点同僚間の同僚もありますし、上役のいたわりもありますが、実際問題から言えば悩みに思つております。

廣崎 福岡の地方大会で出された問題ですが、未婚者側から言わせると既婚者は時間の觀念がルーズで、出勤率も劣るし、職場の中の話も下らないといったら悪いけれども、自分の主人などの話が主になって、あまり理知的な話がない。だから無理があるならむしろやめて頂きたいという発言があった。既婚者の方は、未婚者の方と変らない就業をしているが、たとえば未婚者と同じように一時閑置されても既婚者だからだめだという見方をされるから、皆さんその点考えて頂きたいという発言がありました。

安久 これは地方大会でも出たことなのですが、ある保健婦さんがいわれるのに、私は未婚の方とは絶対劣らず、また結婚しているということで干渉も受けたくない。結婚しているからというので特別に扱って貰いたくないし、自分でもしっかりやっているので。そして、白石さんのおっしゃる通りに、肉体的にも精神的にも負担が大きくなる関係上、仕事に少しづつ差支えてくるというのです。私たち若

い者からそういう御年輩の結婚していらっしゃる方を見ますときに、私たちは一種の技術者なんですけれども、若い者たちが自分で考えながらやっていくことも大事なのですが、やはり経験を積まれた年輩の方たちの指導を仰ぐことも大切だと思ふのです。そういう場合に結婚してどしどしやめていかれるということは、私たちにとても全体の問題としてもマイナスになる場合が多い。しっかりとっていくという方たちはぜひとも残って頂きたいし、家庭と職場を両立させて、家庭的に不幸になり、職場の方もおろそかになる方はやめて頂きたい。私は未婚の立場からそう思ふいます。

氏家 この問題は岡山の婦人問題会議でも話題に上りました。

既婚者と未婚者との間で職場婦人同士になにか感情的にびったりとかない場合があるようです。先ほど唐崎さんからも言われましたが、未婚の婦人が既婚の婦人に対してやめて頂いた方がいいのではないかとというようなことは、婦人が婦人自身で婦人の職場を狭めるといふ方向に自分から進んで努めるようなことにもなるかと思ふいますので、未婚者もいづれ将来は結婚するんだというような広い立場に立つて考えたら、おのずからそこになにかの道が開けてくるのではないかという結論が出されております。

松島 先ほどの既婚婦人の問題、これは非常に深刻な問題だと思ふのです。やっぱり男女の本来的な平等が成り立つためには、婦人が仕事を持つのが一番いい。家庭の中でも経済的な基礎がなければ、なかなか婦人の立場は弱く、本当の意味での平等の關係は出来にくい。また失業問題としても、家事労働というのは非常に辛いものですから、家事労働からの解放がない限り、戦場で既婚婦人が職業を営むことは非常にむずかしい。これは明日に譲ることにして、今日論議された一番大きな問題は男女間の問題として、いわゆるお茶汲みの問題や、責任ある仕事につかせないという問題等がでていました。さらに賃金の問題まで出ましたが、問題を解決するために男性のニゴイズムが問題で、もっと幅広くものを考えていくことの重要性が指摘された。ところがさらにその問題を発展させた場合に、いま一つ重要なこととして上下関係と、それに絡んだ職場自体の問題が浮び上って来た。いわゆる職務上の上下関係と人間そのものの上下関係が非常に混同されている。職務上で上下関係があるのはあるいは当然かも知れないが、職位を離れた場合は、人間としては平等なはずだ。職場への愛情も、自分たちの意見や希望が言えるような職場でなければ、ほんとうの愛情はわかない。ところが現実には、職場には妙な人間関係があつてなかなか下のものはものがいえない

い。明るい人間関係というのは、アメリカのように機械化された状態に対する人間性の恢復の場というより、そういう人間関係の打破へ動くことがわれわれの最大の課題なのだという点が絞られた問題だったと思う。これを解決するにはどうすればよいのか。これに絡んで「まず話し合いましょう」ということが出て来た。では一体何を話し合えばよいのか、ただ漫然と話し合えばよいというのでは何もない。これに関し話し合う場合の個人としての態度はどうか。話し合いのテクニクはなにかという問題が出てくる。こういう事例は明日に持ち込むことにしましょう。

(三) 賃 婦 応 答

質問 女中さんという職業に対する社会的な評価が非常に低いのではないかと御意見がありました。実は私は神田橋にありますが女子の安宿所長で、日々多数の女子を扱っておりますが、一番需要が多くて供給の少いのが女中さんです。ある県では四百人の要求に希望が二、三十という状況です。これは労働時間が長い、家庭内における人間関係が必ずしも近代的でない。私もこれにつきましてよく主婦の方に、女中さんの使い方を改善しなければ女中さんのなりてがないということを、口を酢っぱくして言っている。家事労働についての規定を法律の中に織り込むことが

むずかしいならば、政府機関、社会の有力な団体の方が、女中さんというのはこういうふうに関わなければならぬという準則を示してくれば、希望者が多くなるのではないかと思います。

そこで女中さんのグループである希交会の皆さん方のこれからの運動の仕方についておたずねします。

渡辺 希交会は政治的な目的はありません。政治的な目的を作りますと、希交会に入りたいと思ひましても、御主人側が許してくれません。今後なんらかの方法で私たちは発展したいと思ひますが、とにかく私たちは御主人あつての私たちですから、まだそこまでするつもりありません。

質問 先ほど未婚の方から既婚の方が同じように働ければ、一緒に働いて貰いたい、同じような働きができないときにはかえってやめて貰いたいという意見がありましたけれども、既婚の方は相当の家事労働を負担しているの、同じように働いて貰うためにはやはりそれ相当の施設が必要ではないかと思ふ。特に看護婦の場合には三交替ですから、夜勤者のためには仮眠所が必要ではないかと思ひます。そういうものがなかった場合には、既婚者に同じように働いて貰うことができるかどうか、あるいは既婚者に対するスケジュールのやりくり、そういったあたにかい思ひやりもないのに、同じように働いて貰いたいと思ひ込み

だけを要求していらっしゃるのか、その点を伺いたい。

もう一つ、病院は女子職員が多い職場ですが、そこに託居所がないことは私も非常に残念ですが、もしできていたらその点はどうしていらっしゃるか伺いたい。

安久 これは大きな問題でして、國家的な貧困、経済的な貧困からくるそういう施設の不備ということがあげられると思ふのです。地方大会で言われた保健婦さんの話を伺いますと、同情して貰いたくないとおっしゃるのです。私たちが特にそういう方たちを同情の目で見るということも果して結婚されている方が望んでおられるかということも問題があると思ふのです。そういう方たちが私たちもおなじに働いているから、未婚も既婚も問わず職業人として同等の立場で働こうではないかというような意図の上に働いているとすれば、私たちが同情や愛情をもって見なくてもいいのではないかと思ふのです。そういう施設はあった方がいいけれどもごくわずかではないかと思ふのです。私は看護婦ですから、三交替で深夜勤、準夜勤もあります。家庭を持つていることは大きな負担になると思ふのですが、そのために楽な職業につきたいと考えているとすれば、これからどんどん新しい看護婦が出て来て、その人たちが早く就職したくて待ち構えているのです。給与の落ちているものがないということは、病院の経営からも損をする。私

はそういうふうにとりたいたいのです。

次に、託児所については、私のところはそういう施設はないのです。施設をどんなに作ってほしいと思います。そうして私が先ほど言いましたように、若い者たちの指導のためにぜひとも残って頂きたいのです。それはまあ矛盾しているかもしれませんが、そういう気持は若い者たちにもあると思うのです。そして施設をかく得るためには、将来結婚する未婚者も既婚者とともに手をつないで努力しなければならぬと思うのです。

質問 上役の方のつける成績評価の公開のことなのですが、けれども、職業としての上下関係と、それから上役の人間感情を組合自身が混同しているのではないかと感ずるわけです。もっとも現実には上役の方が混同しておりますから、それに対する対抗策とも言えますが、成績評価を組合員自身が無視できるようにならないものでしょうか。

大村 実際言うともまだ上役の方が近代的なセンスで人事管理をやれないということが非常に多いと思う。事実そういうことは今まで過去の例でいくつもありました。私たちが自身非常に憤慨したこともありましたが、しかし結局それは公務員法ではっきり保障していることを踏みにじられるわけです。公正な人事管理、公正な昇級の機会を与えるべきです。そうすれば同じ仕事をしておりますが、あるいはも

っと仕事をしておりますが、片一方がとまって片一方が上る。この原因はどこにあるかというと、上役の方が職制でつけなければならぬ問題を、封建的な感情でつけられることが多いと思う。そういう意図で本人に見せるということとを要求したわけです。評定というのは人間が驚く以上腹りがある。それをほっきり切り切つていればこういう要求は出さなかったかもしれません。見せて貰って悪いからという、つける人も見せて悪いようなつけ方をしているからということ。僕はそういう意図で混同はしていない。しかし人間である以上肉親的な感情を持っている人もあるだろうし、だからほっきりした線を出して貰うためにこういうふうな要求をしたい。そういう考えであります。

質問 これは私と大村さん意見が違ふのですからしょうがありませんが、それを公開する場合、Aの人は非常に能率が高い、Bの人は誰が見ても能率が低いという場合、上役がAには非難に高くつけ、Bには低くつけた場合には、組合の役員はそれを承認なさいますか。

大村 その場合には私たちが見せて貰ってもそうだといいことになる。ところがそうでない人が、不公平が出るから問題になるわけです。

もう一つの賃金の上げ下げのために成績をきめるのだったら、要領県のように予算がないから三割しか上げられな

い。そのために落す。要するに率を落す手段です。そういうふうには雇われるわけなのです。そういうことを防がなければならぬわけです。みんながよくするための評定であるということを考えて貰いたい。落すのでなくてよくするために作るものである。

松島 日本の企業では賃金規則が明確にきまっている場合は少ない。大企業で、強い組合を持っているところで賃金規則が出来ていても、学歴別の初任給がきまっている程度で、あとは上長の意志でどのようにでもなりうる。むしろこの問題の進み方は、これを規則などできちんと決め、客観化する方向に持っていくのが本来のあり方だと思えます。

質問 香川県庁の職員組合の者ですが、でもこの間の春闘のときにお茶汲みの問題を排除の問題も含めて取り上げました。一時間早く出勤して掃除しなければならぬ慣習がある以上、それに対する正当な超勤をつけてほしいという要求を出して、獲得したわけですが、鳥取の県職の場合には具体的ににお茶汲みにはどういう解決策を進めておられますか。

大村 そのことは職場によって非常に違うわけです。ある職場は給仕さんがいて、問題はないということもありますので、全部一率に検討しようとしたところに今まで誤

りがあったので、各職場でやるとよいと思う。月給の百分の一を積み立ててそれでアルバイトを備う、これは一番いい方法ではないかと思う。

その次にはみんなが当番する。しかしこれはどうしてもする人としなない人のできるのだ。それから予算でなく積立金から出すことは社会的な問題を個人的なものに転嫁するということの問題があると思いますが、現状ではこれが一番よいと思います。

質問 臨時職員の女子の問題ですが、生休は同じ女ですからとらなければならぬということとはよくわかっていてのですね。けれども、臨時の中には日給月給備の方と日給の方とありますから、一率に日給の方にもどうぞとって下さいということとは、無給になりますから言い難いのです。そういう場合に和歌山ではどうなっているのですか。

龜山 現在規則の上では生休は与えるということになっております。しかし実際は生休をとっているのは皆無に第1しいのです。この補こういう問題がありました。生休を要求したけれども、その仕事は決して生休をとらなければならぬほど大した仕事ではないし、今まで生休を一度もとったことないから、その必要はないといって、その係長が蹴ったのだそうです。それを非常に問題にしていたけれども、ともかく生休がはっきりした形ではとられていないわ

けです。専断の場合にはもちろん規則の上では生体を認められております。

質問 先ほど託児所の問題が出たのですけれども、私たちがの方でも結婚してやめるひとはないのですか、赤ちゃんが生まれるとやめてしまうのです。先ほど白石さんが、赤ちゃんを見ながら働いているというのを伺ったものですが、託児所があるかないか、あればどういうふうにしていらっしゃるのか。うちの方では役所の中に作りましても、混んだ電車で連れて行くのが大変ですから、地域で作ったかどうかということを書かれておりますが、そういう点を伺いたい。

白石 託児所はないのです。私のところは半商半農の小さな町ですから、託児所はありませんし、一つある幼稚園は満五歳にならないと入れないので。五歳になればなんとかうちに置いて勤めに出られるのですけれども、私は乳飲用を抱えて学校に勤めたのです。自転車に乗って子供を負って学校まで行って、近所のおばあさんのうちに預かって貰ったわけです。

質問 職業婦人として将来に希望を持ってないという暗い面に、男女差の問題があると思う。結局結婚すれば職場を追われる。それから教員であれば四十五歳になれば社会通念として退職勧告を受ける。これは共稼ぎの場合もあるわ

を持っていないのも否定できない。それから教育程度も一般に男子に対して低かった。しかしなにより一番問題なのは、社会そのものの全般的な一つの遅れ、もつとむずかしい言葉で言えば、民主革命の不徹底とか、日本資本主義の後進的なゆがみだとか、そういうことになるのでしようか、これは抜かして、社会的な通念がある者に利用されているところに問題がある。これがいわゆる人間関係で解決されるかどうかは非常に問題だが、具体的な問題として、使用者との間に誤解その他があつて、よけい事態を悪くしている場合があるのは否定できず、話し合いもある意味では意義がないとはいえない。だが本質的に言って、労使の関係が力と力で解決しなければならぬ問題が多いことも事実だと思う。むしろ人間関係を考える場合に、自分たちの悩みが大量の中でどういうふうに取り組まれるか、みんなの意見の中でどういうふうに取り上げられて、力となつて出てくるかという意味で、希望や意見が正當に述べられるような職場を作り出すことが、まず問題解決のための前提条件だと考える。その意味で明るい職場の人間関係という問題はちがった角度から問題になって来るので、問題解決に大きな関係を持っている。こういうふうにお答えしたいと思います。

同会 これで第三部会の一日目を終りたいと思います。

けなのです。社会通念という言葉が善い合理的があるように、男の方々（決議機関や理事者はほとんど男）は考えているようですので、松島先生にその点をお伺いしたい。

質問 女子の賃金は男子の四三・六パーセントという数字を先ほど示されたけれども、なぜそういった差がつけられているのか、そういった差が話し合いによって解決されるものかどうか。

松島 非常に重要な大問題ですが、急いでお答え致します。この二つの問題は本質的には同じ内容を持っていると思います。結局一般の社会通念として、女子労働が結婚までの一時的な、家計補助的な労働、悪い言葉で言えば口減らし的な労働だと言われます。実際問題として女子の職業従業者ほど弾力性のある、好不況により増減するものはない。ですからさっきの臨時工と女子労働は同一的に見ては悪いのですが、非常に似た性格を持っている。つまり女子をふみ台として経済機構が成立しているわけで、こういう社会通念から四十五歳の退職とか、大きな賃金差も出てくる。ところが現実的に見てだんだん女子の職業の質が変わって来ている。しかしそれにも拘らず現状には、むしろそういう社会通念が一部の人間に利用され、こういうところに非常に不合理がある。これはなぜ起るのか。それは結局先ほど申し上げたように、女性が肉体的なハンディキャップ

(第一日閉会)

同会 それでは昨日に引き続いて部会を始めます。初めに昨日のお話し合いについて、書記から簡単に報告をします。

書記 最初にこちらの会合に出席なさるについての職場での反響から始められたのですが、大体皆さん非常に職場でも喜ばれ、激励されて出ていらしたということでした。中には一、二県の方が、手続きの不足から上役に叱られたり、またはちょっとした誤解から労働組合の方からちょっと文句を受けたというようなお話も出たのですけれども、大体的には労働組合からも非常な声援を受けて出ていっていった。中には臨時職員でありながら、特別休暇扱いにしてみたり、上役から激励の言葉を寄せてもらったというようなこともありました。

次に同僚間の人間関係については非常に問題があつてその中でも特に性の違いによる問題に話し合いの中心が置かれました。そのほか身分の違いによる問題、職場の違いによる問題、未婚者と既婚者との環境、年齢差による環境があげられました。性の違いによる問題の中には、責任あるポストが占められていないこと、学校の先生方の場合、担任の教師になれないという例があげられました。またお掃

除やお茶汲みの問題については、戦務内容できめられてい
る異は問題はないけれども、まだそれがはつきりしていな
いというのが現状で、結局女の側から言えば、お茶汲みの
問題は職業人としての婦人に家庭の妻と同じものを求める
男性のエゴなんだと語られ、これについて男の人は、たし
かに戦場の女の人を低く見る傾向があって、雑用に使っ
ているけれども、女の人自身も従属的なことに甘んじないよ
う、もっと男の人を理解させるように努力してはいいとい
うことが出されました。

身分上の問題としては、臨時職員と本備いの職員との問
題があげられ、特にボーナス期におけるいやな雰囲気、臨
時職員同士で本採用の枠を巡っての摩擦が多少あるとい
うようなことが語られました。また学校出の人と実地を踏ん
だ方との間にもまだ問題が残っていることが出ました。戦
場の違いによる問題としては、特殊な場合でしたけれど
も、バスの車掌さんの場合、乗合と貸切勤務の者との摩擦
があって、どちらかが優越感を感じているというようなこ
と、また現金を扱っている戦場の人たちが、上役からは泥
棒扱い、罪人扱いをされるということが語られ
ました。既婚者が能率が下るということで、未婚婚者との
間に摩擦が生ずること、最近では特に女が戦場で締め出される
傾向があるので、女でありながら他人を引摺り落す傾向が

られました。

最後に戦場におけるこういう暗い人間関係の解決にはど
うしたらいいかということについては、社会問題として解
決する方法もたくさんあるけれども、まず手近な解決策か
ら考えていこうということで、話し合いによって解決をし
なければならぬけれども、やはりまだ女の人には相手の立
場を立てて話し合うという気持ちが非常に不足している。自
分に直接関係がないことだと無関心な場合が多い。ではど
ういうようにして話し合いの場を作るかということが今日
の会議に持ち越された問題です。

司会 昨日たくさん問題が出されたとはいっても、出し
尽されたわけではなく、残されている問題がまだあること
ですから、今日は昨日出された戦場における人間関係の問
題について、どうしたら明るくなっていくだろうかという
ことを話すと同時に、新しい問題を入れながらやっていき
たいと思いますので、まず今日討議したい新しいものにつ
いておっしゃって頂きたい。

(四) 世代、思想の差による対立

唐崎 年齢差、言いかえれば世代別による対立というも
の、それから思想と知識の差による対立、それから職種別
の問題、それから組織を持っているものともってないもの

戦場の中に見えてくる。非常にいやな空気が戦場にあると
いうことでした。これについて男の側からも、同じような
問題は男の中にもあり、職場自体の民主化が必要だとい
う話に進みました。

次に上役と下役との人間関係の問題点としては、戦場の
中には上役と下役が私的に結びつこうとする傾向が非常に
あるということ、下役の人たちは生存競争に負けたくない
という気持ちからなんとかして上役に認められたいため、お
盆とか暮に贈物をしたり、個人的な事を上役に認めて
貰い、他人を蹴落しても上のポストを獲得しようとする空
気が残っている。また上役の人は非常に個人的に世話をや
くかわりに、下の者に忠誠を尽くして貰いたいという気持ちが
強く、親分、千分のなつなかりができていて、それが昇進
にまで影響しているという話が出ました。

これについては松島先生から、男はどうしても家族を養
っていかなければならないという気持ちから、女の人より卑
屈感があるから、戦場の民主化は女の人の手によらなけれ
ばむずかしいと御意見がありました。

次に働く者と社会人との人間関係で女の人が働くという
ことについては大體理解しているが、まだ戦場によって
非常に蔑視されているということについてバスの車掌さん
や女中さん、看護婦さん、給食婦さん達から具体例があげ

のとの間における人間的な交流というものの、そういうもの
を取り上げて頂きたいと思えます。

司会 それでは最初に世代別による対立のことから入っ
ていきたいと思いますが、実際にはどんなことが起きてい
るでしょうか、戦場でお仕事を進めていく上に、あるいは
戦場での生活の中で、どんな対立的なことが起きて来てい
るでしょうか。

金沢 私たちよく上司に、君たちがまだ若いからはず
りわかっていない、年の功で解決するなどとよく言われる
のですが正しいと思っただけ私たちの意見については、
少しでもいいから受け入れてほしいと思います。

安久 おんなじことが言えると思うのですけれども、正
しいということはもう首も承知なのに年輩の方たちはよく
言えは悪いことに妥協しやすくなっている。そこに若い者
と年輩の中がしっくりいかないというふうに思います。私
たちは正しいことを正しいとおきたいのです。それが
年輩の方から言わせれば、それは世間を知らないと言われ
るのでしょうけれども、そういう点がまだ問題として残っ
ていないのでしょうか。お互いが反省しなければなら
ないが、私たちが反省する面においては、正しいのをそ
のまま正しいとしてぶつかっていくのではなく、年輩の
方たちの意見を尊重しながら、どうしたら正しいことを通

せるような世の中にしていくかということを、少しずつでもいいから漸次やっていかなければならないと思うのです。

白石 若い者には若い者の意見があり、また年寄りにには経験があり、若い者のあがが見えるのです。あらの衆しこになりますとほんとうにこれは暗い人間関係になってしまいます。若い者には若い散策があるのです、私ども戦前の教育を受けた者と、戦後の新しい教育を受けた者では考えの違ひはもちろんあるのですから、一応聞いて、もっともだと、一たん受けておいて、けれどもあなたの若さと意気は見上げたものだけれども、私の経験からいって同じような道を歩んで来ているけれども、そういうふうなことはこんな結果になるのだということを、お互いの心と心との触れ合うような話し合いをして、私は今のところ円満に來ている。

司会 若い方から年寄りはこういう態度だというお話がありましたが、若い方はこうだという御意見がありましたらどうぞ。

唐崎 私は若いとき、若い方が今おっしゃったような意見を持っていたのです。でも理論と実践というものがちぐはぐなんです。いっしょうけんめい正しいことを言っているけれども、結局現実の力強さに流されてしまうのです。

登きに職場に來て、それで自分に与えられた仕事だけ要領よくやってしまえば、あとは遊んでいるという、これは極端な例ですが二つのグループがあるわけです。全体の立場からものを見ようという人たちは、御台場極端に働きかけて、こういう考え方があるのだからというふうに持っていくのですが、相手は逃げるのです。逃げるのを今のところ追っかけていません。積極的に行なうという段階にはまだ追っついていないのですけれども、「あなた方の言うことはむずかしくてわからない。そんなにむずかしいこと言わなくても、今日の仕事をやっていくのに不自由はないのだ。やれ組織だ、やれ組合員だ、やれ仕事と言ってもしょうがない。たまには仕事の手がすいて遊んでいるときには、おもしろい話をしよう」ということになる。仕事を持っていて働いている以上、より能率的に有効にやろうという者との差が非常に激しい。そこで感情的な対立が起る。消極的なグループは自分の仕事以外は全然ノー、タッチなんです。周りになにか起ると知らん顔をしている。そういうところに職場の明るい人間関係をぶち壊しているという一面と、それから仕事の能率を非常に低下させているという一面があると思います。もう一つ、積極的に働きかけるグループに属する者の反省ですが、むずかしい言葉、むずかしいことを言い過ぎると思う。そういうことに関心の薄い人にできる

あとで反省したときに、公式論ばかり言っているためなんだ。私は今若い方ですけれども、私どもは力仕事ですから、若い者が見ていてもあれは年寄りにには無理だと思ふことは、「そこおのきなさい、若い者の仕事だから」というように言うのです。そうすると年寄りの方も若い者に任すというふうな気持ちになるのです。私たちがなにか言うときには、気持ちの触れ合いができていから、若い人の言うことを聞いて受け入れてくれるのです。

小沢 結局年をとった人は世の中の経験を積んでいるわけ、職場においても、事務その他に精通しており、早く覚えれば熟練工、若い人は見習工なんです。その気持をお互いに理解して、私は若い人のあがが見えても愛情をもって話し合いをするように持っていく。若い人は年寄りの古い気持にばかり目をつけないで、経験のあることを考えて、結局歩み寄ろうとすれば、決してそこに摩擦はないと思います。

司会 次の思想と知識の差による対立についてはどうでしょう。なにか特に職場で困ったようなことはありますか。

島山 自分の職場のあがを申し上げるようで恥かしいのですけれども、組合運動に関心を持って、広い立場から職業について考えていこうとするものと、ただ単にお小遣い

だけわかりやすく話しみやすく話をしていくことは大事だと思ふのです。ですからやはりお互いに手を握り合せて、対立するという関係でなく、もっとそういうギャップを埋める努力をしなければならぬと思う。

吉田 私のところは病院の給食部で、年齢もまちまちなのです。先に入った人が若くて、給食の調理の技術が優秀で、あとから入って来た人が年とっていて、初めの人より技術がまずいというので、なかなかしゃっくりいかないうことがあったわけですがその場合に私は、仕事の目的の認識をもつことが一番いいのではないかと思ひ、患者さんのためにいい食事を作るのだということをよく知って貰って、お互いに教え合っていくということで解決したのですが、結局仕事の目的を知ることとが一番重要なことだと思ふのです。

(五) 職種による差別

司会 それでは年齢のことも思慮、知識も出て来ましたが、今度は職種のことも組織のことも傳わずに話しあってみましょう。職種のことは昨日も渡辺さんはじめはかにも何人かの方が触れていましたか……。

谷 学校の場合は、学校の中に校長先生、普通の先生、それから事務員、役員などがあるのです。それで教員は

事務員よりは上だ、事務員は小使いさんよりは上だという
ものがあるのです。同じ労働者であるという立場で物事を
見たら、そういうことはいえないと思うのですけれども、
そうしたものがお互いに人間関係を暗くしているという事
実があるのです。

金沢 私たちは多勢で寄宿生活しているのです。学校の
友達が一組に入っても事務に回ると現場の仕事に回る
ものとあります。そうすると事務に回ったものを感情的に
やつつけようとして、お話し合いをしなくなったり、特別
扱いに見て、嫉妬心からその人を引き離りおろそうとする
考えが強いのです。ですからそういうことを改めなければ
だめだと思います。

安久 病院に勤めておりますが、その中の職種に医師、
事務、看護婦、掃除婦、調理、栄養士の方、それから薬局
関係もありますが、仕事が進んでいる関係上、おなじじ立
場ですのに、それがなんだか医師とか薬局とかそういうも
のが高く見られるということがあります。医師と看護婦
だけを取り上げてみても、医師が上に立って看護婦は
下におるというのが今までの姿だったのですけれども、中
に自分のたちが改めても、世間の人がそういうふうに見
てくれるということが悲しいのです。そういう上下の考
え方が、まだたくさん残っていると思うのです。

た給食婦のくせに、先生にあんな態度をするとおっしゃ
たそうです。それで私は自分の親近感のつもりで言ったの
で、決して悪い上った気持ちで言ったのではない。誤解しな
いで下さいというお詫びしたのです。人格上の実力があ
りましたら、そういう誤解は自然に解けて、やはり人間対
人間の一応の尊敬を持ってくれるのではないかと思いま
す。

松島 突発問題としまして、学校を出て職場に入った
ときには、皆さん非常に理想を持って、いろいろなことを考
えているのです。ところが職場で一番先に感ずるのは幻滅
だと思えます。職場に入ってくるときは明るい気持ちで入っ
て来たものが、だんだん卑屈になる。学校で教えられたこ
とと現実の間にギャップがあるのでしょう。

学校では理論的には社会のしくみや、そのあり方につい
てかなりつっこんだことを教えている。その意味で最近の
教育の進歩は、いろいろたたかたながらも昔にくらべて非
常に大きいものがあると思いますが……。

(一八) 身分的な差別

司会 ではなぜ身分的差別というものが出てくるのでし
ょうか。

小沢 結局職場にも見られる封建性というものが、いく

渡辺 お互いに自分の仕事を忠実に守って、仕事を離れ
たときに平等になる、上だとか下だとかというのは一応仕
事のこと、それを離れたときに弊別しない社会通念を
私たちが作らなければならぬと思うのです。

安久 仕事から離れたら平等になるということはちょっと
間違っているのではないかと思うのです。仕事についてい
ればそういうことは仕方がないというのではだめだと思
うのです。たとえばあくまでも看護婦という仕事と、医師とい
う仕事は対等の立場であって、お互いが対等の立場でそれ
ぞれの職場を守っていけばいいのではないか。その仕事を
離れたら平等であるが、その仕事では仕方がないという考
え方は、私としては間違っていると思います。

唐崎 渡辺さんのおっしゃることはやはり使用者と被使
用者の立場があり、使われている方は使われている立場に
おいてその仕事をいっしょうけんめいして、その持場を離
れたときには、御主人とは対等でありたいというのではな
いかと思うのです。

私の経験したこと、給食婦の上に献立主任といって学
校の先生がいらしゃるのです。あるときその先生が向う
からおいでになったのです。それで普段親しくしているも
のですからつい「先生ちょっと来て下さい」と目ごころの親
近感でものをいったのですが、あとであの人は新しく入っ
たら理論ではそれを取り除かなければいけないと言っても、
抜けきれないでどうしても底に流れていると思うのです。
ですからそこをどうして抜けたらいいかという方法を見つ
けなかったら、この問題は何年先も続いていくのではない
かと思います。

安久 今方法に話が進んで来たわけですが、地方
大会に出た話を申しあげたいと思います。学校の先生はお
互いに先生呼びわりするわけですが、これはどうかと思
うのです。私たちの病院の中でも先生がお互いに先生呼びわ
りをする。ほかの方が先生というのは普通なんです、お
互いに先生と呼ぶのはどうかと思います。地方会議でお
っしゃった方は男の先生でしたが、生徒にも「さん」づけ
で呼ばしたというのです。そういう教育方法をされたそう
ですが、人間的な繋がりが、心の触れ合いというものも、呼
び方一つで変わってくると思うのですが、いかがでしょう
か。

松島 小沢さんの御指摘なさった問題が一番根本的な問
題だろうと思います。昨日の話で、いわゆる「話し合
い」が大切だということになった。ところがその前提条件
はなにかということがまず考えられなければならない。つ
まり義理人情とかいろいろあるものでわれわれは縛られてい
る。個人の解放を理念的に一番先に考えてみる必要があ

なる。こういうことを考えれば、話し合いも大切だけれども、その前提条件として人間の解放、自分の尊重ということとをまず皆が考えてみなければならぬし、また話し合いも、こういうものを簡めていく方向に向うものがなければならぬ。だがその話し合いを、さっき言った思想と知識による相違、世代による相違、職種による差別、こうした差がいろいろに訪れている。これを満たすために、テクニクとしてどういうことを心がけたらいいか、これがこゝで論じなければならぬ中心的なテーマだと思う。もう少しこういう問題に絞って考えていったらどうかと思うのです。

司会　職場にそういう方たちと話し合う場というものがあ
るでしょうか。つまり上の方と、下の方と、自由に話し
合える空気があるでしょうか。

て、そこでお互いに御飯を食べながら魚憚ない意見を吐くわけです。なごやかな話し合いが今できております。

佐々木 私のところは勤務している人が少ないのですから、さつき氏家さんがおっしゃいましたように、趣味によって結びつくということがないのです。同じ趣味を持っている人がほかにはいないということが起って、それぞれ別々なことを考えたり求めたりして、そういう結びつきがないのです。スポーツをしたり、俳句をやったりコーラスなどの集まりもやっていきたいと思うのですけれども、人数が少い関係で身近かに仕事のことについて不満とかどうしたらよくなるかというようなことについて話し合っていないと思います。

小沢 趣味による結びつきや、食堂で御飯を食べながらの話しあいもとてもいいことですけれども、発言が思うようにできないという方で、割合にものを書ける方がいるのです。そこで私たちの職場では一つの文集によって、下の方が上の人に言いたいことを書く「職場の声」という欄がたくさんあってありまして、そこへ三行乃至五行にまとめて自分の言いたいことを書くようにしています。それに對して上の方も妥当な解決があれば書きますし、またそういうことを考えていても、今はその段階にいていないというようなことなどを書いて文集による意思の交流をや

っております。

唐崎 地方会議でこういうことが出ました。落書帳を作ることなのです。トイレットの中に落書帳を置いて、それも無記名で言いたい放題のことを書くというのです。それはトイレット以外でも出すことがあるのですけれども、自由に誰にもこだわらない気持ちで書くということになると、トイレットの中が一番いいという話が出ておりました。

司会 グループを作って話し合いの場を作っている、なにか弊害といったものがありますか。たとえばあまりに仲良くなってしまうグループが排他的になったり、ほかのグループとの対立や、その仲間にはなんだか入っていない、にくいというようなことがありますか。

金沢 私たちの職場でも演劇部が盛況活躍しているのです。演劇はほんとうに合わなかったらだめだからごく限られた人ということになって、入りたいと思ってもあまり自信のない人はなかなか入っていけないということがあります。

大森 私も学校に勤めているのですが、五十人ほどの教員のうち、十人ほどが女の教員です。大体年代が二十代で、皆さんすぐ親しくなりますので、毎月一回集まってソフト・ボールやバレーボールの試合をするので、仲がよくなれるのですが、二人だけ年をとった先生がいて、バレーボ

思っております。

司会 あなたの場合はさつき谷さんがおっしゃったように、ほかの職場の方と連絡するということがちよつとむずかしいですね。

樺 全然ないわけです。県の方では保母の集まりはあるらしいのですけれども、村がおそろしく孤立しているところですから、全然中央との接縁がなく、組織も全然ないのです。ただその職場で人と人とが触れ合う、ということだけで、お互いに啓蒙し合っているということです。

松島 大休話し合う場合、さつき氏家さんのように俳句とか、一所に食事をするとかいう同一の行動、同一の関心を中心として話し合いの場を持つことが大切だというのが今のお話から受ける印象です。一つの職場とか、一つの企業体とか、年齢の等しい者、同じ希望を持った者、趣味を等しくする者、こういうような人々の間には互いに同じ関心が働いていることが多い。こういう共通の条件を見出し、その条件から話し合いの場を作り出していくということとが非常に大切で、また先ほどのお話しのように、人々はまだ民主的な訓練を受けていないので、なかなか人前でのことが言えない。こういう人々には文章によって意見を聞くことも大切でしょう。サークルを通して、民主的にものが言える訓練をすることも大切です。その意味で共通の

1ルをやってもサーズがなかなか入らないというので、仲間に入って頂けない。二人の四十代の先生が親しく話し合っ

て来て下さらないということでも悩みを持っておりま

司会 樺さんは汽車を降りてバスで六時間も離れたところの保育所の二人きりの保母さんの中の一人ですね。二人きりというのはいいいこともあれば悪いこともあると思

すが、話し合いはどういうふうにしていらっしやいますか。

樺 たった二人きりで性格ががらつと正反對なのです。

とにかく二人は仲良くやっていると村の人たちは言ってくれるのです。私はどっちかというところ引込み思案の方で、自分を押し出す力に欠けている。もう一人の方はどっちかというところ仕事もばりばりできますし、奥に積極的なのです。私があとから入って、その方に教えられることがたくさんあったわけなのです。私より四つ下のその人も私をやっぱりお姉さん扱いにして、とにかく人がいらして、二人の中はとてもうまくいっているのです。性格が合わないからといって悩んでいらつしやる場合でも、それはほんとうに相手の人をいろいろな面で信頼することから、非常

にうまくいくのではないかと思います。たった二人の組み

場を持つこと、そして出来るだけ違ったものの中でも、同じ関心を見つけて話し合っていく、これが大切だ。一

所に働いている職場の人々の間では、必ず同じ希望が関心がはたらいているものです。といっても、それ等の人々の間に、年齢の違い、既婚、未婚、地位の差違などなかなか克服しにくい、違いがあることもまた否定出来ない。こういうものを打破するには一体どうすればいいか。これがさ

らに突っ込んだ問題だろうと私は思うのです。

唐崎 私が職場に入ってきたときには先入感から、学問のある人は違うとか、私たちとはレベルが違うという見方をされました。私の態度の中にもそういうものがあつたことはたしかです。その空気から自分の方がいけない、自分の方がもっと謙虚にならなければいけないということに気がついたので、自分を一応下げてしまつて、下げた中で人間同士の結びつきをしたわけです。それから徐々に自分の理想の方にみんなと話し合いながら無理のない形で、たとえば落書帳も作りましたし、私たち給食の二年間の組合の動きを記録したり、私たちが社会的な地位は単なる炊事婦のおばさんということではなく、こうした意識を持たなければいけないというふうな話し合いに持っていきました。それにしても、まだまだ皆さんの抵抗があり、その抵抗に対して私は一歩下つてまた二歩前進するというような心

纏ってやっています。

渡辺 グループを作ろう。話し合いの場を持つとうとするときに、上からの専断があるのですけれども、皆さんそういうことはありませんか。

大村 ちょっと私的な話をしてそれが上役の方に通じて、呼びつけられるというようなことがあります。私たちが文藝を出した一番の原因は、個人個人に話せなかったからです。個人個人で解決がつけばお茶汲みの問題を何べんもここで喋る必要はないわけです。

それで一寸まとめてみますと、皆さんの今まで言われた意見も含んでおと思いますが、解決の方法として社会的な面と個人的な面と両方を考えたいと思うのです。社会的な面ではやはり広く大きな立場で皆さんの力を結集するということが第一です。そのためには私たちの場合まず身分的な職制を打ち破ること、それは賃金問題とも関連すると思います。

その次は責任のある仕事を受けること、特に女性には職場に進出することが近代的な人間関係を作る一番大事なことだと思います。それから一人の人の問題でなくみんなの問題としてとり上げて解決してほしい。一人一人ではできないわけですから、常にグループの力で解決すること、旬会も結構だと思っています。しかしそこを果して先ほど出た話

それを自己学習、自己批判に向けるべきではないかと思

もう一つは一般的な社会の問題になりますが、報道の真実性とよき指導性を持つてほしいこと、新聞社の方があまり商売気分を出されて、内容と違ったタイトルを替かれると、当事者も非常に迷惑するのです。

松島 一寸気がついたのですが、話し合いということ、一体なにが達成されるのか、これについて皆さんの考えの中に、大体二通りのものの考え方が混在しているように思われて来ました。一つは近代の職場は突に恐るべきもので、そこには大きな組織があって、自分に与えられているのはそのなかのごく小さな仕事だけだ。自分がいくら何かしようと思っても、組織はなかなか動かない。これからえてして人々は孤立感を感じがちだ。この点面白いのはデズニの漫画のミッキーマウスです。これなど見て喜んでいるのは皆大人で、あの漫画は大人を対象としており、恋愛が出て来たりして子供に見せるためのものではない。なぜそれを見て大人が喜んでいるか、結局漫画というものはみな筋が同じだ。鼠は猫から追っ駆られ、猫は犬から追っ駆けられて、いまにもくわれそうになる。人々はこれを見てはらはらする。つまり近代人は世の中が思う通りにならない。そして職場の大きい組織を考えた場合、自分の無

のように、あまり献身的になり過ぎて家庭の雰囲気を感じるといふことは、近代的ではなく、女性自身を一番しいたげている家制度のものを感ずるのです。そういうことになると思ふマイナスになるので、サークル活動自身はいいけれども、運び方についてみんなが考える必要があるのではないかと考えます。

次に私が一番考えることは、青年婦人協議会の消滅として、世代の差ということになります。三十、四十の御婦人が積極的に若い青年層の行動の中に参加して、みんながこうしようという意思の決定をするのに入ってほしいということ。先ほど小沢さんの言われたように、三十、四十の人は一応社会的にもポストを出めているという意味でも指導性を持たなければいけないと思います。

次に組織を通じての交流は、井戸端会議を井戸端会議で終らせないためには自己学習というものが必要ではないか。結局問題は批判しても行動の力をみんながあまり持っていないために、自分の考えはこうだということをもみんなに理解させる勉強が足りないのではないかと思う。

それに関連して時間的な余裕を作ること。農村で電気洗濯機買ったら余計お隣さんが泣いた、そういう話はあまり近視眼的な目先のことしか考えていないと思う。少くとも電気洗濯機を買った目的は時間、労力を節約するためで、

力感や孤立感で、たえず不安になやまされている。人々は漫画をみて、そこに何物かにおわれている自分の姿を見出してはらはらする。ところが漫画は必ずハッピー・エンドになっている。ハッピー・エンドにならない漫画は成立しない。鼠は猫から逃げおろせ、あわよくば猫は一撃をくらわされている。猫は犬に一撃をくらわせず、ポパイは最初やつつけられたからホウレン草の力をかりて最後は必ず大きなやつをやっつけている。要するに近代人は漫画を見て、最初はらはらしながら、救われるのを見てほっとした気持ちになる。そして一撃を加えるのを見てい知れない喜びを感じる。つまり俳句の会でもなんのサークルでもいい、同じ年齢層の同じ関心を持っている人々で話し合うことは、自分たちの失われた人間性を回復することになる。そして孤立感から解放してくれる。こういう意味で話し合いということを考えていらっしゃる方が一方にいます。

同時にこういうこと以外に、今日の職場や社会にはいろいろ非合理的な面がある。それを解決するにはさっき大村さんの発言のようにいろいろ解決しなければならぬ問題がある。たとえば孤児の問題、未亡人の問題、社会保障、最低賃金など考えればいくつもある。しかしこういうようなことを言っていて、これがよくならないければ駄目だなどといっているのではしょうがない。それ等は勿論長くしてい

かなければならないが、昨日からたびたび話そうに、自分のできることからまず一つ一つやっていくことが必要だ。それはどうすればいいか。一人でいくらやってもできない。一人で考えなやむ代りにお互いに話し合うことが必要だ。一人でできないことも何人か集れば出来ることは多い。そのための手段として話し合いを考えている人、こういう二つのものが混在しているように思う。たしかにわれわれの心に安定感を得ることも大切だし、その意味で話し合いの効果は大きい。けれども、やっぱりわれわれにとって、人間関係の非合理さを改めていく、その手段としての話し合いが大切なのではないか。だがそのためには何でもいい、ただお話し合えばよいというだけでは始まらない。それでは井戸端会議になってしまう。だがこの場合、共通な関心が見出されればいいが、見出されなかったらどうしたらいいか、これが問題です。

話し合いのテクニク

司会 話し合いの場を見つづけるためになにか手がかりがあるのではありませんか。

小沢 自分のことになって失礼ですけども、婦人部長を三年やりました間に、生活が苦しくて事務服を一枚買うのにも大変だから、理事者側で事務服を買って貰いたいと

いう問題を持っていたのですが、三年かかって獲得しました。どうしてもほしいというみんなの同じ目的に向っての欲求があるので、「事務服獲得についての話し合い、だからお寄り下さい」と呼びかけ、理事者の方で大体予算を考えて、型や色を考えて言って来なさいと言ってくれた。それについて皆さんと型のことを相談するために集ったりして、結局三年かかり事務服を獲得し、一年半経ちますけれども、そういう同じ目的によって話し合ったことが一つのみっかけになりました。その後どういふことでも与論を高めれば通らないことはないのではないかと一つ一つのめどが見つかつたものだから、その後もどんな小さいことでも婦人部として寄り合つて話しては解決していくことに尽力しています。

司会 それまでのあなたのところの女の人たちは、対立的だったのですか。

小沢 対立というのはまたちょっと違うのですけれども、戦後二つの区役所が集まって一つになったので、お互いにもとの区のカラーがあるものですから、なかなかうまくいかなかったのです。建物は現在も離れておりませんが、一つの枠の中に入つたのだから、一つの目的を持たなければならぬということ、事務服を獲得することによって両方が歩み寄つたということはよかったと思います。その

後そういう共通の問題のために誰でも来て意見を言つて下さいということにして、その後も両方から全部寄つて今はほんとうに一つの形になりました。

松島 一体お互いの対立とか誤解というのはなぜ生まれるのだろうか。私は話し合いについて皆さんのお話を聞き、たとえば年とつた方にこうして貰いたいとか、ああしてももらいたいという要求、こういう形で話し合いが出来る過ぎるような気がする。話し合いというのは、自分を尊重して、自分を理解して貰うことではなくて、その前に人の話を聞いて、その人の話を理解しようとする、そして立場を理解しようとするのが根本的な条件で、むしろ顛倒しているような気がするのですけれども……。

安久 先ほどの話し合いの場というものが俳句会などなごやかな雰囲気の中に出席したということですが、私は違った立場から出席したことをお話しします。職場が病院ですから患者をどのようにして早く回復に向けるかというところを中心の問題にして毎週一回話しあっているのです。そういうところから入りましたけれども、今ではお互いがいつも不満に思っていることも話しに出てくるわけですからそれは十人くらいのグループで働いている場所ごとによっているのですが、ほかのグループでは話し合いがうまく

いっていません。そこで会の持ち方が問題になってくると思うのです。ある人が会を持つからにはやはりいくらかの強制力も必要だということです。司会者を順にきめまして、そのテクニクの向上にも努めているわけです。その司会者が今週とりあげるテーマについてどういふことでみんな困っているかというところを探しまして、それを中心に話し合っているわけです。

地方大会で出た話なのですけれども、保健婦の方たちで作っている会で少し強制力が入っています。都合が悪くて出席できない場合にはメッセージを送って自分が考えていることをグループの人に伝える。またその会を脱げるときには、その理由をはっきりその場でいわなければならぬらしいのですけれども、その場合で、それはこれから改めたいものだろうかということを検討して、どうしても私は続けないかなというところになると会から出るのだそうですが、会を持つ場合にはやはりいくらかの強制力も必要ではないかと思えます。

松島 強制力というのは非常に大切だと思う。ただその場合、忘れてならないことは、人間というものは心から納得しないものためには絶対に立上るものではないということだ。だから人々を強制するには、まず何よりも人々をよく納得させなければいけない。しかし人々はほんとうに

必要性を自認しても、なかなか踏み切れない。こういう場合に強制力というものが非常に有効性を発揮する。だがこの際そのリーダー・シップが問題で、そういう活動に出てくれない人たちの立場をリーダーがどう理解するか。そういう人々にも必ず何かの理由があるはずだ。そういうことをよく理解してあげることが先決問題だ。しかしこういう場合にも大体二つの場合があると思う。たとえばあまりいい例ではないけれども、学生時代に僕はあまりお酒は飲めないけれども、友達に引つ張られてあるおでん屋に三年間通った。ところがその三年間に、そのおでん屋にいた看板娘が嘘をいったのを発見した。それは看板娘が年を二十三といていたけれども、私が大学に入った時も卒業する年を二十三だというんだ。これは嘘を言ったことになる。だから嘘を言っていることを知っているに違いない。しかしこの場合も、彼女をして嘘をいましていろいろな心理的な葛藤があるはずだ。それは女の人であればどうも年を若く言いたがる傾向があるらしい。それから彼女はおでん屋の看板娘であるという重責を担っている。その意味から営業政策的に年を若くいうこともあるかもしれない。このようにまずその人の立場を理解することが必要なのだ。ところがこの場合は比較的簡単だ。しかし人間は意識

ら、そのような行動をとらなければならない人間の心情そのものにスポット・ライトを当て、それに同感して泣くのだ。別の例だけれども、ルイ十六世紀でギロチンで首を斬られたマリー・アントワネットは侍従から「近ごろ農民どもがパンが喰えないといって騒いで困る」という話を聞いて、「パンが喰えないなら何故お菓子を食べないのか」といった。これはいまだに笑い話として伝えられているが、深窓に育ち過ぎていて、彼女のなかにそもそも価値概念がない。われわれならパンが買えないければ、それ以上に高いお菓子が食べられるはずがないということがわかるけれども、彼女にはそれがわからない。つまり人間は意識するとならないに拘らず必ず立場を持っている。女の人には女の、男には男の立場がある。僕なども貧乏教師としての立場から抜けきれないために必要以上の誤解が生れる。それでそういうことを超越しようとする努力、そして相手のこのような立場を理解しようとする努力が必要だ。話し合いの運動を始める場合に、まず自分たちの立場を主張するのはなくて、いろいろな意味で相手の立場を理解することが大切だ。そして誠実に話し合うことが必要なのではないだろうか。

白石 井戸端会議、トイレット会議、お風呂場会議、それが女の人たちの真実の声が赤線々に表われる場所なん

しないで立場を持っている。つまりイデオロギーという概念だ。たとえば高見順の書いた浅草小説に「如何なる星のもとに」というのがある。その中で高見順は浅草になぜ親しみを感じたかということ面白く書いている。それは彼が豊田正子の書いた「綴方教室」というのを映画で見た。その中でブリキの職人の父親は非常に気のいい人だが毎日になってもやった仕事の金を振って貰えない。どうして年にくれを暮らしていいか心配でしようがない。それで酒を飲んで暴れる場面があった。その映画を高見順は初め丸の内で見たら、この場面が多分に喜劇的に見えて、あちこちでどっどっ笑い声が上った。ところがもう一度それを浅草で見た時、同じ場面のあるところであちこちですり泣きの声が上がった。それで高見順は本能的に浅草が好きになったという。同じものを見て泣くと笑うというのは全然反対だ。映画が同じである以上、見る観客そのものに違いがあるに違いない。簡単に言えば銀座マンと浅草マンの違いだともいえる。つまり銀座というのとは、どちらかというとホワイ・ト・カラー園、中産階級の娯楽場だし、浅草は庶民階級の娯楽場だ。人間というものはどんなに努力しても、自分の基礎である生活はなれてはなかなかものが理解できない。同じものを見ながら銀座マンは俳優の演技に焦点を合せ、それが喜劇的に見えるから笑う。浅草では同じものを見なが

すけれども、教養の低い話題が多いのです。実際お弁当のおかずの話、うちのお惣菜の話はするけれども、私たちの職場の悩みはなかなか出てきません。また私の職場でも毎週司会を輪番制でして話し合いをしているので、一年間も続いている間に若い人も、女の人も司会をすることになりました。そうしたら大変なごやかなので、力をずつと伸ばして、はつきりした意見を言えるようになってきたと思います。

谷 今のお話では、話し合いの内容についてはおかずの問題などしかできないというお話でしたけれど、みんながそういう段階にある場合は、共通の問題を持つということ、そうしたおかずの問題などから、どうしてこんなまじいおかずを食べなければいけないかというような身近かな問題に取り組んで、それを掘り下げることによって、私たちは煮詰まるといえる結論も出てくるし、さらに掘り下げた問題でなく、いつもおしゃべりの中に出てくるような問題の中から話し合いを持つことを私は言いたいと思います。

安久 白石さんのおっしゃることも谷さんのおっしゃることもわからないことではないのです。というのは白石さんのはそういう話題にとどまらずということをおっしゃりた

かったと思うのです。谷さんはそういうところから入っていった方がいいことだと思ふ。それからもう一つ松島先生がおっしゃった、異なった立場の人がそういうものに入っていくかれないということは、今までの教育というもの自分の思っていることを発表するような教育でなかったために、そういうテクニクに大変欠けていると思ふのです。話そうということ自体をひき出すという意味で、私は強制力という言葉を使ったわけですが、そういう違った立場の人たちは無理にということではなく、テクニクの問題としてなのです。

唐崎 先ほどの谷さんの言葉に少し補足したいのですが、このことを考えるときにやはり原因はなぜか、その結果はなぜかという事がらを追って考えることが大事だと思ふ。先ほど松島先生から御解はなぜ起るのでしょうかということから始まって、先ほどのお話のように人それぞれの誤解を理解して話し合うことが大事だけれども、相手を知るためにはどういう方法をとったらいいかということ考えたのですが、低い問題かもしれないけれども、その人の正しい立ち、身の上話ということもよく知る必要があると思ひます。

白石 私がきたいある工場の住宅の井戸端会議の話題というものは非常に通っていてAという井戸端会議のグループ

で持っていくにはどうしたらよいかという話になったと思ひます。また、話し合いをするには、相手の立場を知ることが必要であるとともに自己の確立、自己の解放が大事だ。また話し合いにはテクニクも大事だということ、いろいろな御経験などがあげられたように思ひます。では松島先生にしくりのお話をおねがひいたします。

松島 昨日からお話ししていた問題は男女の問題、職場の問題から発して、職場それ自身の非合理的問題といろいろあげられて来た。こういう問題をどうすればいいか。それには客観的な社会そのものが良くなければだめだともいえる。ところがそれをいくら待っていてもだめだ、自分たちのできることから一つ一つつけていかなければならない。出来ることを、大きな問題に結びつけながら、一歩一歩上っていく努力、これがわれわれにとって一番大切な道だ。そのためにはどうすればいいか。まずお互いに話し合って仲間づくりをすること。職場づくりをすることが大切だ。自分たちが自由に意見がいえ、本心に自分の職場だと思えるような職場を作らなければならぬ。その際同じ企業で働いている人間、同じ職場で働いている人間、同じ職種、同じ年齢、同じ生活の人々、こういう人々にはいろいろ共通な条件がある。話し合いはこういう条件から次第に入っていくかなければならない。しかし話し合いで重要

プに入ったときには、その人はだんだん低下するが、Bの住宅の井戸端会議の婦人の仲間に入ると、知らず知らずのうちに向上するということです。ですからおぼろの心配、育児の心配、旦那様の不平、姑さんの不平などを抑り下げるといふことも非常に結構だと思ひますが、井戸端会議を有効なものにしていくことも必要ではないかと思ひます。

安久 地方大会に出たことですけれども、同じ職場に男と女が働いているところで会を持ちますと、男の方の出席率が非常に悪い。それはなぜだろうか。女が集まっていると男の方は眠いて帰ってしまふらしいのです。そういうところに出席される方は男の同僚からなんだつまらない、幼稚だとみられるではないかと思ふ。そういう考え方が男の方にある、出席率が悪いという結果になるらしい。それから女性の出席率が悪いということについて反省しますことは、会に出てもなにも喋らないで坐っているだけではつまらない。努力しようと思ひないでそういう話を敬遠する傾向があると思ふのです。

員会 私たちはここで二日間重って話し合いをしたわけですが、たゞさんの問題がある中で取り上げられた問題は非常に少なかつたと思ひます。まだまだ残されておりますけれども、ここまで一応、明るい人間関係をつくるために話し合いをすることが大事だけれども、そこま

なのは、自分を主張することではなくて、まず相手を理解するために努力することと自分自身を義理人情から解放することだ。そして新しい人間観、倫理観をみんなが身につけるように努力し、また話し合いもこうした倫理観を持ち合えるように進めていかなければならない。しかし最後に大切でありながら、中途半端に終わった問題がある。さっき安久さんのいわれた強制力の問題だ。非組織的な、一つのもやもやしたサイルというふうなもの、それは話し合いのために最もいい基盤だ。しかしそれはさらに組織化されていくことが必要で、その場合非常にいい例は、職前に生活協力運動というのがあった。岩手県のある村に学校の先生が赴任して行った。そこで彼が見たのは、教科書も買えない子供たちだったし、貧しくて家の手伝をするために学校にも出られない子供たちだった。その先生はこういう場合どうすればいいかということを学校時代には教えられていなかった。どうしていいか迷った。先生は、まず自分たちの周りの生活の子供とともにふりかえって見ようと思つた。そしてみんなで生活そのものを繰り方に書いていくとした。そしてなぜ家が貧しいのかということを考えてみようと思つた。この運動が岩手県から始まって、だんだん方々に広がっていった。そして立派な文集ができるようになった。県にはそれぞれ支部が出来たし、次第に大き

な全間的の組織になっていった。これは残念ながら戦争で中断されたが、こういう生活を見つめるという運動は、現在でもわれわれの間にいろいろの意味で生きている。たとえば戦後の民法の改正などでも、あれを与えられた改正だときめつけてしまふのは簡単だけれども、歴史の中でいろいろ有名無名の人々が、一歩一歩合理的な生活へと努力していったという基盤がなければ、与えられた憲法でも理解することすら出来なかったはずだ。われわれはやはり日常的な基盤から発して、それを組織化し、一つの力にしていることが大切だ。その場合に有効なのが話し合いで、われわれはあくまで相手の立場を理解しつつ、忍耐強く話し合うべきだ。分ってもらえないからといって、その努力を中断すべきではない。世のなかに理解し合った人間関係などというものは絶対に存在しないともいえる。分ってもらえなくても、そうした状態を無視に求めて、あくまでも努力をつづけていく所に人間の使命があるともいえる。都合う以外に、時々なテクニクというものは存在しない。こういうことがこの会談の結論だったような気がします。

司会 これで二日に亘りました第三部会の討議を終ることにします。

白石 私は学校ですが、産前産後六週間のお休みが頂けます。その間は産休補助教員というものが県として認められるのですけれども、実務問題から言うとあとに残された同僚が苦勞致します。その苦勞するということはお互いの女の仲間ですから、授乳の時間とか給食の時間、体操のときとか、助け合います。ですが産前の六週間の休みというのはなかなか良心的にできないのです。授乳のためには午前三十分、午後三十分の哺乳時間があります。託児所は理想としてはほしいものですが、現在のところはありません。質問 話し合いのテクニクの問題で、安久さんは強制することも必要だというふうに言われたのですけれども、私は話し合いの場ではまず雰囲気第一ではないかと思えます。話し合いの場に出る人たちが、ハンマーを振る人でも土方をする人でも、節くれた手を叩いても恥かしくないというような安心できる雰囲気が必要だと思うのですが、そういう雰囲気になくても安久さんはテクニクとして強制力は必要であるというふうにお考えでしょうか。

安久 もちろん、そういう明るいなかやかな雰囲気は前提になりますけれども、その場合考えられますことは、その場が明るくなごやかな雰囲気になるために努力するということは、そこに集まる人たちがみんなの力によってなるのではないかと思うのです。しかしとかく会がうまいかな

質問 応答

質問 既婚者の能率問題が出ていたようにすけれども、やはり既婚者は家事にわずらわされるのが多いと思います。そういうものに對して職場の中でどういうふうな対応策を講じているか、お聞きしたい。

大森 私自分の考えていることをちょっと言わせて頂きます。昨日も既婚者と未婚者の問題でこのことが出て、難方でしたか既婚婦人の場合はどうしても仕事の能率が下るので、それでも頑張らざる人にはできるだけ残ってやって頂きたいということがありました。私は現実の問題として結婚なさっている婦人は、どうしても職場と家庭の両立はむずかしいと思います。もちろん人一倍努力しなければいけないと思います。それにはまず自分の決意が一番大切だと思ふ。周りの未婚女性も協力することは必要と思ふが、結婚しているから早く帰らせて貰いたい、赤ちゃんが熱があるから休むというような甘えた気持ちでいると周囲のものが非常に迷惑を蒙る。それは家庭で夫とよく話しあって、少くとも家事労働は協力しあって、できるだけ職場にその影響を持ち込まないようにして頂きたい。

い場合、司会者とか、会を開いた当事者の責任のように思われるのは誤りだと思ふ。私がさっきテクニクとしての強制力と申しましたのは、そういうなかやかな雰囲気の出えに、さらにそれとはまた別の問題としてです。今までの教育方法が特に女の場合、自分の思っていることを話し出せない、そういう訓練に欠けていたと思ふのです。そういう点で強制力ということを上げたはずで、質問 文化サークルのお話ですけれども、臨時工の方も入っていらっしゃいますか。またサークルで俳句の問題などについては皆さんが非常に親しくお話ししていらっしゃいますけれども、職場の問題をそのサークルに持ち込む空気があります。

氏家 臨時工も入っているかどうかは十分承知しておりません。私は組合員の中での問題としてお話ししたのですけれども、職場の問題は句会が始まる前にもっと座談的に出る場合もあります。それも固苦しいような気分ではなしになごやかな気分での日常の問題も出されるのです。

質問 上の人も下の人も多勢いらっしゃるということですが、職場の下層の人たちの不満などが出たときに、上の人たちがどういう態度をとるか、職場のいろいろなむずかしい問題がサークルが終ったあとで出されたときに、そういうサークルは解散しなければならぬのではないかと

いう懸念があるのですが……。

氏家 今私が申し上げたのは、日常の仕事の面について座談的に話が出るということは、上役と下役との不平、不満がそこに出来るという問題でなしに、もっと日常的な軽い話が出るということです。

質問 職場を明るくするには話し合いによって理解を深めていく方法が遠くて近道だという結論になったようですが、社会の組織、機構と密接な連絡がある場合が多いのですが、その点どうお考えですか。

松島 話し合いで皆の意見が出しあえるような職場をつくる。しかし皆で意見を出しあい、希望をのべあえればそれは当然、社会の組織や機構の問題にぶつからざるをえない。社会の組織や機構が不合理なら、それをあらためるような動きが話し合いの中から出て来なければならぬ。ただ組織が悪い、機構が悪いと莫然といってもはじまらない。それを改革する力が皆のなかから生れることが必要だ。莫然た不満というのではなく、このようなものを生み出すために必要なのがまず話し合いによる仲間づくりだと思います。

質問 今回のテーマである「人間関係」という言葉と、婦人労働の問題を考えると、やはりもっと日本の労働問題にも関心を向けるべきではないかと思うのですが、この

ことについてお尋ねしたいと思います。

松島 職場で話し合いが行われる場合、同じ職場で働いている人々である以上、皆さんの最も関心を持たれるのがその職場の労働条件であるのは当然で、こうしたことが話し合いの中心テーマにはなりやすいし、また関心をもたれていくことが中心テーマとならないかぎり話し合いも発展しないように思うのです。労働条件の改善も人々の意見が出しあえるような明るい職場になって、はじめて改善への具体的な力が出て来るのだと思います。その意味で大きな関係があるのではないのでしょうか。

質問 組織で決定したとおり動いた結果、誰が見てもいい場合は問題がないが、なにかちょっと問題がおきてくる場合、例えば私生活の自由を称えた結果事故が起きたとき、その責任についてはどうお考えになりますか。

松島 いわゆる組織という問題、これは組織における強制のあり方が非常に問題です。会議で何かを決める場合にも、その問題をあくまでも徹底的に話し合って少数の反対意見の人々にもその事柄の必要性をよく理解してもらうことが必要です。たとえば会議などで、よく「反対意見もありましたが、まげて御承知を」とか「時間の関係で遺憾ですがこれで打ち切ります」とかいうことになる場合が多い。これは会議の運営上仕方ないこともわかるが、こう

したことはできるだけ避けて、たとえ反対でも、多数の人々の立場を理解してもらい決定に従うことの必要性をできるだけ理解してもらいように持つていくことが必要だ。しかし現実には時間などの関係でなかなかそのようにはいかない。その一つの助けになるのがサークル活動で、徹底した話し合いで納得してもらおうべきだと思います。そうでないかぎりいくら組織で強制してもなかなかうまくいかないのではないのでしょうか。

司会 どうも皆さん御熱心にこの会議を御支援頂きましてありがとうございます。

第四部会 社会生活を中心として

出席者

宮城	太半	文子	(主)
秋田	小田	玉子	(助)
福島	渡辺	まつ	(助)
石川	中島	晴子	(主)
山梨	青木	めぐみ	(主)
長野	関	みさ子	(主)
滋賀	平山	琴子	(主)
大阪	道倉	乙子	(主)
広島	平野	美貴子	(主)
高知	久保	恵子	(主)
長崎	本多	道子	(主)
大分	吉村	玲子	(主)
東京	金平	文二	(主)
静岡	菊池	正吾	(主)

アドヴァイザー
東京都立大学教授 磯村英一
婦人少年局婦人課 猪股和子
婦人少年局婦人課 赤松良子

が、個人の資格で出席されるにもかかわらず、家庭とか、団体、部落、近隣などで、皆さんが抵抗を感じなければならぬような状態であったということは、この部会で、考えてみなければならぬ問題ではないかと思ひますので、はじめにこの問題を中心にお話合していただきたいと思ひます。

全国婦人会議出席についての人間関係

司会 これから第四部会を開きます。
私たちは、家庭とか、近隣とか、職場の人間関係をもつだけでなく、一歩外に出れば、団体や、グループの一員でもありますし、大衆の一人としても、いろいろな人間関係を結んでおるわけです。社会における人間関係を、団体における人間関係と、大衆生活における人間関係とに大きく分けて討議を進めたいと思ひます。
団体における人間関係の中には、団体内の問題と、団体相互の問題、団体と団体に入っていない人との問題などがあると思ひます。大衆生活における人間関係といひますのは、いろいろなあるわけですが、まず地域のひととの人間関係、それから大衆同士と申しますか、例えば電車で偶然乗り合せたひととの人間関係とか、同じ映画を見てゐる観客としての間がらなどや、また銀行や役所の窓口の人間関係とか、買物をするお客さんと、店員との関係というような職場のひととの人間関係とか、孤児、老人、身体障害者等、そういう特殊な状態にあるひととの人間関係、また外国人との人間関係など、いろいろな人間関係があると思ひます。

それでは、今日は団体における人間関係について、お話を伺つておきますが、その前に、昨日からいろいろお話を伺つておきますと、皆さんが全国婦人会議に出席するのにも、何らかの抵抗を感じられたような御様子でした

本郷 私は、サークルの人や、婦人会の人に、とても應じられた送りがたをされ、本当にたのしく、感激の中に出発しましたけれども、あるかたは、地域の有力者に、地域の恥になるような問題をもって部会に出てはいけなないといわれ、御自分は地域のために正しい意見をみんなに聞いてもらひ、みんなに考えていただくために出てくるのだ、という信念の下に、出掛けられ、このことはラジオでも全国放送されたと同つたのですが、そんな問題が、もっとも私たちの周囲をとりまく大きな問題ではないかと思ひます。
平山 私は官舎といひますが、今度こういう会にゆく帯入って共同生活をしていいますが、今度こういう会にゆくといふことになりましたら、「私たちのまわりはよくできているわね」とおっしゃるのです。まさかそのことを言うのではないだろうといふことをおっしゃられて、これはや

はりありのままを話してはいけなかつたかしら、と考えておられます。

司会 自分たちのことは言われたくないという気持です。

平野 女のかたからは非常に歓迎されて、出て来たのですけれど、男子のかたの非常に大きな圧迫を受けて来ております。実は私、広島で原爆を受け、個人的には愛児を失っておりまして、私自身も原爆のために、二度の手術をしまして、死線をさまよっておる関係で、人よりも社会全体のために、大きく手をつなぎ合って戦争のない世界を築き上げなければいけないという信念にもえています。それで一生懸命やっているわけですが、男子の側からいいますと、私が少し正しい意見をはき過ぎるのだそうで、それで婦人大会に平野さんを送った、云いたいことを言われてしまふだろうというのです。「子供を現場に送るな」という意味で日教組の先生方からいろいろ御尽力をいただいておりますが、「日教組のかたと親しくして、日教組の先生の手先に使われていけば、お宅のお嬢さんの縁談に差支えるだろう」とか「日教組はアカだ」とおっしゃるのです。今日非常にうれしかったことは、最初に宮沢先生が、「正しい信念に基いて行動しよう」とすると、孤立の状態におかれることがあるが、そういう周囲の圧迫に対しては敢然と闘って

克服しなければならぬ」ということを、おっしゃいました。あれでまた私は一つの新しい勇気を加えられまして、私のやっていることは、社会全体の人が——PTAのかたも、婦人会のかたも、地域のかたも、手をつなぎ合ってゆこう、という目的に沿っているのだから正しいことだから、帰ってもますますこの運動を続けてゆこう、という自信を更に得たわけです。私には非常に強い圧迫が、男子側から加えられております。

吉村 私ははばまれた原因というか、そういうものが、ちょっと違うのです。学校の教師をしています「学校の先生は、もっと学校で、ちゃんと子供の教育をしたらどうか」という意味のことを言われるのです。そういうふうに学校内で、私たち人間関係をはばんでいる点と、もう一つは、地域に帰って部落の人から、「やっぱりあんな人でなければ、こんなことはできないだろう。普通の人と違ってもの好きだから」と、いうような、白い目で見られるのです。喜んでくれているのか、皮肉を言われているのかかわらないような挨拶を受けるのです。学校の先生は学校だけで仕事をしなければいいのだろうか。それ以外のことをしてはわるいのだろうか。何か割切れない気持で出て来たのです。

中島 私は鉾山から参りましたが、親分子分的なつながり

りで、鉾山の秩序が保たれていると考えられておりますところ、私が、それは正しい明るい人間関係でないというようなことを申しましたら、そういう思想をもつことは、鉾山の秩序を乱すことであり、経営のマイナスになるように思っています。指導者のかたがあやぶむような目で見ていらっしゃる。私はむしろ経営にプラスになることであると思うのですが、指導者層のかたが、ヒーマンリレーションということを研究していられなければならないために、そういう抵抗を感じて参りました。

青木 私はこの会議の所感文に「母親と女教師の会」というものに対して、自分のいろいろな考えを書いたのですけれど、地方婦人会議で「なにをお書きになったのですか」と言われて、こういうものを書きましたという、私の言葉が終わるか、終わらないうちに、婦人会の幹部のかたが「母親と女教師の会」というものには私は必要を感じておりません」とおっしゃったのです。それに対していろいろな意見が出ましたが、続いて女の教育委員のかたが「たしかにそれはいらぬでしょう」というようなことをおっしゃったのです。私は、女の人になかなか発言できないから、女の先生とお母さんが、気楽に女同士の立場から発言する訓練にも必要であり、それからお母さんと先生というものが、なにかしらしつくりゆかないで、お互いに女性の向上

ということをはばんでいるような状態に対しても、必要だと思っていたのですが、全然いらぬというふうに言われたときには、私が孤立状態になってとても淋しいものを感じました。母親と女教師の会というものにながらも、もっている現職の先生が出ていないのは、とても残念でした。もと女校長だったかたが、やっと助け舟を出してくださいただけです。

久保 いつも集っている私たちの仲間の人たちは、みんな今度の出席を喜んでくださったのですが、やはりあちこちの婦人団体の中には、平和運動とか、原水爆反対とか沖縄の返還問題とかいうことをやっている人は、すぐアカだとみる傾向があります。私は足がわるいのです。このことは自分の人生観、価値観にも影響していますが、私もこの水爆実験の問題に相当力を入れてやっておりますので、出席が決定したとき、「あなたはアカか」という質問をうけました。思想とか、信仰というものの自由は憲法で認められているのであるから、こんな質問はすべきではないのにも思いました。正しいことをみんなが言えるようにみんなではど立ち上らなければ駄目だと思っております。

磯村 いまお話を聞いてみると、二つの問題があると思います。一つは平野さんと、久保添さんのおっしゃったもの、これには原則的なものがあります。男性がこれに反対

するといわれますが、必ずしも男性だけに限らないと思うのです。あとで、男性の代表が二人おられますから意見を承りたいのですが。たまたま平野さんの相手になったかたが男性だったのではないかと思うのです。ほかの、たとえば平山さんのお話とか、吉村さんの学校の先生のグループの反対、中島さんのほうの鉱山の仲間同士の反対とか、あるいは青木さんの、母親と女教師を結ぶ会が必要であるかないかという問題などは、今朝ほどの宮沢先生のお話にもありましたように、団体のエゴイズムの現れだと思えていいのではないかと思います。われわれが、こういった団体に属しているか、いないかは別問題として、なにかそういう団体が、全国婦人会議などの代表になるのが当り前だという特権意識がある。ところが皆さんはそれ以外の立場で、出て来られるから問題がおこる。そこあたりで団体のエゴイズム、利己的な人間関係があるとみられるのです。

しかし、これからの社会生活はいろいろな団体に、属してゆくのが必要でありますから平野さんのお話のように、一つの団体に属して、それからまた、全国の婦人会議に出る。そして新しい社会生活にあるいは団体生活に加わるということは明かに一つの進歩です。そして、お互いが寛容と、理解とをもって、その進歩を喜ぶのが本当だと思えます。喜ばないというのは、中島さんが仰る親分子分という

たに欠けているという感じがします。ただ、婦人週間に、皆さんは関心をもって、非常に御熱心でいらっしゃいます。が、まだまだわれわれの職場でも、いろいろな啓蒙運動をやっておりますが、本当にこういう全国会議ということを知っている男性はあまりないようです。

平野 私の場合はボスなんです。それから圧迫が来るわけ、政治的なものにつながっておるわけです。私たち女同志は手をつなぐことに成功しております。こういう大会に出ますと、帰って報告いたしますが、皆さんが喜んで下さって、ますますグループ活動において、一つの成功を納めるわけです。そうすると、次期の選挙の際に、自分たちの組織が脅かされるだろうという、一つのエゴイズムから来ている。決してそれには負けませんし、恐れもしませんし、言いたいことは言うほうなのですけれど、そういう面での圧迫が、非常につらく来るわけです。意志の弱い女のかたは、そういう圧迫に堪え兼ねて、手を退いておしまいになることもしばしばあります。

磯村 少くとも、全国婦人会議の出席者のかたが、そういう形でもって男性に対する影響を与えているということ、婦人会議の成功とみていいですね。少しは抵抗を感じても、それに負けないで、出ていただくということは、確かにいい傾向だと思えます。

ったようなものが、団体の中で出来ている結果ではないかと思いたいのです。どうでしょうか、お二人の男性のかた……

菊池 特に男性からの非難攻撃があったというお話でしたけれども、それは男のかたが、顔役という立場にいらしての非難というふうに考えられると思うのです。私が婦人会議に出席するようになりまして、男の立場として非難、あるいは抵抗というものは、ほとんど感じられませんでした。日本人というのは、一つは習慣というか、一種の義理、儀礼的な要素があって、素直に喜んで祝福できない。この点では、私たちの仲間、あるいは近所のかなりインテリと思われるような人々から、二、三語を聞いた程度です。

金平 私は都会に住んでおりますので、そういう抵抗は全然感じないで、むしろ意外に思うのです。昨日からいろいろ話を承って、「割合いまいしょう」ということの前に、本当のことが言えないということ、農村、あるいは地方のかたから伺って、実はずいぶん驚いたわけです。ただ男性の場合、さっきの問題は、どういふ場合でしょうか。私でしたら、むしろ喜んで賛成したいと思えます。男性の場合、自分の既成の社会的な地位を脅かされる、あるいは変化に対する抵抗というものがあつたために、反対をなすたのではないかと思います。社会的な視野が、その男性のか

菊池 平野さんの場合、常日頃から先ほどおっしゃったように、正しく意見を言えすぎるという定評をされたが、活発に動いていらっしゃる。そういうことが今回婦人会議に出席なさること、集中的に現れた一つの形で、そういう御経歴をおもちにならないかたでしたら、もっと違った形で現れて来るだろう。ですから、この婦人会議に出席することによって現れたのであって、なにか問題がそれだけではなくて、もっと広い大きな問題を持っているということを感じます。

渡辺 皆さんの御意見を聞きまして、皆さんある程度の抵抗があるようですけれど、私は書いたものが団体に関係あるものでもありませんし、自分の助産婦としての職業を通しての感想を書いたもので、あまり関係がないためか別に何にもありません。本当に明るい人間関係を作る第一歩をあげるお役目を果たすのは助産婦であるという関係から、そのお母さんを幸せにするためには、生れる赤ちゃんとお母さんの関係が、一生明るく暮らせるようにと折る気持ちで仕事をしております。平穩無事、なんの抵抗もなくとくに男の方は全然無関心ですので、むしろものたらく思っております。少しでも抵抗があるほうが、今後の成長にいいのではないかと、うらやましいくらいに思っております。

本多　こんど婦人会議に来る時に一緒に来たかたのお話で、とても抵抗を受けて出席され、不愉快な気持ちをもっておられるということを聞いて実はびっくりしたわけです。長崎の私たちのグループのかたなどは、電話をかけて下さったり、私の家にかけてつけて、私よりも喜んで下さいました。それで、私たちのグループの人間関係は、こんなにもいいものかと思つたくらいです。長崎市全部のかたが明るいい人間関係を作つてゐるのだと、私は、大いに自負しております。

道倉　私はこつこつと地域で、本当に地を這いながらやつて来たものですから、今度いかしていただくようになつたというのは、みなが目から、当然であると、祝福されて送つていただいた。

関　私の場合は、農家でして、みんな農家のおばさんです。私は生活改善グループの仲間に入つておるのですが、今度出ることにしまして、一番喜んでくれたのが、そのおばさんたちです。皆さんが抵抗を感じていらつしたやつたというので、やはり私もびっくりしたわけです。しかし私がこうして出て来られたのも、グループに入つておるおかげで、所感文にもグループのいろいろな成長の段階を書きましたし、私がそうした考え方をするようになったり、見方をするようになったのもそのおばさんたちのおかげで、

なるだろうと思つたのです。

磯村　その点では、非常に賛成です。私はそういう勝負というふうな問題より、われわれの人間関係というものは、ややもすれば、利益が伴うのです。しかも決してはだかの状態ではないのです。必ずしもゆきのかげで出てくるものから、そこに、いろいろな暗い面が出て来ると思ひます。けれどもスポーツの場合は、肉体的な条件が決定的です。それから、割合に暗い状態が少いわけです。そういう面ですなから、ということとは、青木さんがおっしゃる通りに、非常にいい考え方だと思ひます。

久保　平野さんが、圧迫に堪えられず、手を退いてゆくと、いふものに対して、負けないでやつてほしいとおっしゃいましたけれども、丁度高知では、紀元節をやつた校長の排斥問題が出てゐるのです。それに立上つたのは、PTAの副会長と、もう一人のおばさんです。この婦人が立ち上つた勇氣というものを全国的にみなが応援してあげてほしいと思ひます。一人だけでやつても、そこだけで勇氣をもつたところで、できないのです。みんなの世論が高まらなければだめだと思ひます。女の人が何かやつても、どうして成功しないのかというと、やはり「女らしさ」ということが問題なのです。政治とか、経済の力をもつということ、女らしくないといつて、かたづけられてしまつていま

私一人だけでは出られなかつたし、また私の家の周りの人たちが、本当に自分で書くということができないので、私たち農家の声を、どうか本場にありのままに話してくれ、ととても応援されて出て来たわけです。

平山　私はコーラスのグループに入つておりますが、発表会などをした場合、休んだかたには私たちが出掛けていって教えてあげたりして、少しでも自分たちがよくなるようにと思つてやつておりますから、そのグループのかたは、今度私が出て来ることを、それこそ自分のことのように喜んで下さいました。本当に人のことを心から喜べるような人間関係になりたいと思つております。

抵抗の原因はどこにあるのか

司会　多かれ少かれ、なにか抵抗を感じていらつしたかたが、いらつした理由が、その原因はどこにあるのか、団体間のチガイの問題とか、ボスの利益につながる問題とか、いままでにも出ておりましたが、ほかに、こんなようなことが原因ではないか、というお考えがありましたら、おっしゃつて下さい。

青木　私、女のかたが、もっとスポーツを楽しんで、本当にスポーツマンシップというものを体得したときに、女の人間同士が自分たちの仲間の足を引張るということではなく

す。やはり貞淑な女性とか、家長制度、家制度というものが、結局先程いわれた原因になつてゐると思つたのです。太田　皆さんの話を伺つて感じますのは、平野さんの場合は、男のかたの抵抗があつたという例外みたく、あとは私たち女性自身が喜びをはばむとか、進出をはばんでゐるのではないか、ということをつくづく感じさせられました。自分たち女性が、もっともつと成長しなくてはということを感じさせられております。

小田　私のところは四百世帯くらいの部落です。何年か前に婦人部の幹部をしておりまして、いろいろな困る問題を解決したいと思つて、会議をもちましたが、出席できないかたがたくさんありました。私も経験しましたが、本当に生活が苦しいときというのは、あたりの人は、それほど感じなくても、その人にとっては生きるだけが精一杯で、無我夢中なのです。そういう人たちは、あきらめとか、我慢とか、犠牲というものが当り前として生きてゐる。それでは、その人たちはいつまでたつても、そのままだ。私たちは声に出すこと、話し合うことによつて、少しずつでもよくなれるのだということをわかつていただきたいと思います。私は助産婦ですから、どんな貧しい家へも参りますので、職業を通して、そういうかたとお話し合ひするように努めてまいりました。このような現状ですの

私が出席することについても全然歓迎を受けませんし、勿論抵抗も感じませんでしたが、それでけっこういいと思っております。

金平 女性の抵抗ということが問題になっておりますが、男性側からみて、疑問に思うことは、幾後いろいろなグループができ、それが一つにたまって、婦人としての大きな力になるうとするのが、婦人運動の目的だと思いますが、いまお話のように、一つの婦人の力としてまとめあげようとするときに、婦人の側からレジスタンスがあるということとは、大きな問題だと思います。具体的な解決方法として、さっきスポーツ、合唱という問題が出ましたが、婦人少年局の「人間関係に関する統計資料」をみますと、嫉妬したり、感情的になるといのが非常に多いのです。男性も女性も、ある意味では感情的になりやすいのは同じだろうと思えますけれど、違うのはなにかというと、男性は社会的な仕事をしています。そういう仕事を通して、社会的な訓練というのが、割と男性側にはゆきわたっているのではないかと。女性のかたは非常にせまいコミュニティの中に住んでいらして、先ほど久保添さんからおっしゃったように、政治、経済、社会的な関心という面の勉強が足りないのではないかと。スポーツも結構だと思いますが、むしろ私は、婦人活動を通しての勉強のほうが大事ではない

か。それによって、嫉妬とか、感情的になるといことが、婦人の大きな力に対して障害になるといことが、自然にわかってくるのではないかと考えるわけです。

中島 金平さんから、女性のほうの勉強が見られないとおっしゃいましたが、私は主人が会社員で、ほかの社会は存じませんけれど、会社の経営者の男のかたたちが認識不足のために、なにか抵抗を感じて来ました。経営協議会などは、しよっ中開いて、経営者の社会的責任と申ししますか、理想の社会を実現するための指導の方法とか、世論の研究などを研究する機関がないために、指導層にあるかたが、ヒューマンリレーションに対して、全然無関心です。それで私は、指導者層の更の上に立つ最高の指導機関のようなものがほしいとつくづく思います。生涯を通して、日本の経済発展に寄与することも大事ですけど、経営者がもう一面の、社会といいますが、そういう面を通じて、社会に貢献することとも考えていた方がいいと思います。菊池 宮沢先生のお話に、当り前のことをやるのに大変な抵抗を感じなければならぬ、ということがありました。が、ただいまの会社の指導的な立場にあるかたたちは、当然のことを行うのに抵抗を感じない部類の人たちだと思えます。つまり逆にいうと、当り前でないことをやること

が当り前だというふうに考える層だといって差支えないのではないかと思います。そういう人たちを更に上から指導するということは、大体において、不可能なではありませんか。私たちは本当に大衆的な、苦しい日常生活を送っている人たちの団結によって上の人たちを、指導はもちろんできないわけですけど、反省させる機会を作ってゆかなければならないと考えます。

司会 いろいろ反省や、批判が出たようですけれど、この問題について磯村先生にまとめていただいて、次の問題に移りたいと思います。

磯村 別に、まとめるというほどのことではありませんが、いままでお話を聞いていますと、皆さんのような積極的な社会生活に出る場合には、多かれ少なかれ人間関係のまさつがあり得ると考えるわけです。それが抵抗となって現われるか、あるいは協調となって現われるか、それにしても動きとなったとあらわれます。特に女性の社会生活における進歩ということを考えますと、それが積極的に抵抗であつてもいいのではないかと。むしろ、一回、二回、三回、四回と、この婦人会議を重ねて行くうちに、いままでは無関心であったのが、だんだんと一般の関心がこの婦人会議というものに集中してきて、それが抵抗となって現れ、あるいは賛辞となって現れたとみられるのです。それはむしろ

ろこの会議自体の進歩を意味するのであるし、また社会生活を新しく開拓するときには、そういう面でのまさつがあるのが当然ではないか。ここに参議員の市川さんが傍聴にみえておられるかその生活などをうかがってみると、おそらくすべてが抵抗の連続であつたともいえると思います。したがって、そういう抵抗があつても、やがてそれが世論の支持を得て、新しい社会生活の分野の拡がりを持つてくることになる。卒直に言えば、われわれが婦人会議を、男性と一緒にもてるようになったのも、そういうまさつと、協調の結果だと思ふのです。そういう抵抗があつた場合は、それをわれわれの進歩のためだ、というふうに分析してゆくのがいいのじゃないかと思ふます。金平さんの言われるように、今度はこの会議に、男性も加わって自由に討議し協調のできることは実際にまでもって行くというのがよいのではないかと思います。

団体における人間関係

司会 いままでのお話の中にも、団体の中での人間関係について、ずいぶん出ていたようですけれど、これから団体における人間関係ということについて、お話しをしていただきますと思います。

先ほど申したように、団体における人間関係の中には、

団体の中で、役員と一般会員、あるいは会員同士、役員同士という問題もありましょうし、先ほどから出ておりますが、団体相互における人間関係、団体のエゴイズムということ、また団体に入っていないしやらないかと団体との問題など、いろいろあります。所感文を拝見いたしますと、皆さん団体に入っていないしやるようですが、どんな団体に属しているのでしょうか。

平野 P T A、地域の婦人会、読書グループ、子供を導く会。

関 生活改善グループ。

本多 草の塊会。

渡辺 子供を導く会、それから母親大会に、昨年菊島から、七十何人が出席いたしましたものを基礎といたしまして、母親連絡会というのを組織しております。

司会 いろいろなグループに属していらっしやるようですが、そのグループの中で、どんなことが人間関係で問題になっていきますでしょうか。

団体相互の問題

平野 P T Aと婦人会が結びつかなければいけないと思いますが、P T Aのかたが、婦人会というところ、少し違った目で見える関係があります。P T Aの集りは、子供の幸福と

いう一つの目的に即っている共通の話題があるので、ややスムーズにゆくのですけれど、婦人会というところ各種の団体に属していらしたり、若い層もあれば、お年寄りのかたもありますから、共通の話題というものが、持ちにくいわけですね。緊張をなくして、一つの共通の話題から出発してゆかないと、人間関係が明るくゆきませんので、その点頭を使っているわけですね。

磯村 P T Aと婦人会は同じであったほうがいいというお考えですか。

平野 P T Aのかたも、婦人会のかたも、手をつながなければならぬときは、一緒にやってゆかなければならぬという考えをもっております。たとえば、こんなに婦人会で話し合うということも、結局人間が幸福になるためで、原水爆が一発落されたら、なにもかもオジャンになるわけですが、原水爆に対しては、広島は非常に関心を持っていて各団体が一致して、一つに足並みを揃えなければいけない問題だと思っております。先ほど金平さんから、女性自体に対する御批判が出ましたけれど、うまくいっているところもあります。ある意味では、一つのセクシ・ナリズムですが、自分たちの団体だけ成功し、自分たちの団体だけまともればいいという小さい視野に立ってものを考えるかたがあります。こういう面では、大きな立場から、みんな

が手をつないでゆきたいというふうに努力しております。

司会 いま団体と団体との関係の問題で、反撥意識というか、手をつないでゆける問題なのに、手をつなごうとしない。そういうようなことについてはいかがでしょうか。

青木 私のところは、P T Aの役員と、婦人会の役員が同じ顔で、場を交えてやっているわけです。それで婦人会のかたが、くさわけ時代から、P T Aでもつべき運動会のバザーの準備費というものをにぎって、P T Aにやらないとういのです。それが三年ばかり前に、学校の創立記念日のときに、半分だけあげるということを言ったのです。私それに対して、すいぶんわけのわからない問題だと思いましたが、よそのP T Aのかたから聞いても、どこも婦人会が運動会のバザーを、牛耳っているところはないのです。

中島 私どものところは、飯山の社宅で五、六百世帯ありますが、労働組合のほうは、組合員の家族だけの主婦会というものを作って、家族ぐるみの闘争というか、ストなどのときも協力してもらおうという態度に出る。そうすると会社のはうは、それができては大変ですから、主婦の会の結成を防ぐために、会社の管轄の下にある婦人会を作って、会社の命令をきかすようにする。そういう二つの組合対会社の争いの中に、婦人会がまきこまれている。私はそ

れではいけないと思ひまして、婦人会というのは、そういうことに全然関係のない、もっと社会的に立ち上っているものだと思っております。

団体内部の問題はないか

磯村 いまお話を聞いておきますと、先ず団体内部の問題があるのではないかと。私、東京でしばしばそういう団体の精進度と申しますか、あるいは組織度というものを調べております。ところが団体というもののの中に、地域に住んでいるから義理やつき合いで入るという団体は、本当の団体ではない。自分が目的をもって、それに対して同意して入るのが本当なんです。義理で入っている団体などでは先ほど第一に問題になった、抵抗などがよく現れているのです。つまり合理的でなく、感情的な関係からできているのですから抵抗が出て来ているわけです。

そこで、第二の問題としてわれわれは、団体というものをどう見るかということです。私はその場合において、三つの面で団体というものをつかまえております。それはまず団体の会費を払っているかどうかという問題、それから団体の、少くとも総会に出席しているかどうかという問題、それから役員になった経験があるかどうか。この三つの課題です。これで団体を調べて参りますと、東京のP T

Aは、一番会費の払い度が高い。ところが出席度は必ずしもよくない。地域の婦人会はPTAより会費の払い度はずっと減っている、出席度もよくない。しかも出席もしないでおりながら、なにか一つの婦人団体を中心とした問題があると、一体幹部はどうしているの批判が出てくる。そういう団体の人間関係は、極めて不調和の状態です。民主的な明らかな人間関係の団体であれば、出席もするし、会費も払うし、ときによっては、役員にもなるというのが当然の形です。そういう状態にならなければ——これは男性の団体だって同じですけど、特に女性の団体の場合、団体団体と言いますけれど、結団度のうまいあやふやのものではないか。社会生活では団体意識というものをはっきりさせることが、人間関係を明るくする上において、非常に大切だと思うのです。そういう面で、皆さんの属している団体は、どうなのでしょう。

幹部の会になつていないか

道倉 婦人団体というものが、現在あまりにも幹部の会になつていないかと思ひます。婦人団体、婦人会というものは、個人の一人一人に浸透する会であつてほしいと思ひます。頂上の会ではなくて、底辺から盛り上げる会であつたならば、もっとスムーズにゆくと思ひます。なぜ

幹部の会になるかと申しますと、あまりにも外部との交渉が多い。会員の多いところの会長さんは、連絡協議会の会長にもなれるし、たまには、いろいろな問題をもつて東京に出てゆくこともできる、新聞にも出るということのために、会費を払わなくても、会費を浪山するということになるのではないかと思ひます。会長の顔も知らなければ、名前も知らないという人が、沢山あると思ひます。そうではなくて、もっと個人の一人一人の会であつたならば、明るい人間関係が保たれてゆくのではないのでしょうか。

中島 みんなの会にしたいといつても、合理的な組織ができていないために、ならないのではないのでしょうか。それで私は、生活部とか、文化部とか、家庭のサーヴィスセンターとか、細かく分けて、みんなが参加して働けるようにしました。そういう二、三人の集りから自然と声が出るような組織がないために幹部の会になると思ひます。もう少し合理的な婦人会にしたいのではないかと思ひます。

司会 どんな組織を作られたのですか。

中島 大きく分けて生活部、文化部、それを更に細かく研究会などにして、みんながそれに参加し、研究発表会で提案したり、討議したり、また投票箱を作ったりして、みんなの声を拾うようにしたものです。組織が完備してない

ために、幹部だけの会になるのではないかと思ひます。

本多 私たちのグループは、十人足らずで、ひととき楓が機嫌となつて生れたものです。だから会長というものがいませんし、特定のリーダーもいません。いろいろな人が集つていのですけれど、一応齊くということ集つております。毎月例会などで、討議したり、書いていたりします。全部一人一人が会の責任者であるという自覚でやっておりますから、運営が総意でなされ、自分たちの会だから、ほおつておいたら自分たちにはね返ってくるから、一生懸命やろうというので、非常に私たちはスムーズにいつています。

関 私のところは二十名足らずの小さな生活改善グループです。大変水の不便なところで、毎日二百メートルくらいの坂道を、どんな忙しい農繁期でもくまなければならなかった。ところが水道が全部にひかれた。そこでその労力と時間を、ただ田んぼにいったらだめだから、みんなで話合う時間にしようというので始めたわけです。それで集まることはいいいかというだけではわかつたのですが、会の運営をどうしていいかわからないで、いままでの婦人会のように、役員制にして始めた。二、三回開いたのですが、農繁期になると、役員の人には負担がかかる、また畑で草とりもしなければならぬ。とにかく私たちのところは、自

分を伸ばすより、一本の草をとるほうが大事だと考へている人たちがいます。そのうちに、私はゆかないとか、役員のくせに出ないとか、喧嘩したいになつてしまふわけです。それでよく考へてみると、このくらしいことは役員がやっだらいいとか、役員がいるのにこんなことをすると出しや服りになるといけないとか、ヘンな機嫌のような気持もとてもあつたのです。そこで、みんなが楽しく、無理をしないで出るには、この会をどうしたらいいか、というところから話の糸口を見つけて、思つていふこと、苦勞のこと、何んでもみんな話して、この会がみんなが育て、みんなの会であるから、役員だからとか、あの家のおばさんだから、ということ捨てて平等に当番制にして始めたのです。みんな慣れない人たちが、折角始めたけれど、最初は、たとえば料理の講習をすると、その用意する人は、そればかりやつていふというふうな状態でした。大体一年くらいかかつて、そのかさをやつとぬけることができたのです。そうすると余計なお義理や、お世辭がだんだんなくなつて、とてもなごやかにいふようになって、現在三年目です。

本多 そういふ小さいサークルですと、とってもスムーズにゆくのです。私たち母親グループは十四人で、皆勤でそのサークルの中では、それこそうまい人間関係が作

り上げられています。婦人団体を作るときに、間違った考えの下に作れることが多いのではないのでしょうか。この間、高等学校の入学式に参りましたら、意思もなんにも聞かないうちに、「今日は会員PTAに加入していただいたので、ありがとうございました」という挨拶を受けたのです。そのようにPTAの実態が、まだ進んでいないということ、婦人会も同じように、まだそこまですぐ互いに民主団体であるという意識が高まらないのに、それを無理に運営しようとするところに間違いがあるのではないかと。私たちの婦人会は、二百人くらいですが、作るときに原因があったのです。町内にリコール騒ぎがあって、それをおこしたのが婦人会の幹部でしたが、私たちはそれに承服できないので、婦人会の総会で決議して下さいといったが、とっても忙しく、こんなに緊急の場合、総会どころではないといった調子で、婦人会の総会そのものの意識がわからなくて、会を運営しておられた。そういうことに満足できないで、新しく同士の婦人会を作ったわけです。いまでは地域の婦人会として、皆さんから認められ、婦人会そのものは、とってもよく運営されております。

磯村 草の契会などは、御自分の意思が非常に強く出されている団体ですから、人間関係がうまくゆかなければおかしいので、当然なのですけれども、PTAとか、地域を

中心にして一緒にするという会が、しばしば問題になるということでしょね。

小田 その点、私の場合は非常によくいってあります。労働組合の下部組織にあるせいもありますし、生活状態があまり裕福でない、四百世帯くらいの部落ですが、年度初めに総会を開いて、この一年の行事として一番してほしいことを、皆さんからとり、それによって一年間のおおよその計画を立てます。例えば、夫の協力がなくて困るという声が出ますと、夫と妻の話し合いの会をもつわけですが、そういう名前では、男の方が出て下さいませんので、町政を聞く会というのを添えて、町長さん、町会議員さんに出席していただいて、そういうかたの話を聞きませ、その話のあと、明るい家庭をもつための夫の協力を得る相談をするわけです。またお嫁さんとか、若い層、古い層のお話会など、とっても要望として出て参ります。それを婦人部でとり上げるのですが、それだけでは固苦しくなりますから、お料理などを一緒にします。

司会 先程道倉さんから、団体が幹部だけの会になって、会員ともあまりうまくいっていない、それどころか、会長の名前も知らない人がいる、という問題が出ておりましたが、幹部との人間関係について、ほかの団体でも、もう少し御意見がおりではないかと思いますが……。

菊池 私は去る九月に静岡県の婦人問題会議に出席しましたが、そのときにもただいまのような意見が出されました。時に幹部の会であるということは、その婦人会の目的や、存在意義とは別に、実際の活動が、実質的に生活と結びついていないのではないかと思います。このことは同時に、ただいま小田さんからもありましたように、夫が協力をしないということとも関係があるように思います。実質的に生活と密接な関係をもち、それが生活にプラスしてゆくといいことになる、無理難題だった夫が、自然と、それなら大いにやって来いということになるのじゃないかと考えます。

司会 さっきから団体の中の問題や、外の問題が交りあっているようですが、お話にくいと思いますから、会員同士の問題など団体内部の問題をもう少しお話ししあったらいかがでしょうか。

組織は要求に応じてできる

道倉 中島さんから、組織があったならば行いやすいという御意見がありました。組織というものは、作って置いて、それにはめこんでゆくものではなくて、要求に応じてできるものだというのを体験して来ております。

私は焼出されて、現在住んでいるところに参りました。

そこは土着の人がおり、それに難民者とか、引揚者とか、いろいろな階級で、大変差があります。お金持のかたでしたら、奥さん、坊ちゃん、お嬢さん、日雇い人夫みたいな人でしたら、おかみさん、離れちゃんではなくて、誰々と呼び捨てにするというくらい差があったものですから、その差のために、人と人とのつながりができないわけです。どうかして近寄るために二十代の奥さんが、みんな平等になろうということで、奥さんとか、お嬢さんとか、坊ちゃんという尊称をいっさい廃止しまして、お金持の家の方でもAさん、日雇いの人夫の人でもBさん、お金持のAさんのお嬢さんも、日雇い人夫の子供も、同じように名前でお呼びあうと、大変近寄って来たのです。それでこんなに近寄って話し合いができるようになったならば、ただそれだけでは、なにかやりたいというので、一番先に生れたのは、時間制託児です。当時、子供があるためにPTAにお母さんがゆくことができないという声が出ていたので、若いお母さんのために、年とったお母さん、が子供を預かってあげた。するとその帰りに、あめを買って来たり、おまんじゅうを買って来るのは、ものがない時に困るから、一時間十円にしたらどうかと、賛金を決めました。それで「ちよっとこの子供たのみます」「何時間ですか」「二十円」という工合で、時間制託児というのが生れました。そのうち、よ

その子供を預けて、怪我でもさせたら困る。遊園地を作ろうと子供のいないお母さんが、子供のあるお母さんへの贈物として、遊園地を作ったのです。いまでは二百五十坪の大きな遊園地ができています。遊園地ができると、よその赤ちゃんも預かる。それには育児を勉強しなければならぬ、そのためには本がある。図書室を作ろうと、私のうちの玄關を解放して図書室にしました。それからだんだん大きくなつて、入学の四月には、皆さんお金がいるから、四月のための貯金をはじめ、四月に学校にゆく人に一番の権利を与える、ただしその利子は、その人が出すということ、決して無理のない、皆が平等であつて、奉仕でないところの、その他いろいろのことをいたしました。地域の広さは三十軒くらいですが、お金などを利用したいときは、よそからでも入つていらつしやいますし、お洗濯のグループには、内職にお洗濯したいと、よそから申し込んで来ますし、「警察で聞きましたが……」といつて赤ちゃんを連れて来たりします。この頃では警察の迷子子は、全部私のほうに参ります。(笑聲)

人をその身分で見る

吉村 組織が結びつきをばばんでいるということ、私が体験したことですが、私たちは教職員組合という組織を

——私も今、教師ですから、特にそう感ずるのですが、人間を見ないで、その身分を見ているのです。教師なら教師という立場で自分が見られる場合と、自分の本当の内容をもつて見られる場合があるのですが、世間はどちらも身分で見ることが多い。最近、私は役所の窓口で人間関係を調査をしたときに、こういう話を聞いたのです。小学校の生徒が二人並んでいるときの話ですが、一人が「うちのお父さんはお役所にいっている」といいますと、相手のほうは「うちのお父さんは会社に入っている」お会社とはいわない。ここに親の身分が子供まで規定していることがわかる。そして役所を社会生活の上で上位においていることが子供の社会にまであらわれている。一つの固定的な概念ができています。これなどは知らず知らずのうちに人間関係を暗くする基盤ではないか。又大学の教授などもそういう傾向があるのです。人間の真実といいますが、本質というものよりも、イスがものをいっている。これは必ずしも社会を明るくしていない。イスよりもそこに坐っている人間を見なければならぬのですが、どうも人間を見ないで、イスで評価する。あなたの立場では、自分の内容で青年に接しようとするけれど、相手のほうは、学校の先生として見る、そこにいちがいができていると思うのです。それが考えようによつては、摩擦の原因になつていっているのではない

持っており、その中の青年部が今年の活動方針として、地域の青年と結びついて、子供の教育を進めるということがあります。私が地域の青年と結びつこうとしても学校の先生が来たとき、お答さんにされたり、いろいろ質問を受けたりします。そのうち「先生が来ると、なんにもおもしろくない、話したいことが話されない」という声を聞いて、初めてわかったのですが、私自身が青年の立場に立つて、話を本心に聞いていなかったようです。いつも質問されると答弁するだけで、本心の青年の叫びを聞いてやるうとしていなかった、ということに気がついたので、それから私も地域の青年であるということ、しばらく青年たちと共に生活してみました。その間、仲間の先生たちから、相違な非難を受け、その非難にいろいろ悩んだのですが、結局、私は学校の先生であるという身分の上に青年に結びつく必要のあるところは、しっかり結びついてゆくだけの自覚をもたなければならぬということに気がつきました。組織の中で結びつきにくいということは、本心に私たちが青年の立場に立つて、青年のことを考えてやれない、なにかの力に束縛されて、私たちは青年と結びつこうとしていたように思いました。職場の中では、いまでもあなたは学校の仕事が大変か、どちらが大変かと、非難されております。磯村 そこに一つ問題があると思います。あなたの立場

かと思ひます。官舎や社宅の生活などにもよくあることだと思います。

中島 私は、飯山の社宅におりまして、職場から五分のところにありますから、職制と社会生活がどうしても混同せざるを得ない状態です。しかも地位の差がはなはだしく、一番上は重役級、一番下は抗夫で、それを対等関係だと申しまして、第一家の大きさが違います。所長の家には電気冷蔵庫から、ピアノが揃っているということ、理窟ではしかたがありませんから、ほかの合理的な解決法で解決しなければいけないと思ひ、先ほど申しましたように、主婦の要求から組織を作りまして、その階級意識からくる反感、嫉妬というのを婦人から緩和しようとしたのです。そうしたら、いままです職制と、どうしても切り離して考えられなかったものが、いつの間にか緩和されて「ちょっと奥さん……」というふうになり、どなたでもそのバックではなくて、人間的な目で見える訓練ができるようになりました。

平山 主人が学校に勤めておりますので、ちょっと愛したことをする、先生の奥さんが、あんなことを……と、非難され、それにまた左右されるのも弱くていけないのですが、それが結局、主人の職業にもかかわると思う、やはりみんなから、なにも言われないうちに、目立たない

ようにいつもまわりから監視されているようで、好きなこともできず、ひどい人権蹂躪だと憤慨したこともありま

す。

小田 先ほどの中島さんのお立場は、会社の課長という、どちらかというと、おえらいほうに属しているかたから、ああいう言葉を聞くということは、とてもありがたいことだと思えます。私どもは労働者の家族ですが、自分の撤退とか、環境の平等とかいいうことを会社でもよく言われ、徐々に実行されるようになっておりますけれども、いまでも、上のかたの社宅とか、その近くの道路とか、あらゆる面で、工員との差がついております。団体の人間関係という問題とは、ちょっと離れるかも知れませんが、こういうことが、結局は、今年の春闘というような形になって現れてくるのではないかと思うわけで、ただ春闘は、皆さんに迷惑をかけるから悪いのだ、というだけでは済まされない、広い範囲で考えなければならぬ面もあると感ずるのです。

大きなグループの運営

平野 私のほうの婦人会は、会員が千人います。先ほどから伺っておりますと、グループ活動の面では、どなたも成功しておられるようですが、私どもも随分グループの活動では、非常に人間関係がうまくいっています。しかし千

人もの大組織になりますと、なかなか運営面でうまくゆかない。そこで昨年から私たち幹部のものが集りまして、小さいグループ活動なら、うまくゆくのに、大きなものは、なせうまくゆかないかと反省いたし、昨年度から、趣味を同じくする、いわゆる生活学級というものを設けたわけです。お母さん方が多い関係で、生花のグループ、お料理のグループ、舞踊のグループ、歌うグループと、いろいろ注文が出たわけです。強制的ではなくて、会員に、グループに参加していただいて、そこで話し合いをもつてゆこうと、去年の四月から着手しております。成功とまではゆきませんが、大変熱心に毎週一回やっております。たとえばお花を育てていらつしやるのところにいて、いきなり、「お手は休められないで、耳だけ貸して下さい」と呼びかけて、井戸端会議をちょっと成長させたような形で話し合いを進めておりますが、だんだんそういうグループに入る会員がふえていっておりますから、私は小さいグループを大事に育てていって、大きなところにもつながってゆくというように婦人会活動をもつてゆくと、やや人間関係が明るく保てるのではないかと考えております。そういう大きな団体の運営面の御経験を、私は聞かしていただきたいと思えます。

司会 大きなグループの人間関係を、うまくなすったという御経験のおありの方どうぞ……。

金平 大集団の運営について、たしかに話し合うというところが大事だと思いますが、三百人、五百人となった場合、話し合いから運営してゆくということは形式的に不可能だと思えますが、テクニカルな面で、方法があると思うのです。大集団でレクチャーの方がお話しして、その後いくつかのグループでデスカッションする。スモールグループを作つて、その中で、ある与えられたテーマについて話し合つてゆくという方法が、技術的な方法として考えられるのではないかと思えます。

吉村 あまり大きな団体ではないのですが、会のもちかたで明るくなったというので、こういうことがありました。司会者や指導者が、表面にデモンと坐わられると、なかなかものが言えないそうです。そういう方は、常に、今日新しく来た人などの隣りにいて、なにか言いたそうな顔をしているときに、その人の気持を察してあげて、それを伝えてあげる、すると、急になんだか親しくなつて、その次から気楽に話せる。そういう雰囲気、指導者や、グループの長になる人は忘れないでほしい。

小田 大きな団体と申しまして、村の一婦人部の活動ですから、何百人ということではないのですが、古い層と、新しい層と、三十五歳くらいから分けて、会をもつことによつてうまくいった例があります。三十五歳以下のグルー

プを若竹会とか、若妻会とかいう名の下に別に運営していくと、結さんは、自分のほうの会とき出たいから、若い人の集りのときは、子守りをしてやるから行って来いといひ、また若い人は、自分の会るときにゆきたいから、「おかあさんどうぞいって来て下さい」と、お互いにとても出やすくしたということです。

団体行動の終着駅は政治につながる

久保津 地方婦人問題会議のときに、婦人団体に入つて来ない人をどうするか、という問題が出たのですが、そのときに、婦人団体のありかたが、単に趣味というふうな形でつながるだけでは、人が集まらないのではないかと。こんどお米の値上りを、婦人の力でやめさせることができたというように婦人団体が一つの力をもたなければ人が集まらないのではないかと。一つの組織に参加すれば、すぐこういうことができるのだという、一つの力を本当に自分たちが持っている、また政治に結びついているという現ナマ的な自覚によってみんな集まるのではないかと、ということが出たわけです。それでこれからは大いに政治運動のできる団体というものに、婦人会などが好むと好まざるにかかわらず、どうしてもなるのではないかと思ひます。

磯村 団体の問題で、いまのことは、非常に重要な問題

だと思ひます。結局、一つの団体とか、階層とかいうかたまりが、一体どういふ共通の目的をもっているかということをはっきりつかむことが大切と思ひます。それが単に地域に住んでいるから、という漠然としたものでなく、その中に目的をはっきり出してゆくようにやってゆけば、出席する人も多くなるし、会費も払うでしょう。そういうことをお互いにしっかりと理解し合ふことが、団体を明るくする方法ではないか。それをただ近所に住むから、年輩と後輩だとかいうだけで集めてしまうと、ただ名義だけということになるのではないか。

それからもう一つ、久保添さんのお話で政治につながるということは、社会生活の一番最後の目標として、非常に重要な問題だと思ひます。社会生活の最後のゴールというのは、やはり、これは政治にゆくと思ひます。政治とのつながりは、目的意識をハッキリさせるという点でやはり団体のつながりのようなものですから、男性も女性もともに選挙の場合に態度を明かにすることが必要と思ひます。極端な表現をすれば、すべての団体行動の終着駅は直接間接に最後はやはり政治につながるのです。これは非常に大事なことと思ひます。

緊張を処理する方法

とって、同じ着いものの広場を作つてゆくことに努めております。

道倉 遊園地をなおすときなど、寄付を集めますが、お金が余計にないときは、平等に二十四なら二十四集めます。ちょっと千円以上はしいと思ひましたら、箱を捨てて穴をあけて、それを廻すと、百円札が四枚ほど入って来ますから、やはりお金持の人は良心的に、自分は余計出さなければならぬと思ふものがあるのかしらと思ひますね。一つの技術ですが、そのようにわからないように入れてもらうという方法をとつております。

平山 いろいろなことをうまくするために、どういふふうなことをしたらいいか、ちょっとはずれるかも知れませんが、一番もとになるのは、やはり感謝の気持とか、思ひやりの気持、謙遜の気持が大切だと思ひます。

団体外のひととの関係

司会 では次に、団体と団体に入っていないひととの関係について、最後にお話ししたいと思ひます。お互いに団体に入っている間は意識しないのですが、外からみると、団体のエゴイズムも相当見られる場合もあり、仮に団体に入らうとした場合、その団体が對鎖的であるということも感じられる場合があると思ふのですが……。

司会 いままでいろいろな団体の中の緊張の問題が出ましたが、人間と人間がつながっている以上、なんらかの緊張があるのは仕方がないので、それをうまく処理する方法というようなことについて、なにか御意見がありましたらどうぞ……。

木島 私は母親クラブをやっておりますが、その中には日曜のお母さんもありますし、お医者さんもあります。しかし、その会には、リーダーというのを決めてない。同じ母親の立場、女性の立場で集っておりますから、とてもスムーズにいきます。話題も、はじめは、なにか社会的な問題もとり上げようという話も出ましたが、結局、身近な問題を話すことが、一番大事ではないかということになって、ある程度、高いお母さんも、一応低くなって、一緒に進もうとしています。

吉村 私の地域では、青年と青年教師が一緒になって、「道」という機関誌を出しております。それには青年団も、自分たちの先生に対する要望をどんどん出す。教師のほうは、青年団は、こうあってほしいとか、先生の立場はこうなのだから、こういうところは無理だと、子供を伸ばすための共通の問題、それを両方から投稿する。それを青年団の係が、全部印刷して、毎月出しております。また就労グループには、希望者だけ入っていますが、そういう方法を

渡辺 地方会議に出た問題ですが、ある家庭婦人が、団体に入っていらいっしやるかたは、なにかにつけて、組織でぶつかつてゆくことができるからうらやましい。家庭婦人というのは、本當につまらない、ということをおっしゃったのですか……。

中島 私は、必ずずなにかの団体に入るべきだと思ひます。そうしなかつたら絶対に社会とのつながりがもてないと思ひます。

太宰 私も団体に入るべきだと思ひますが、自分の団体だけ可愛がるエゴイズムというものが、団体の成長をまたげているのではないのでしょうか。お互によくほかの団体をみて暮そうではないかということをお願いしたいと思ひます。

国鉄春闘は団体エゴイズムか

吉村 団体に全部入ることが望ましいということ、よくわかるのです。私も一団体に入っておりますが、今度の春闘の問題で、個人として感じたのですが、国鉄があんなに力を入れて闘争した。で、結果として、闘争で勝ったのだけれど、そのために、沢山の人が犠牲になつてゐる。そういうことについて私は、どうしてみんなを犠牲にまでして闘争をしなければならないのだろうかという疑問を持ち

ました。同様から「現代の社会のしくみでは、それは当り前だ」と言われたのですが、どうして人を苦しめることをやってみて、自分たちの組合だけをよくなければならぬのか、現に大学に受験にいった子供が、間に合わないでしよう。

青木 私はその考えには賛成です。闘争というのは、闘争のできる人間だけが、自分たちだけの条件のために、どこまでも押し進めようとしている。それからはみ出した人は、結局人間扱いされないという感じがします。

菊池 この問題は大変大きな問題で、軽々にここで論議することはできないと考えますが、私は直接被害をこうむったほうですけれども、固執にしても、全通にしても、現段階において労働者の団結権が認められ、闘争権も認められている現状で、合法的な範囲においては、これは当然の権利であると考えますが、現実には未組織の人が問題になって来ると思いますけれど、現在過渡期の止むを得ない一つの現象であって、先ほどどなたかおっしゃいましたように、あらゆる可能な団体に、皆さんが加入されて、未組織でない状態が望ましいのではないかと思います。

久保添 いまの問題で、私も丁度旅行していて、勿論迷惑したわけですけれども、私がいろいろな形で、いろいろな組織に入っているから、団体の立場がよく理解できま

ぜかといえますと、昨年から、神武以来の景気だと聞きますけれども、私たちの子供は、両合羽を買ってお金もないような現在の生活です。そういうことから、やはり闘争しなければならぬ状態にある人間は、とても大変であるわけですから、そういう二つを考えていただきたいと思ひます。

青木 闘争できる組織をもった人が、自分たちの権利だけを主張しないで、その段階にまで達しないグループが社会の中に、沢山あるということを考えて、そういう人たちのために労働組合というのが、同僚の目をもって、その人たちが、自分たちの水準にまで持ち上げてやるくらいの気魄が必要だと思います。それを労働組合の一つの仕事とされたらいいのではないかと思います。

団体に入れない人

金平 婦人団体に入る必要性は、皆さん了解されているけれども、入っていないのが沢山ある。その中には、家事がいがいというものが五〇%近くある。この人たちに對して、入っているかたは、かなり経済的、時間的に余裕があるわけですが、皆さんは、そういうかたに對して、どういうふうに応援していらっしゃいますか。

中島 余裕のある人のほうが、サーヴィス精神というの

す。組織に入れば、ただ自分が乗れないというエゴイズム、そういうものから来た判断ではなくて、他の立場に立って、結局、団体の質上げ問題が、やはり私たちの生活の向上にひびいているということの理解が、できるということです。

小田 私は金沢鉄山の労働者の家族ですが、その闘争について、二つの面から考えます。一つは、例えば、官庁の給料が、いくら上がった場合、あつぱかり上って、こつちは上らないという気持ちをもつのも、考えようだと思いますけれど、人が上ることによって、自然に、それに準ずるようになり、あとから上ることによって、普通の見方だと思ふのです。そういう意味で、ある一定の人が、いい立場になったからといって、それをひきずりおろすような考えはもってはいけません。一部の人の生活程度が、いくらかでも向上することによって、社会保障を受けているかた達も、値上げになってゆくのだと思ふのです。ですから、人の上ってゆくのを引張るのではなく、ある程度は、そういうことによつて、自分たちの賃金をあげてゆくということも考えなければならぬということ。もう一つは、闘争しないかたには、大変な御迷惑なわけですけれども、闘争した人だけを責めないで、闘争しなければならぬ状態にある、この両者を秤にかけていただかなければいけないと思ふのです。な

をもつて、家事の共同学習をして技術的にも教えてあげるとか、こつちがのり出して、洋裁の型紙なんか作って、裁つを手伝ってあげるとか、そういうふうなサーヴィスしてゆけばどうでしょう。

関 具体的な例ですが、農村でお歳さんが出られないという問題があります。いそがしいということ、一つはお姑さんに遠慮して出られない。おばあちゃんに出てもらつて、私は留守番をするという人が、私の農村には、まだいるわけです。それで私たちは、料理を習つたら、来なかつた家に行つてわけてあげて、こういう作り方をするので、よと、散えてやるわけです。そうして少しずつでも、みんなが伸びるように、小さいことですが、そういうふうにしてやっております。

道富 婦人会は実際に会費がいるから、ニョウンの人に、会費を払いなさいといっても、それでおやつを買ってやるという始末です。私は、ある日の新聞広告に、私の住んでいる地域で、映画の割引きを「何々婦人会、何々婦人会の会員に限り映画を半額にします」と書いてあるのです。それを見て、私いやな感じがしました。これがもし「ニョウンの方、生活保護者には、映画を半額に割引きます。何々婦人会」となっていたら、みんな喜ぶだろうと思つたのです。婦人会の仕事が、自分の会員にサーヴィスする

のではなくて、会に入れない人にサヴィスするという方針をとっていただきたいと思うのです。

司会 時間が参りましたので、あと傍聴の方の御質問を受けることにいたします。

質疑 応答

質問 道倉さんに、地域の状況などをもう少し詳しく伺いたいと思います。

道倉 吹田市の片隅にありました、子供をPTAに連れてゆくところになるので生まれました。当時、赤ちゃんは十円、歩く子供は五円でした。当時、十円もあれば、お母さんのおかず代になりました。いまは、皆さんの経済状態もよくなったので、歩く子供も、赤ちゃんも十円にしております。はじめは、私を通じて預っていたのですが、最近はどうしても、おやつをもってくれば、預るようになっております。

質問 遊園地は、区とか、府のものですか。

道倉 はじめ誰の分らない空地がありましたので、そこに作りました。そのときも、女がセメントをねり合わせていけば、男の人は見ておれないで手伝ってくれました。すべり台は、あるお父さんが、子供を亡くして供養に大工を使わないで、御自分で三月かかって立派なを作ってく

れました。三、四年して、土をふみならしたので、いい土地になったところ、地主が現れ、売るから、買って下さいというわけです。お金がありませんから、市役所の助役さんに頼んで二万円市役所からもらって買いました。あとは全部周囲の人の負担によってやっています。いたみますと、誰となしになおしてあります。

質問 太宰さんにお伺いします。会をお作りになるとき、大変いい考えでお作りになったということですが、それでも途中でつまづいたり、いろいろなすった思いました。

本幸 会を組織するときに、私たちは勉強しました。毎日前進している社会の動きにとじもっていたのでは、子供の幸せにもならない。女同士手をつなぎましょう。という趣旨を聞いて、皆さんに呼びかけたのです。それが結びつきのもとになって、いろいろな抵抗があっても、ちっともゆるみませんでした。今年で七年になりますけれど、未だに町の中に相当の抵抗を感じますが、会員同士はゆるみません。

質問 ポス的な動きなどは、全然ありませんでしょうか。

本幸 会の中にはありません。出席は、二百人もおりますから、全部というわけにはゆきませんが、長いこと出席

されないとい、こちらから伺います。みんなて手分けして、地域を受け持っております。総会などは、半分開りの出席率です。出席しない人には地区的なグループ活動とか、共同学習などで、その程度に参遊させております。

質問 集りは、お互いに社会的に訓練されてない人たちの集りですから、大きくなると、有名無実のものになる場合が多いと思います。それで現状においては、婦人団体の人数の限度は、どのくらいでしょうか。磯村先生にお伺いします。

磯村 私、調べているのは東京だけです。現在のところでは、小学校のクラスの単位というのがある程度まで、人間の集まりとしては適当な数です。そうすると、せいぜい五十人前後ということになります。ところが、東京の場合、そういった婦人会の出席率は、五〇%から、五五%くらいです。それから逆に考えますと、地域を中心にした婦人会の会合としては、百人くらいの単位でもおちになることが、具合がいいのではないか。その基礎になりますのは、私の考え方として、大体目の届く限り、声の届く限りというのが原則です。ですから、百人くらいを中心にした、御婦人の地域的なつながり、そのかたが集まると五、六十人になって、そこでいろいろお話できるという程度が、かなり声も届きますし、百人くらいでしたら、どなたか二、

三人が伝達するということもできる。せいぜいそんなことを考えております。

質問 封建社会から、急に自由の国家として生れ代りまして、根強い封建制と、極端に走る自由との間にあって、会の運営がゆきなやみの状態にあるところが、浪山あると思います。自分の身近かなものとしては、PTAですが、その会の運営をいかにしたら、現在の日本の状態として最もよいでしょうか。

磯村 大変むずかしい問題ですが、非常に重要なことで、たしかに戦後、女性の方が、非常に解放された。それは結構なんです。いままで、特に日本の女性には、比較的、家庭というところに、大きなよりどころをもっていた。そのために、女性が家庭から解放されても急に社会生活に出て一人歩きができないものではない。——ここにおいでのかたは、全部一人歩きしておられますが——そうではない人が相当ある。その場合に、集団への隔隔と申しますか、どこかによりどころを求めてゆく。ところが、その場合に、加わろうとするPTAとか、婦人会というのがある、あまりに既成概念や組織でかたまりすぎているのではないか。新しく入って来る人が、どうも入りにくい。私の調べたところによりますと、とくに二十になって、女性の方が成人として社会生活に迎えられ、それに適んでいくときにとくに感

じるらしいです。成人の日というのは新しく社会の一員となる日だといわれるのですが、手帳をもらうだけで、婦人会も迎いに来なければ青年団の説明もない。もしそのような時に団体の動きがあれば、新しい若い女性によるこんで社会生活、団体生活に入っていくのです。そういう面での方法をお考えになれば、まだ婦人団体をもっと積極的に新しい活動をする余地もありますし、又地域社会へのサーヴィスも出て来るのではないかと思います。既成の婦人団体にとらわれないで、そういう新しい団体の参加をお考え願えば、相当出てくると思いますが……。

質問 東京の金平さんが、東京では、全然抵抗を感じないとおっしゃいましたけれども、きつとよいところばかりを御覧になっているのだと思います。私、昨年まで下町でささやかな商売をしておりました。すると、町会の役員に婦人会の人がくっついて、町会の役員の顔色をみて、婦人会が動いております。ほとんど年寄りの方で、若いかたは意見も出せない。そういうところをもう少し啓蒙していただける方法はないかしらと考えております。

金平 先ほど申し上げましたのは、私が全然感じなかったというわけです。

司会 今日、出ました問題についての御質問ということ、お願いしたいと思います。地域の問題は、明日話し合

うと思っております。

質問 団体が家庭というか、個人にあまり入り過ぎて、かえって家庭を不幸にしているということが、特に農村に多いわけですが、婦人団体のゆきすぎが家庭に影響しているという点はどうでしょうか。

太宰 私の身近にあった問題ですが、部落で地方婦人会の会長をしておられる方が、分家の奥さんで、本家のほうからは役員として出ている。割家にスミースにあっていったのですが、たまたま婦人会の中で研究発表会があったので、それで若い人のほうが、発表しやすいだろうというので、本家のお母さんが、娘さんを出してくれた。ところが、その娘さんの発表がよかったために、こっちの会、あっちの会と、しゃっ中ひっぱりまわされて、家の中でうまくなくなったわけです。お母さんは、女性の嫉妬と、家をあけられることに対する不満で、家の中がゴタゴタして、結局どちらも婦人会に出て来なくなりました。いろいろ手を尽したのですが、未だにお二人とも出ていらっしやらない。

質問 私は二百三十何名の会をもってありますが、今年度の運営の方針として、次の役員は、全部若い方ということで、一年間を進めて参りました。それで若い世代の方を三分の二、役員の中に入れて、御一緒に勉強して参りま

して、最近では会の運営も上手になりました。ところがまたP.T.A.のほうで、非常に優秀な組織ができました。私のほうで養成していた若い世代の人を、みんな引き抜かれてしまったのです。いま婦人会の重要な地位にいるから、P.T.A.の方はとてできないと、お断わりしても、ぜひお子さんのためと言われて、とうとうタラがえしてしまつた。一年間、一生懸命やって来たのですが、その有能な人が全部とられてしまったのです。非常に悩んでおります。磯村先生に、なにかいいお智恵を与えていただきたいと思ひます。

磯村 かなりむずかしい問題ですが、しかし今日話題になりました。団体と団体との一つの新しい分化の問題——分れてゆく一つの形だと思ひます。P.T.A.の組織が強くなつたために、有力な活動分子を抜かれてしまったという問題ですが、それが政治的かなにかの問題で、それを抜いたというなら別ですが、そのメンバーが、P.T.A.のほうに、そちらのほうに自分の余力をさいて協力する目的が強く、そちらに参りましたならば、それはあまり阻止することとはできないのではないかと思います。それと同時に、もう一つ検討すべき問題は、婦人会とP.T.A.の間で、将来、分けられるとすると、どういう目的でもって分けられるか。P.T.A.にはおのずと、自分の子供と、先生と、家庭の関係

ということと限度があると思ひます。それ以外に婦人というものの存在する理由、その地域の特長な理由というものの間に線を引いて考えることが大事で、その結果新しい幹部に、在来の方がなる方が、なるまいが、またそういう目的がはっきりすれば、それには強い協力者が生れて来るべきものじゃないかと考えます。その機能を分けるという本来の目的が二つでゆけるかどうかそこが問題ではないかと思ひます。

小田 大変儲けですが、役員が両方なさるといふことは、できないのでしょうか。それではお答にならないのですが、東京などは、いろいろな層の方がいらっしやるので、個人々々で解決できないようなことを、婦人会でおとり上げになるとか、例えば、精進院の問題など、あまり手をつけられていないようですが、やはり母親の立場から、婦人会でおとり上げになって、力を入れてゆかれるというようなことも、これからの婦人会には必要ではないでしょうか。

司会 時間が過ぎましたので、今日はこれで閉会させていただきます。

(第一日閉会)

司会 それでは、昨日に引続き、二日目の部会を開きたいと思ひます。先ず、昨日の討議の内容を書記から、説明

します。

書記 最初に話し合われたことは、この会議に出席することになったためにおきた人間関係についてでした。グループや、同じ地域の人々が、自分のことのように喜んで送ってくれたという例、無関心だった例、なんらかの抵抗を感じた例などが話された。その内容は、団体内のエゴイズムとか、嫉妬、羨望などのために、この会へ出ることが、人におもしろくない感じを与えたということ、また普段から会議員のかたが、町の顔役とか、ボス——多くは男性——と対立的な立場にあって圧迫を受けていたような場合に、その圧迫が、この会議に出るということのために、より明らかになったということ。エゴイズムとか、嫉妬という問題に関して、女性自身で女性の進出をはばんでいる面があるという指摘がなされ、男性からの圧迫という面については、勇気をもって闘ってゆかなければならないということが言われた。また男性会議員から、その嫉妬とか、羨望というのは、女性に限ったものではないが、男性の場合には、職業人として、社会的な訓練を受けていることのために現れたが、多少違ってくるのではないか、そして女性も、社会的な勉強が必要ではないか、ということがいわれた。

次に、団体や、グループについては、組織の中の問題と

して、組織が幹部だけのものではなく、会員全体の自主的なものになるためには、その組織がはっきりした、具体的な目的をもった集りであることが必要であり、ただ同じ地域だから、というだけでは結合がうまくいっているかということがいわれ、具体的な目的をもつて成功した例などが話された。また人を、その人間としてではなく、身分によってみるということのために、人間関係が暗くなっているという例も出され、また技術的な面として、ある程度少数のほうで、団体としてはまとまりがよいのではないか。大集団の運営については、スモールグループなどを作って、討論などのしやすいようにすること、更に政治的な、あるいは、実質的な効果をもたらすだけの力をもつということによって、その関係を魅力のあるものにする事ができるのではないかということが言われた。

最後に、団体と組織の外の人との関係については、国鉄のストなどをめぐって、活発な討論が展開され、ある立場のかたは、組織の外の人に迷惑をかけるというのは、よくない。また未組織の人は常に無視されて、非常に困った立場にいるということが言われたが、それに対しては、自分も迷惑した側であるが、ああいう闘争をしなければ、労働者の権利が守れないものであり、国鉄のストは、国鉄の労働

者だけの問題ではなく、国民全体の生活をもよくするのであるから、それをほかから、足をひっぱるようなことをすべきではない。また闘争している人々をせめるのではなく、闘争せざるを得ないような立場に追いこんでいる、使用者のほうに対しても目を向けるべきではないか、ということが言われた。未組織の人たちが弱いのは、当り前のことで、みんなが、なんらかの組織に入ることが必要なのではないかという発言もあり、自分が組織に入ることによって、組織的な連帯感というものがわかり、ああいう闘争の必然性というものが、理解できるようになる、という意見もでた。その問題とは別に、組織と、組織の外ということに関しては、会に入れない人のために、会員がサードイスするという精神をもつことが大切なのではないか、ということが言われて、昨日の討論はおもしろいになったと思います。

地域の人との人間関係

司会 以上であります。が、団体の問題についてもまだ討論が十分ではないと思いますが、今日は大衆生活の面における人間関係について話し合いたいと思います。

先ず地域の人との人間関係について、考えてゆきたいと思いますが、これは昨日のお話合いの中でも地域の主婦の

グループなどについて大部で書いていたと思いますが、特に近所づき合いというものが、どんな面で重圧になっているか、あるいはまた非常に協力体制がうまくいっているか、どうかなどについてはいかがでしょうか。

磯村 昨日までは、団体を中心に、その中に入っている自分ということでお話をしたのですが、こんどは必ずしも、団体に入っているということではなくて、われわれが毎日社会生活をしている場合に、団体との関係で、自分たちの生活に差障りのあるような面が出て来てはいないか、という点があれば、お話をしていただきたいと思います。

平山 近所のかたが、個人の生活にあまり関心をもちすぎています。例えば夫婦で一緒に出たりすると、仲がよいとか、つまらないことを問題にして、出るにもきがねして別の道から出るようにしなければなりません。人のことは人として、はっておいていただきたいと思っています。

磯村 それは若い御近所同士にもあります。やはり年齢のかたですか。

平山 年齢に関係ありません。

磯村 それはどういう意味でしょう。どうお考えになりますか。逆にあなたのほうは、気になりませんか。

平山 自分が気にされたくないから、人さまの私的なこととはあまり気にしないようにしています。あまりにあわな

衣服を着ていても、その人は自分で、自信をもって、それがいいと思つて着ているから批評したいと思ひます。いろいろ事情があつてしていることだと思つて、あまり細かいことは気にしません、あんなの着て派手だとか、そんなことまで気にする人もいます。

中島 たえば気分がわるくてお掃除しないでいても、なんとかわかれますので、無理してもということになって、ずいぶん迷惑するようなことがあります。官舎の共通の問題ですね。

磯村 都会の生活になると、自分の家だけが一つの一番せまい社会で、外に出てしまつと、匿名でわからなくなつてしまふ。そうすれば、きつめて自由ですけれど、農村とか、山村ということになりますと、毎日の生活が、お互いに知り合ひすぎて、その結果が、そういう状態になるのではないかと思ひますが、ほかのかたで、そういうことありませんか。

吉村 私の部落も田舎ですが、隣りの家で、ちよつとしたことがあつと、みんなそれと押しかけてゆくのです。おめでたということでもなく、たとえば東京から親戚がみえられたとか、小さい坊やが病気で入院したとか、そういうちよつとしたことでも、すぐ押しかけてゆくのです。それはみんな、ほんとうに腹んであげたり、見舞つてあ

げる気持ではなく、だれかの嫌いで、しかたなく、ゆこうというのが大部分ですが、それがどこへでもゆくのです。お見舞や、お慶びを受けた人は、受けたくもないお慶びをしかたなく受けて、そうしてあげたくもないお返しを、虚礼的に返さなければならぬのです。理窟でみんなわかつていることが、どうしてもすたれないのです。

寄付の問題

金平 都会では、ちよつと皆さんと違ふと思ひますが、個人の生活に立入られるという面では、寄付行為です。たとえば消防署あたりの人が、集団で押しかけてくる。また簡易保険局のかたが、保険の勧誘にたしか名簿をもつていらつしやる。あれは国勢調査の場合に、ほかに使つちやいないというところが驚いてあります。それを区役所あたりから写して来る。そういう名簿は、必要のないかたには見せないということになっておるのに、それがたいへん詳しく、個人の家庭の中まで書いてある。そういう二つの点で、人権侵害というか、そういうことを感じております。

磯村 金平さんから出た寄付の問題に関連して、お祭りなどはどうですか、これなどは近隣を中心とした一つの社会生活ですが、それが皆さんの生活の中にうまく調和がとれているかどうか、という問題はどうかですか。

蒲池 終戦直後に、部落毎に神社の氏子会というのが結

成されて、自由意思の形ですけれど、まあ半強制的に氏子会の会員にされ、神社の祭典などに、寄付を出さなければならぬ実情ですが、こういう場合に、自由意思ということを使つても、実質的には強制という形で行われる場合が多く、話し合いの機会が非常に少いのです。特に地方の会議でも、これが問題になりました。婦人会などの団体でとり上げて成功した例もありますけれど、地方にゆきますと、祭典の主催者と、婦人会の役員というものが、だいたいの同じ系統、極端な場合は同じ家の夫と奥さんが担当している例もあります。そういうときに、婦人会の力に頼らないにしても、二人でも、三人でも団結して、その寄付が不当なものであつたならば、勇気を持って、寄付をしない、そういう形にもつていて、少しでも強制されるということとを、自分たちの力ではねのけてゆかなければならない。静岡市の小さい町内で十四軒ほど、最低百五十円以上の寄付というのを拒否した。あとで寄付金名簿が印刷されてきたとき、その人たちは、みんな名簿の上にゼロと書いてあり、いやがらせをされたということがありました。

磯村 いまのはつき合ひという問題ですね。このつき合ひということばの中に、非常にいろいろなものが含まれてゐる。つき合ひだからしょうがない。これもつき合ひ、あ

れもつき合ひだといつて、お互いの私生活の中に、自分の意思でない考えが、非常に多く入つてゐる。つまりつき合ひだといつて、非合理的なものを温存することになる。それでは社会生活に入つても少しも進歩しないのです。いまのお祭りの問題、氏子の問題などはその著しい例の一つです。文部省の統計をみますと、日本の信者の統計というのがある。仏教がいくつ、キリスト教がいくつと、ちゃんと統計になっている。それを総計すると、日本の人口が一億四千万人もいることになる。神道だけで七千万以上の信者があるとなつており、それに仏教が三千万ですからそれだけでも日本の人口は減つてしまつてゐる。これなどは信仰という個人の意志が、氏子とか信者とかいうのはつきりしない面でもとりあげられるからだと思ひます。これでは私生活の中が合理的になつてゐるとは言えないと思ひます。

平野 静岡のかたから、婦人会が一緒になつて寄付を集めるといふお話でしたが、私たちの婦人会の役員は、こういう寄付集めにだけ利用されることは、まづらごめんだといつております。そうしませんと、婦人会に入ると、率仕とか、寄付というときばかり使われて、自分たちの本當の自主的な運動ができないからといやがるかたもありまうから、寄付のことに関しては、町内の役員さんかたでやつて下さいと、はっきりした線を出しております。それでお

祭りの寄付などのときは、一応集って、与論調査をしてから決めております。ですから私の町では、強制的に行われるということはありません。お母さんがたが目覚めて、手をつなぎ合っているからです。しかし、共同募金などという大きな助け合いを目的とした寄付には、婦人会が率先して集めております。寄付も寄付によりけりで、目的がはっきりしている寄付には、婦人会が先に立ってやっております。

菊池 浜松市では、たこあげ祭りを盛大にして、これに何万という、大きな金額の寄付を要求されてたいへんなのですが、婦人会の力で、ようやくやめさせたということです。

道倉 私のほうは、町内の自治会が毎月四十円ずつの会費を集めておきまして、それで共同募金も、お祭りのときも、いろいろのことをすべてまかなっているようにしています。

渡辺 私の所も、新しくひらけてゆく町で、わりかた教養のある人が住んでおるためか、うるさいこともありませんし、親切すぎるということもなく、たいへんいいのです。町会が新たにできて、やはり四十円くらいで、普通のときはまかなってありますが、特別のときには、できる人が大かた出して、新しく入って来て、少し苦しうなかつた

には寄付をまわさないようにしております。それでけっこう円満です。

隣り組の問題

司会 隣り組というのが、特に個人の生活に重圧をもってくるというようなことはありませんか。

吉村 それは田舎にゆくほどみられると思います。私の部落は選挙になると、隣り組のどこからか、「こういふ人を推しましょう」と、いつの間にか決まってくるのです。そうすると、家庭にいる主婦とか、老人は無意識的に、みんなそれにしてしまう。若いものが「どうして、そういうふうに決めるのか」というと、「前のおじさんがそういつて来たから、しょうがない」と、なぜということ絶対に考えないのです。

菊池 隣り組であるというだけで、自分の全然考えていない候補者を推さなければならぬというお話をすけれども、私たちが、そういうことを経験していちばん感ずることは、日本の古い習慣で長いものにはまかれる式の、イージーゴーイングな気持を、私たち自身が多かれ、少かれもっておることです。私の隣り組は勤め人あり、商人あり、また自分で小さい企業をやっているものもあり、非常に階層が複雑で、小さな選挙でも、利害が必らずしも一致してな

相当根を張っているようですがこれらは考え直してゆかなければならないことと思います。

近隣のつきあいを明るくするために

司会 昨日伺いました道倉さんの場合、非常に明るい近隣のつき合いができていらっしゃるようですが、いま伺っておりますと、とても近隣の人間関係が、個人を圧迫しているようですが、何にか、そのために努力していらっしゃるようなことがありましたらどうぞ……

久保 なぜ個人の生活に、近所の人が関心がありすぎるのか、本当にその人を援助する形の批判であれば、私だったら、その人に会って、直接言っておけるのです。いちばん問題は、陰で言われることです。陰で言っている人とも手をつなぐことは必要ですから、その人と手をつなぐたのに、誰に言っていないのか、わからないわけです。なぜ陰で言わなければならないのか、というところ、結局、発言をしては損だ。ボスなどに、こういふことをいうと、にらまれるというところがあるのです。もっと公開の場で、正しいことを言う訓練をする。結局もう少しみんな、話合おうということが大切だということです。

中島 こちらで何か誤解を受けているようだから、まずそのかたに聞いていただこうと思つて、話合いましうと

いのですが、やはり隣り組という名の下に、全部一致して、推薦母体のような形で、強制せられ、選挙運動をやらなければならぬというのが輿論です。具体的なことになりますけれども、たとえば票を集めるということになりますと、その人の特殊事情によって非常に沢山、票の集まる人と、集まらない人とあるのですが、集まらない人は、非常に肩身のせまい思いをして、しかも自分の入りたい人があるにもかかわらず、自分の意思に従って投票することができない。それに対して、話合いの機会というものが、まったくないのです。私は集会の度に身近な問題でも、自分たちの意思を尊重するという方向で、発言してきておりますが、特に若い人たちが、年寄りの中に入って発言できるような方向に、少しずつ向いてきている現状ですが、まだ全部が、その問題をとり上げて、話合いをするという段階にはなっておりません。

磯村 肩身のせまいということばは重要なことばです。肩身とか、顔という問題が、わりあいかわれわれの社会生活の中にあるのですが、これは必ずしも合理的なものではないものです。肩身とは自分の身分とか、地位とかというものに捕われすぎて、自分の本質的なものがでるのをおそれるという点に問題があると思うのです。選挙などの場合に、肩身がせまいとか、広いとか、面子だとかいう問題が

いうときに、ノーコメントということはできるのでしようか。

磯村 ノーコメントの態度を示した場合に、無理矢理に意見を出すことは、必ずしもよいと思いませんけれども、その場合台に人間の生活には、いろいろな面があるので、その人によってなにか口をはこぼす話の糸口があるかも知れない。当面の問題については、ノーコメントがあっても、他に話の糸口から案外当面の問題に入ることでできるのです。そういう面での人間関係を作ること、近隣を中心とした社会生活では大切なことだと思います。いま久保添さんがおっしゃったけれども、近隣を中心とした社会生活は、目の届く限り、声の届く限りが、その範囲となっていて、その中には、いろんな問題が出てきますから、特定の問題については、ノーコメントされても全然別の面から話の糸口がとけてゆくようにするのがいいのではないかと思います。

岡 私たちは、話合いまししょう。話合いまししょうといっても、はじめは、いったいどこから糸口を見つけていいのか、農村では話合いの場がもてないのです。そこで私たちは、先ずはじめに、生活技術を通じて、話合いの場を作るという空気を作ったんだん話合いになれるようにしています。

うな形で、グループを発展してゆく方法もあると思います。渡辺 私は仕事の関係上、受胎調節指導員として働いておられますので、いろいろな家庭にゆきますと、たいへん卑屈になっているかともありますし、そういう御家庭に入りますときに、親心と申しましようか、御近所の様子をみて、共同水道などに人がいないときを見はからって入ってゆくようにしております。

大衆生活の中での人間関係

司会 ではこのへんで、大衆としての人間関係について話しあいたいと思います。昨日の宮沢先生のお話にも、電車の中の場所とりの問題が出ておりましたが、汽車に乗ったとき、非常に好意をもって前の人が話し込んでくるけれども、こっちはうるさいと思うときもありますね。このような人間関係はどうあったらあかるいのでしょうか。

磯村 われわれの生活は、家庭につながっている。それから近隣につながっております。また職場につながっております。それが、そうじゃない状態があります。それが大衆です。われわれはいま会をやっています。全国婦人会議という大きな社会生活の集団に属しておるのですが、ここから一歩外に出ると、大衆になってしまふ。そこでの状態は、家庭の環境からも、近隣の関係からも、又職場のモラル

磯村 近隣の生活の中で、もっとも基礎的な生活ということですから、それはやはり一つの方法で結構だと思います。

太宰 地方会議で出た問題ですけれども、引揚げ者のかたたちの集っている一つの部落で、やはり人の生活を干渉しすぎというお話が出たのですが、それを解決した一つの方法として、キリスト教の信者のかたが中におられて、選挙を通じて、みんなで話合いまししょう、ということをお願いし、それがたいへんいい結果をみているそうです。そうした一つのものをもって、人をひき入れるというか、集めて統一するという形は、いったいどういうものでしょうか。

磯村 私は二つあると思います。一つは、たとえば五十人のグループがあるとして、その中で、いちばん共通な話題になる問題はないかということに慎重に考え、いちばん最近なものから出発してゆくというありかたが一つあります。それからもう一つは、あまり直接の生活に関係のない誰にもあたりさわりのない問題から入ってゆくという、二つの方法が考えられる。片一方のほうは、誰でも発言できるのですけれど、片一方のほうはときによっては、誰も発言できないかもしれない。この場合は発言する人の知識の豊富さと話術が問題となります。いずれにしてもこのよ

からも離れるという状態になります。「席の恥はかきすて」ということがあります。その状態が出てくるわけです。ところが案外この大衆生活の中で、やはりいろいろな人間関係ができてきています。

乗物の中でのエチケット

青木 バスなどで、お子さんをひざの上にのせればいいのに、ちゃんと一人前の席をとる。タクシーに乗ったような気で、隣りに年寄りや、赤ちゃんをおんぶした人がやって来ても、ゆずろうとしない。しかし自分に関係のある身近な人、知合いの人、近所のかたが来ると、ひざのせてその人に席をゆずるのです。全然知らない人には、決してゆずってあげないのです。それは家族とか、家庭というものを中心に考えているからではないでしょうか。

久保添 座席の問題ですが、私は足がわるいものですから、常に座席ということが、頭にこびりついていて、四国から本州横に乗り換えるときに、宇野から降りて、汽車が潜んでいるのです。だからものすごく、みんな目の色を変えて走ります。なんにも言わない、人間関係なんかないのです。旅をたのしむとか、そういうことを忘れて、一目散に走って、私なんかつきとばしても平気でとんでゆく、皆さん危険ですが、時間は十分ありますので、ゆっくり歩

いて下さい」というアナウンスをしょつ中している、それが開いているのに走っているわけです。私はなぜ走るか、ということ考えたのです。座席がいっぱいあったら走らないだろう。やっぱりみんな自分が坐りたいから走る、私も坐りたい、けれども、私は走れないから歩いているのです。その人たちは、時間があるけれども、座席というもののために走っている。それで座席があふえることが、いちばん人間関係を明るくすることだと思っただけです。

本宰 それに関連して私は東北本線で参りましたら、ある駅からお米を紙袋に入れたものを、たくさん積みこんできました。深夜で、みんなおむらいたいのにおねわっている下に、どんどん荷物を入れるわけです。その人たちが、そうすることによって生活しているということは、よくわかりましたけれども、そのために、多くの明日をもっている人の生活を脅かすというか、侵奪する。そういう問題にふれたときに、私たち、いったいこれをどういうふうにするべきなのでしょう。いま久保菜穂さんがおっしゃったような社会問題ですね、そういうことにならないで、人間関係がわるくなったり、よくなったりする。それをどういうふうにしたらいいか、ということを考えさせられてしまいました。

聞 自分たちの問題ですけど、私は上訪譚までパスに

人の教育ができていのかどうか。

太宰 いまの道倉さんのお話、よくわかるのですが、私は長いこと婦人会におりますが、どっかに一緒に出かけるときは本当に子供になってしまふのです。そういう心理状態がどこからくるか、ということをやはり考えてみたいと思うのです。家庭に年中下積みになって、家庭の犠牲になっている人が、ある一時解放されて、自分の時間になったという心理状態を、私たちは本当に考えてあげなければならぬと思います。まだそういうときに、理性を失わないことです。

道倉 大衆ということを考えなければいけませんね。

渡辺 私、長らく外地におり、終戦のとき大連におりましたが、電車の中で、皆さん疲労困憊に達したというか、イスから離れないのです。そうすると、ソ連の進駐軍が来て、子供をおんぶしている人が立っていると「お前たちはよける、大の男がなにごとだ」といってどかしている。私たち日本人同士では、それが言えないのです。本当にはずかしいなと思いました。

酔払いの問題

本多 私、繁華街に住んでおるのですが、よく夜酔払いが通るのです。そのときに私たちに、まるで女給さんにな

乗るのです。そのときは年寄りの人が来ると、必らず立つのが習慣ですが、東京に来ますと、さっきの「旅の恥はかきすて」ではないけれども、自分でもすまして坐っていたわけですね。私あとよく考えてみたのですけれども、あーいう知っている人の場合では、他人を意識するのではないと思うけれど、本当は意識していて、人の目を通じて自分を意識するという気持ちが、私の本心にあったのだと反省してしまっただけです。

磯村 個人のエゴイズムとして判断するにも限界があるということですね。エゴイズムだといって、自分を最後まで犠牲にするということ——ある程度、犠牲にするということとはあり得ることでありますが、それにはやはり限界があると思います。衣食たって礼節を知るといふようなことも考えなければならぬという話も出ていますね。

道倉 私も汽車の話ですが、婦人団体のとっても立派な服装をしたかたが、十四、五人お乗りになったのです。こちらには学生さんの一団が乗ったのです。そうしたら、婦人団体のしゃべること、しゃべること、……聞かずに朝までやったのです。学生さんは場所がとれないで、新聞敷いているんですけど「夜がふけたら、静かにしような」といって、ごもくならべを静かにしていた。婦人団体のおえらがたは、会に出て堂々としゃべっているが、本当に個

もういようなことを投げかけます。日本人の酔払いというものは、たしかに礼儀がないと思うのです。こういうことは公衆道徳として大いに糾弾しなければならぬと思います。だいたい日本の男性は、他国の男性と比べて、とってもエチケットがないといわれておりますが、酔払いだからということ許すわけにはゆかないと思うのです。

渡辺 私が大連におりました時、當時は、家の中では、第一夫人から、第五夫人くらいまでもっている人がおりましたが、外でだけは、酔払いの姿は見たことがありませんでした。

菊池 私なども非難の対象になるかもしれないのですけれども、現実であるということは認めざるを得ません。私のはうで、商工会という商店街の会があって、年に一回新年会がある。こういう会に出て、芸者など呼んで騒ぐのですが、年に一回、それをするために一生懸命やっているという考え方の人もいるわけで、昨日、女のかたが教養を積む、勉強をするということが出ましたが、それと同じように、男の人も、商売ばかりに徹してないで、趣味をもって、勉強する。お酒をのんでも、いわゆるエチケットをわきまえたのみかたをして、明日の勤務に差支えないようにするということですね。

磯村 ここで、今そういうことをとり上げていいかどうか

かわかりませんが、最近、われわれの近所の国で、社会生活が非常に変わったのができています。たとえばそのような国でカとハエがいなくなり、酔いもなくなつたということがあったとする。それならば、われわれの国では、それがなぜ実際に実現できないかというようなことも反省してみることがあります。

道徳教育について

平山 昔は道徳教育とか、公徳心というものをその科目で学校で教えていたのが、戦後はなくなつて、各教科を通じて、そういうことを教えていると思うのですけれども、やはり最近の道徳心の低下をみますと、修身教育というのが、ほしいうように思うのですけれども……。

吉村 道徳教育の必要性は大いにあると思いますが、私は修身教育に反対です。いま政府などが言っている修身教育の復活というのは、私たちの願っている道徳教育ではなく、その美名の下に、昔の封建制度を復活するという行為が隠れていると思うのです。

金平 修身教育というのは、どの程度をいうのかかわからないのですが、平山さんのおっしゃるのは、修身教育の復活ではないと思います。宮沢先生のおっしゃった人間性の尊重、新しい意味での人間関係のありかたの哲学という

か、そういう意味だと思うのです。

本多 私がエレベーターに乗ったときに、子供が、われ先に乗ってきた、そのとき私が、その子供の肩に手をやって「われ先に乗るといふことはいいじゃない」と叱つたわけですね。子供さんはお母さんにこういふふうにと叱られたといふわけなのですが、そのとき、エレベーターの中で、お母さんが私をにらみつけているのです。こういう場合、親の本能的な愛嬌だけで子供をみるのではなく、社会の中の子供という、冷静な、第三者的なまなこで子供をみる必要だと思ふのです。またある程度遠慮しないで注意してやることも必要だと思ふのです。

菊池 いまのような場合、できるだけ相手の気持ちを損じないように、言わなければいけないと思います。静岡の婦人のかたのお話ですが、静岡から東京に来る途中、静岡で乗った、座席が二つくらいあいていて、大きな荷物があった「だれか来るのか」と聞いた「すぐ来る」とのことであつたが、とにかく来るまで坐わらしてくれという条件で坐つた。ところが汽車が動き出しても来なかつた。「もし、ここに来るといふ人が途中の駅から乗るんだつたら、私のはうが権利があるから、ここをどきません」といふたら、それがかつぎ屋で、途中の駅から連れが乗つて来たといふことがわかつて、たいへんうれしくい顔をしていたと

いうことでしたが、そういう場合には、ある程度言わなければいけないと思います。

司会 汽車の座席の問題を中心に、知っている人には親切で、知らない人には不親切だとか、旅の恥はかきすてという日本人の心理についていろいろ例が出され、その原因に家族主義的な考え方が強いこと、エチケットが不足していること、公衆道徳が低下していることなどが話されましたが、そのほかにはいかがでしょうか。

中島 私は鉾山の社宅におりまして、職場で働いている男のかたとお話しします。家庭婦人ともいふぶんおつき合ひしておりますが、これを比べてみますと、男のかたは、職場で訓練されているから、礼儀が正しい……心の中はどうかわかりませんが、技術的にすぐれております。女の人は下手なんです。感情をむき出しにする。そういう職場で身についた技術が大家の一人となつたときに、いつの間にかイタについて、たいていの場合、男の人のほうがエチケットがあります。女はもっと、いろいろな団体に属して、市民として訓練されなければならないと思ひます。

職場の人との人間関係

司会 こんどは、職場の人との関係というか、昨日も役

所には「お」をつけて、会社にはつかないというような問題が出ておりましたが、役所の窓口については特にいろいろと言われておりますけれど、このへんからお話をすすめて頂いたらどうでしょうか。

窓口の問題

菊池 私がこの会に出席することになり、静岡の婦人少年室の所在がわからなかつたので、役場に電話をかけたが女の子が出て、さっぱり要領を得ないばかりでなく、非常にツツケンドンで、官僚的だった。小さなことですけれども、ああいうところにいるかたは、いろいろな團のかたに接する機会があるのだから、もっと親切心をもっていた方がいいと思ひます。

渡辺 福祉事務所から、主人が民生委員しておる関係で、会議があるから出るように、という通知があつたのですが、出られないので、お断りにいたしました。話そうと思つても、仕事をしなくて、なかなかこつちを向いてくれない。もうやうく同いてくれましたがその態度が冷いのです。私の服装を見てたろうと思ふのです。実は主人が民生委員ですが、このようなわけで……と申しましたら、「ア、民生委員の奥さまで……」というわけで、態度が一変するのです。こういうところに来る人は、おそらく私より以下の服

装をしていच्छやるのではないかと思つたのですが、どんなにか肩身のせまい思いをして相談に来るのではないか。とういうところは氣をつかわなければいけない、ということを痛切に感じました。

司会 人間を見ないで、その人の身分とか、いまの場合
は服装をみるということですね。

金平 人事院の試験課にありますが、採用試験の場合、いちばん大事なことは、民主的で、能率的な公務員を採用するというのを眼目にしております。しかし採用のときに、そういう人を選んでも、中の訓練が大事だと思います。まだまだ役所の窓口で不親切な人がたくさんいると思いますが、デパートなどは、企業内で对人的接待法など、ずいぶん訓練しています。そういうトレーニングということが必要ではないかと考えております。

磯村 主として役所と、民間の窓口を比べてみると、非常によくわかるのですが、昨日は、役所と、会社という例で申しましたけれども、このような善悪関係はもっと深いところにあるのではないかと思うのです。それは役所というものが、民主的な社会になっても、やはりまだわれわれが作った役所だという感じが、でてきていない。たとえば区役所と税金の関係で、われわれ依然としてこういうことばを使っています。「税金をとられる。」これなどは、税金を

奪つてゆかれるような状態を意味します。また「税金を納める」というのも、昔のみつぎものを納めるような感じがする。このようなことばの中にも、依然として役所に対する劣等感の残つており、又役所のほうでも、それで平氣でいるんです。役所対われわれの人間関係も、原則的にはか違ひがあるという考えがどうしてあつて、切れない。たとえば人事院のほうでは、立派な人を採用しても役人というイスにつけてしまうと、國民がイスに対しておじぎをしているのを、いつの間にか自分に対しておじぎをしているように錯覚して、だんだん尊大になつてゆく。ここにやはり問題があるのではないかと思ふのです。

小田 それにも関連しますけれども、もう一つ隙口をくらくしてゐるのに言葉の上手、下手ということがあると思ひます。うまく言える人は目的を達するのですけれども、言えない、弱い立場の人のことは通らない場合があると思ひます。そういう人の立場こそ、いちばん丁寧に、細かく聞いてあげなければならぬと思うわけで、現在、そういう面が行われてないと思ひます。

青木 窓口においでのかたは、自分の職場というせまいところだけのことを考えないで、いろんな職場に關係した勉強を、もっとやっていたきたい。はじめて来たかたにも、あらゆる方面から、一応結びつきを考えてあげられる

程度の、自分自身の職場に対する勉強をしていたらいいのではないかと思います。

吉村 和、それと反対の意見をもっています。役所というのは、私たちの役所です。その私たちの役所を、私たちはうまく使っていないと思うのです。いま言われたかたは、役所の窓口のかたが勉強して、はじめていった人もわかるようにしてほしいということですが、私は、私たちの役所の仕組みを、私たちがもっと知っていて、自分の用事は、この窓口に行ったらわかるということを知っておってよくように、自分たちで努力しなければならぬと思います。そのいい例が、あるおじいさんが窓口に行ったら、風貌などみて、あまり相手にしなかった。ところが、その人は、いつまでたっても窓口からどかないのです。それで窓口の係の人が困って「ここではわからないから帰って下さい」と言ったら、「わしらの要望でできた窓口に、わしらが仕事をもって来たのに、なぜしてくれないか、いそがしかったら夕方まで待っているから、やってくれ」と言ったそうです。そうしたら、自分たちの仕事の範囲なので、やってくれたそうです。そのくらい窓口に対して、一般の市民が自信をもって、自分の仕事はここであるのだと、遠慮せずに、窓口の人をどんどん使うようになって欲しいと思います。

久保漆 窓口の場所のことですけれど、例えば、高知の
亮春婦の更生相談所はわかりにくいのです。また本当に亮
春婦だったら、入りにくいような形にあるということ。こ
のことを考えて、本当に更生しようと思っている人を見捨
てないような形に窓口をもつてほしいと思います。
道倉 人の性質に三通りあると思います。道を聞いて
「どっちにゆくのか」「知りませんね」という人
と、とっても親切に教えてやる人、自分が知らない、よ
その人に聞いてまで教えてやる人、それからウロウロして
いる人を見て、あの人、道を聞いているのではないかと、
おっかけていってまで聞くという性質があるのですよ。そ
のおっかけていってまで聞くという人を、窓口に採用して
いただいたら、窓口が明るくなると思います。(笑)

當業の身分性について

司会　言葉の上手、下手ということがでていましたが、日本語は、外国語に比べて、敬語があったりしてなかなか複雑ですね。このように何にかことばの身分性というものがあると思うのですが……。

磯村 日本の社会生活のなかにはたしかにありますね。

「いたい、皆さんが夫をなんと呼んでおられるか、さっき久保添さんが「御主人」と使っているじゃないか、さっきの、あなたの発言の中にはいつているようですが。」

久保添 高知で、私ともう一人が「御主人」ということは絶対使っていないと、いったところ、そのためにある人が会に来なくなった。そういう一つののいがい騒動をもっておりまして、私は言わないけれども、人が言っていることは、やっぱりそれを認めたほうが、スムーズにゆくという観点に立っています。

金平 ことばというのは、歴史的な流れがあって、急に交えられないと思います。また敬語を使うのはいいと思います。問題は、ここの人には敬語を使わないで、ここの人にだけ使う。「お」をつけるか、つけないかということ、その背後にある考え方、差別するということ、ここの態度のほうが問題だと思います。何千年続いたことばを、急に交えるということは、非常にむずかしいと思いますが、態度だけは交えられるのではないかという気がします。

久保添 ことばを無理に、意識的に交えることによって、事態を変えてゆくというので考えているのです。国会だったら、どんなえらい人でも「離々君」それが、いかに自分の立場を平等な形で話しているかという、一つの形式です。

席なような御婦人が、ただ単に全国婦人会議に出席をするという私に「先生」と言うということは、一種の封建性に通ずるなにかがあるというふうに考えました。

特別な事情のある人との人間関係

司会 ことばの問題をこのくらいにしまして、先ほど窓口の問題ばかり出しましたけれども、ほかに、孤児であるとか、身体障害者であるとか、売春婦であるとかいう、何にか特別な事情のある人との人間関係や、また外国人との人間関係などはいかがでしょうか。

吉村 いろいろ問題を出しても、結論として、やはり職場の窓口の問題と同じで、お互いにもっと知識や、人間的な教養を積んでゆかなければならないということを自覚すれば、問題は解決すると思います。

久保添 私の知っている、足がわるいとか、手がないとか、そういう人はいくら人間的な教養を積もうとしても、そういう場所に出られるだけの生活をもっていないのです。仕事をするために技術をもたねばなりません。技術をもつには学校にもゆかなければならないし、その技術をもつても、就職ができるという場所がないといけない。いままでの日本の社会は、そういう人が入れるような施設というものが、全然なかったのです。高知でも、肢体不自由

けれども、その形式が、とかくえらい人に対しての恐れというものをなくしていつているということが、私のほうの地方婦人問題会議のときに出了たのです。形式で中味がないけれども、ことばは実態を現わしていて、実態が変れば、ことばも変わるけれども、ことばを意識的に交えることによって自分たちの生活を変えてゆくことができるのではないのでしょうか。

磯村 私はうさぎの年の会というのをしています。百八くらいでその中には、大臣をやった人もあるし、現に大臣の人もいますけれども、会員お互いは必ず「君」呼です。もう二十年近く続いています。こういう考え方を、社会生活のどのグループ、特に女性の力がたの団体などで、おとりになるということは、一つの方法ではないでしょうか。女性に「君」をつけては申訳がないのですけれども、人によって「奥さん」と呼んでみたりするより、名前で呼ぶとか、平等な表現ということが差別感をなくす方法ではないかと思っています。

菊池 ことばの問題で、私が経験した、もっとも最近の例ですが、私はこの会に出席することになって、静岡の婦人問題会議に顔を出させていただきましたが、その席上で、「菊池先生」と生れてはじめて「先生」をつけられたのですが、たいへんいやな感じがしました。婦人問題会議に出

るを教育するのができたら、自慢しているけれども、たった七十五人、対象は四千人くらいあるのです。そういう犠牲を忘れずに、そういう施設というものを、どんどんふやすということまでやらなければ、一般の人々も、本当に明るい人間関係、明るい幸福というものが、自分のものにならないのではないかと思うのです。

小田 私私も強くそれを感じます。いろいろな面で不自由なかたについて、お役所がとり上げて、一〇〇%それを実行していただければ、まことにありがたいのですけれども、いまの国の状態では、それにたよりすぎて、あとはしかたがないと、あきらめてはならないと思います。あきらめないで、どうしたらいいかということを考えたときに、これがマイナスの点を補うのが団体の力ではないかと思うわけです。そういう意味で、肢体不自由児にせよ、生活の苦しいかたにせよ、婦人活動の中に、そういう面もおこまれたところの行事が必要だと思うわけです。

道倉 福岡から家出ではないのですが、出て来た娘さんの相談を受けましたが、「わるいことは知っているが、スタンドに勤める。意欲が強いつもりでゆくけれど、おちてゆくかもしれない。私の家庭は、六畳一間に九人家族、父が結核で三回咯血した。母は行商して、三千円の補助を受けているが、どうして生活できますか。私は高校出たら家の

助けができると思って、どんな恩をして卒業したかわからない。しかし、就職試験では、最後の家庭調査で、補助を受けているようなものは雇ってくれない。広い大阪にいったら、家族のことは誰も知らないと思って出て来ましたが、それでも、両親の元から通うものを雇うとか、家族関係の少ないものとかいって、どうしても私を雇ってくれなところがない」というのです。私は何んとかしてやりたいと思つて、方々の会社に頼みましたが、「うちの会社は営利会社で、人助けの会社ではないですよ。そんな複雑な家庭で、五千円くらい送金しなけりゃならん子供を、どうして雇えますか」と断られました。私は相談員という役で、この子一人救うことができないんだつたら、いったい誰が、どうしてくれるのやろうということをおもうのです。営利会社には進まないですけれども、あたにかい目でのばしてやるということをおもうてやらなければということをおもうのです。

久保 去年の九月に、身体障害者職業更生週間に労働省でやってくださったのです。私、その一週間に、どれだけ就職者が本当に出たか聞いたのですが、結局は、あまりなかったようです。普通の営利会社は、私たちを絶対に救ってくれない。だからお役所が率先して願つてくだされば、いちばんてつとり早い。三十人おるところでは、一人雇うという強制雇用にすれば、という形を運動しているよ

うですけれど、そういうふうな形ででもってゆかなければ、私たち食べる場がない、食べる場がなくてどうして明るい人間関係があるでしょう。

磯村 私には又、二十五条会というものをもっています。二十五条会というのは、憲法二十五条の会です。御存知のように「健康にして文化的な……」という憲法の条章で、会員はパタ屋さんなどで、隅田公園に小屋を作っている人たちです。非常に明るいつき合ひをしています。なんといつても最低の生活を憲法で文字通り保証してくれるような社会になって欲しいという、おだやかなうちにお互の生活を守り合う会です。いま皆さんの話を聞いておきますと、社会生活においての人間関係で、いわゆる社会生活のルールを守らなければならん。しかしそれを守るにはやはり憲法が保証するくらいの生活は、その基準になければならないというのが御意見のようです。たしかにその通りと思います。したがって社会保障という問題が、もっと強く考えられなければならないというのが皆さんの御意見のように思っています。

平野 社会保障の問題ですが、広島が原爆にやられているといふ意味だけではなくて、全国には戦争未亡人がたくさんいらっしゃる、その人たちが遺児をかかえてゆかれるのに普通の職業についていたら、子供を養ってゆけない。

手つとり早く金になるみちは売春婦だ。これを救うには、根本問題をさぐって手をうたなければ、問題は解決されない。なぜそういうふうな戦争未亡人が出たかということになると、結局、戦争に連なる原水爆なんかの禁止ということを強く訴えたいのです。戦争がなかったら、戦争未亡人もでなかったし、売春婦もでなかった。その根本問題を考えるときに、皆さん、もう少し原水爆禁止という問題を強く掘り下げて、五分でも、十分でもいいから話合ひの場をもちたいと思うわけです。社会保障の面で強く感ずるわけです。

本多 平野さんの胸に弊点が出ているのです。ここに明るい人間関係を作るために寄っていながら、原爆を受けたかたが、まだそうした不安の念にかられているということをお、私はあくまでもみんな考えなければいけないと思うのです。これは私たちだけの問題ではなく、全人類の問題だと思ふのです。私たちは原爆を知っているのです。原爆を受けているわけです。平野さんと同室になったときに、兄弟に会ったような親近感をもりました。そして原爆を受けているものと受けていないものの心のズレというものを、どうしたらいいのだからと思つたのです。

磯村 その問題については、実は私もあとで申し上げようと思つていました。原水爆の問題はたしかにわれわれの

明るい人間関係をつくることにはもっとも大切な問題と想います。ただこの問題を社会生活の部会だけで討議することがどうかと思ひますので、時間も迫っていますしほかにも、もう少し御相談したい面もありますから、その面については、休憩のときに御相談をしたい。もうこの問題については、おそらく人類の明るい生活を論ずる場合に、今日の日本の段階において度外視するわけには行かないことと思ひます。それに関連してもう一つの問題は、日本人が外国人をふくめての社会生活をする場合に、何か劣等感的なものをもっているのではないかとということです。

たとえば、先ほど広島の方野さんから、売春婦の問題が出ています。戦争がなかったら、という問題もあるのですが、それならば、戦争によって生じた日本の生活の非常な困難さの中で、売春を、とくに外国から来た人を相手にしたもの、を、どういう立場で考えていたかという問題です。

道倉 売春婦が多いということについては、家庭の事情とか、いろいろなことがあると思ひます。戦争が済んで直ぐに婦人会に出したときに、えらいかたたちのお話に、大阪の伊丹から、名古屋までの売春婦は、外米を買いお金より、なお余るほど外貨をかせいでいるということを盛んに言つて、いかにも売春婦がよいことをしているかのようにいっていました。私は、こんなふうになつたということ

は、やはり政治というものもわるいのではないかと思ふのです。

平野 いまの問題に関連して、自由党の代議士のかたが、広島で講演なさったことがあるのですが、日本にとって売春婦は、非常に大恩人だ。外貨獲得に非常に大きな貢献をしている。ということをはっきり公衆の席上でおっしゃったときには私たちが哑然としたのです。これは女性全体の問題で、女の人たちも考えなければいけないと思いますが、その点をどう思いますか。

青木 もうけるためには、スリをしても、サギをしてもかまわないという考えと同じ気がします。国がよくなるためには、手段を選ばずという考えです。

小田 いまのことにつきましては、女自身の考えも低くということも、一つには原因があると思うのです。なんでも犠牲になって、はいはいといっていればいいという、昔からのしきたりとか、周囲のそういう考えというものが根強く残っておるために、そういうことになるかと考えてみますと、やはり女も、自分で考えるという力を養うということが大事だと思うのです。売春婦の多くのかたが、まずしい生活のかたとか、あるいは身分的な差別があつて、生活してゆくことのできないカベにつきあつているので、ただ自覚だけでは解決できない問題ですけれども、その一つ

で、おだてられたり、のせられたりした投票ではなくして、本当にこの人は私たちの代表であるかということを、自分で判断できるような勉強を、もう少しやらなければいけないと思います。

久保 自分たちの生活をよくするためのいろいろな割合の集積であるところの身論というものが、本当に正しくとり上げられる政治をのぞみますし、身論を無視せず、声にならない声までも、聞くだけの目とか、耳とかいうものをもっている人を国政の担当者にしたい。その人の首を切るのも、切らないのも、私たちがもっているという自信の下にやってみなければいけない。やはり話し合い、話し合いでいくらいっても、話し合いの限界というものを感ずる。

関 私には、僧州に隔って、農村ですから、もう少しおぼさんたちが、ものを考える訓練——いまもしているのですが、それをだんだん振めてゆきたいと思ひます。私はずっと農村に住むつもりですが、一生かかっても、また自分の子供の代になるまで、とっても廻り道でしょうけれど、一歩一歩やってみようと思ひます。

道倉 だれもが、明朗に仲よく暮してゆける、その具体的な方法として、民生委員を検討しておしえていただきたい。それら民生委員の数を、せめて百軒の家に対して一

として、自覚も大事だということ、女の救済を高めてゆくということも必要だと思ひます。

最後に——私たちは何ができるか

司会 いままで、いろいろな人間関係を考へてみましたが、その底にはまだ前近代的なものがたくさん残っているということがいえるのですが、私たちが明日からの日常生活で、明かるといふ人間関係をつくるために、どういふことができるだろうか、ということをお話していただきたいと思います。

中島 対外関係の問題の、さっきのような売春婦の考へ方は日本が外国に対して堂々たる外交をしていないということからも来ていふと思ひます。それで日本の外交が正々堂々とやってみようと思ひます。それは、やはり国民ののだと思ひますので、多少の苦しいことも、みんながまんしようという考へが必要だと思ひます。

吉村 理由がわかれば、どんなことでもがまんができると思ひます。売春婦は重要な役割をしているということを目の前に口に出すような政治ではなくて、本当に日本の國がよくなるための明朗な政治の下では、どんな犠牲も払えると思ひます。それで選挙の場合でも、相手をよく考へ

人おいて、もっとみんなの生活に食い込んでいただくということが、売春婦も出さない、ほがらかな生活ができるということではないかしらと思ひます。

平野 いまの大人の生活に、いささか愛想がつきておりますから、私は帰りましたら、未来を背負う子供会の育成に全力を注ぎたいと思ひます。

木暮 私ども宮城県で、レースあみとか、造花とか、たくさんやっておりますけれども、その料金がとっても安いのです。さっきの政治の問題につながると思ひますけれど、貿易をするときに私たちのやったものを、高い値段で買ってもらふということを考へていただいて、女が正しい道を歩みながら、外貨獲得に協力してゆきたいと思ひます。

金平 戦争の被害を私自身も受けておりますが、男性だけでなく、今日出席して、女性の側に意外にシワよせが来ているということも、本当に痛感したわけです。こういう会議に出席させていただいて、非常に幸福だと思ひますが、ぜひ来年から、もう少し男性を加えていただきたい。

小田 助産婦として、声の出せない人のとりつき役という面で役に立ってゆきたいと思ひます。農村、結局、話し合いをこれからどうするということに、二つ形が出たと思ひます。一つは高知の久保添さんがいわ

れるように、どうしても最後には政治につながるのだ、そういう面に絶えず関心をもちてゆかなければならんという一つの姿と、それから、長野の関さんがおっしゃった、先ず小さなグループから話を進めてゆこうという、この二つ。私は先ほど申しましたように、この割合の、特にこの全国婦人会議が目標としているような姿を基盤として考えてみますと、やはりこの二つの面が同時になければならんと思うのです。関さんは、そういった小さなグループから、その何人かのグループの共通の問題をとり上げて、同じような一つの意識の段階を作っていたのですが、そのねらいは、やはり久保添さんのおっしゃるような高い目標というものを、心にもつ必要がある。同時に久保添さんも御自分の地元近所の、あるいは同じ階級の、そういったようなものを基盤にもってやるようにする。そういうことが、現在の段階ではとくに大事なのではないかと思います。司会 それでは、これで討議を終わります。

質疑応答

質問 町会とか、隣組とか聞きましたけれど、それがどうしてできたか、本当に下から盛り上げてできたものかどうか、田舎などで上から下下りのでできているものを納得しているのか、どうか。

できれば、大いによい方面に向けてあげることができると思います。

質問 「上を見ればキリがない、下を見ればキリがない」ということばがありますが、それが日本人全体の意識に、非常に根強く残っていると思うのです。そのために私たちの明るい人間関係を作ることがはばまれていいると思うのです。そういうことをどういうふうにお考えになりますでしょうか。

菊池 日本人の非常にあきらめめ、また自己をなくさめるためのことばで、長い間の封建的な生活の中で生んだ一つの知恵ではないかと考えます。それを根本的に、現実的に解決するということは、やはり政治の問題になって参ります。さつき、結論的に要約された磯村先生のお話の通り、政治へつながらる姿が、同時に私たちの身近な問題を積み重ねてゆくことによって、力を養ってゆかなければいけないというふうに考えます。

質問 民生委員の問題ですが、私たちのところでは、選挙委員がありましたが、ある一定の人によって左右されるという傾向です。本当に下部階級の実態というものを、よく知ったかたが、民生委員にならなければ明るい社会はできないのではないのでしょうか。私たちのところでは、立派な家で、大きな犬をおいてあって、困窮者のかたが何って

言わね、私のところは、ずっと以前からできているものです。それが上からできているから、あなたが全部わいということは言えないのです。全部隣組ということがわかっておれば、隣組というのはなくなるのですが、やはりそういう組織があるために、その中の何割か役に立っている面があるのです。そのために組織がすたれないでいるわけです。今日私が出したのは、その組織がわれわれに影響を及ぼしているところを出したのであって、それが上からできたといつて、全部排除することができない現状です。

質問 母子家庭等の息子の就職問題は、現実として、たいへんむずかしい問題ですが、婦人として、または母親として、それを解決するについて、身近な方法かなにかお考えでしたら、小田さんに伺いたいと思います。

小田 私は教育もありませんし、立派なお答えもできないのですが、母家庭のかたがたは、自分で、自分の意思を正して表現することのできないかたが多いと思うのです。ですから先ず第一にその人の相談相手になってあげること、もう一つは、婦人会などが、お茶とかお料理などの行事を重くしないで、そういう女の立場を救うような行事をもたれてゆくこと。それによって身論を育てて行くことも大切だと思います。また市長さんの身受人のお話もありましたが、大きな団体の力で保障することなどが

も、おそろしくて帰って来たという実態です。これを明るくするためには、もう少し私たちが政治に関心をむけてゆかなければならないと思っております。それから充奉婦の相談員のかたが、一般に年齢が若いのかと思いますが、やはり相手が若い方ですから、年輩のお姉さん、お母さんというかたのほうがハラを鞠って相談できると思っています。

道倉 私五十七歳で、大阪の相談員をしています。大阪府も、大阪市も、大変年をとった人を採用しており、私たちが困っているのは若いのかの考えと、大変ズレがあるので、映画を見に参りまして、目からの教育を自分がいたしております。

質問 私、第一回の教育委員の選挙のとき、婦人の代表を出したいと思いましたが、ボスが、電話をかけて脅迫したり、その他あらゆる方法で、反対しました。弱いかたはそのまま縮んでしまいましたけれども、敢然とやりとげたものは、主人の立場まで影響するからと脅迫され、それが根強く、あとあとまで未だに残っております。たとえ、高校の奥さんがやった場合に、先生を左遷するなど、ボスの手が加わっているというところを痛切に感じますが、そういうときにどういたしたらよいのか……。

磯村 私も同じ経験がありますので、いまのお気持、よくわかるのです。われわれが政治を目標にして、最後はや

はり政治につながるという段階に入りますと、自分の立場をはっきりするということは、家庭的な面から、近隣の関係から、職場の関係などから、抵抗があると思います。しかしその抵抗があるということは、日本の現在の段階の一つの縮図とも思われるのです。したがって、これに対してどうするかという、即効的な考え方はないのです。あるものには、若干の犠牲をこうむっても、やりとげるといふ勇氣が必要なのです。私自身、やはりそういう立場におかれましては、その反省からして、それ以外に方法はない。その結果ある程度キズつくこともあると思います。しかしそれに負ってしまえばすべての終りです。なんらかの方法でグループなり、同志なりのつながりで、なぐさめられ力を与えられその犠牲が認識されてゆけば、たとえ一時は犠牲であっても、やがては、私は笑を結ぶときがあると考えます。

質問 社会の明るい人間関係を作ってゆくといういちばん根本になることは、やはり自分自身が相手方に対して理解をもつことではないかと思えます。先ほどのお話にも出ましたが、特に原爆にかかっていない人が、かかっている人のことを、どういうふうに考えてゆくか、ということにズレがあるし、また身体のある人や、まずしい暮らしをしている人のことを考えた場合、どういうふうにしたらその

人たちの気持ちになり得るか。貧乏人の気持は、富める人にはわからない。ということを書われますけれども、そういうズレに対する考え方を、私たちもっと深めてゆかなければ、対人関係というものも、深く追及できないのではないかと思います。やはりそういうことに対して、この部会では、そういう意見をほり下げて聞きたかったのですが、司会 時間が少なかつたので、そのような点はあまりお話しができなくて残念だと思っておりますので、御批判として受けいたします。

質問 私やはり戦争の犠牲者でありまして、いまでも頭張って一人で暮しておりますが、広島の平野さん、長崎の本多さんのお心が本当に通じ、涙して伺っておりますけれども、孤独な感じをお持ちにならないで下さい。全国では原水爆の禁止運動を手をつないでやっております。私も本当の小便走りのようなことで、ただいま一生懸命微力を尽さしていただいております。また売春の問題にしても予算が半分に削られたことはもっと女の立場が足りなかったのではないかと思うのです。ただ話合っているだけでもその方法を考えなければならぬと思います。私は原水爆禁止運動に信念をもって、一生を捧げて参りたいと思っておりますから、どうぞ皆さんも一緒にお願いいたします。

質問 要望ですが、この会にいらしたかたは、地方にお

帰りになりましたら、固体に所属なさらなくても、その地方のかたに、こうした会の雰囲気とか、いろいろのお話の様子を、よく話してあげて、この場限りで終らないようにしていただきたいと思えます。

司会 予定の時間ですので、まだ御質問もあるかと思いますが、二日にわたりました部会の会談を、これで終りたいと思えます。どうも長い間ありがとうございました。

合同部会

司会

労働省婦人少年局婦人課
内藤 つね

司会 合同部会を始めますが、初めに、二日間の部会、附議でそれぞれ一番問題になった点を中心にして、各部会から御報告をして頂きたい。その後で一つの部会で討議されたけれども、全体で討議したらどうかと思われる点、また二つの部会で別の面から協議された問題、またこれら四つの部会に共通ではないかと思われる問題について討議してゆきたいと思ひます。

（報告省略）

家庭における人間関係について

司会 各部会から短かい時間いろいろな問題が提起されておりますが、その全部を一度に討議することは出来ませんので、まず第一部会、第二部会から共通にできました、夫と妻のあり方から討議に入ってゆきたいと思ひます。

御発言はこの部会に属しているかということにかかわらず、一人の個人という立場でお願いします。

まず、唯今の御報告に盛りこめなかったという点があると思ひますので、補足して頂きたいと思ひますが……。

坪井 家族の問題として重点がおかれたのは、肉身のつながりというものを余り強く強調する考え方をやめることであつたと思ひます。たとえば嫁と姑の場合、全くの他人を無縁に突きの親、娘と思へという考え方もありましようが、

嫁姑が実際の親子と思へないのは、人間として自然なことだと思ひます。そういうことにとらわれないで、もっと対等な一個人として明るい人間関係が作れるように努力すべきだと思ひます。

菊池 私の家の嫁と姑の問題では、妻が育った家庭の雰囲気や私のうちに持ちこみ、それが母の持っている雰囲気と共通でない場合、たとえば近所づきあい、義理人情や形式的な行事——法事のような時、具体的に現われてくるのではないかと思ひます。そういう点について第一部会ではどういうようにとりあげられましたか。

久米 御報告になつたように、姑と嫁の関係も人間としての接点によって理解されるということです。理解するということは、相手と自分を同じにすることではなく、相手と自分の違いを認めて寛大に許すということであつて、各個人が違ふものを持っており、又いわゆる家風が違ふという時でも、相手の立場を認め干渉し過ぎない心がまえをもってやってゆくのではないかというお話になつたと思ひます。

司会 雰囲気の違い、考え方の違つた嫁、姑が一緒にいる時に、どうしたらいいかという問題、これは第二部会あたりが一番問題があつたのではないかと思ひますので、部会討議の内容など御披露かたがた御発表願ひたいと思ひま

す。

小村 農家では夫婦が同じ仕事をしている関係で、夫婦の間の共通な話題があるのに、その楽しみをはっきり現わそうとすることが、今までの農村では少いのではないかと。

私ももともと堂々と夫婦の愛情を現わすようにしてゆかなければいけない。そしてその場合夫の方にもっと勇気をだしてもう必要がある。そうすれば、嫁と姑の間も自然に明るい方にゆくのではないかということを話したいと思ひます。

唐崎 親子関係、嫁と姑の問題ですが、私の心がまえとして姑になつてはじめて、姑としての心がまえを考へるのではなく、子供を生んだ時からおたがいに個人としての人格を認めて立派な社会人になるよう子供を育ててゆくという始めからの心がまえが必要だと思ひます。

司会 子供が大きくなって一人前になつた時は、親から離れるものだ、また嫁は血がつながつていないのだから、はじめから他人だと割切つてしまふ方がよいという発言がありました。これではあまり淋しいではないかというお考もあると思ひますので、そうした面からの御経験がありましたら御発表がいたいと思ひます。

本幸 個人として人間として認めることは勿論必要ですが、突際には嫁を迎える時に既成の人を迎えるという考え

がありはしないか。未完成な人を迎えてその人を育てるという温かい心があればうまくゆくと思ひます。

千葉 農家では、自分の嫁でさえ氣に喰わないのですから、よそさまから頂いた娘さんと、しつくりゆかないのは当然のことです。お互の努力が必要だと思ひます。

司会 ただ今の御発言の中には、突の子供でも氣に喰わんというお言葉がありましたので、その突の方はいかがでしょう。親子相互の立場でお話しなりたいのですが。

八木 本當の親子の場合は、親が余り子供の事に干渉しすぎと思ひます。それで氣にくわない場合もあるのではないかと思ひます。たとえば、子供が独立してゆけるようになつても、何時までも小さい子供のようになにかい事に干渉しすぎて、子供が伸びようと思つても伸びられないということがあります。

那須 たとえば私が成人式を済ませて嫁をもらおうというのに、あの嫁は家風に合わないなどと云い出すので、こんな調子では、将来結婚して生活を作るのが不安になります。

谷 氣に入る娘といわれましたが、それが自分の思う通りというのなら問題があります。やっぱり娘と親の問題を対等な立場で話しあうべきではないですか。

吉村 親は自分たちはこういうようにして親に仕えてき

た、自分の子供は自分たちがしてきたような事を親にしてくれないといつてこぼします。これは社会の仕組みで老人の生活は不安ですから、そういうことを親がいうのはあたりまえだと思います。だから今の若い人たちは余り干渉してもらいたくないということだけを主張するのではなくて、親の立場に立って考え、親を安心させてあげられる道があると思うのです。

司会 吉村さんは子としての立場でおっしゃったのですね。第一部会では、この問題について、どんなお話しがされたのですか。

今井 第一部会では、若い者でも年寄でも、女性が聰明になることが必要だという意見になったのです。と言いますのは、それぞれの世代の違いをいくらかかり合おうとしても、完全にわかり合うことはむずかしいのではないかと。それぞれの立場をお互に認め合って、話し合い、妥協と言ったらかしいですが、聰明に付合ったらどうだろうかという意見だったようです。

増田 私は子供の立場から、親子の関係を話ししたいと思っています。

小さい時は親というものは絶対的な神様のように感じていますが、大きくなると、親の欠点が目について仕方がない。そこで私の年頃では親に反発したくて仕方がない

のですが、親は子供がいつまでも自分のもので思ひ通りになると思っている。そこに親と子の行き違いが出てきますけれど、子供も親も互いに欠点のある不完全な人間意識として見てゆく寛容さが必要だと思っています。

司会 先ほどから子という立場の御発言がありましたので、それを受けて、親の立場から御発言をお願いしたいと思います。

平野 私は少し変わった親で、子供が私に向って反抗してくれずと嬉しいのです。なぜならば、子供と親は世代のズレがあって、並行にゆかぬのが当然で、子供が自分の言うことをはっきり主張してくれまうと、社会に出た場合、自分の言うことを主張することができたらうと思ひ頼もしく感じます。

司会 少し男性の方はこの問題についていかがですか。山口 聰明でありたいということですが、年寄った姑の立場を考えますと、若い時に自分の生活をもつことができなかった環境の人が多いのです。そういう親や姑の気持ちを理解することが必要です。年を取ってからの遊びとか勉強する機会を子供が作ってやり、そういうところに出してやる、そういう話し合いが必要であると思っています。

小西 私は子供夫婦の幸福を羨ましく思わないために、自分も一つの楽しみを持って、たいへんいい結果を得た程

験を持っています。

私は歌が好きなので、歌のグループを持って時々家をおけることによってかえってみんなに喜ばれる結果になりました。留守番するばかりがよい姑ではないということに思ひ至ったのです。

社会的地位や職業における人間関係について

司会 家族の問題について討議が行われてきましたので、これから話題を少し変えて進めてゆきたいと思ひます。

第三部会、第四部会のあたりで問題にされたと思われまう、職業に応じて差別をされたりするという問題、また職場における立場、夫が勤めている場合は夫の職場における立場が、家族にまで及ぼされるということが出ておりましたので、そういう点について討議して頂きたいと思ひます。

たとえば学校で先生をしている、その教師というものは偉いんだ、という扱いを受ける、その代りに、道路の掃除をしているという立場の人は、道路掃除をしているという事で職業に貴賤はないと言いながら区別されて、私的な生活にまで及んでくる、大分そのことで悩んでいらっしやる方もありでしたので、そういう問題につきまして

御討議願うたと思ひます。

中島 私の住んでおりますところは職場と住宅が同じところにありますので、公私の生活が混同し、家族ぐるみ巻き込まれてしまうので、悩みが多いのですが、いつもそういうようなことに振られないで話し合いをしてゆくということは、一つの訓練で、その訓練を重ねて行くうちに自然にある程度解決してゆくと思ひます。

小林 私は住宅の生活を続けて参りまして、やはり主人の地位が住宅の家庭生活にまで及ぶというような近隣の関係というものは、非常にいけないものだ、ということを考えました。引越しました当初は、そういう雰囲気のためたいへん封鎖的なことだと思ひておりましたが、そのうち近隣集団の中に気の合った同僚的なグループができて、その中では、たとえば言葉遣いも分けへだてしないで、主人達の地位によらず奥さん達自身の持ち味が住宅の生活の中に生かされるように、その点をほつきり割り切ること、人間関係が明るくなりました。

司会 いま住宅の生活を巧くなされた例に、言葉の使い方に注意したということですが、それは第四部会でもお話しに出ていたと存じますか……。

道倉 私の住んでおりますところは、大阪市の衛星都市で、戦災を受けませんので、従来から住んでいる人のほか、

引揚者、疎開者がたくさん集って、何ともいえないわだかまりがありました。何とかそれをなくして、話しあいでできる生活をしたいたい、奥さん、坊ちゃん、お嬢さんと呼ぶことを排して、社長の奥さんでも、お米担いで働く人でも誰でも、Aさん、Bさんと同じような呼び名を使うようにしましたら、わだかまりがなくなつて、ほんとうに温い気持ちが出てくるようになり、それから話し合いが生れ、親しい生活ができるようになりました。

司会 職場の地位が私生活にまで持ち込まれるという問題について、それを解決した明るい例が出されましたが、まだまだ問題をお持ちの方もあるかと思いますが……

植垣 私はバスの車掌をやっていますが、最近風邪を引いて、車の後まで声が届かない場合など、すぐにこの車掌はサービスが悪い、と会社に投書が行く。そうしたら、理由が何であろうとも、その車掌は成績が悪くなり、また正しいことを言っても、お客さんから何だ車掌のくせにといわれます。このように社会的に私たちの地位が認められていないことがあるのです。

廣崎 私は給食婦です。子供からは給食のおばさんと言われます。偶々私の学校の行き帰り、「先生お早う」とか「さようなら」と言う子があると「先生じゃないよ給食のおばさんだよ」などと仲間同士でふざけることがある。

お知らせでもありましたら……

小村 炊事婦さんの問題について申しますと、学校では一年生に子供が入りました時に、学校の生活に慣れさせるために学校を見て廻りますが、給食の部屋や備員の部屋に行きまして、学校ではこのおばさんに非常にお世話になっているのだというところを感じ取らせるようにしております。

中村 私は小さい時から、女中さんも同じ家族だといふうちに教育されてきましたが、嫁入った家では、女中さんは身分的に一段下であるから、食事も別でいいし、電気も部屋にやらなくていいという考でした。私はそれはいけないことだと主張したのですが、わかってもらえなかったのので、先ず主人に理解してもらおうと思い、しつこく中央家に連れて行って、その楽しい雰囲気を感じさせ、経験させて、主人からそれを改訂してもらい、今では女中さんの部屋にも電気がつきますし、食事と同じ食卓で同じ物を食べるようになったのです。

大森 女中さんが低いものだと考えられるのは、日本人が個人を尊重し、人格を認めることに慣れていないからだと思います。女中を雇うということは、労働してもらってそれに対する賃金を払うということで、女中さんの人格をこちらが奴隷にしてしまうということではないのですが、そ

「給食のおばさん」と言っている気分、そこには、家庭の中におけるお母さん、お父さんの教育を感じさせるものがあります。こうした問題が正しく解釈されるような教育をお願いしたいと思ひます。

渡辺 私は女中をしておりますので、主人の仕事は忠実に守っておりますが、よそに出た場合みなさんにずいぶん蔑視される。家庭と社会で、そういう通念をなくして下さい、特に奥さん方がそういう社会通念をなくすようにして頂きたいと思ひます。

安久 私は看護婦ですが、今までの社会通念では、肉体に触るということは汚らわしいという考えがありませんでした。医療関係で、治療と看護、医療というものがありますが、治療を担当される医師というものは社会的に地位が高く、社会の人からも尊敬をもって見られるが、私たち看護婦を見る眼は「看護婦か……」というような、ものがあるのです。実際に私どもの仕事を知らなかった方、また実際に私たちがサービスをしている患者さん方は、今までの考が間違っていたということを言われますが、関係のない方は、私たちを低くみていらつしやるようです。

司会 炊事婦さん、女中さん、看護婦さんの立場から御発表がありました。他の方々は一般社会の人としてどういうように感じられているか、またこうしたらいいという

れが混雑しているところに日本の封建性があると思ひます。

司会 窓口についての問題はいかがでしょう、そこを職場として働いていらつしやる方、また窓口を利用なさるといふ立場からどうぞ……

小沢 私の仕事は区政の運営上窓口におりまして、多くの方と毎日折衝しております。私は一公務員として役所の規定というものに縛られて事務をとっておりますから、ある場合には皆さんの意に沿うように運べる場合もありますけれども、ややこしい規則に縛られて、なかなか皆さんの意に沿えないような場合もあります。その時に御理解のない方は憤慨して「貴様、われわれの税金で養われているのではないか」と言われることがあります。税金で養われている職種は数多いと思ひますが、窓口に働いている者は二つか三つは毎日そういうことにぶつかりまして、私どもで話のつかない時は、上司に来て頂いて懇々と話ししてなかとまとめる、なるべく感情的にゆかないように慣らされて参りました。窓口においてはできるだけ感情的にならないで、なるべくものやわらかにおっしゃって下されば、いくら時間を費やしても説明するという気持ちを持っており

ます。

たが、やはり分業ということでお互にサービシ合っているということを理解しなければならぬ。先ほど、職業の苦勞というものについての認識が不足だということがありました。そういうことを、PTAとか婦人会の催しなどで、理解させる必要があるのではないかと思います。

小田 窓口の事務をしていらっしゃる方にお願したいことですが、私どもの社会にはお話のうまうまできない人がたくさんある、そういう方々のために、少しは廻り道でも、話相手になって頂きたいということです。

磯村 職業という立場でなくて、私は窓口に行く大衆の立場から申し上げます。役所全体の機構というものが、われわれ国民の生活に与えているもの、そういうものがややもすれば窓口の人間関係に現われるということも考えてゆかなければならないので、その点役所というものの在り方についての反省がかなり必要です。たとえば役人が自動車に乗り過ぎると、税金がどうだというふうには、われわれが知っている、そのようなことを考える立場で窓口に入る、そういうものに対する反省を国民のわれわれ自身が持ちますが、役所としてそういう反省が持てれば、もう少し窓口で役所を代表して応答される公務員の方も対等の立場でゆけるのではないかと。この問題もそこまでは是非広めてお考え願うことが必要だと感じます。

とおっしゃいますけれども、そこに、いま言った家庭の主婦がなすサービシを職場に求めるという男性のエゴイズムといえますか、こういうものが多分にあるのではないかと思います。

牧 いま言われたことはたしかに事実あると思います。これは職場の問題だけとして解決しようとすることはむりではないか。職場と家庭とが常に循環をもって、家庭における生活を職場に持ち込む、職場の封建性がそのまま家庭に持ち帰られるということになるのです。やはり、自覚した婦人の話し合いによって協力して男性の考え方を変える努力をやってもならなければ、家庭で奥さんが一生懸命主張しても、職場でチャホヤされればそれが当り前ではないかということになります。職場と家庭との結び付きということをよく考えて頂きたい。

司会 家庭で主婦が夫にサービシする、それが職場に持ち込まれるのではないかと御発言がございましたが、共稼ぎの家庭ではどのようにお考えになっておいででしょうか。

古川 私は農業改良普及事務所、生活改良普及員としておりますが、六人の男性の中で女一人で働いています。男性と同じような仕事をしており、事務所にいる時間はごくわずかです。その時間は非常に貴重なので、お客さんが

司会 先生のお話でこの窓口の問題を打ち切りまして、先ほど第三部会から御報告がありましたお茶汲みの問題を通じてこの男女の関係について、職場の部会でどういう点が耐えられたかということをお聞き願って、全体で耐えられてきたいと存じます。第三部会で報告者以外の方から補足的に御発表願ったらいかがかと思っております。

小沢 お茶の接待は、職場にあっては男性も女性も同じ職業人ですから自分の仕事というものが決まっているのに、女の人だけはお客様が来たからお茶を注ぎ、といわれるところに問題があると思います。

司会 職後十年経ってもお茶汲みの問題か、という感じの方がお聞きですが、お茶汲みそのものでなく、男女関係ということで御発言願います。

安久 お茶汲みの問題は、お茶を汲むから本来の仕事が留守になる。本来の仕事が留守になるから女には責任ある仕事をさせられない、仕事を持たないからお茶汲みしかさせられないという悪循環になる。この辺に大きな問題があると思います。

第一の問題ですけれども、これは男性ばかりを抗議するわけではありませんが、家庭の主婦のサービシというものを職場でも求めるという傾向があるのではないかと思います。ある人は、お茶を汲むのは女性の方がやさしくていい

見えたからといってお茶を差上げている時間はない。その点をよく理解して頂き、お客様が見えたら手がすいている者が出すというふうになっております。農村の人達を相手にしておりますので、家庭に訪ねてくる方もあります。そういう場合には主人がお茶を沸して出してくれます。それは少しも不自然ではなくて、家ではそれが当り前ということになっております。

司会 職場でも家庭でも同じような態度で一貫していらっしゃるということですね。

金平 いま共稼ぎをやっておりますので、私も洗濯など自分のことは自分でやっております。さっきのお茶汲みの問題と関連があると思いますが、職場の中で、たとえば同じ専門学校を出られて一緒に入った方でも、男性は一生懸命勉強するが女性はいない。そういうことから考えて、もっと女性の方は勉強する必要がある。私が家で手伝うことも、自分の妻が外へ出てお茶汲みさせられないように、勉強するために助けるわけです。職場の中のお茶汲みの問題は……すいぶん何年も前から論議されているが、問題になるのは、たとえばわれわれが石炭運びなどは女性にやらせないでしていますが、そういう場合になぜ女性がお茶汲みをしてはいけないかと思うのですが……。

久米 皆さんのお話を聞いて、二つの疑問があります。家

庭でお茶を汲むのは主婦の役目だといわれますが、果してそうか。第二に仕事の台間にそうお茶を飲む必要があるかということ。私はお茶汲みは主婦の仕事だとは思っていない。それからやみやたらにお茶を出す習慣はよくない。私の法律事務所では、お客さんにお茶を出しません。必要ならば「のどがかわいていますからお茶を下さい」と言っても、それが無遠慮なこととでなくなる社会になればいいと思う。

それから、職場で女がお茶汲みに使われることはとんでもないと思う。部屋の隅に熱湯を入れておけば、飲みたい人はそこに行つて飲めばいいので、他の人に汲ませて飲むという心算がおかしい。家庭でも同様です。それで、お茶汲みの問題がこんなに大きな問題になること自体が合理化されない社会であることを示していると思います。どうしても解せないのは、じつと盛っていて、同僚がお茶を眼の前に持っていて飲まなければならないということです。こういう男性には女性として抗議したい。日本の男の人は子供の時から盛っていてお茶を飲むように育てられているらしいですね。

松丸 久米先生の言い方はちょっと切り過ぎていると思う。なかなかそうはいかない。なぜいかないかということ。日本の総人口の大部分が農民だということで、農

民の影響が知らず識らずにあると思う。

農村の御婦人は、お客さんが来たら何はさておきかまどに飛んで行って火をもしつけるのが役目になっているのです。いわばお茶沸し器です。つまり嫁は人格のある前に機械なのです。そういう状態にあるわけです。これをそのままにしておいて職場だけで女のお茶汲みがどうこうしても、それだけでは解決しない。地方の職場に行きますと、農村出身の娘さんなり青年達がいっぱいいるわけです。その人達は、家へ帰れば女はお茶沸し器になり、それで結構なのだと考えている人達だと思う。

大村 この問題は職場だけの問題ではなく、家庭なり社会の問題だということで提案したわけです。

また私の職場である鳥取県庁では、給仕さんではなくしてゆくことになっていますが、その仕事は女子職員に転化される。そこに問題があるのではないかと思います。

氏家 私の会社では、大企業である関係か、きちんとお茶汲みとか、掃除をする人達が決まっている。お茶は、朝、昼、三時にきちんと出すので、それ以外は各人が自由に飲む。この場合、男性のエゴということではなしに、職務に基いてやっているの、女子もその職務を卑下するに当らないと思う。現在の職務に満足ならばよろしいでしょうが、もっと向上したいと思うならば、それより以外の技能

を身につけられて、どしどし進出して行かれたらと思います。

島山 特殊な技能を身につけて対抗できるというお話をしましたが、お茶汲みのみならず、公用の中の雑用を、きちんとした仕事を持っている女がやらなければならない実情です。私は地方の市役所に勤務しておりますが、ハンコをつきに廻る仕事は一応の仕事を持っていますが、公用であるために断りきれないのです。女の人の能率が低下すると、その面だけ見て、雑務に追われて仕事ができなかったということは見てもらえない。だからお茶汲みのなやみは職場で切実に体験している者でなければわかないと思います。

松島 職業上に上下の関係のあるのは当然で、それぞれ職業には自分の責任と与えられた仕事がある。しかしそれはあくまでもその地位に与えられるので人間に与えられているのではないが、日本の職場ではこれがこんがらがっている。職場では、自分の仕事に忠実であるよりは、上長に忠実であることを要求される。そういうものが昇給するチャンスをつむぐ。そこにいわゆるサラリーマンの悩みが出てくる。これが一番の問題で、これをどう改革すればいいのか、むしろお茶汲みの問題というものは職場それ自身の一つの構成上の問題に係属することが根本的な問題だという

感じがするのです。

坪井 私はオフィスに勤めたことがありませんので、お茶汲みの問題については傍観者の立場になりますが、たとえばお手洗に行くことなどは上下の関係なしに自分で行くのに、どうしてのどがかわくという簡単な生理的現象の時だけ人に持たせてこさせて飲むのかしらとおかしくなります。(笑) さき程のお話のように、お茶をたくさん飲めるような場所を作っておけば、一杯持ってきて、もう一杯ほしいのにいららすることもなく、行って好きなだけ飲めてよいのに、どうしてそういうことがサラリーマンといかないのでしょうか。その辺は臨機応変にやったらいいのではないかと思います。

岡金 男女の関係を職場の中として話を進めて参りましたが、家庭にも問題を広げてゆきたいと思います。

吉村 私の身近に、御夫婦とも教員の方がいらっしゃいます。奥さんにお客さんがある時は旦那様がお茶も汲みあげて子供も見る。旦那様にお客さんがある時は奥様がやる。ところが学校では女の先生がいつも男の先生に、私がやりますといって、お茶をいれている。御主人に言わせると、そうしないと白い眼で見られるということです。これは男性の、女性に協力して上げたいというよさをお互に阻んでいることになるのではないか。

もう一つは、雑巾がけをして妻の帰るのを待っていたが、

友達が来て「家に帰ってそんなことまでさせられるのか」と言った。させられるのか自分で好きでしているのかと考
えさせられたが、自分自身は面白くやっているのに、同性
が白い眼で見るとどうしたものかとおっしゃられる。男性
同士そういうことをもともと話し合っていて、お互に協力
の世界だということをわかって頂きたいと思ひます。

久保 茶を汲まない場合、あの人は女らしくないとい
う言葉で片付けられてしまう。さからわずにやるような
女性が好き、そういう人が結婚のチャンスを探るよう
にみえる。そうしたことから、お茶汲みはしなくてもいいと
思ふでは思ふても、ついしてしまふという、そういう弱さ
があると思う。だから自分が損であつても、男性の好みに
合わないとかつても、してはならないという自覚に立つ
て、雰囲気を作つてゆくことだと思ひます。

大村 お茶汲みが問題でなく、この事実に見られた社会
の封建制の問題について、徹底的に討議してもらいたい
と考えていたのに、残念です。

社会における大衆としての人間関係について

司会 社会生活における大衆としての生活に討議を移し
たいと思ひます。

菊池 いま婦人会議に出席することの抵抗という話が出
ておりますけれど、婦人団体等で非常に積極的に活躍して
いらつしやる方の中に、今度の婦人会議に出席する人達に
対する羨望や嫉妬から、非協力的な態度をとられたとい
うような形での抵抗があつたのではないかと考えられます。
婦人会議自体についてもマスコミその他の方法を通じて徹
底させられることが望ましいのですが、ただいま申し上げ
ましたような形で行われた抵抗は、従来の保守的な要素が
多分にあると思ひます。そのこと自体が問題であると思
ひます。

牧 一般的に、何か正しいことをやろうとする場合に抵
抗を受けることが多いですが、その抵抗の一つは権力、一
つはこちらが少数派であることなどです。そういう場合に
どういうふうにして正しいことを認めてもらうか。それに
はやっぱり正しい力、正しいことをやろうとする力を蓄え
る以外ない。権力に打克つだけの話しあいをし、また少数
派である場合にはより自分の立場を理解してくれる友達一
人一人を自分の側に拡大していつて、グループの中におけ
る正しい主張を通させるような努力が必要ではないでし
ょうか。

久保 森、ボスなど、正しいことを言われては困る存在の
人達の妨害というものにどうしてもこちらで闘うくらい

社会生活における大衆の生活、これは開会式に宮沢先生
のお話もあり、第四部会ではそこから話が展開していつた
ように聞いておりますので、第四部会の方から、部会報告
を兼ねて御意見を出して頂きたいと思ひます。

木村 報告の中にあつたのですが、この大会に出るため
にいろいろの抵抗があつたというお話ができました。地方の
抵抗を受けられ、未だに抵抗を感じておられるのに、その
ことがこの大会で論じられないで閉りになった場合、暗
い人間関係に終つてしまふのではないか。そうであれば、
この大会の意義もその地方の方に認めて頂けないといふこ
とになるのではないかと思ひます。

司会 ただいまの御発言はここにお出での六十人の方々
がそれぞれお感じになつており、そのために苦勞されたこ
とがあると思ひますし、この大会だけでなく、地域の婦人
団体の会議に出席するのにも抵抗がある場合もあると思ひ
ますので、そういう場合にどうするかといふことで、討議
を取り上げてゆきたいと存じます。

佐々木 私の出席が新聞に載りました時に、あの人は婦
人会で役員もしてないのに婦人会議に出席する、というの
で、生意氣だと言われたが、婦人会議に対する認識が足り
ない人が多いからだと思ひます。一般の人にもっとはつき
りわかるようにして頂きたいと思ひます。

気持がなければほんとうの会合はできないといふことを感
ずるのです。そのようなとき個人だけの力ではできないか
ら、激ましく合つてやつてもらいたいと思ひます。またマスコミ
が、ただ職業的な形で取り上げるのではなく、みんなの幸福
という立場を考えてほしいと思ひます。

那須 農村ではよくあるが、世間ていを怖がる。世間て
いを破ると自分だけ村八分にされる。みんなからへんに思
われたというので自殺する人まで出る。婦人会議に出て来
られる時に抵抗があつたというが、抵抗や権力を破つてゆ
くには、自分達にはつきりした確信がなければできない、
しつかりした考え方をもちいるような問題の取上げ方をマ
スターし、人間関係をよくするためにどうしたらよいかと
いふことを充分ここで身につけて帰りたいと思ひます。

関 農村では話し合いましようと言つても話し合いの場所
が持てない。ものを考えるといふことができない。だから
その場を持つための努力をしている段階です。たとえ近
所のおばさん達と集つて食生活、衣生活など生活改善とい
うか、身の廻りの手近なことから話しあつていきます。

植垣 農村の方から、話しあいの場を持つために努めよ
うといふことが言われたが、家族会議の問題について、第
一部会では、どんなお話だったのでか。

関 私は家庭に秘密を作つてはいけなしいと思ひ、月に一

回程度の家族会議を開き、家計の内容や娯楽のことなどを子供も混えて皆の意見を聞いているのです。子供もある程度成長したら、現在わが家の家計はどういうふうになっているか、自分達の学校の経費はどの程度かというところを知るのは、経済的観念を作るために重要だと思います。

松丸 農村の場合に、先ほど仲間の話し合いが必要だということと言われた。農村には一つの特徴として村八分という慣行がまだある。村八分がなぜ効果的であるかというところ、村八分をされると生きてゆけなくなる。たとえば水利関係を断ち切られると米が作れない。どうしても部落の古い秩序に従わなければいけないという現状です。そのことが村八分を非常に効果的にしている。ですからそういう状態をそのままに残しておいていくら話し合いをやってみても、古い秩序の中の話し合いしかできない。大きな抵抗がくる。直接政治に関係する問題になる。ここで必要なことは、古い秩序の下を離れても何とか食ってゆけるという方法を考えて——言いかえますと、生産の方法を考えてゆく、そういう場合に、今の農村の婦人方がともすると生産の問題にあまり関心をお持ちになっていない。特に生産様式を新しくするというところについての関心をあまりお持ちにならないで話し合いとおっしゃっている。もっと生産についての知識の裏付けを持たなければだめだと思えます。

「聞くか？」というようになって落きました。やはり自分で努力して実力を示すことが必要だと痛感しました。松丸 話が通じない通じないが勝手に決めてしまう場合が多いのではないかと。時間も手数もかかるから放棄したくなることもわかる。しかし作戦的にも戦術をお考えになれば、人間である限りわかるのではないかと気がします。

磯村 この会議に出られる方に対する地元の無理解という問題は、二つにわけられると思います。一つは、その方が団体に属していなかったために理解が得られなかったということ、もう一つは属している団体が抵抗をしたということ。もし団体に属していないために抵抗していたならば、そういう団体に属するという一つの方法がある。もし所属している団体の中で抵抗したとすれば、その団体の中に一つの人間関係の暗さがあると理解していいと思う。同時に、そういうところから全国婦人会議という大きな社会生活の中に入るといことは一番大きな進展だと思ふ。むしろそのくらいの抵抗があるということ、全国婦人会議というものが関心を持たれてきたという発展の段階と考えられるのではないかと。そのような抵抗の中で、会議参加者の立場を世論が支持するという結果になれば、それがやがては通ずる道になるのではないかと思ふ。

もう一つは、古い秩序の藩口を云々たり、ほんとうの姿をあらわしたりすることが村八分の非常に大きな原因になる。現在の農村には、それほど封建的なものが残っているというところを考えなければいけないと思ふ。

白石 話し合いをしてお互に理解し合えば問題はないのです、話し合ってもわからない人間関係があります。私は夫を亡くして三年になります。七十先の老人が二人おり、夫の生前は何度話し合ってもわからなかった人達ですが、長男に死なれた後は年寄の気持もやわらいでできました。私は三人の子供を育て、舅姑と一緒に生活しなければならなくなるとき、お父さんやお母さんにも考があるでしょうが、私の意見も入れて下さいとよく話し合っていました。心と心で話し合えば、わかってもらえるのではないのでしょうか。

八木 私の家庭は非常に封建的で、周囲なおじいさんの考一つですべてが動かされていて、私達の意見は頭から受けつけず話し合いなどはとんでもないことでした。しかしそのような私たちの家庭でも、私がこの会合に出席できるようにしたら、おじいさんの私に対する態度が少し変わってきました。たとえばラジオのスイッチでも、普通ならおじいさんが一人で握っていたのに、今度私がこへ出るようになったら、おじいさんの方から、婦人の時間になると

唐崎 先生がおっしゃるように、抵抗があるということ、この会議に対してある意味において関心が寄せられているということだと思いますが、抵抗が全然ないという場合はそれだけ関心が薄いことだと思います。この会議で討論され、考えられたことを何の関心も持たない人達に対してどこまで浸透させてゆくかということが私たちの今後の問題ではないかと思ふ。関心を持っている人達だけでやってゆきましようというのが、今までの私たちの態度であったが、関心を持たない人にも、世の中を明るくするために関心を持たせることが必要だと思ふ。

本多 明るい人間関係を作るために個人で解決できぬものは社会と手をつなぐことが必要です。

また全人類と手をつないで、平和目的のためにやってゆくことが大切です。こういうことについては、意見が出ませんでしたが、もっと話し合いたい問題だと思ふ。

原水爆の問題ですが、広島からいらした会議員の方の右の頬に斑点が見えている。それは、原爆症候の徴候なのです。せっかく明るい人間関係を作るために出掛けて来られたのに、このような暗い面がある。今後ともそういう暗い面が残されているということに対して、皆さんどんなにお考えでしょうか。

吉村 いまの発言に関連することですが、先ほどから話

が通じなくてどうにもならないという意見が出ていましたが、全国婦人会議に出ていつまで経っても私たち女性が家の中のことにだけにこだわって、姑の問題、嫁の問題を二日間通して、これに費やしていることを非常に残念に思います。なぜ私たちが眼の前のことばかり考えているか。もっと大きな、日本中、世界中の人間が明るくなることを考えないのでしょいか。とても不安でなりません。

小林 いまだいへん御不満なような発言がありました。それに対して異議を申し上げます。

ほんとうに人間が社会人として、自己の尊厳をはっきり自覚できないような状態でありましたならば、自分の一番周りにあります夫婦や家族間の人間関係はもちろん明るくなりませんし、全人類的な人間関係ももちろん明るくなりません。

第一の問題は、何といっても個人の尊厳を考えることだと思えます。自己の確立、言いかえれば――非常に抽象的な言葉になりますが――社会人としての教養を身につけるためには、身近な個々の問題から捉えて考えることが非常に必要だ。もしここに一人一人が自己の人間関係をほんとうに明るくすることができたならば、そういう人は又全人類との人間関係も明るくすることができると信じます。

牧 大きな問題と、眼先の問題とどちらも必要と思えます。われわれ眼の前の問題はやっぱり社会的に見、歴史的に見るということが必要で、そのことなしに考えておっては前進はあり得ない。この会議に出席した人なら、眼の前の現象を歴史的に見、社会的に見て、その中からいまだ何が必要であるかということがわかるわけです。世界的に大きな問題に取組むためには、近隣から手をつけなければならぬ。眼を蔽っていたのでは近隣の人も助からないということをよく考えたいと思います。

司会 時間も参りましたので、もし先生方に付加えての御発言がありましたらお願いします。

磯村 第四部会では原水爆問題も発言され、全員いろいろな関心を持たれていたが、結論的にはいまの方がおっしゃったように、こういう問題については小さいグループの問題と非常に大きな問題を同時に取上げながらすすめてゆかなければならないことになりました。

司会 それでは時間も参りましたので、御不満の点多かったと思いますが、今日の合同部会を終ります。

司 会 NHK 大浦アナウンサー

◇ 印 発 言 者

司会 一昨日、昨日と二日間に亘りまして、今この会場に並んでいらっしゃる六十人の方々、四つの部会に分れ、都市、農村、職場、社会、それぞれの生活を中心に、助言者の先生を囲んでお話し合いを進めて参りましたが、大変に広い範囲を持つテーマですので、問題はたくさん提出されていても、十分に論議が尽きれていないような感じもありました。それで今日の総会の話題は、人間関係の明るさを阻むものとして問題になる、いわゆる義理人情ということに絞って、話を進めていきたいと思ひます。

初めに助言者の先生方から、いとぐちを提供して頂くという意味でお話を伺ってみたいと思ひます。それでは第一部会からお願ひ致します。

久米 私たちが討議致しますときには義理人情という言葉はほとんど使われなかったように思ひますけれども、人間関係を暗くしているものの中に義理人情がかなりあると思ひます。一体義理人情というのはどういうものだろうということを考えてみると、これを義理、これを人情だという定義はなさそうなのですが、これに不の字をつけて、不義理、不人情というような言葉にしてみると、私たちお互いの中で不義理、不人情の人間というのは、一番いやな

す。農村の進歩を阻んでいるものに、この世間体にかかづらわる気持というものがあつたと思ひます。私どもの部会でも特にこの問題を一つの話題として、一時間半ほどこの論議に時間をつきました。世間体にかかづらわる気持が農民に強いのは困つたことだとみんなの意見が一致し、それをぶち破っていくのはどうしたらいいか、またどこから初めたらいいだろうかということに話が進みましたが、やはり一番身近な問題からやっていくのがいいのではなからうか。たとえば冠婚葬祭の簡素化というよりな一生に一遍の問題からとかく取り上げられがちなのですが、このようなくことは多勢の気が揃わなければできないことなので、なかなかやりにくい。それに地味に自分はその気になつたらやれることがあるのではなからうかということ、私がかつた例をひいて問題を出しました。私は始終農村を歩き、よく農家に泊めて頂きますが、そのとき非常に困ることに、食事の問題があります。たとえば御飯をついで頂きますと、てんこ盛りというのが勧められる。一杯どうやら征服してやれやれと思つても、一杯めしはえんぎでもない、もう一杯どうしても食べさせられ、もう入りませんからといって、一杯くらい入りますよと、人の胃袋を勝手に推察し、無理じいを入れるというようないことが非常に多いのです。これは私だけでなしに、今農村に關係してい

人だと思ひます。それならば逆に義理人情を守る人が必ずしもいい人かというところではないと思ひます。「義理ほど辛いものはない」というように、必ずしもこの義理を守った人が楽しく暮せるかというところではなくて、義理のために辛い辛い世の中を、一生過す人でもないと思ひます。この封建的な義理人情というものは、どうしても日本の社会からなくしてしまわなければ、ほんとうの意味での明るく人間関係は来ないというふうな考へているものの一人ですが、これについては大変異論があるだろうと思ひます。私が問題として提供したのは決して不義理な社会、不人情な社会というものでなく、この義理人情というものをもう少し近代的な考へ方に照らして、ほんとうにそれを理性化し、合理化していく努力が必要ではないか。人情に押し流されて正しさを見過ごしてしまふ例はかなりあるので、そういうことのないように、人情の前にもとるべき手段があるし、合理性がある。そこで、ここでは日本の社会をどれだけ義理人情が暗くしているかという面を考えてみる必要があるのではないかと思ひます。

松丸 農村の場合には義理人情ということがやっぱり非常に尊重されていると思ひますが、純粹な形の義理人情というものが問題にされるということよりも、それにも一つ別のファクターがつく。それは世間体という問題で

る私のような立場にいる人間全部が嘆息している問題なのです。これも私は世間体にかかる問題がそうさせるのではなく、それと関係なく問題として出したのです。そうしたらそれまで客観的な立場に立つて世間体は困つたものだといふふうな意見が一致していたのに、途端に問題が非常に粉砕して、いやそれは昔からの習慣だからやめるわけにいかないという御意見も出てきました。

世間体を問題にするということは、実は農民だけではなく、国民全体の問題だと思ひますが、一人一人の心の中にそういう弱点というものが残っているといふことがはっきり出たような気がするので、具体的な解決策を打ち出すまでにはいかなかったのです。今日の総会で皆さん方と一緒に考へ願つたらと思ひます。世間体というようない問題として論ぜられたものでは具合が悪いのではないか。一人一人の心の中の反省という形で問題を取り上げる必要があるのではないか、それが今一番必要な段階ではなからうかと私は考へております。

中島 職場では上下を問わず長と名のつく人間が非常に部下の私生活の面倒を見たり、採用の縁故が始まって個人的な借金の保証をしてやったり、仲人をしてやったり、機会あるごとに部下におごつてやる。部下がなにか大きい

失敗をした場合でも身をもってかばってやりさえる。往々にして役得というのも長と名のつく者が部下をおごる材料になることも少くない。ときによると臨時収入をあて込んで課員の忘年会などやるという場合も少くない。これは、上長が部下の面倒を見ると同時に、他面上長に人間として献身することを求められるもので、そういうものが昇進の手段になりやすい。極度の自己否定と謙遜が要求されがちだ。日本の職場は縁故募集に対する比重が非常に多く全産業を平均して六一パーセントの人間が、なんらかの縁故で入っている。つまりこういうふうには縁故関係が網の目に入り込んでいるということとは、職場の上長、下僚の関係を義理人情に結びつけ、経営家族的な色彩を持たせやすい。仕事を教えて貰ったからあの人の言うことを聞かなければならない、面倒を見て貰ったからあの人の言うことに逆らえないということをよく聞く。たとえば組合役員の選挙でもこうした縁を通して投票がなされることは意外に少なくないのではないか。もちろん面倒を見て貰ったことに對する感謝の気持は大切だ。また経歴の多い者と経歴の少ない者では能力に差があるのは当然だ。しかしそのために人間としての良心の音が阻げられるようでは重大なことだ。日本では職場の人間関係が往々にして上下の関係を中心にして営まれやすく、横に繋がる関係は非常に弱くて、ある意

味では平和だ。しかし平和に見えても義理に縛られて思うことも言えない。こういう職場は決して明るいものではないということが非常に大きな問題になって議論されました。

磯村 私は大体義理人情という関係は、非常に狭い社会のルールと思うのです。社会生活というような極めて近代的な広い人間関係に持っていくと、初めて非常に大きな問題になってくる。

義理人情と一口に言っていますが、これは少し区別して考えなければならぬのではないか。最近のはやりの言葉で申し上げますと、義理の方はドライであり、人情の方はウェットであるという区別は当然出てくると思う。たとえば、最近日本人の一つの生活習慣として、駅での見送りとあるいは出迎えというものが非常に盛んになった。これは社会のルールとしての一つの人間関係ですが、まあ見送りに行っておけばあるいはなにかいいことがあるかもしれないという形のものは、義理のところから外れた問題で、必ずしも人間関係を明るくしているものではないのではないか。あるいはまた夫がなくなつた場合と、妻がなくなつた場合の葬式のときに、どっちに花輪が多く贈られるかといひますと、奥さんがなくなつた方が多いのです。奥さんの人間関係が多いから花輪が多く集まるというのは合理的で

すが、そうでない場合にはなにか別のものがある。この義理の関係は社会をある程度まで暗くしているのではない。

人情ということになると、たとえば貧しい者に対する同情はあり得ると思います。ところがこういふたような考え方が、社会生活に妨がっていくと、共同募金であるとか、赤十字的なものに発展するので、私は義理というものは近代の社会の生活の中ではすでに限界が来ていると思います。が、人情というものは、これが合理的に発展していくと、世界の平和のためにも役に立つのではないかと考えております。

司会 それでは早速会議員の方々から御意見を出して頂きたいと思ひます。

◆ 大人になつても家族的な人間関係によりかかろうとするところから、社会的にはやくさ、ボスといひたいわゆる親分、子分的な問題にまで繋がっていくのだと思ひます。私たちは義理の人間関係にかわる新しい人間関係を考へるときに、合理主義というものを考えますが、義理人情を否定することがなにか利己主義にとられやすいところに、弱みがあります。義理人情を捨てて、かわりに人間の道徳と愛情でものごとを解決していくように考へていくということをお私に考へたいと思ひます。

司会 それでは次の方。

◆ 友達から相談を受けた問題ですが、その人の実家の両親がとても生活に困っているのに、主人に相談しながら少しばかりの送金をしていたが、その中多額の援助をしなければならなくなつて、主人に相談することも心苦しくなり、黙つて二万円の金を送つてしまつた。ところが主人に見つかり、両親の生活まで見てやることはできないと離婚話まで持ち上つたというのです。そこで友達は、夫を両親の両方に挟まれてどうしたらいいかと相談に来たのですが、私は両親は可哀いそうだが、自分自身の幸福も考へたら、両親を救う道は社会保障や生活保護によつた方がいいのではないかといふのですけれども、その対象にもならないような場合なのです。この問題はどのような解決法をとつたら一番いいかといふことを考へて頂きたいと思ひます。

磯村 社会保障へは持つていけないというお話なんです。そこに問題があるので、社会保障という法律で定められたものに達する前に、そのルールに乗りないわゆる人情。そういう社会福祉的な繋がりがいるものが出てくると思ひますが、そういうことでひとつお考へ願えないかと思ひます。

◆ 磯村先生の御意見と同じですが、義理人情というこ

とを久米先生も松丸先生も歪められて、その効果を考えていないと思うのです。義理というものは今までの通念でこうであるときめつけられないと思う。農村の人たちは低級だと考えておられるからああいうような意見を述べられるのでしようが、低級だと思われている人が、案外広い意味で、あるいは深い意味でほんとうの生活をしていると思うのです。それを考えないで、ただ社会通念で、義理人情をこね上げて、浅いものを上滑りさせて出しているのです。ですからもっと深い意味で根本的なものを議論していかなければならぬと思うのです。

司会 どうして久米先生のおっしゃることが不合理か、その点具体的にお願いします。

◇ 見送りを受けるとかお喜びの催しをしてくれるとかいうものに、義理のためにして貰うのと、友情で、そしてほんとうに喜んであげるためにしてあげるのでは、義理の考え方が違うと思うのです。そういうことをして貰ったり、してあげたりすることを、これは義理だ、あとできっと報酬を貰えるのだと、一般に理論づけようとするところに私は問題があるように思う。私たちの生活の中にはなに報酬を受けることを期待しない見送りがたくさんあると思うが、久米先生やその他の先生からおっしゃられた話を聞いてみると、全部義理で返って来ているような感覚でと

れたのです。

司会 それでは久米先生にもう一度お話をさせて頂きましよう。

久米 義理、人情というものをもう少し合理的な光に照らして、そういうものを高いものにしていく必要があるのではないか。そういうときに従来使われている義理人情という言葉が非常に悪いので、決して義理というものからわれわれは人間を幸福にするような楽しいものは得られない。それよりは、人に世話になったら世話を返さなければならぬというようなこと、これは人間の自然の情として、人に世話になって感謝しないのは人ではないと思う。社会や職場における義理人情のお話にぜひよく出ていたと思うのですが、世話になったから、会社に入れて貰ったからというので、義理のために、正しかりと悪かりと一応あの人についていかなければならない。立候補すると自分の主義主張は違っても、義理があるからあれに入れようというの私は困ったことだと思ふ。人情の場合にもそういうことが言えるので、そういうことから義理人情というものを理性的に考えてはどうだろうか。その場合私は義理人情という誤解を招きやすい言葉を避けて、もう少し感謝の気持、情愛という言葉を使つた方がいいのではないかと思うのです。人に同様に親切にすることは、親切、同情

それ自身のためではなく、自分はこうしておけば、たまたま自分がなつたときにやってくれるであらうという非常に功利的なもの、自分も含めてわれわれの日常生活の生活感覚の中にあり、これがまた、世間体、義理人情にもつながっていく。こんなところをもっと反省しなければならぬのではないか。私たちは人に同情するときに、同情それ自身のために同情したい、親切それ自身のために親切をしたい。そういうことがわれわれの感情をもっともっと美しくするゆえんで、常に義理人情のために、われわれが純粋に生きようとするものが阻まれている。たしかに義理人情は悪いものではないけれども、義理のために人情を殺すこともあるし、人情のためにしなければならぬ義理を欠くこともあると思う。だからその言葉を避けて、もう少し高めていって、われわれの生活感覚というものを正しい合理的なものにしていきたい。こういうふうに申し上げたのです。

松丸 先ほどの義理人情と同じことでも意味が違う。見送りという行為、これは社会通念だから見送りに行く。行かなければどう思われるから行くんだ、こういうものと、むしろやっぱ見送られれば自分も嬉しかったから、人も見送る。世の中にながら大切かという自分より大切なものはない。自分を大切にすれば他人もやはり大切なのだ。だから自分が嬉しいことは他人にもしてやる。同じ人を見

送る行為でもそんなに違う。先ほど久米先生のおっしゃたのは、そういう意味でおっしゃったのではないかという気がするのです。

◇ 私は久米先生と先ほどの方の考えのギャップは、一概に都会の人は頭が文化的だから、農村の者はそれより低いということでなしに、地方は昔からの因襲が深くそこに根ざしているから、自分たちの代になって急にできがたいところに、あると思います。

司会 農村の方は今までの生活環境からなかなか抜けられないのではないかということなのですが、いかがでしょう。

◇ 農村では家と家の繋がりを重要視しているので、世間体にとらわれるのではないかと思う。底の底を掘っていく自分を守るとき、自分が可愛いということがひそんでいて、義理人情に縛られているのではないかという気がします。

松丸 私も久米先生と農村の方からの発言の間にギャップが生じたことは、やはり都会と農村との差だと思うのです。農村の場合には非常に縦の関係を重んじるが、重んじさせる口実として義理ということが尊重され、良風美俗というふうな褒め方までされているわけです。それにうっかり抵抗すると村八分というふうな一つの罪罰まで課せられ

て生活糧までも奪われる危険があるので、非常に苦しいわけです。久米先生は非常に割り切って、よくないから敗るっておっしゃるが、農村の人はそれでは食っていけないという、そこら辺の反撥ではないかと感じます。

◇私は人情を合理化していくためには同僚を選挙淘汰しなければならぬと思う。その場合の基本線は、そのもの自体が個人の進歩や社会の進歩に全然役立たない、むしろ害になるようなものである場合に、それが義理や人情にとらわれる必要がないという判断をする必要があると思うのです。都会人が農村の人よりも、あるいは知識人がむしろ普通の筋肉労働者よりもずっと薄情であるかの如く農村の方がおっしゃったけれども、近代化によって人間がだんだんと複雑な生活をして参りますと、同僚とか人情をいけると選択淘汰しなければ、自分の内面が崩壊されることになると思います。ですから私はそのものが個人や社会の進歩に役立つものであるかどうかということのけじめをちゃんとできる教習というか、そういうものをそれぞれが持たねばならないと思うのです。

久米 いとお話がいろいろ出たのですが、たしかに私は農村のことはなんにも知りません。ただ私は疎開をした一年の間農村のまっただ中に任んでみて、義理人情というものがあまりに全体を縛り過ぎて、それが農村を非常に暗く

しているというのを感じておりました。また、たまに農村の方にお会いすると、嫁の立場、夫の立場、そして娘の立場にしろ、やはりこの義理人情の多さのために自己が殺されていく苦しさというものをいつも聞いております。都会でもこれがないとは言えないので、今の方の発言は非常にいいと思います。

◇私たちの周囲には義理人情に加えて、見栄というものも大きく働いていることを忘れてはならないと思います。一例ですが、六年生のPTAの会合で、卒業記念の品物についてその額の検討がありました。ある方からは十円や二十円にこだわらないで、余るくらいの金額を出そうという発言があり、またその反対に必要な額だけでいいのではないかという発言もあったのです。その結果、中間をとることになったけれども、そのあとが懸かったのです。あの人は十円、二十円のことにとこだわっている、けちくさい。そして結局は個人の生活にまで入って非難をするというようなことがありました。これは個人の尊厳を乱すというだけでなく、私たちの生活の中において合理的な正しい意見を述べたことを阻むものであり、またそれが新生活運動などの実施に際しても、見栄とか義理が大きく働いて、私たちの社会を暗くしている場面が多いと思うのです。

◇義理人情について年末と中元の贈答を例にひいて考

えて頂きたいと思います。私は教員ですから、年末になると方々から贈答があり、それを断われないのですが、どうもそこが人間の弱さで、人情として受け取ってしまうのです。ところが気になるものだから少しだけ貰った賞与の中から頂いた方たちに少しでも返すと大部分その方に使ってしまいます。贈って下さる方だって多分同じだろうと思うのです。それならいっそそのことをやめたいのですが、そこに義理とか人情とか、それからやはり自分の子供をよくしてほしいというエゴイズムが働くのだと思います。

◇私は会社の社宅におりますから、職場のことが痛切に響いて参ります。どうしてそういうことになるかということを考えてみると、職場上の任務というのが理解されていないのではないかと思います。たとえば長のつく方は後進を指導するということが当然の職制上の任務であるのに、それを後輩の方は目をかけて頂いたとか、面倒を見て頂いたというふうに感ずるのではないかと思うのです。

もう一つは職制上の一人の人間の査定が、人情がそこに加わる隙がないように完全に合理的に行われているかというところに問題があると思います。

松島 上長というものは下僚の仕事上の面倒を見るはずなのです。また上長は下僚に命令も下さなければならな

い。それはあくまでも職務上の問題で、それが一身上の問題に転化された場合に非常に問題になるのだと思います。

◇昔から農村は一般に義理人情の堅いところですが、義理があればこそ農村では生活できるので、義理人情がなければ絶対に生活できないわけです。義理人情がどうこうといいますが、私は義理人情はあってほしい立場なんですから……。

◇農村では義理人情が絶対だと伺ったのですが、私が考えますのにはやはりそれも限度があると思います。私は先年まで田舎に住んでおり、そこで選挙の時の非常な情い半面を見ておりますので、今発言なさった方は、選挙についてはどういう態度をおとりになっていらっしゃるのか。

◇農村にはしきたり、因襲があるのだと思います。小さいことですが、お祭りとか会合とかいいますと、持っている者が寄附します。その恩恵を受けているために下の方が選挙に使われることはあったと思います。

◇ただいまの選挙の問題については因襲にとらわれた問題があるかと思いますが、やはり選挙ははっきり割り切って頂きたいと思えます。いろいろな義理人情に絡まれておろうとも、自分に与えられた公民権の正しい行使のために、自分の信ずる主義主張にマッチした適当な候補者があ

れば、その人に与えられた一票を投ずるというはつきりした明確な態度で選挙に臨んでほしいと思います。

司会 次の方から頂きましょう。

◇ 人情についてお互いにもっと素直であればいいのではないかと思います。皆さんがお見送りを受けたときに、それを素直に受けて、自分も素直な気持ちでお見送りをする、なにかに拘わらない方がいいと思います。

◇ 義理とか人情とかについて非常に素直であれという御意見でしたが、私たち職場で働く者には、上役と下僚との間と同様、同僚間の義理人情というものにも非常に問題があります。たとえば仕事が終わってから、自分自身にやりたいことがあっても、勝たれば友達つき合いたから自分を殺してつきあう。職場において団体行動をとらない、みんなと合わせてゆかないという非難を私たち非常に受けるのですけれども、そういう言葉にまどわされて、自分自身を殺してしまつてはならないということを感じます。

◇ 義理ということにお金をかけ過ぎることに、また人情との分れるところがあるのではないかと思います。たとえば病院へ病人のお見舞に行くにしても、このうちは義理があるからこれだけのお金を持っていかなければならないという心が先に立つところに、人情の薄れていきやすいところがあるのではないのでしょうか。もう一度行つたから

義理が済んだということでもなしに、安い見舞品でも持ったびたび行きやすい行き方をした方が、ほんとうの人情があるのではないかと思います。

司会 いろいろ問題が出ておりますが、こうした問題をどう解決していったらいいかということに話を進めて行きたいと思ひます。

◇ 私は理性を持って、自分がなにをなすべきかということを慎重に考えて、義理や人情にとらわれない行動をすることが、これからの女性に大切なことではないかと思ひます。

◇ 皆さんが大変理性的な発言をしていらっしゃいますから、この理性が集まればもう少し明るく生活できると思ひます。例えば義理人情の厚い、封建的な職場に若い人が飛び込みまして、その壁をつき破ろうとして努力致しましたが、上役がその芽を摘みとって、結局その人が職場をやめなければならぬようなことが起りました。現実の問題となるとなかなか理性的にはいきませんが、そういう場合にとりして因襲の壁を打ち破つたらいでしょうか。

◇ こういうことは一人ではなかなかできないことだと思ひます。ですからなるたけ同じ考えを持っている者同士が集まってグループを作り、少しづつ良い方向に向いていくように努めて行くより仕方がないのではないかと思ひ

ます。また、言にくいことでもイエス、ノーをはっきり言うことが大切だと思います。

司会 時間がなくなつて参りましたので、この辺で助言者の方々にもう一度お話を伺つて締めくくりにしたいと思います。

磯村 いろいろお話があつたのですが、私が最近調査をした結果から見ても、どうも普段層の生活とよそゆきの生活というものが依然としてあつて、普段層の生活の中ではかなり義理人情にとらわれているが、いざ社会生活の中に入つてくるとよそゆきの生活で話をする。この点が合理的にならないと明る人間関係ができないのではないか。むしろ先ほど久米先生のおっしゃつたようなことが、ほんとうに普段層もよそゆきもない。これからの女性の生活を明るくする一面の御発言だと思ひます。

それから義理人情という問題は、ややもすれば上下の關係がその基礎になつてゐるのですが、これを明るくするためには横の關係、すなわち同じ年齢、同じ階級、あるいは女性であるとか、趣味のグループであるとか、そういった關係を強くすることによつて、縦の關係というものをある程度制限し、そしてそのためにまた人情というものが広く拡がっていくというふうに考えたいのであります。

松島 先ほどお話に出ていた職場改善の問題は、部会で

も活発に討議されたが非常にむずかしい。これは職場でわれわれは生活のかたを得ているので、改革をしたくてもまず上長に従つて生活を立てなければならぬ。この改革するといふ意欲と従わなければならぬといふ必要が一人の人間の中に混在している。だから改革といふことは非常にむずかしいけれども、それぞれ長い過程をかけたがら改革していく以外に仕方がない。その場合にやはり一人で考え悩むかわりに仲間で話し合うこと以外に方法はないと思ふ。同じ職場に働いている人間は必ず同じ悩みがある。そういうことを誠実にあくまでも話し合うことなのだ。非常に長い時間がかかるけれども、それが通つて一歩近い道だといふふうな考えます。

松丸 このごろ大学の先生や農事試験所の技師さんたちが農村の実体調査といふことをおやりになつて、その報告がたくさん出ておりますが、これは農村に来ていろいろなことを調べ、数字にして統計的な結論をお出しになるというよりな実態調査です。ところが私のように農村に住んでいる人間が実態調査報告を頂いて見ましても、一向役に立たない。それはなぜかといふと、日本の農民は連絡の世界に住んでいて大部分いわゆるニュアンスの生活をしてゐるからです。その情緒の世界の根本を流れているものは義理と人情の考え方だと私は思ひます。そのような義理

と人権ということが農村の場合には、今ここで論ぜられたような運命的なものではない。たとえば農村では自分に都合の悪いやつがいたら「あいつ赤だ」と言えば勝負がつく。それと同じように不人情なやつだと言えば勝負がついて、一種のレフテルになるので、理性を超越した、原始というか、一時代前の時代に住んでいるということ。今松島さんが職場の中でも食うことに絡んでいるのだということも言われましたが、農村の場合にはもちろん食うことにも絡んでいるのですが、生存の問題と絡んでいるということです。仲間づくりをやることだということを言われましたが、たしかにそうですが、その仲間を作ること自体がなかなかむずかしい。都会の方々がそういう農民の奥に心をとめられ、ともどもやっていくという考え方にぜひな

って頂きたいと思います。
久米 今の農村のお話を伺い、私たちは都会に住んでいることを、非常にありがたいと思う。結論として松島先生のおっしゃったこととまず同じだといっていると思います。が、すぐになくせとか、理性化しようといっても、注射のような妙薬は決してないので、各人が努力していくこと、それには非常に勇気のいることかもしれないけれども、こういうことはしてはならないと自分が思ったら、敢然とそれをやっていく人が社会にほしいと思う。これは大変むず

かしいことですが、一人一人がやっていくと次第に大きくなっていくと思います。新しい教育を受けて、ほんとうの民主主義の精神を身につけた人が、日本の面を動かしていく時代が来たら、日本ももっと明るい義理人情に縛られない社会がくると思いますけれども、私たちは心構えとして一人一人がそういうものに縛られない覚悟をしたいと思います。
司会 時間が短くて、意を尽きなかったのは残念ですけれども、今ここで討論されたことから、皆嫌なにかプラスになるものを得られたのではないかと思います。御努力によりまして活発に議論が行われましたことを感謝致します。

明るい人間関係をつくるために

——第5回全国婦人会議記録——

昭和32年10月21日 印刷

昭和32年10月25日 発行

発行者 東京都千代田区大手町1ノ17番地
労働省婦人少年局

印刷者 東京都中央区入船町2ノ3番地
永井直保

